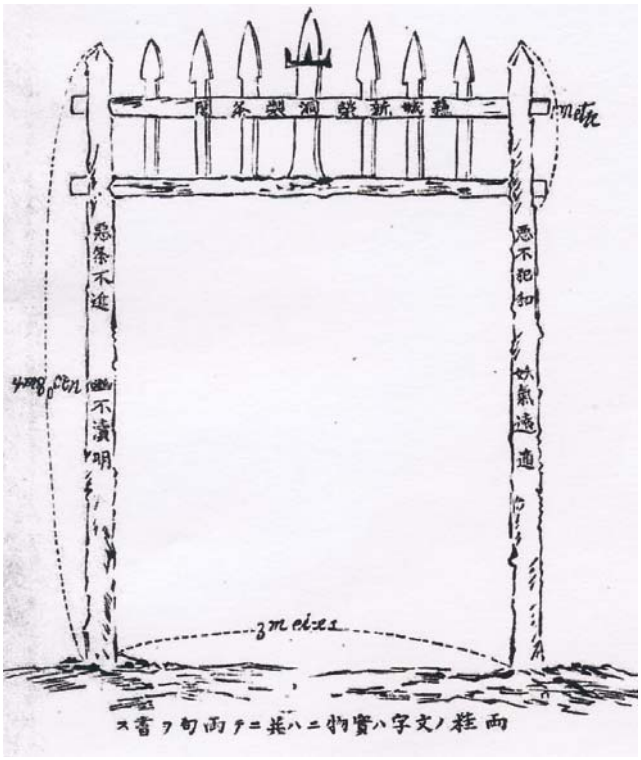
電子書籍

“ジンギスカン即源義経説” 流布の顛末（るふ　てんまつ）



吉林省琿春（こんしゅん）河上流の家屋・日本の鳥居に類似、鳥居龍蔵がアムール川踏査行で撮影したもの

蘇城郡蘇城（スーチャン）にあった日本武将の末裔が建てたと言われる鳥居とはこの門であろう
「沿海州南部烏蘇利（ウスリー）蘇城郡紀行」深堀順蔵氏記より・解説５８頁参照

明治黎明期、日本国を取り巻く欧米の圧力は、やがて維新政府の蘭語から英語へと国際語が移りかわる時代局面を向える。そして蘭学から英学への変遷過程で、副産物として生まれたのが“ジンギスカン即源義経説”である。明治９年１０月から１１年１１月まで、浦潮斯徳（ウラジオストク）貿易事務次官・瀬脇壽人（手塚律蔵）が記した日記『浦潮港（ウラジオストク）日記』を、イギリス公使在勤を命じられた富田鉄之助が、この日記を取寄せ、先にロンドン在留の末松謙澄に手渡した。末松は倫敦（ロンドン）に於いて、『成吉思汗（ジンギスカン）は源義経』の題名で歴史論文として英文発刊した。この論文が明治１８年に内田弥八訳述の『義経再興記』となり、大ヒットに繋がる。英国公使館一等書記官富田鉄之助の結婚相手は蘭学の杉田玄白の曽孫、縫いであり、晩酌人は啓蒙家の福澤諭吉である。瀬脇壽人と福澤諭吉の関係は幕府の蕃書調所僚友関係、末松謙澄と福澤の関係は外務省を通じた慶応義塾人脈の関係、『義経再興記』訳述者内田弥八は福澤との関係が、故郷徳島県井川村に福澤が弥八に贈った弔慰文が石碑に残されている。この義経伝説に関わる『浦潮港日記』の原文が昭和１８年『義経入夷渡満説書誌』岩崎克己著に残されていた。

２０１４年４月３０日　　池田　勝宣

はじめに

義経伝説地の探訪紀行を、２０１１年に電子書籍として『義経不死伝説の声を聞く』をインターネットに掲載した。次にいつかは取り組まなければならない課題、それは「ジンギスカン即源義経説」の考察である。自らの力で集められるだけの資料をもとに、各方面に探索し、収集した資料の本文に手を加えず、原文のまま掲載し、読者の〃原文はどのように書いてあるのか〃の問に答えるために、あえて旧仮名遣いをそのままとした。筆者による誘導主張する論評はさけ、時代背景に立ち入って、その論文・新聞記事等を拾い集め、“ジンギスカン即源義経説”がどのような経緯で成長し、どのような過程を経て終りに至ったのかを、読者に理解してもらうために、いろいろ横道に入っていただくことにする。

又、『中外経緯伝』の伴信友の原文ある注釈は「〔　〕」で表記した。その他原文の注釈は標準明朝体「(　)」とし、その他の歴史的な説明等を筆者よる注釈は「(　)」９ミリ明朝体、９ミリゴシック体にして説明を加え、参考解説には「★」印での説明とした。これらの説明には不充分なところがあるが、筆者の説明から更に追求できるように名称等を表示した。出典については書籍等、写真、絵図、イラスト等も出典を明記し、明記のないないものは筆者の撮影したものとする。

この電子書籍『“ジンギスカン即源義経説”流布の顛末』に於いて、今日的なモラル論での歴史論評を避ける。戦前の日本国が大陸侵略を意図した「プロパガンダ」としての侵略思想を指摘した論評を見かけるが、筆者はこれに触れず、自己の批評も控える。できるかぎり、その時代現場に入り、各方面からの収集した資料を読者に読んでいただき、読者自身よる解釈や批評が見出していただければ幸いと思う。

今回の『“ジンギスカン即源義経説”流布の顛末』をまとめる基本は、昭和１８年発行の『義経入夷渡満説書誌』岩崎克己著を本(もと)にした。この書の内容を理解し、義経言説を更に探究することができた。又、手塚律蔵=瀬脇壽人の情報収集において、筆者が千葉県下(佐倉藩在籍した)に住んでいたことが功を奏した。6余年の義経言説の情報収集し、ジンギスカン即(すなわ)ち義経の流布の顛末記事を各方面から集めた。又、資料の探索中、明治維新黎明期、明治・大正時代の激流に生き抜いた人々の姿を見出し、筆者自身も大きな感動を受けた。

今拙書に大変お世話になった国会を始め各県立図書館、各記念資料館、探索地の皆様方の協力をいただき、深く感謝申しあげたい。

２０１３年４月８日　　池田　勝宣

目次　2

はじめに　1

第１章「成吉思汗即源義経伝説」の経緯の源を探る　３―２５
『義経入夷渡満説書誌』　著者・岩崎克己の履歴
『浦潮港日記』著者・瀬脇壽人（ひさと）の履歴を見てゆく
瀬脇壽人の『烏剌細窓斯杜屈（ウラジワストク）見聞雑誌』・加藤九祚編の『浦潮物語』（１）紀行文
『義経入夷渡満説書誌』より「浦潮港日記」全文を読む

第２章　伴信友（ばんのぶとも）の『中外経緯傳（ちゅうがいけいいでん）』の原文を読む　２６－３１

第３章　間宮林蔵と松浦武四郎の北蝦夷（樺太（カラフト））紀行考　３２－５０
源義経の記述部分を『窮髪紀譚（きゅうはつきたん）』から
『柳莽（りゅうあん）雑記』の著書は栗原柳莽でなく手塚好盛（律蔵）ではないか
武四郎の蝦夷地での義経伝説の記述考を考察

第４章　瀬脇壽人の「浦潮港日記」以後に書かれた書誌を見る　５１－６７
「沿海州南部烏蘇利蘇城（ウスリースーチャン）郡紀行」鈴木大亮著は
『西伯利（シベリア）地誌』・『西比利（シベリア）東偏紀要』等

第５章　福澤諭吉と瀬脇壽人・富田鉄之助・末松謙澄・内田弥八の関係　６８－８５

第６章　『義経再興記』を考察する　８６－９８

第７章　小谷部全一郎著『成吉思汗ハ源義経也』を考察する　９９－１０６

第８章　新聞記事（読売新聞・満州日日新聞）を拝見　１０７－１１５

第９章　明治維新、明治、大正時代の国際外交を見る　１１６－１２６

むすびに　１２７－１３３

附録・ウラジオストク・ウスリースク・ハバロスク紀行　１－１５

Ａ４・横４０字×行３０=１３３枚　（附録１５枚）計１４８枚

第1章「成吉思汗即源義経伝説」の経緯の源を探る

明治黎明期より急速に広まった「成吉思汗即源義経伝説」を解き明かす作業を、まず始に岩崎克己著『義経入夷渡満説書誌』から見て行き、「ジンギスカン即源義経説」が生まれた経緯、そして一般民衆に熱く支持された経緯を、時代背景を探りながらその真相に迫ってみたい。

『義経入夷渡満説書誌』 著者･岩崎克己の履歴を見て行く

岩崎克己(1905－1993)享年８８歳。研究業績は日本英学・蘭学史の研究を中心に多数の著書がある。昭和１０年(1935)に**『柴田昌吉伝』**著し、 柴田昌吉(1842―1901 年)は英語辞書史先駆けの研究者で、幕府・明治政府の通訳を務めた人物伝となる。昭和１４年に**『前野蘭化』を著し、**蘭学史の基本文献をまとめた名著、前野良沢(蘭化・1723－1803)は蘭学者、蘭方医学者、『解体新書』の主幹翻訳をした人物伝となる。(東洋文庫 1―3 巻となる)

昭和１８年年に**『河本重次郎伝』を著し、河本重次郎**(1859―1938)は眼科医、医学博士で明治 18 年ドイツ留学、帝国大学名誉教授伝記物語となる。同年に、**『義経入夷渡満説書誌』**を編輯、私家版として出版した。

岩崎克己は和蘭語を一橋大学で学び、蘭学史・医学史・英学史の分野の研究著書を、昭和 10 年から 18 年に集中的に発表されている。その中から**『義経入夷渡満説書誌』**を取上げる。この著書の内容は、平泉地方の義経不死伝説や判官物語、庶民に愛され続けた『義経記』、更に蝦夷渡りへと物語が発展して行く過程を著述し、やがて江戸後期から明治維新と時代を下って、義経が大陸渡満説に変わってゆく経緯をまとめたのが『義経入夷渡満説書誌』著書となる。『義経入夷渡満説書誌』が発刊は昭和１８年となり、先の大東亜戦争のハワイ真珠湾攻撃が昭和１６年１２月８日の開戦から１８ヶ月後の発行となっている。その時分は言論統制の厳しい時に、岩崎克己は義経の大陸渡満説を否定し、お上の咎めを意識したのか、すれすれの著述をもって、自らの主張・歴史・文学観を恐れずに著した『義経入夷渡満説書誌』は、私家版で発行した勇気は讃えられる。筆者はこの書に出会えたことに運命感を抱いた次第である。

義経伝説の集大成として『義経入夷渡満説書誌』を本に、大陸渡満言説を明治・大正・昭和の時代背景をも含めて探索を試みてゆく。以後『義経入夷渡満説書誌』を文章校正上により筆者は『書誌』呼びことにする。この『書誌』は源義経の遁走して大陸に渡った肯定説・否定説・伝説・小説・随筆等６１８編の文献等を解題され、「成吉思汗 即 源義経説」の伝播過程の解説を克明にされている。日米開戦時下の日本国民は、義経伝説資料収集に

世は決して協力的でない時代、義経の大陸遁走説を否定し、この「成吉思汗即源義経説」が世に与えた影響は計り知れないと結んでいる。

『浦潮港日記』著者・瀬脇壽人の履歴を見てゆく

次に上げたい人物は「手塚律蔵=瀬脇寿人」である。この人物を岩崎克己が「手塚律蔵伝草稿」を昭和１３年前後に完了し、自費出版を望んでいたが、諸事情と時代背景よって困難となり、それを惜しんだ温知会(医療団体と思われる。記録第５８輯・昭和１３年２月)の発表の場を与えてくれた。岩崎克己氏講演「手塚律蔵と瀬脇壽人」は、手塚律蔵が佐倉藩に招聘された関係であるので、上記の題名で千葉県立中央図書館に複写が残されていた。この題名で戦後再度の出版の話が持ち上がったが、実現しなかったのが「手塚律蔵伝」である。又同時期に著した、『中外医事新報』[1]の雑誌に「シーボルトの成吉思汗即源義経とその後世への影響」が３回にわたり執筆されている。関心のある方は昭和１３年２月(1252号)、３月(1253号)、４月(1254号)となっている。

1、『中外医事新報』戦前の医学の学術雑誌。明治１３年から昭和１５年終了となっている。

瀬脇壽人=手塚律蔵(1822－1878 年)は幕末の蘭英学者。文政５年周防国熊毛宰判(長州藩では一代官が管轄する区域の医師)手塚壽仙の次男として生まれる。名は好盛、初め手塚律蔵と称す。手塚氏の祖先は手塚太郎輔光(金刺左衛門佐)に遡る。その孫光盛は木曽義仲に従って戦功をたて江州(滋賀県)栗律泉で義仲と共に戦死したと伝わる。その後裔に手塚光朝に医の生業として、次代の季重が京都に移住、医を学び防州熊毛郡小周防に居住した。

手塚律蔵は天保 9 年(1838)、１７歳で長崎の高島秋帆 (1798－1866・幕末期の砲術家、洋式兵学者、高島流砲術の創始者)塾で蘭学と兵学を学ぶ。この塾友時代に上総国佐倉藩藩医鏑木仙安(佐倉藩士・蘭方医)と西淳甫(同・和蘭医)と親交を結ぶ。天保１３年(1842)高島秋帆は、密貿易の讒訴で投獄され、律蔵は西淳浦の紹介で坪井信道(蘭医)塾入門する。この塾で南部藩(盛岡)の製鉄の父といわれる大島高任と出会い、蘭学に自信がついた頃、和蘭ヒュゲーニン著書、大砲の鉄素材と鋳造の『西洋鉄熕鋳造篇』の翻訳し手塚律蔵の名を世の雄藩に轟かす。高任の私記『鉄銃製造御用心覚の概略』に「手塚律蔵は元謙蔵と称す。嘗て坪井信道の門に在り蘭学を学ぶ。高任と同窓の友なり」とある。

この時期に、シーボルトは文久２年(1862)許されて再来日し、幕府の顧問に招聘せられて江戸蕃所調所に在留していた。調所には手塚律蔵の僚友大島高任(1826－1901・釜石に日本

初の洋式製鉄用高炉建設者)が居た。大島にシーボルトは「源義経は衣河で死なず、蝦夷に逃げ、更に満州に渡って成吉思汗になった」と云う吉雄忠次郎(和蘭通詞)説話を聞かされた経緯となる。しかし、大島は不信であったが、この話を大島から聞かされた手塚律蔵は「之が抑々律蔵が義経渡満伝説に感心を持つに至った起原となる」と、崎克己は述べている。手塚はシーボルトと直接には会ってはいないらしいが、後年までこの話を温めていた。

又『佐倉史談』(佐倉堀田家歴代記)に《周防の人手塚律蔵なるものあり。英学通ず。其父は医師なりしを以って、正睦(堀田家第５代藩主)侍医西淳甫と相識る。寛永３年中、淳甫を東道として佐倉に来り遊ぶ。当時佐倉には蘭学に達するもの甚だ多しと雖も、未だ英学に通ずるもの一人もあらず。・・・・平野重久なるものに内意を下して律蔵の人物を鑑識せしむ。重久乃ち律蔵の対面せしに、性質淳朴にして物に誇らず、頗る君子の風あり。当時洋学者流の習癖たる大言壮語人を嚇するの状なし。・・・・正睦大に喜び、其末だ長藩に仕えるを幸い、客礼を以て之れを聘し江戸の藩邸に於いて英学を教授し、兼ねて砲術せしむ》とある。

実情は律蔵が英学の知識を以って佐倉藩へ招聘されたのではなく、後に律蔵は英学刻苦勉励して身につけたものと伝わる。唯、佐倉藩士の中で、彼以前に英学研究に着手した人が無く、律蔵の英学知識を当初から在ったものと思われていたからであろう。

岩崎克己は《私一個の考えでは鏑木仙安(藩医)が律蔵を佐倉藩へ導くに最も與って力の有った人ではなかろうかと思っている。・・・佐倉藩の和蘭医学の発達に寄与した佐藤泰然(順天堂の創設医学を教授)の碑文(芝白金三光町松秀寺)に「洋学砲講蘭書、招手塚氏為蘭学教官、皆君之所奬勵計畫也云々」とあり、天保年間手塚、鏑木は共に長崎に在った事実から、既にその頃から交友関係が結ばれていたと想像はつく。・・・維新後に鏑木は律蔵の五女みつ子と海軍々医、山本景行との結婚の媒酌もしている。》とある。

嘉永６年(1853)６月、ペリー来航と翌安政元年３月の日米和親条約を契機に、親書の外交関係の事務処理が困難になった為、勝海舟等が、蕃書調所(江戸幕府直轄の洋学研究教育機関、後の東京大学の一つ)創設が立案された。安政４年(1857)蕃所調書開業時、律蔵は総勢５８名の中に含まれていた。律蔵の職名は教授手伝役「１０人扶持・５両宛」の待遇で招聘され、教授職の者が「病気等ニテ御用差支候節ハ、内密御用等迄も名代」として

勤めることが求められていた。調所設置は蘭学から英学(国際語)へと移行期と重なり、律蔵も手探りの英勉学ながら、最初の大役はアメリカ大統領ピアースの国書の翻訳作業を勤めた。律蔵と西周(啓蒙思想家・蘭学・英学は手塚律蔵に学ぶ)の２人は「イギリス文字壱通御渡」され、英文からの直接翻訳を分担役割したと云う。

寛永４年(1851)、中浜万次郎(土佐の漁師・1841 年遭難、米国捕鯨船に救われる、米国に渡り捕鯨と英学を学び、ペリー来航時には通訳に従事)が数十冊の英書共にアメリカより持ち帰った「伊吉利文典」(英語から直接日本語引用)は、問答形式の英文法の基本が説明してある本があった。万次郎の帰国時、幕府の命で長崎奉行所に他の書籍と一緒に没収されていたものを、嘉永６年末に、江川太郎左衛門(高島秋帆に砲実術を学ぶ、韮山に反射炉築造)が返還を願い出て、まもなく返還された経緯となる。西村茂樹(佐倉藩、堀田正睦が老中首座外国事務取扱係り外交上の機密文書を担当)の『記憶録』に「律蔵はこれを万次郎から借り出し、西周とともに「刻苦勉強」し「読過」したとある。「未だ英語の発音を知らず」という状況下にいた手塚律蔵らは「中浜氏に就き、初めて発音を学び、以って英書を読む」大いなる助力となっていたと記している。

律蔵たちは自分の塾で翻訳した文典は、《『英吉利文典(全)』１８５０年版　手塚律蔵・西周助・閲　津田二五郎牧助右衛門・校正　又新堂(手塚律蔵の私塾・美濃判)》で刊行し、俗に「木の葉文典」と呼ばれた。原本は 1850 年ロンドン刊行されたもの。この律蔵等の翻訳した『伊吉利文典』は文久・慶応の２回に亘って活字で復刻している。幕府に於いても５回出版され、国際語は蘭学から英学へと変わり、若者たちへの英学修行の貢献度ある文典となったのである。後明治３１年大槻文彦[1]博士(国語辞典『言海』の編纂者)は「今洋学家の４０歳以上の人は此文典の庇蔭に頼らざりし人はあらざるべし。文彦も其一人に漏れずして此書より英学に入れり。されば言海も広日本文典も遠く其淵源をたづぬれば此書より発せり。今昔の感なきにあらず」と述べている。

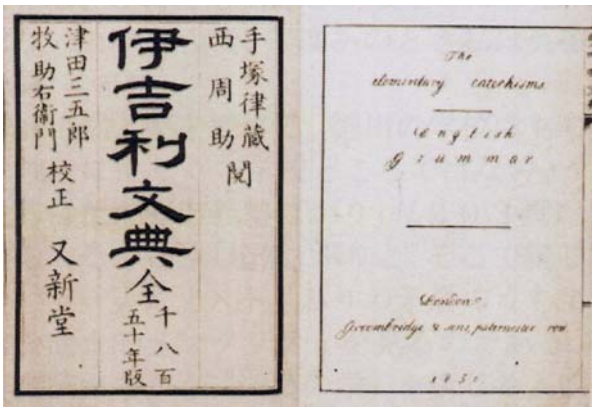
1、大槻文彦(1847－1928)仙台藩士、富田鉄之助の後輩。『言海』の完成祝賀会に内閣総理大臣・伊藤博文をはじめ榎本武揚・勝海舟等が出席中、福澤諭吉も招待されたが、次第書に伊藤の名前の下にあるのを見て、「伊藤の尾につくのは嫌だ、学者は政治家の下につかぬ」と、出席を辞退した逸話が伝わる。この次第書は富田鉄之助がまとめたもので富田の苦渋が知れる。(富田記述・５章 75－78 頁)

『慈大愛宕新聞』(東京慈恵医科大学発行、千葉県立中央図書館蔵)

昭和９年１２月１日の「手塚律蔵(１)大久保武二著の連載記事(１５回)に、《律蔵氏の

選書遺墨は次の通りである。１、彼理日本紀行訳書。２、鶏林事略の原稿。３、浦潮滞在日記。４、日記、地理、紀行類等訳書。５、1872 年和蘭新聞紙訳外諸雑記類。６、明治８年より１１年迄浦潮監貿易事務官時代の諸記類。以上約７０余点。此等の外にも訳書泰西史(西洋諸国)略万国図誌、清真字典(イスラム)、海軍要領、火攻精迸其他がある。》と残されている書籍数を上げている。

時代は手塚律蔵の身の上に災難が降りかかる　全国的に文久２年(1862) ４月頃から暮頃迄、尊皇攘夷運動に伴って起きた洋学者迫害の絶頂期の時代に当り、当世蘭学、英学は一流とされていた律蔵は、長州藩邸の洋学勉強会において、長州藩若者に「売国奴は斬ってしまえ」と襲撃された。後難を恐れて佐倉に隠遁して、母方の姓に改姓して名を瀬脇良弼と改め、同藩の学校博文堂の総裁兼教授として明治２年まで佐倉に遁世する。その間９年の情報が途切れるが、名を金指光壽、瀬脇光長、晩年に瀬脇壽人と改めていた。この時期に瀬脇壽人は結婚、お相手は堀田家奥女中の大目付、木村與治右衛門の娘、賀濃(賀野)と云い、媒酌人は堀田侯の侍医神保良肅(緒方洪庵門下)である。



瀬脇壽人『佐倉市郷土の先覚者手塚律蔵』より　手塚・西の『伊吉利文典』WEB 版稀覯書展示会より

律蔵の襲撃の顛末を『懐往事談』福地源一郎(幕末維新の政治家・ジャーナリスト、福地桜痴)著にある。又福澤諭吉著の『福翁自伝』に出ているので後述する。(第５章 74 頁)

維新後、明治３年外務省に入り翻訳に従事し、同８年春、露清韓国境の視察を命ぜられ、同９年に初代浦潮貿易事務官[注1]となる。同１１年１１月２６日、英国の貨物船ドラゴン号で函館に戻る途次、船中で客死(享年５６歳)となる。

翻訳書『西洋鉄熕鋳造篇』、『海防火攻新覧』７巻、『洋外砲具全図』上下、『海防心得草』1 冊、『泰西史略』初編 3 巻 3 冊、『鶏林事略』２冊等がある。

1、**貿易事務官**・榎本武揚（旧幕臣・駐露公使）が交渉にあたり「我が国の商人たちがウラジオストクへ赴く者多いので、その管理に浦潮港に通商支配人（コマーシャル・エイジェント）置きたい」と申し入れに対し露国側から「領事館の官吏（かんり）の在住は認められないが、名義が通商支配人なら容認する」との回答を得る。これにより日本政府は 1876 年「貿易事務官」を「貿易事務館」として開設した。

（**参考文献**・「手塚律蔵と瀬脇壽人」岩崎克己講演・温知会・昭和１３年２月。『英学史研究』第２８号・1995 年・日本英学史学会。『佐倉市史研究会』第２２号「佐倉出ノ人手塚律蔵と洋学」小川亜弥子著・佐倉市史編纂。『光地方史研究』１２号・山口県光町。『佐倉市郷土の先覚者手塚律蔵』佐倉市教育委員会。『蘭学資料研究会・研究報告』第８１号・井上一郎・１９６１年５月２０日・『復刻版蘭学資料研究』第５巻・１９８６年６月。『ウラジオストク物語』原暉之著）

貿易事務官派遣の前年に瀬脇壽人の『烏刺細亞斯杜屈（ウラジワストク）見聞雑誌』沿海州南部紀行を見る

瀬脇壽人がウラジオストクでどのような立ち位置で、露国・朝鮮・満州・シベリアを見聞していたか見る。瀬脇壽人は現在の韓国との領土問題継続の「竹島=独島」の問題に係わる人物でもある。この日韓領土問題の件に関することは、「義経言説」と直接に関係がないので省くが、竹島問題に関心のある方はインターネットでこの問題を取上げた記事等が出ておりますのご覧ください。

明治の黎明期、瀬脇壽人が浦潮港（ウラジオストク）において、極東沿海州の見聞情報を知る手掛りとして、加藤九祚（きゅうぞう）氏(ユーラシア大陸の考古学・シベリア等書籍多数)の「浦潮日記」を読む。この紀行文は瀬脇壽人が明治８年(1875)４月７日から６月１４日までの６８日間に渡り、沿海州南部の露国・朝鮮半島の実情調査視察日誌である。明治初期のウラジオストク周辺の情報は日本に於いて初めての地誌資料となるが、不思議なことに１世紀間も外務省保管庫に埋もれていて、シベリア研究の先学者、加藤九祚氏によって日誌が発掘され、解説附の全文が日の目を見たのは、１９７２年(昭和 47 年)のことであった。

加藤九祚編の『浦潮物語』(1)より紀行文を拾い読みする　（原文はカタカナ）

（加藤九祚編『季刊ユーラシア』４号（（一）「浦潮日記」瀬脇壽人とそのウラジボストク）より、５号（二）「鈴木大亮のウラジボストク」、６号（三）「川上俊彦と太田覚眠」）となっている。

明治 8 年4月7日《清国海岸より露国ウラジワストーク、ポッセット辺視察の為、東京を発して横浜在留露国領事館に到り、マレンダ氏に会し、共に公使館に到りければ、公使ストルウェー氏に面謁し、マレンダ氏通弁にて、余より言葉を発し、拙者儀は此度貴国領内

ウラジワストーク及びポッセッ辺まで到り、彼の地の形勢より其度数寒暖、商品の多寡、人民の多少、物産の種類等を視察せんが為、渡海いたさんとす。・・・近頃貴国政府にて右の両地に首府を開き給うと承りを以って以後は我が国よりも、時宜(じぎ)に因って渡海いたし、相交通して尚交際を厚くせん事を欲し、今般視察に赴くなり。・・・》と。

同4月16日、ロシア輸送船「ヤポーネツ」号に乗船する。《・・・本日午後第２時半より錨を揚げ、長崎港を発し、西に向い、五島沖に到り、夫より船首を右に転じて正北より二分五里ほど東に向け走り・・・》

同4月19日《・・・午後第五時過、甲板に登り回望すれば、左辺に当て稍大(しょうだい)なる一島ありける故、此島の名は何島と申すか、何れの国の領地に属するやと尋ねれば、士官答えて、此島の名は松島と称して日本の属島なりと云いい、甚だ恠(あやし)み居し処へ、仏人も偶(たまたま)来りければ、又尋ねしに、其人も日本の属島と答えけり。されば我が属島なりけりと始めて信じぬ。此島に人ありやと問へば、人家はあらじと云へり。余双眼鏡を出して照し見たれども、薄暮なれば模糊(もこ)として見へず。》と、瀬脇は松島を日本の属島と確認している。

同4月21日《・・・午後第一時頃に至り、士官等北方を指してウラジワストークの山が見えるぞと叫びしゆえ、頭を回らせば、余が近眼にも遥に一山の海上に聳(そび)へたるを見る。・・・海上には露国の国旗を立たる軍艦五、六艘あり、又英船一艘、亜船(アメリカ)一艘、・・・蒸気船もあり帆舟もありて、総計七、八艘も見へ、満州人の丸木舟は四、五十艘余(あまり)もあると見えたり。・・・》

同4月22日《・・・露国の鎮台(ちんだい)館[1]に詣でる。・・・当地の開港、人員、商品の事に渉(わた)りけるゆえ、商品は如何なる物品、当地に入用なるやと申ければ、米、煉瓦石、塩、石炭の類、又人員は露人五千人余居住し、其他満州人四、五千人、朝鮮人五、六千人も来て、夏は日雇、漁猟(漁労と狩猟)或は他人の僕従など勤むれども、其内三千人ばかりは、冬は皆其郷里に帰り住むなどと話し、又当年は是よりサガレーン島(樺太島)に殖民し、黒竜江辺には亜(アメリカ)国なる露国領の人民を移さんなど話せり。・・・・》

1、ロシアの沿海州軍務知事館、ウラジオストク有数な大きな建物で市内から眺望できたと伝わる。

同4月28日《・・・地方官フィリポウィチ氏が官宅に詣いり、・・・初面会の挨拶して、拙者事、今般視察を命ぜられ当地に来り、暫く滞在いたすべければ、万端宜しく依頼する旨を述べる。次にフィリッポウィチ氏より言葉を発して、貴国と台湾並に朝鮮との関係は、如何なる訳合にて起り、結末は如何なりしやと間ふ。余之に答えて、拙者は此事件に関らざれば、巨細の事を詳にせざれども、貴下にも歴史にて御有あらん。元来朝鮮国は古来我が国の付属の如く来朝したりしが、徳川氏の時代に至り、無益の費用を省かんが為とて、対馬にて朝鮮の使者を受る事と為り、夫より我が本国と漸く疎遠に至りしが、近年復活我が国より使節を送りたり。

其後の事は未だ詳ならずと述たり。同氏又云うは、台湾の事件は如何。余又之に答えて、台湾は１５００年間に、我が国の軍艦彼の島に至て、一目我が属島たりしが、其後久しく我国より彼の島に至る者なきに至り、支那より其西北を征服し、東南部は１８部に分れ、恰も独立国の如く為り居し由なり。

然るに５年前、我が属島沖縄島の漁夫四１５人、其東南南部に漂着しければ、土人其４１人を殺害し、又翌年、本国備前の住人４名も台湾の東南部に漂着して荷物を掠められ、船を奪われしゆえ、此趣を支那政府に報告せしに、支那政府にて更に干渉なき旨申し越たるにより、将来の災害を恐れ、止事を得ずして去歳(昨年)船舶を送りしに、彼より撃て来り、竟に一戦に及び、我が兵幸にして勝利を得、悉く服従せしめたり。此時に至り、支那より前言に反して、台湾は我が属島なりと報じ来りしゆえ、遂に大議論に及び、初めて干渉なしと言し事を詰りければ、支那にて其理に屈し、敢えて争ふこと能はず、償金を出すに至れり。是亦拙者が関らざる事なれば詳なる事を知ずと述べたり。

次に余より言葉を発して、本地の輸出品は如何なる品なりやと間ふ。フィリッポィチ氏答えへて、・・・貴国は近国なれば、国産の物を輸入し給へと云うふ。余如何なる物品を要するやと間ふ。氏は新開の港なれば、百物皆有用なれども、大麦粉、塩、石灰の類最も切望なりと。・・・》　**★明治４年「宮古島民台湾遭難事件」死亡者５４人、台湾バイワン族による事件を指し、明治政府は陸軍中将西郷従道に兵３千をつけて台湾へ派兵している。第９章 118 参照**

同5月3日《・・・当港より北、５０里余の地に東河套(内蒙古)と称する地ある由、此地に古代日本人来住し、今に至りても其墳墓累々として遺り存ぜり。蓋し其人の漂流せし時、上陸したる地と言伝ふ由、武藤(平学)其外の皇国人、又土人等が話しなり。本地の外、満州地には日本人の墳墓、諸所に在る由なり。・・・》と記し「義経伝説」を指している。

同5月5日《旅宿の主人コーペル氏とヒンランド人某氏と戸外にて話すを聞く、支那政府は金穴(金持ち)なり。先年英仏と戦ひ敗績して莫大の償金を出し、去年又台湾一件にて日本へ償金を出したと云う。其語気味うに支那政府を真に富めりと誉るに非ず。蓋し嘲哢せしなり。・・・英人又申には、日本国は近来大に開化して東海の一強国なり。其政体我が英国と同一なれば、我甚だ日本国を愛す。支那の北京は日本の兵隊３万出せば、手に垂陥るべし。今日日本国の位階は恰も支那人の頭上に在り。嗚呼何ぞ支那人の惰弱なること如く此甚しき、或は嘲り或は嘆きたれども、支那人は唯黙然たるのみと武藤が話なり。》

同5月7日《・・・満州人、万城人と称する人種あり。初夏より初冬の頃までウラジワストークに来り、日雇人足の稼をし、或は小間物を売り、或は煮物などにて些少の金を貯へ、中冬頃に至れば其郷里に帰る由。此人種皆支那人の習俗にして支那学を学び、支那政を奉じ、己れを尊とび人を賤んする風俗と云う。朝鮮人も此両人種も穢れ垢つきたる衣服を着し、露人に使役、実に憐むべき醜態なり。・・・此満州、万城の両人種は、朝鮮人雑居せり》

１８６３年日本地図・左上竹島・中松島・右隠岐島　　現在の地歴高等地図(帝國書院より)

ウラジオストクに滞在中の商人、武藤平学(奥州の人)が外務省へ「松島開拓之議」請願を提出、松島の開拓を申し入れ、外務省で議論の結果、1880 年に調査船を派遣し松島が欝陵島(うつりょうとう)であることを確認した。因って政府は現在の松島と考えていた事が、現在まで尾を引いているのである。

★ネットに「竹島領有権問題の経緯・第３版」調査及び立法考査局・第 701 号・国立国会図書館・参照

同5月15日《午前第１１時、学校より帰り見れば、武藤が義兄の金麟鼻[1]、吹風(300 程の朝鮮村落)より着し、旅館より武藤へ、書簡を送りたりとて、武藤乃ち之を袖にし来りしゆえ、聞き見れども其書たる、一種の俗文なれば、其意を解すること能はづ。武藤より其意を聞けば、賢弟(かしこい弟)去冬、本国の長崎へ帰りたるに、食言せずして再び渡海せられ

るは、信を失わざるの至り、後刻(数日後)面会すべければ他言を煩はさずとの意の趣なり。此人、姓は金氏、名は麟舜と称し、其本国にて簪纓の家に生れ、頗る其国学に達したる者にて、吹風に脱走し来たりても、学校を開き生徒を教導したる由。武藤が朝鮮学は、金氏より受けたる由なり。・・・後略》。

1、 姓は金氏、名は麟舜、簪纓(地方の高級官吏)の家に生まれ。慶興府の小吏であつた金麟舜は、武藤平学(朝鮮語学ぶ・金と義兄弟の関係)の紹介で瀬脇と合う。『鶏林事略』の情報提供者。

明治１０年１１月頃、瀬脇寿人は東京に帰国時に、大槻文彦(『言海』国語辞典編纂者)博士へ竹島と松島の話をする。博士は同１１年８月３０日の『洋々社談[1]』に「竹島松島の記事」を載せた。瀬脇の意味する竹島・松島は何れも今日の鬱陵島の事で、外国人がマツシマと呼んでいる島は「鬱陵島」のことで、即ち徳川時代より竹島に当る事に気付かず、鬱陵島とは全く別島と誤解して、盛んに松島の開拓の建議を唱えて居た経緯となっている。

1、『洋々社談』明治近代化を支えた学術、知識集団を考察する上で重要な史料雑誌。

次に『中央公論』昭和13年8月1日の手塚律蔵の「浦潮日記」遺稿がある

この遺稿は「浦潮日記」由来記には手塚英孝氏の名があり、協力で記事が成立したと察する。手塚英孝氏の経歴をネットで拝見すると、手塚律蔵の曾祖父の弟にあたるそうで、氏は慶応義塾大学中にトルストイに影響を受け、日本共産党に入党し、『民主文学』の編集長や『小林多喜二全集』にも携わっていると出ている。1981 年死去、享年 74 歳とある。

明治9年4月29日《本地を露語にて「ウラヂワストーク」と称するは其の初、開港の時、露人の命じたる地名にして、領地の東部といふ義なり。露都より最東に当るを以て斯く名づけしなるべし。朝鮮、満州にて唱ふる古名は「海参崴」と、云へり、本地は古来多く海蔘を産するヲカなるゆゑ、此の名称ある由なり。・・・》★海参はナマコ、崴は山と平地。

同5月3日《当港に在留する大商は、亜国４人、宁漏士国４名、英国１名なれども、小商は三国共に４、５０名下らず。此の九商は皆露国より土地を借り、巨店を開き、広く商法を行へり。・・・此の商人は露国の地方官に商税を収め居る者なれば、商品として販売せしむるなり。・・・》

同5月4日《・・・・世評を聞く朝鮮人の当港に来住する者、１人として露政を愛慕し、

露地を羨思(えんし)して来るにあらず。本地に住すと雖(いえども)も、常に露政を罵り、露人を軽んず、満州人も亦然りと云ふ。・・・》

同11月9日《前月上旬より露英両国葛藤[1]を生じ、英国より本港に襲来せんと云ふ評ありしが。中旬に至っては、鎮台より英艦侵入せしも計り難ければ、各国の人民、私貨、家具を携(たずさ)へ、或は内地に入り、或は他港に赴くべし。

・・・本港府庁より遠近の村落に布告あり。今年も英艦襲来の警備あり。報告の有志の者は本国人、外那人を論ぜず募るべければ、府庁へ申し出るべし。其の才能に応じて士官にも抜擢せんと。この布告をみて露人には微募に応ずる者、すでに、２、３百名もありしと云う。然るに満州人は本地の土人にして、露政を受けながら露籍に入ることを肯定する。今、尚入籍する者甚だ少なく、僅かに、２、３０名のみなれば、微募に応ぜし者なし。本日、館前へ、士官３人にて、凡そ百名ばかりの微兵を率ゐ来り、其の産地及び姓名、年齢を記し帰れり。兵卒の容貌をみるに、皆、露人にして、農民の如きもあり。市人の如きもあり、之を調練し、兵隊に編入するものなり。

朝鮮人は、新、古、の別あり。其の「新」と称するは１０年以内に、本国を脱走し来り、新に露籍に入りし者なれば、微募に応ずる者もありと云う。是れ即ち、新朝鮮人なり。其の「古」と称するは、本港より北部「ウラヂーメル」「チムハー」「ヤンチカ」「ナホーツカ」等の地方、昔は、朝鮮国の判圖(はんず)なりしが、後、支那に属し、阿行煙の事件にて戦争の時、嘗って、支那帝、英国、仏国、両国の兵に追われ、露領に敗走し、其の後、支那帝より、１７、８年前、其の謝礼として、此の地方を露国に贈られり。此時朝鮮国の北界、豆満江(とまんこう)より黒龍江(くろりゅうこう)までの沿海地方悉(ことごと)く露領に属くしたりき。其の朝鮮国の判圖なりし時より、此の地に居住する鮮人あり。これ即ち古朝鮮人なり。此の古朝鮮人も満州人と同じく露政に服従せず、露人を罵(ののし)ると云う。》

1、クリミア戦争(1853－56)衰退したトルコにロシアが南下、英、仏、サルデーニャ、オスマントルコの４ヵ国の戦いに敗れたロシアは、1854 年カムチャツカ半島のロシアの港湾で英・仏海軍と激戦、この戦い並行して露国は日本と開国交渉迫り、1855 年日露和親条約が成立させている。明治 9 年(1976)に於いても英露の小競り合いは続いていた。1860 年、露国と清国が北京条約を締結直後、「メア湾」に露国水兵 40 人が上陸した。その集落は「東方を支配せよ」(ウラジオストク)という名前が与えられた。この湾はメア湾と呼ばれ、1850 年、最初にこの湾に仏・英の捕鯨船が湾内に入り、「メア湾」と名付けた経緯であるが、後続の露国が水兵駐屯させこの湾を防衛した。又後に 1882 年ウクライナのオデッサ(黒

海)からウラジオストク直行便が結ばれ、ドイツ人・スウェーデン人等が多数入植した経緯となる。

このような英国・仏国・露国がクルミア半島の領土取り合いから、極東アジアの局面へ移り、英・露の鍔迫(つばぜ)り合いなる国際的な戦略を、1850 年―1880 年の先進国の闘争を見せられた明治黎明期の政府の指導者は、「領土侵略はこうしてやるのか」という国際学を痛烈に学んだ時代となる。

明治11年8月1日 《一昨年、初めて、本港に在留を命ぜられし時、公使、榎本武揚(たけあき)(幕臣・蝦夷共和国樹立・明治政府の外交官)を以って、小生の官名を何と称すべきや、常例の如く、領事館と唱ふべきやと問ひたれば、露国より、浦潮港は、未開の地にして、先年より独逸(ドイツ)国、亞(アメリカ)国などよりも領事館を設置せんと請求せし時、未開港の故と称して固辞せり。日本と露国は隣国にて、毎年漂流船もあり、又、商船の往返も多ければ我国のみ設置を承認したり。然れども両国へは、未だ許可せざれば、事務官と唱へ給え、露国よりの待遇は領事館と同一なりと答へとし云ふ。》

8月25日《開拓使より、箱館丸、昨２４日、小樽を発すと電報あり。又、「ミニステル・クロカ」金剛(こんごう)艦にて、２７日開帆(かいはん)すとあり。金剛艦の出帆は、本港近地測量のためならんか。解(ほつ)し難く、且(か)つ「クロカ」といへる姓の人は、何人にや、黒岡帯刀(英・仏海軍に学ぶ・台湾総督府海軍部参謀長)氏ならんには「ヲ」の字少なく、開拓長官黒田君ならんか。》

8月27日《丁抹(デンマーク)国の電信局にて、作れる麥(むぎ)、黄色を帯びて、我国の秋の心地せり。午後４時、蒸気船一隻入るをみれば、夕陽を負って旭日の旗翻(ひるがえ)れり。箱館丸なりと、松本と共に、小舟を傭(やと)って漕出しに、一艘の小舟に両人乗り来たれる人あり。大槻、村尾両君なり。互い声かけて過ぎ、余らは箱館丸に登り、無難(ぶなん)を祝して帰りぬ。・・・(略)》

★**丁抹(デンマーク)国の電信局の説明は２０頁ある。**

8月30日《早朝、一隻の大艦、黒煙をあげて入る。金剛艦なり。錨を投じて、１９発の祝砲を打ち、露艦よりも答礼しぬ。箱館丸よりの迎舟にのり、艦に着し、黒田清隆(陸軍軍人・政治家)川村(純義・参議兼海軍卿)両君に対面せり。・・・(略)》

１８７８年に撮られた「金剛」
金剛型装甲巡洋艦・英国建造
全長 70、41m・石炭 330 トン
乗員・２８６名
ウィキペディアより

瀬脇の浦潮斯徳在住の日々は貿易関係の取材と露国･朝鮮の調査をしていた

浦潮港は国際的緊張の湾口であることが『ウラジオストク物語・ロシアとアジアが交わる街』原暉之著の「第七話・一衣帯水」に、瀬脇壽人の記事がある。

《街衢の後なる金角峰と唱ふる山に登り、四顧すれば、市中には露国の鎮台館、亜国、独逸の商館其他商客の居宅、満州人、朝鮮人の矮屋(小さい家)など一望の中に連り、又海上には露軍艦三艘、亜船、英船各一艘、朔風(北風)に国旗を翻へし浮かべたり。》とあり、これは、瀬脇寿人の『烏剌細窓斯杜屈見聞雑誌』の中の一節である。１８７５年４月に南部沿海州の実情調査のため、ウラジオストクに派遣された。略２ヶ月にわたる滞在中の見聞を日記で綴ったものである。

この視察日記は、明治初期の洋学者の外国体験記としても、またウラジオストクに関する日本で最初の本格的地誌資料が、１世紀間も外務省の保存庫に埋もれ、シベリア研究の先学、加藤九祚によってこの記録が発掘されたと先に述べた。

瀬脇がウラジオストクに派遣された頃、ペテルブルク(露都)では樺太をめぐる日露交渉が大詰めを迎えていた。樺太の国境問題は明治政府が幕府から引き継いだ懸案で、この樺太問題解決の特命全権公使が榎本武揚である。１８７５年４月２６日(西暦５月７日)日露間のペテルブルグ条約が調印の翌年、ウラジオストクに日本政府の在外館設置交渉を重ねた。榎本の申し入れは、日本商人や漁業者とロシア地方当局との間に、「貿易事務官」通商支配人(コマーシャル・エイジェント)を置く事をロシア側から、「双方の為め至極入用」との回答を引き出すことに成功した。その事務所を「貿易事務官」通商支配人(コマーシャル・エイジェント)に「貿易事務官」と名付け１８７６年、初代の貿易事務官に瀬脇寿人が任命された経緯となる。

２年後の年の夏、開拓使長官の黒田清隆、注 そして、ペテルブルグから陸路シベリア横断してきた榎本武揚も浦潮港来訪での慌しい日々を瀬脇は過しいている。瀬脇はその年の晩秋に病状が悪化し帰国の途に着いたが、明治１１年１１月２９日、船中で客死となる。

瀬脇と黒田北海道開拓長官は、北海道の産物を対岸貿易の可能性を探って見たが、函館からの織物、陶器、海豹皮等の高級品は輸出受けとはならず、麦粉、鮭、鹿肉の缶詰類、食料品や石炭の引き合いはあった。しかし、ロシア側の希望は、長崎には船舶のドックあって船の修理と燃料(石炭)等の便利性を優先し、長崎との貿易を望み、ロシアと函館貿易は伸びなかった。

注・黒田清隆(1840－1900 年)薩摩藩士、陸軍軍人(陸軍中将)政治家。箱館戦争で新政府軍の参謀として指揮をとり、榎本武揚(1836－1908 年)箱館戦争時、五稜郭に立て籠るが、蝦夷方の劣勢は決定的となり、オランダ留学時に入手した『万国海律全書』を戦火から守るために黒田に送った。黒田は榎本の非凡な才に惚れ、政府に熱心な助命嘆願活動に動く。黒田庇護の下明治７年１月駐露特命全権公使となる。

瀬脇寿人の官僚人役の国益を思考し『鶏林事略』刊行する

明治８年、５４歳の時、浦塩港に赴き満州・朝鮮・シベリアの調査に入る。その間、朝鮮の金鱗昇(加藤九祚編の『浦潮物語』日記５月１５日・１２頁参照)と共に、「朝鮮の政治経済の概要」の論文『鶏林事略』の著がある。明治９年から１１年まで浦潮斯徳在住時に、明治９年４月に『鶏林事略』を瀬脇寿人・林深造編刊行している。

朝鮮の政治・経済・人種・人口・地誌等多種わたる調査情報の概要『鶏林事略』はウラジボストク旅行で知り合った朝鮮人金麟昇(咸鏡道慶興出身)による聞き書きを基にして、瀬脇自身の見聞を加えた朝鮮の国情を調査報告書となる。浦潮港に朝鮮国情が多く見られるのは、国内での西南戦争後の政府の方針が朝鮮半島に向けられている以上、露国の行動は朝鮮王朝府まで伸び始め、日・露の朝鮮情報がウラジオストク港で繰り広げられていた。

『鶏林事略』

『シベリア記』加藤九祚著の「七・瀬脇寿人と金麟昇との出会い」より

《瀬脇は出発のとき、外務卿寺島宗則から朝鮮の事情を調べてきてほしい旨、依頼された。「朝鮮地ノ北部魯領ニ接近スル地方ニ入ラバ良港ヲ検出可致事」、「ポッセットニ到リ時宜ニ由テハ土人ヲ雇ヒ朝鮮地ニ入リ土地風俗等ヲ探索可致事」「同所(ポッセット商業港)ニ於テ土人朝鮮人雇ヒ入レ郷導トシ事情ヲ偵探可致事」という命令を明治８年４月４日付で受取っている。命令書は七ヵ条、約半分が朝鮮に関する項目になる。》・・・明治６年夏、

朝鮮が日本の外務官吏に対する無礼が発覚したことにより、日本国内に「征韓」の議が起る。明治８年前半は日本が朝鮮の事情を最も欲していた時期と重なるわけである。

瀬脇は武藤平学の義兄弟の金麟舜からの情報をもとに、朝鮮人の文化・風俗・政治等を日本に紹介した。彼の情報提供は日本と朝鮮両国の親善のためとの希望であっただろうが、その情報は日本の指導部によって朝鮮進出に利用されることとなる。金麟舜は不愉快であったかも知れない。

『鶏林事略』朝鮮国の政治・経済・軍隊・地誌の調査報告の一部を、

《朝鮮国ハ、亜細亜州の東北に在り。太平洋に突き出して、半島の状を成せり。緯線ハ、赤道の北三十四度十七分より起り、四十三度ニ分に至りて止み、経線は、英国「グリインウ井ッチ」の偏東百ニ十四度三十分より起り、百三十度三十五分に至りて止む。東ハ日本海に望み、対馬島と僅に十八里を隔つ。西は、支那の黄海、及び遼東に至り、鴨緑江を(次頁文)以って界とす。南ハ朝鮮海峡に接し、北は満州に連なり、豆満江を以って境とす。東西一百里、南北三百里なり。》

《**島嶼**(大小の島)　属島極めて多し。就中最大なる者を、済州という。(全羅道に属す)次を南海といい(慶尚道に属す)次を巨済(島)という。(左に同じ)此の他黄海、及び朝鮮海峡には小島数多あり。所謂朝鮮島是なり。》

《**山川**(山と川)　国内高山極めて多く、就中西北を最とす。其の最大なる者を白頭山といふ。(済州に在り)鳥嶺といふ(慶尚道にあり)。又、九峰山、蓋襄山、白雲山、麻耆羅山、鉄嶺、等皆高山なり。其の他、山詠に綿亘(長く連なり続く)す。火山数座あり。

地形、南北に偏長(一方だけがかたよる)にして、山脈(山の連なり)国中に連なるを以って、大河少し。其ノ稍大なるものハ、曰く豆満江。(共源ハ白頭山の後より出て、東南に流れて海に注ぐ)。曰く鴨緑江。(源を白頭山に発し、両南に流れを義州に至て海に入る)。白頭山ノ上に大なる湖水あり。暑中ニ積雪消するに至れば其ノ水地下に入り、湧出て二江の源となるなり。漢江、大同江、洛東江、金海川、清川江、錦江、等其ノ大さ上の二江に次ぐ。》

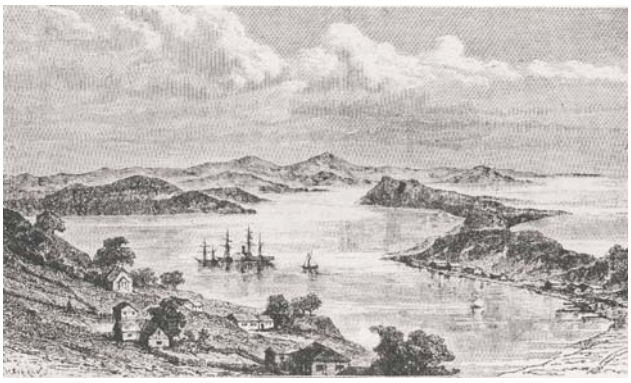
《**政綱**　(政治の大綱)　吏(役人)、戸(行政上の家単位)、禮(行事、動作、言行等の社会秩序)、兵(兵士)、刑(刑罰)、工(活動機能からみた物事の状態)、の六曹(官制)に関する者ハ、皆茲に附す。唯兵制ハ、第二巻に出すを以って之を略す。》

《**政體**(国家の政治形態)ハ君主専治(一人の判断で政治を行なう)なり。凡そ国内の政務、唯之を国王一人にて統べ、其ノ特権を持って万機を裁断(物事の善悪を判断して決める)す。国人之

を仰ぐ事神の如し。国内の附貨百物、悉く其ノ王一人の有たり。解(と)へば王は地主の如く、人民ハ佃戸(でんこ)(小作)如し。国王ハ、世々支那の冊封(さくほう)(君主関係)を受けて其ノ位に即(つ)き、又支那の正朝(せいちょう)を奉じ、年々貢進(こうしん)の礼を修め、支那を称志(しょうし)て天朝と云ふ。其ノ国家至重(しちょう)(重大な)の事件に至ては、之を支那帝に奏聞(そうもん)(天子に申し上げる)すと雖も、平時国内一般の政務ハ、皆国王の特裁にて、敢(あえ)て奏聞する事なし。・・・(略)》

鶏林事略初編１は、標題紙・目次・巻之一・全国の位置・島嶼・山川・気候・地味・産物・国郡都城・宿駅道路橋梁・政綱・文学・風俗・貨幣・度量衡・量田・里程の多岐にわたっている。

瀬脇の『鶏林事略』は明治９年４月刊行、翌年、西郷隆盛の「西南戦争」を早々と片付けて強固な明治維新政府を目指した。やがて起きるであろう、隣接する朝鮮半島の有事を明治政府は注視していた。阿片戦争(１８４０年)以来、清朝は弱体化し、ロシア・欧米列強が半島の進出が現実のものとなって行く。明治維新の指導者たちは、日本の安全保障をどう導くか、明治新政府は朝鮮問題に関与し続けなければならないとの結論とし、これらの問題解決が日清戦争と繋がって行くのである。朝鮮半島問題を、国家も国民も朝鮮半島の「有事」を想定して、朝鮮半島の調査報告書を求めていたことがわかる。



ウラジオストク港の最初の絵図・１８６０年

『ＫＲＡＴＫＩＪ ИСТОРИЧЕСКИЙ ОЧЕРК　Г. ВЛАДИВОСТОКА』Н.П.МАТВЕЕВ 著

「解り易いウラジオストクの歴史」(筆者訳)より。(初版版は 1910 年に出版・再版 1990 年)

★ウラジオストックは昔、寂寞(せきばく)たる一漁村で、僅かにツングースの一族が散居していた位、後にシナ人が来るようになり、此処の海から「ナマコ」が捕れるというので海参威という名前がついた。シナ人漁村、朝鮮人の雑居した処で、鉄道がニコリスクと結び、ニコリスクよりウスリーと連絡し、東清の両鉄道の開通によりシベリア地域と結び、急速な発展した地区となった。

『義経入夷渡満説書誌』より「浦潮港日記」全文を読む

岩崎克己著・昭和１８年(1943)5 月３０日発行・私家版(432 頁)・237―248 頁より。

「浦潮港日記」(明治９年１０月４日―１１年９月２４日)(瀬脇壽人・自筆草稿・和大・４冊

１５２葉・瀬脇三重子氏蔵(親族)となっている)

明治9年12月1日　《斉藤[1](七郎兵衛)来リ、日本人ノ墳墓、蘇城[2]ニ存在スト言フ説ヲ、本港ニ寄留スル蘇城ノ者ヨリ承リタリトテ、其ノ大略ヲ談話セリ。之ヲモ急和文ニ作リ、書簡ニ封入シテ、午前第八時、武藤ヲ丁抹[3]ノ電信局ニ遣リ頼マシメタリ。義経一件ヲ和文ニ作リ、左ニ挙ク。

源義経、其ノ兄頼朝ノ譴責ヲ蒙リ、清原ノ秀衡カ許ヲ脱シテ、蝦夷ニ渡リ夫ヨリ靺鞨(粛慎)国ニ到リ、其ノ地ヲ満州ト改称シ、土人ヲ愛撫シテ其ノ勧心ヲ得、隣邦ヲ服従セシメ、皇国ノ武威ヲ蒙古・靺鞨[4]・露国・西洋マデモ輝シ、其ノ子モ亦父ノ剛勇ヲ受継ギ、支邦国ニ打入テ凱歌ヲ唱ヘ、遂ニ帝位ニ登テ世號ヲ元ト称セシバ、元ハ源氏ノ源ノ音ヲ假用シ、又満州ハ源氏ノ始祖多田満仲ノ音ヲ假用シタリト言ル事ハ、**伴信友ガ『中外経緯伝』**ニ諸書ヲ引テ載ル所ナリ。又蘭人、失勃爾杜氏ハ久シク皇国ニ在留シテ、我カ国事ニ明ナル者ナリシガ、嘗テ露国ニ遊歴シテ、同国ノ古器蔵ニ於テ、日本製ノ太刀ト重藤ノ弓トヲ見、加之(先行の事柄に後続の事柄が添加)、廟前ニ日本製式ノ鳥居アリ。之レ必ズ日本人ヨリ聞タリシ勇将義経ノ蝦夷地ヨリ満州ヲ経テ、靺鞨ニ来リ死シタル遺跡ナラント、或ル人ニ語リシト聞ケリ。壽人両氏ガ説ヲ見聞セシヨリ、尚此事跡ヲ詳ニセント欲シタレバ、此地方ニ遊歴セシ人ニ逢毎ニ、日本人ノ遺跡ヤアルト尋問シ、又此事ヲ探索スル事ヲ依頼シタリ。此行モ亦武藤平学(「松島(竹島)開拓之議」提出、竹島問題関与)・斉藤七郎平衛等ニ義経ノ事跡ヲ探索セシメシニ、斉藤昨夜来リテ言ルハ、山東登州黄邑城人、劉鵬程ト言ル者ニ邂逅シ、偶語ノ次日本人墳墓ノ事ニ及ビケレバ、尚切ニ聞シニ、本地ヨリ北ニ當リ、五十里余リ地ヲ蘇城(義経が渡来して城を築き蘇生した由来による)ト云エヘリ。従時日本国ノ名将某氏、其ノ国難ヲ避ン為ニ、九死ニ一生アリ。其ノ側ニ、此ノ名将ノ渡来セシ初、暫時住居シ給ヒシ穴ナレバ、平人此ノ内ニ入レバ祟アリトテ、土人敢テ近ヅカザルニ、１５、６年前、支邦人７名来リテ、祟ル事アラン、何ノ祟ル事アラン、此穴ニ１泊セバヤトテ臥シタリシニ、夜半ニ到リ、七名共ニ穴外ニ出サレタリ。又此子孫ト称スル民家二、３百年前ノ寛永通宝ト題セル銭ヲ鋳造シ、今尚此ノ城内近邊ニ数１０村ニテ通用セリト語リシトゾ。寛永年中ハ後水尾帝ノ御代ナレバ、４百年余ノ後世ナリ。(中略)・・・壽人自ラ行テ尚仔細ニ探索セント思ヘドモ、蘇城マデモ行程５０里余、奥地ハ２、３百里モアル由ナレバ容

易ニ行コト能ハズ。公務ノ余暇アラバ明春ナド行ント楽シミ居ル。》

1、斉藤七郎兵衛(下総)、武藤平学(奥州)が・明治 9 年 12 月 19 日、瀬脇壽人に、第 13 号「松島開島願書義建言」を提出。「11 月浦潮港貿易事務官瀬脇寿人の露領に赴くに及び、意を松島のことに用ゆ、既にして千葉県佐倉の商斉藤七郎兵衛なる者あり、商業を持って此港に従来の序松島に近き、租租地形を極め、同島開拓の願書を貿易事務次官瀬脇氏に出せり、即別紙第 13 号是なり」とある。瀬脇と斉藤七郎兵衛は佐倉藩代の盟友。明治維新の世となり函館から日本の輸出品を模索した事業家である。伝わる話としては長崎に販路は取られ、成功しなかったようである。

2、蘇城・ウラジオストクから北５０里の地点となる。

3、デンマーク電信・明治３年明治政府は上海―長崎間、ウラジオストック―長崎間の海底電信線をデンマーク系のグレート・ノーザン・テレグラフィック会社に敷設を許可、翌明治４年上海―長崎間、ウラジオストック―長崎間に海底電線敷設完了。国際通信が開始、日本国内は明治６年開始となる。

4、靺鞨=沿海州方面いたツングース系諸族の１つ。

同12月3日　《今日ハ斉藤七郎兵衛、蘇城ノ者ヨリ義経ノ事跡を載タル書籍を借用シ、且つ同所人ノ本港ニ来寓セシ者ヲ同伴セント約シタレドモ、其の者既ニ帰リタリトテ同伴セズ。夜半ニ入リ、斉藤、支邦山東登州(煙台市)ノ王鎮九ト称シ、稍学事アル者ニテ、蘇城ニ２０年より居住セシ者ヲ誘ヒ来リシユヘ、秋田ノ文吉ト云ル者ヲ通弁ニ頼ミ、日本人ノ古跡ヲ問タレバ、鎮九、蘇城ニ居シ時、土人ヨリ聞タリトテ、左ノ如ク答ヘタリ。

住昔、金烏諸(ジンギスカン)・寛永ト言ル両人、日本国ヨリ渡来シテ、本地ニ一城ヲ築キ、蘇城ト唱フト、古来土人ノ口碑ニ伝フレドモ、寛永ヨリ先ニ来レルカ、金烏諸先ニ来レルカ、又時代モ詳ナラズ。寛永、蘇城ノ王位ニ即キシヨリ、其ノ後裔２８０余年在位スト云フ。寛永ノ墳墓ハ蘇城ニ在テ碑文アリ。金烏諸ノ女、紅羅女(明史ニ紅羅ト云フ者アリ。考エルベシ)東京城(黒竜江省寧安県東京城にある土城)ヲ作ルト云ウ。此ニ人ノ棺槨(ひつぎ)、杜丹(牡丹江)江辺ニ在テ、靈櫃[1]具ニ桴樞ナリトゾ。又蘇城ニ客居セシ時、現ニ屢寛永銭ノ今尚通行セシヲ見タリ。此銭、日本ヨリ来レル寛永氏ノ鋳造セシ銭ト聞タリト答エル。文吉其ノ外ノ日本人モ、皆此銭ヲ見タリト云フ。此談話如何ニモ虚言ナラザル様子ユヘ、寿人、寛永・金烏諸両人ノ事跡ヲ記載シタル書籍ハ無ヤ。若シ此書籍アラバ一見る致シタシ。周旋シ給ハレト頼ミタレバ、鎮九、承諾シテ帰リタリ。》

1、靈櫃具=「史論」第３巻７３頁には「江辺に在りて現に其の靈櫃は浮樞せりとあり。本土の貴人の葬式は櫃を土中に埋めず、樹上又は地上に浮置すると云う。

同12月9日　《王鎮九訪来テ、寛永・金烏諸ガ小伝ノ書籍、寧古塔(満州東部牡丹江中流域)ニ到ラザレバ得ベカラズ。大小両部アリ。其ノ價１７円ナレドモ、今之ヲ買取リ給フニハ、別ニ人ヲ遣サザレバ急ニ入手シ難シ。寧古塔マデ日本里数ニテ１２０、３０里(４８○ｋ余)ニ減ゼザレバ、旅費３、４０円ニ下ラズト云リ。其ノ語気黄白ヲ貧ル體ナレバ、幸便ニ托セントテ、酒ヲ飲シメ、帰シタリ。》　★語気黄白=話ではお金がかかる。

同12月14日　《過日、日本人墳墓ノ事跡ヲ間ントテ、王鎮九ヲ労セシ謝儀ヲ與ントテ、斉藤ヲ招キ、其ノ謝料ヲ儀シタレバ、６ルーブ與へ給へと云フ。即チ同人ニ托シテ文吉合シテ附與セシム。過日鎮九ガ筆語中ニ、満州地ハ住昔粛峻眞ト称し、中古ニ至リテ満州改ム。此ノ地ハ上古、朝鮮ニ従属シ、現今露国ニ属セリ。今、君等本地ニ残有セル日本人ノ墳墓ヲ探索シ給フハ、中古ニ復セント欲スル意ナラント云リ。此時、余、心中大ニ驚駭シ、今本地ハ露国の領地ナリ。何ゾ我ガ国ニ於テ、他人ノ所領ヲ覬覦(身分不相応な伺い)スルノ意アランと答ヘタレバ、暫時黙示セシガ、復寛永氏ハ日本人ナリ。其ノ旧地ヲ復セバ如何ト云し故、余反復シテ、日本ニ於テハ誓テ左様ノ意旨アラント答ヘテ止ヌ。今斉藤ヨリ聞ク時ハ、満州人等、本ヨリ露政ニ服セズ。此回モ竊(ぬすみ)ニ英国船ノ来航ヲ祈り、英船到着セハ、内外ヨリ討伐セントスル意アリ。是故ニ過日寛永ガ古領ヲ復シ給ヘト云シナラント察セシト云フ。実ニ斉藤が推察明中ナルベシ。》

同12月25日　《文吉来館シテ云ニハ、両３日中ヨリ蘇城ニ趣キ、去年茂吉郎が送リタル商品ノ残高２百余円アレバ、此金ヲ催促ノ爲出行スト。余之ヲ聞き、然ラバ蘇城に至リ、過日ヨリ聞ク所ノ日本人ト云ル寛永が墳墓ノ一件具ニ事跡ヲ記セル書籍ヲ購ヒ来レ。金子入用アラバ與へント云シニ、帰リテ後ナラデハ金円定メ難シト云ルヲ以テ與へズ。》

明治10年2月26日　《去冬(昨冬)、登州人王鎮九ガ、往昔日本人寛永ト称スル者蘇城ニ来住シテ本地ノ酋長トナリ、遂ニ支那ヲ掠略セリト云ルヲ、義経ノ事ナラン、然レドモ寛永ハ日本ノ年号、義経ト年代ノ相去事多年ナレバ、何人ニラント思ヒシニ、今日、新井白石著に述ノ蝦夷誌ヲ閲(調べる)スルニ、土人、義経ヲ「オキクルミ」ト称シテ尊崇シ、又弁慶崎ト唱フル地アル事ヲ載ス。次ニ又、寛永年間、越前国新保ノ人、韃靼地ニ漂着シ、燕京(北京)ヲ経テ朝鮮ヨリ日本ニ帰リシ者アリ。此者帰朝シテ、韃靼ノ奴兒干[1]ト称スル地ニ在留シ、此地方ノ人家ノ門戸ニ神ト尊奉シテ、義経ノ像ニ似タル者ヲ懸ト云シ由ヲ載タ

リ。寿人按スルニ、蘇城ニテ日本人寛永ト称シテ、往時ノ国王ト尊崇セシハ、越前人ノ残リ留リシ人ナラン。然レドモ義経モ渡来セシコト疑ナシ。蝦夷地樺太ニテ判官ト尊敬シ、又弁慶崎ト称スル地名アリタルト云ル地ナク、韃靼ニ渡海スト蝦夷人ノ口碑ニ残レリ。按ズルニ、越前人ノ帰朝シテ云ル奴兒干ハ今ノ蘇城ノ辺ナルヘシ。朝鮮図ヲ閲スルニ、吹風川ト黒龍江トノ間ニ奴兒干と称スル地名アリ。》

1、奴兒干都司=１４世紀前半元朝がアムール河口（ティル村）に設置した軍政都司、間宮林蔵見ている。

注釈・岩崎克己が記す「明治10年の3月から6月までの間に書かれたと信ずべき理由があるのであるが、その部分の草稿が現存しないので、「史論」第3巻(75-79頁)より転載した。」とある。『史論』第３巻は鵜澤正徳著（史学書院）明治２６年１月２７日出版・７５－７９頁の題名は『源義経靺鞨を経略して満州と改称し、大元皇帝の始祖となるの疑』となる。全文は６９頁―８０頁となるが、岩崎克己氏の指示通り７５－７９頁部分を下記に記載する。

尚79－80頁不記載文は第6章の97―98頁に記載した。

《本地は土人の言へる説に、往昔日本国の版図なりしが、中古に至て日本人往来を絶ち、夫より或は支那に服従し、或は朝鮮に附属せり。その日本に隷属せし時、日本人の来往せし城址なりとて、方１２町の丘陵、或は土手にて圍みたる所ありと、土人の猪之吉が談話なり。按ずるに、国史（『日本書紀』）に斎明天皇、即位５年、越国司阿倍比羅夫をして肅愼（みせはし）[1]を伐しめ、６年又舟師（水軍）を率ひて肅愼を伐しむ。比羅夫、生羆二、羆皮７０張を携へ帰り、之を献ずとあり。然れば土人の猪之吉が往昔本地は日本の領地なりと云ひしは、此時代の事なるべし。此の地方領主屢々代り、彼に属し此に隷し、君主一定せず。是故に其の地名も屢々改り、或は女[2]真といひ、或は肅愼と云ひ、今満州と称するも皆同所なりとぞ。又按ずるに、蘇城に日本人の城址あり。又蒙古街にも日本人の城址あるを以って見れば、往昔日本人多く渡来して、此地方を鎮領して居しは判然たり。是故に土人皆洋人を擯斥（のけもの）して、日本人を親愛し思慕するの情あり。若し露領外の満州地・韃靼地・或は朝鮮界の無主地に於いて一地を開かば、必ず粛然として我が政令を奉じ、服従する者多かるべし。朝鮮は古来関係ある地なれば、之を説破するは猶容易ならん。是レ他あるに非ず。其の国民を開化に導かん為のみ。

既にして斉藤、日本人寛永が時代に蘇城にて鋳造したる銭一文を満州人より得て来れり。之を一見するに、日本銭に比すれば其形少しく小なれども、文字形状は日本の寛永銭に異

なる所なし。斉藤曰く、今日蘇城の者に邂逅して寛永が事を聞たりしに、此者いふ、寛永は日本人にて、往昔渡来し王位に登り、蘇城の近地５、６０里は領地なりし事を告げ、且其の城址石碑、並に当時鋳造したる寛永銭尚存在して通用す。又寛永が事跡を載たる書籍４、５冊ありし由を答たりと。然れば向に王鎮九が云へる所と符合すれば、義経には非ずとも、日本人の一傑来住して久しく此地方を領し、王位に登りしは疑ひなし。

頃者(近頃)、コーペル(貿易商)が妻女王氏、偶然として来話す。余曰く、本港より蘇城・吹風辺に、往昔日本人の来住した古跡いま尚存在すと聞く。之を見聞せざりしや、王氏いふ、蘇城の土人に知己(親友)あり、常に彼等が談話を聞くに、本港より西北に当り、百里余りに至れば韃靼なり。韃靼より以南即ち本港より蘇城以北は、中古悉く日本国の所属なり。当時日本人渡来して蘇城に一城を築き、タービンホー(割記・刀氷墟、或は怒爾哈の音なるべし)の城将と連戦して、遂に之に勝ち、爾来久しく日本領なりしが、夫より幾多の星霜を経て、又支那に隷属し、近来露領となる。此時までは蘇城に日本将の古墳ありしを、露領と成りし時、露帝より此地方の古祠古寺の古墳記録及び蘇城に有りし日本将の墳墓など多くは露都に運輸されたと、世人の口碑に残り、又其の墳墓の地を耕作すれば祟ありとて、今日迄も近づく者なき由なり。然れども君等日本人の古跡古墳を探らんとならば、満州人２、３名を携さへ、４、５０日間も蘇城より以北、本港迄の内地１４０、５０里を歴遊し給はゞ、日本人の墳墓、竝に古跡は、一郷一村毎に多く有るべしと。

日本国の一将、満州地に渡来して大に武威を奮ひ、土人を服従して王位に登り、遂に支那の帝祚(帝位)を踐みしと云へるは、蘭人失勃爾杜が説より、蘇城の人某氏が談話、又王氏(金梅)が談話等悉く皆同一なり。然れば其の日本将と称するのは、源義経か、又は他の人か、それは定め難けれども、日本人たることは判然たり。彼の蘇城に在る日本の古記を得るならば分明なるに至るべし。王氏が如き婦女子さえも斯く明白に談話する所を以って考ふれば、虚誕ならざるは必定なり。此一将と称するは、義経ならんと推察すれども、寛永銭を鋳造して今尚存在し通用する所を以って考ふれば、寛永年中、越前より渡来したる人の遺子ならんも亦知るべからす。斉藤が満州人某と筆談したる筆記あり、今此を載す。

満人　大日本国、同大清為一国。至寛永年間分為両国。今大清有寛永銭。

斉藤　此寛永在世之書籍、有之者請見聞。

満人　寛永則有伊、所籍之書未見。大国日国朝鮮本為聖門子弟。外洋人非人類也。と。

今満人が、日本と清国とは本一国なりしが、寛永年間に至り、分れて両国と為り、今尚寛永ありと云へるを以って考ふれば、寛永時代の一傑本港近地に渡来し、独立して酋長と為り、

年号を寛永と称し、此地方を領せしこと分明なり。》

1、肅慎（みせはし）・満州、沿海州いたツングース系狩猟民族。2、女真、女直とも。松花江から興安嶺以南にいた部族。１７世紀「満州」マンジュ（地名でなく民族名）となる。

明治11年5月19日　《客歳（昨年）在勤せし時、七郎と共に一夜館内に来り、酒を與へければ詩など作りたる申先郁といへる者・・・嘗て貴館に登りし夜、日本板の世界地図を拝見せり。此地図を一部貴国よりとりよせ給はらば、披閲（書状を開き見る）して卑生が生涯の楽みとせんといい越せれば・・・予も亦足下に請ことあり。往昔日本国の一将、蘇城に渡たりて一城を築き、割據（独占）して近国を押領し、遂に支那地まで入しと聞けり。此一将の事跡を記せし書ある由なれば、足下蘇城地方の人に便りし、此書を得て予に與へられなば、謝する所あらんとこたえへ置ぬ。しかはあれども先都は本より朝鮮人なれば、蘇城わたりの人に知己あるにやおぼつかなし。》

同5月25日　《吉田徳次、箱館（函館）より先日電信を以って、栄福丸を支那人鄧文敏が手より買取たる証書を送り給はれかしとて報じ来りぬ。・・・徳次が栄福丸を買し時、其の船の番人とて日本人５名、嚮導（先達）支那人１名を雇い「ウラジーメル」（第 4 章 59 頁地図参照）に行に由。其内に忠蔵と呼ぶ者ありしが、彼が行程の談話を聞き左に記しぬ。》

同11月7日　《本港を発して「ヤンチカ」・・・翌八日「チモハー」・・・十日・・・「サンスイザ」・・・十一日「ユクドン」・・・十二日「ホトヒツワン」・・・十三日「タヲジンシ」に泊り、十四日十五日は蘇城にて休息せり。本地は此近地の最も繁花なる地にして、満人の住家二百戸ばかり、魯人の住家二十戸ばかりありしといふ。土人、忠蔵らを日本人と聞いて、目様手様にていろいろ談話しつれども、僕ら僅に魯語を解するのみなれば、往年本地は日本人の開きし地なれば、是より２０町余の所に日本人の墓所あり、又日本人の開きたる道もあり、其地に行きて見給へ、といえる事ばかりを得にけれど、皆大に疲労しぬれば行ざりしと云々。》

同9月9日　《予が本港に来りし時より、源義経の古跡を探索せんと、土人に逢毎に必ず此事を問しに、唯日本国の智勇兼備なる名将の其昔蘇城の地に渡来し、一城を築きて此地方を押領し、其子ともいい又其孫ともいへるが、亦智勇あって蒙古を石巻し、遂に支那地

に入り、元の世を起せしと皆は云う。休暇の時に蘇城に趣もき、日本将の事跡を探らんと志しぬれば、昨日ふと１８７４年鏤行(書物刊行)英国龍動(倫敦)「イムレー」氏板の日本国北部航海地図を閲せしに、本港より北に当る海岸２０里ばかり、蘇城より７８里の所に、「ハンガン」崎と称する地あり。本日本港在住の満人に此地名の由来を質問せしに、古より唯「ハンガン」崎と唱へ来るといへるもあり。往時「ハンガン」と称する人の居住したる地なるゆへ、斯なん唱ふるといへるもあり。是九郎判官源義経の始めて来着したる地か。或は蘇城に城郭を建築する前、暫時此所に居住した地なる故、斯なん唱へ来りと察せられる。されば源判官の衣川より脱走したる道路は、奥州を発して箱館に来り、蝦夷地を経過して「サガレーン」(樺太)に渡り、夫より此「ハンガン」崎に渡来して、蘇城の地を卜して築城せし事明けし。　(現在の地図からハンガン詮索は不能)

其証には、箱館人に聞しに、蝦夷地に義経明神と唱へ、土人の崇敬する小社、諸所にあり。又義経崎・弁慶崎など唱ふる地あるといへり。予も現に義経蝦夷戦争記と題したる古書を、箱館の佐野與三右衛門が宅にて一覧せり。又「サガレーン」(樺太)に渡りたる証は、成富成風氏同嶋在勤の折から、回嶋して一村に到り、義経明神に参詣したる詩作あり。然れば義経の満州に渡り、支那を征伐して元の世を起したりと、今日迄も口碑に遺れるは事実にこそあれ。伴交友(伴友信)が中外経緯伝に、諸書を引用して、浦潮港より「ニコライスケ」地方(清代は双城子・浦潮港西北 100ｋｍ)は、上蒙古に属せし時、肅愼と称し、其の後独立して靺鞨と唱へ、義経渡来して、其始祖満仲の名字を取って満州と改め、夫より支那を掠略して、其の姓源氏の音を假て「元」と称せしと云うは決して誣言にあらざるなり。》

★以上が瀬脇壽人の『浦潮港日記』岩崎克己による全文となる。

瀬脇の「浦潮港日記」は日本外務省へ送られていた・・・瀬脇は明治１１年１１月２９日客死。翌年１２月に富田鉄之助は、外務一等書記官(英国公使次席級)に命じられ、同年２月初め倫敦へ向う。末松謙澄は前年１１年の２月、一等書記生見習いで倫敦にいた。この話の経緯は富田が英国公使館で、末松が「浦潮港日誌」に関心を示したので外務省から取寄せたことになっている。しかし、明治１２年に末松は「ジンギスカン即源義経」の歴史英論文を刊行の年となる。当時英国船旅日数は１ヶ月以上であろうから、この日数を考慮すれば冨田が持参しなければ時間的に間に合わない。富田が日本出国時、福澤諭吉先生に《「浦潮港日誌」を倫敦に居る末松謙澄に渡せ》の用事を授けたと筆者は推察する。この件は第５章の富田鉄之助の項で述べる。

第2章　伴信友の『中外経緯傳』の原文を読む

纂録第５１・『中外経緯傳第２』伴信友　（『史籍集覧』第１１冊　明治３４年１０月刊より）

この『中外経緯伝』を間宮林蔵、瀬脇壽人、末松謙澄、内田弥八等がよく読んでいることが判る。義経が満州へ渡り清朝の祖になると云う言説の解説が述べられている。

『中外経緯傳』伴信友(1773－1846)は国学者、日本の古代から近世初期までの近隣諸国や地域の文化・交通の歴史的経緯をまとめた概説書となる。『中外経緯傳』の草稿は天保９年(1821)、全６巻からなり、第１は『古事記』『日本書紀』の古典考証して、その第２の中に「文化３年(1806)１２月」に義経の言説が書かれている部分を拾い出してみる。

《添えて云ふ、もろこしの『清三朝実録採要』[1]と云書を見るに、〔伴信友の注釈・此書ハもと大清三朝実録とて、今の清国王祖の太祖・太宗・世祖と云うか、三代かけて北狄満州と云う国よりおこりて、明国を簒奪とれる間の事ともを記したるか、写本にて二百巻あまりありけるを、ちかきころ彼国の商人が齎して参渡り来れるを、邨山緯北條鉉[2]といふ儒者の云ひあハせて、其書の浩く文詩の煩芿(荒く編集した)を約めて作れるにり、下に畧て清実録というこれなり〕・・・(略)》（６０頁）

1・清三朝実録採要=清朝の皇帝歴、太祖、太宗、世祖の実録記。2、邨山緯北條鉉は不詳。

《又この因に云ふ。さきに肥後人中島広足[1]語りけるは、おのれ長崎に在けるとき、唐通詞水野某と親しかりつるが、或日語りけらく、昨日唐商江芸閣(清の交易人)と会談の時、ふとおもひよりて、むかし吾国に源義経といふが、故ありて蝦夷に渡り住、後満州の域に徙り止りたりけるが、其裔つひに国王となれり。今そこの清国の王、その子孫なりといふ一説あり。此事汝か国にて著せる図書集成にも、微とすべき事ありと聞けりる。さる説ハ聞かすやと間けれバ、芸閣答へて云、おのれ浅陋(あさはか)にして、いまた其書の名を聞ける事なし。但し己が本国の俗説に、今の清王の祖ハ、貴国より出たりともいへり。その事「御序玉牒天潢世系[2]」といふ書に見えたりと。さきに僚友某がかたるを聞つ。さりけれと詳にたづねおかさりつれば、慥なる由ハ知らすと対へたりきと談れるに、其ハめづらしき事なり。いかにて其の対へたる由を、芸閣に書せて見まほしきわさにハあらずやとそそのかしけれバ、いでやとて、やがて書牘（手紙）かきて芸閣に贈りけれバ、すなわち返翰（返事）おこせたりき。いとめづらしき事なればとて、志ひてその返翰を請得て蔵りとて見せたる其書に、図書集成、誠出ニ於いて吾国一、但末ニ之見一、今来ニ是邦一、有レ所レ間及ニ

於余一、〔所問と云は義経の云々の事をいへるなり〕余未ニ敢妄対一、至ニ国君御序玉牒天潢世系一、余会敬聽ニ僚属言レ一之、而明文却未ニ之見一、是以未ニ敢類頇以対一也。江芸閣具とかきて、朱印を捺たり。この芸閣、手もつたなからず見ゆ。詩文などもおほかたにものせるが、つねに妄説(根拠不明の説)せし事なく、なへての唐商の中には、よき人からなるをのこなりと、これもかの水野かいへりとぞ。件の説いとめづらし。図書集成・玉牒天潢世系などいふ書見ていない。

〔但し伊勢貞丈(有職故実家)主の随筆に、図書集成といふ書壱萬巻あり。清朝の康熙帝(清４代皇帝)の自撰なり。此書南京の商船に載て、元文元丙辰年、長崎に渡りけるを、奉行細井氏江戸へ申上て、その書百六十巻二十函奉りたりけるに、基本、印板いまだ全備せず、図有て解説無きところなど多かりければ、御不審ありて船主に尋させたまうに、いまだ印板成就せざるよし申しけるによりて、その成就をまちて持渡るべしとて、此度もて来れる本を返し下されき。かくて後宝暦（1751‐63）１４庚申年におよびて、印本全備一萬巻を持渡りけるを召上て、官庫(国庫)に納られぬ。或説に、清国の帝の姓を清と云う。源義経の裔(子孫)なり。清和の清字を取りて国号とせる由、図書集成の康熙帝の自序に見えたりと云えり。これ大偽なり。予因ありてかの序の写を見たるに、其の事曽て記せる事無しと見えたり。しかれば、その自序になき事ハ知られたり。〕》（６１－６２頁）

1、中島広足=(1792－1864)江戸後期の国学者。熊本藩士。本居宣長系の国学を修める。

2、御序玉牒天潢世系=清朝の家系図、歴代皇帝、王家分派図が記されていると云うが実態は不明。

《さて義経の衣川の軍を遁れて、忍びて蝦夷に落られたりとて、蝦夷にその伝説旧跡ありといえる証とりどりきこえ来れど、正しき説をきかず。志かるに太田道灌自記に、世に伝うる事あやまり多し。為朝(源為朝)大島にて討たれ、義経衣川にて討たれりと云うは偽りなり。為朝は高麗(918年から1392年朝鮮半島の国)へ渡り義経は蝦夷へ落し事も、志るし明なり。世には似たる事こそ多けれと見えたり。これそのかみの旧説なり。また慶長年録というものに、慶長１４年、五山の僧玄蘇長老(１６世紀前半京都五山僧侶による「源為朝来琉説」が日琉間の禅僧僧侶を通じて齎された)の、公に奉りたる八島記という旧記に見えたる由にて、琉球国の事をいへる中に、頼朝卿の時、義経また平家の餘類などや渡りて在るとて、天野藤助小物太郎を将として、軍勢を遣して、戦にうち勝て、和談の後、島内をあまねく尋けれど、然るともがらの無かりつる由、志るせりと見えたり。此時の事、吾妻鏡（文治３年９月２３日の条）に見えて、下の琉球の條に挙えて論じるが如し。そのかみ、義経の行方のおぼ

つかなき、きこえのありしかばなるべし。

志かれば蝦夷へ渡れりときこゆる説も、據なきにはあらずと、おもいをりつるに、寛政の末つかた、近藤守重[1]、公事にて彼地に行くて、何くれとたづねあかせりとききて、さきに守重に逢って、此事を問いかけるに、口蝦夷（北海道西南部の地域）という部内、牟加波という地の川上、紀呂呂伊という山上に、與之都禰と云う人の幣を立てる所なりと、夷人語り伝えて、恐れて登るものなしというへり。

おのれ登りて見つれど、何の奇怪なき事もなかりき。此牟加波に古き甲冑を持伝たる夷人ありとききつれど、いそぐ事いできて見ずてやみにき。其処より十里余へだてて、佐流（沙流郡旧日高町門別）という処の川上、波伊昆良というところにも、というところにも、與之都禰の居宅の席蹟なりといい伝うる処に幣を立てたり。波伊昆良という由は、その居宅に波伊という魚吻を立てるに依れり。與之都禰此処に在りて、島長の女に奸たるを、其の父怒りて與之都禰を殺さむとしけるを避て、船にのり薙刀を櫂に用いて、海を渡りて去れり。後は行方を知らず。今蝦夷に車櫂[2]というものりを用いは、その遺風なりといへり。また久奈辞利島（国後島）にも、與之都禰の鎧の石に化れる由いひ伝ふる石あり。また弁慶の古跡なりしいふ処もあれど、此は松前人などの、義経の遺跡に准えて造れる説と聞こえると語たりき。》（62－63 頁）

1・近藤守重=近藤重蔵。江戸後期の幕臣・探検家・寛政１０年幕府に北方調査意見書を提出。４度蝦夷地へ赴く。最上徳内と千島列島、択捉島を探検「大日本恵土呂府」の木柱を建てる。

2・車櫂=義経は櫂を忘れて船出したので、薙刀を船べりに結びつけて漕いで渡った。

〔備中人古河辰が東遊紀[1]に、津軽の青森より２里行きて、大科子神社あり。坂上田村麻呂を祀れり。其の傍に貴船明神[2]の社あり。神主の云、義経蝦夷へ渡らむとせる時、小社を建て、貴船の神を祀れるが、此社なりと云伝たりといへる由、記せり。又松前人の伝説に、義経、武田悪太郎という者を案内者として松前を伐従へて、悪太郎に與へ、其身は奥蝦夷に入たりといへる由もみえたり。これは松前氏の祖の事と、義経の事とを、混に合せたる誤説ときこえたり。〕（６３頁）

1・東遊紀=橘南谿著。天明４年（1784）東海・東山・北陸の各道の旅した紀行文。

2・貴船明神=（貴船神社・JR 野内駅より鷲尾山）この神社に航海安全を祈願し蝦夷渡海の碑がある。

《かくてその満州の地ハ、布良無須国にて製れりといふ輿地全図の訳本を見るに、蝦夷

の北のはてかたより、海を隔てて北西の狄地より接ける地にて、東のかた海に沿ひて、朝鮮の辺界に接き、もろこしはその西ざまに接けりと見ゆ。かくして其地をもろこしの籍どもを参考するに、とりどりに混れあいて、いと紛らはしく、おぼつかなき、かたもあれど、おほかたとりすべていはば、まづ旧くはその地方の大名を粛愼〔息慎とも作り〕といへるを漢の代のころにハ挹婁ともいい、北魏のころ勿吉ともいい、唐の代の頃には靺鞨、また黒水靺鞨などもいへるが、その地方漸に広まりて部落まちまちに分れ、互に界域を相侵し、或は合せ、或ハ分れなどして、其界とりどりに沿革つつ参差てあり。経たりつる中に、朱里眞というがありけるを、〔朱里眞ハ粛眞の訛称にはあらぬか〕訛って女真〔或は慮眞〕といい、後に故ありて女真と改るがありて、宋の世の末に、金といえる国号を建て、世々勢ありつるは、この女真より出で国を広めたるなり。元の世におよびて金を滅ぼして、その地に軍民萬戸府(金代は万戸府・元代は軍民万戸府)というを置きたりけるが、明の世になりて、其地分れて数種となりたりつるを、海西に居るを海西女真(16－17 世紀吉林にいた女直)と称し、建州(マンジュ国)毛隣などいへる諸処なるを建州女直[1]と称し、極東最遠なるを、なべて野人女直とさだめて、置ニ建州等衛一百八十四兀者等所二十一、都司一曰ニ奴児干一、官ニ其酋一為ニ都督都指揮[2]千百戸鎮撫一、卑レ統ニ其部落一といへり。明の世よりその地方を韃靼と呼べるこれなり。かくて今の清国の王祖は、その女直の建州部奴児干[3]より出て諸国を併せ〔明人の奴酋とよべるこれなり。清太祖か明国に贈りたる書に、己か名を奴兒哈赤[5]と記し、清実録に諱奴爾哈斎(ヌルハチ)と志るせるは、奴兒干に斎(神に仕える)といふ言を加えて、名に呼びたるなるへし。此ほか夷人には然る趣なる称呼とり〕国号を定て満州[6](12 世紀に民族名マンジュより起る)といへりとぞきこえたり、国号を定て満州といへりとそきこえたる。・・・(略)》63－64 頁

1・建州女直=明代中国北東にいた女真の一支族、清朝ヌルハチが出て後金（清）を建設する。

2・都督都指揮=都督府軍と君主の一帯軍事指令組織。最高軍事指揮者は都指揮使司となる。

3・建州部奴児干=明代、建洲に駐留軍を置き女真族を間接統治し、黒龍江下流奴児干都司(軍都)置く。元代に於いては蒙古人が東征元帥府設置、樺太まで一帯を統治した。(『鳥居龍造全集６巻』より)

4・粛愼(みしはせ)沿海地方のツングース系のギリヤーク族とゴルディ族は接近して住み、粛愼、挹婁、勿吉、靺鞨、女真野人はこの部族に属する。５－６世紀の狩猟民族。松花江から長白山一帯住む。

5、奴兒哈赤=ヌルハチ(清の文献は弩爾哈赤)。朝鮮の文献は奴兒哈赤。明の文献は童奴爾哈斎。

6、満州=１２世紀、民族名を指した洲。渤海、金朝、後金、清朝を建国した満州民族や、夫余、濊貊族、鮮卑、烏桓、契丹、蒙古等の故地となる。

《寛永年間、越前国新保人、漂(漂流)至二韃靼地一、是歳癸末、清主乃率二其人一、而入二燕京一(北京)、居ル歳コト余、勅遣[1]二朝鮮ヲシテ、送致シテ而還一、其人曰、奴児干部ノ門戸之神、似下此レ間畫(画)二廷尉像一者上、亦可三以為二異聞一、〔奴児干はもと韃靼の本名にて、満州というもこれにて、今の清王の祖、其所より起れる事既に説へるが如し〕と記されたるをおもへば、ますます由縁(由来)ありげなり。故清王が祖の事を清実録に依りて攷ふるに、姓は愛新覚羅、[2] 名は布庫里雍順といへるが、満州を開基す。其後孫苑察国の乱を避けて、身を隠して終わり、伝へて肇祖督都孟特穆(満州語・清朝愛新覚羅の祖先)に至る。これを原皇帝と称ふといへり。》・・・(略)　　(６５頁)

1・勅遣=皇帝のことばを伝える勅書を遣役。

2・愛新覚羅氏・満州に存在した建洲女眞族の姓。清朝の家系。

《志かればかの建州の猛可帖木児[1]は蝦夷人に殺されたるなり。これによりてそれより前の世にめぐらして准へおもへば、義経蝦夷より金国に渡りて、其王に属して功をたて身を起し、奴児干の酋長の家を嗣で、門地（門閥）を興隆したりつるが、その子孫孟特穆(モンティムール)におよびて建州の都督（指令部）になりたるを、殊に挙て清王が肇祖(始祖)といへるにもやあらむ。さて又義経は、文治５年閏４月２９日、歳３１にて、衣川の館を焼て自死れる由見えたるによりて、其年蝦夷にわたり云々して、６０歳までの齢を経たりとするときは、もろこしにて、宋の孝宗の淳熙１６年(1189)より寧宗(南宋４代皇帝)の嘉定１１年におよぶべし。そのかみいはゆる金国の王が、ことに勢ひつよく、もろこしにも度々討入などして在りしころに当れり。其世のありさま、金史又そのほどの事志るせる漢籍を見ておもひ合すべし。さてかくおし定て考ふるに、かの孟特穆[2]が諡を原皇帝と称へるも、義経の姓の源字をはやくより重き称とこころえをり、原字に通はして用ひたりげにきこえ、また其後孫弩爾哈斎（清の文献太祖）が世におよびて、さら国号を建て、清と称えるも、かしこれど源氏の御祖の清和と申御諡号(死後の名)につけて、その清字を源氏にもまさりて重く尊き称なる由に、おろおろ聞伝へて用ひたりしにもやあらむ。》・・・(略)65―66 頁

《また満州と称えるも、もしくば義経主の曩祖(祖先)満仲朝臣の名字を重くする伝のありしによれるにもやあらむ、こはことにあまりなる志ひ説なるべくや。》・・・(略)（６６頁）

1・猛可帖木児=北元(明に敗れ祖国北蒙古に引き揚げた元朝のこと)フビライ軍のオイラート部の軍。

2・孟特穆=モンティムール、満州語。清朝・愛新覚羅氏の遠祖先とされる伝説上の人物。

3・渡辺幸菴・江戸時代初期・中国大陸に多年滞在、歴史・文化等多岐にわたり記述を集輯。16 巻。

《〔渡辺幸菴[3]対話筆記といふ書に、幸菴寛永十八年(1641)、もろこしの明の世その国に渡り、天笠にも住て所々見て巡りて、四十二年を歴て帰来れるか、そのほとの事ともを話れる中に、明国にて国城郭といふ官人に逢ひて、親しくかたらひけるか云、おのれ素は駿河の国人にて、長左衛門と称ひて、茶問屋なりき、昔年渡海せるとき、台風に遭ひて、遂に韃靼国に漂着きて在けるが゛、後にその国の王となり、また後にこの国に来りて、官人となりて在るなりと話りし由見えたり、但しその国の王とは、韃靼部落中の一国の主となりし由なるへし。また同書に、渡唐は対馬より、和珥湊へ二十四里、其より朝鮮の釜山浦名証屋まで二十四里、合せて四十八里なり。其処より韃靼の地のはつれを行き、太泥邏を通りて、明国に至りたりといへる由も見えたり。さて此幸菴、本名渡辺下總守源茂とて、越前君に仕へてありけるか、其君に故ありける後、更に主に仕ふる事をせず、質直くきもつよき壮大ときこえたるか。ことのほかなる長寿して、寛永八年に百三十歳にて死たりとそ。件の筆記は、加賀君よりたひたひ間者をつかはして、その話をもを書記さしめられたるよしにて、さらにうきたる事ハ聞こえさる書なり。また寛永十一年、越前三国浦の者、渡海の間にて難風に遭ひ、韃靼に漂着き、清国の創順治元年北京の都に送られ、翌年朝鮮より送帰されてる時の口書に、御奉行衆日本のものともに真似て言葉にて御申候は、日本の人は、義理もかたく、武辺も強く、慈悲も有之由伝聞候、韃靼国も似申候由被ㇾ仰候。其故日本人の人をご馳走被ㇾ成候との御申様にて候と云へり。義経のゆくへにこれかれおもひ合さるるかたあれは、副へ注しつ〕但しかかる趣なる考説は、意のすすむあまりに、おもほえず、率合説のいててくるならひにて、後にその事実の真の説を見出す。》(67 頁)

《いま陸奥蝦夷の地図地誌ともを併せて、古を案るに、先年の奥蝦夷曽宇也(サウヤ)島の北の終かたより、海上十里はかりに有る迦良布登(カラフト)島(樺太)わたりまてを、蝦夷の界として、汎く定られつるものなるへし。然るはこの島の北西より、海上一日はかりの船路を経て、山丹といふ国に至る。この地満州に接続て、人物もなにも満州と相同じく、迦良布登(カラフト)は、よろつ蝦夷に異ならすとぞ、志かれは古より、迦良布登までを蝦夷の部落として治め給ひ、山丹わたりをさして、汎(よ)く粛慎といひ、其を後に韃靼と革(あらた)め称ふ事となりにしを、和銅六年のころ、渤海に併せられつれど、その南北〔迦良布登より北西〕さまの渤海に隷がさりつる部落ハ、なほ靺鞨と称して在りける。・・・(略)》。(69 頁)

★伴信友(1773－1846 年)江戸時代の国学者。亨和元年(1801)村田春門を介して本居宣長の没後の門人。宣長の養子本居大平に国学を学び、平田篤胤、黒川春村等に交流がある。『中外経緯伝』全 6 巻他、延喜式神名帳の考証、稲荷神社の考証、渡来神の祭神の考証、鎮魂祭の考証等多くの著書あり。

第3章 間宮林蔵と松浦武四郎の北蝦夷(樺太)紀行考

間宮林蔵は文化５年(1808)に、松浦武四郎は４８年後の安政３年(1856)に、樺太(北蝦夷)に入る。間宮林蔵は文化５年４月、北海道宗谷岬から樺太に渡り、樺太が島であることを松田伝十郎と共に確認する。当時、ロシア海軍が南下して幕府の領海線を脅かし、その目的は通商を幕府に求めて来ていたのであるが、幕府の鎖国政策を堅持するため、頑なに親交の場を作ることを拒止し続けていた。そのため幕府はロシア北蝦夷地の内情を知る緊急の調査を必要とした。幕府は手始めに樺太の南端から北方まで調査するよう箱館奉行に命じた。当時、幕府の樺太の現状掌握認識は、松前藩が樺太南端シラヌシ(白主)に夏期のみに場所請負制(交易場)の藩の役人・漁場(場所)請負商人が詰めていた程度の支配領域であった。松前藩の樺太の国界意識は、樺太南部に住んでいるアイヌ民とニヴフ民・オロッコ民が、暗黙の了解地点が国界、ナヨロ辺としていた国境の意識であった。

従って、樺太が大陸続きの半島であるのか、樺太の北方に更にサガリインという島があるのか、確証は得られていなかった。寛政４年(1792)露国ラクスマンが伊勢国の漂流民大黒屋光太夫ら３人を連れて、日露交渉を求めてきたが、その交渉は幕府の強い方針で拒絶された。文化３年(1806) ９月、苛立つロシアの軍艦２隻が樺太南端の松前藩会所を襲撃する行動に出て、その翌年４月にも択捉島に上陸し、幕府守備隊を襲い施設を破壊した。危機を抱いた幕府は、松前藩の樺太南部の地を幕府直轄領にするため、弘前藩と南部藩に領土保全の警備命令を出した。

間宮林蔵渡樺の地　稚内市教育委員会の解説板に「ロシアの南下政策に驚いた幕府は文化５年４月１３日間宮林蔵と松田伝十郎を北蝦夷(カラフト)の調査に向かわせた。・・・この年、林蔵は再び北蝦夷に渡り越冬、翌年文化６年春、西海岸を北上し北蝦夷は大陸と海峡をへだてた島であることを確認した。夏期に大陸交易に赴くギリヤークに同行、アムール下流の満州仮府デレンを訪れ、この地方の情勢を調査し、『韃靼紀行』に報告された。後にシーボルトは「間宮の瀬戸」と名付けて世界に紹介した。」とある。

この時代、幕府はロシアの勢力が樺太のどの辺りまで及んでいるのか、その確認調査を急務とし、その人選に間宮林蔵が選ばれた。何故「雇」の身分の低い役人である間宮林蔵なのか、それは幕府の鎖国政策問題に依ったものである。国交の無い我が政府役人が露国入国したことが発覚した場合を考え、民間人が樺太に潜入した程度の地方事件での解決策とした。樺太の大地をロシアは何処まで領有しているのか、又何処地点までの勢力範囲なのか、間宮をしてその諜報の任を命じた。しかし、現状の樺太は清朝の勢力範囲となっており、樺太は宗谷から４３ｋｍの距離であるが、現実には大陸に近い存在であったのである。宗谷アイヌと樺太アイヌの関係は知り得たが、その先の交易行路が掴めず、幕府は樺太奥地の山丹人による蝦夷錦や樺太玉(青色玉)等の交易勢力圏の実情を全く掴めていなかった。更にその先のアムール下流域に居る山丹に就いては話しだけの理解となっており、幕府は樺太アイヌ経由の毛皮交易の実情を幕府は特に入手したかった。過去に於いては安土桃山期の豊臣秀吉が蝦夷錦を褒め称えた話しが伝わるように､好奇心の強い藩主たちが、蝦夷錦を松前藩に求めた。その交易経路は樺太南端の白主アイヌ民を通じて入手する方法しかなく、それにより松前藩はアイヌ民へ苛酷な強制命令で、蝦夷錦を求めていた。その結果、樺太南部アイヌ、宗谷アイヌ民が錦代価(貂の毛皮で決済)を支払えず、山丹人に代価を未支払継続の結果、山丹人による借金の形にアイヌ民がアムール河口へ連れ去られる事件が起きていた。この問題を放置することは、幕府に於いては樺太南部の居住するアイヌ民たちの心情が幕府(日本)から離れ、ロシア側に帰属してしまう事を幕府は恐れていたのである。

露国と中国の国境は黒竜江としたのは、その歴史的な経緯は、１２６３年、元朝の世相フビライ・ハーンは、黒竜江口に近いアムグン河口[1](チール・ｔｙｒ)の対岸に東征元帥府(軍駐留指令部)を置いて、黒竜江流域の原住民を綏撫(しずめ治める)する総鎮守(軍政提督府)を置いた。樺太北部に居たギリヤーク族(樺太ニブヒ族)は元朝に服従したが、南部のアイヌ族・オロッコ族(ツングース系民族)はなかなか服属せず、１２６４年以来、元朝は軍隊を送り続け、樺太アイヌ民を討伐しが、抗戦は４０年も続いた。その後、樺太アイヌ民は元朝に服属しアムール河口へ渡り獣毛皮を貢納する歴史を辿る。

明代に入り、武力で抑える法方から、懐柔政策で、樺太南部アイヌ民までが奴児干(1409年､黒龍江下流に置かれた明の軍制機関､奴児干都司)に朝貢した記録が 1413 年の「勅修奴児干永寧寺碑記」に都司の併設した永寧寺建立と諸民族融和の歴史碑文が残る。その後、清の黒竜江下流域経営は、ロシア人の侵攻に対抗して、1660 年代では河口までが版図になってい

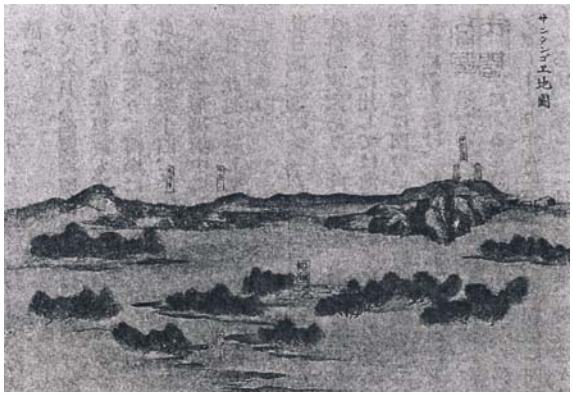
たが、1689 年ネルチンスク条約によって黒竜江下流域は清領と確定して１８世紀初頭、康熙帝５８年(1719)『皇輿全覧図』(仏イエズス会が完成した中国全図)に黒龍江下流の描図に現れている。

1、アムグン河(アムール)はロシア極東部のハバロフスク地方を流れる。清代は興衮河。

ヌルガン永寧寺碑文の概略は・・・《我が大明の王朝は非常に栄えており、全国を統一して５０年たつが、天下は太平である。多くの異民族が山を越え、海を渡り、次々と都へやって来て皇帝に朝拝した。・・・ただ東北地区のヌルガンだけが、何度も通訳者を必要とする遠い異民族の土地にあり、そこの住民は吉列迷(ニヴヒ)及び野人女直(女真族)といい、ここに雑意居している。・・・この地は五穀が生育せず、布を作らず、飼育するのもイヌだけである。・・・1411 年春、宦官、亦失哈(去勢の官吏)らを派遣し、1000 人の兵隊と２５艘の船でこの国にやってきて、ヌルガン郡司を開設した。1412 年冬、永楽帝はまた亦失哈らに命じてヌルガンに向わせ、海の外の苦夷(アイヌ)の庶民に及ぶまで衣服や穀米を与え酒・肴でもてなしたところ、みんな躍り上がって喜び、一人も逆らい、従わない者はいなかった。帝は、土地を選び、寺を建てさせ、その民を教化した。・・・(略)。》とある。

(「永寧寺碑文」日本語訳・中村和之先生・函館日ロ交流研究会より)

★永寧寺碑文は 1413 年明朝永楽帝の時代に建立。1432 年にも再建している。



左・ヌルガン永寧寺遺蹟・『東韃地方紀行』間宮林蔵　中・1854 年ロシア探検隊の塼[1]塔の絵図・『西伯利亜から満蒙へ』鳥居龍蔵著・大正１０年　右・間宮林蔵肖像(間宮記念館・茨城県筑波郡伊奈町上平柳 64)

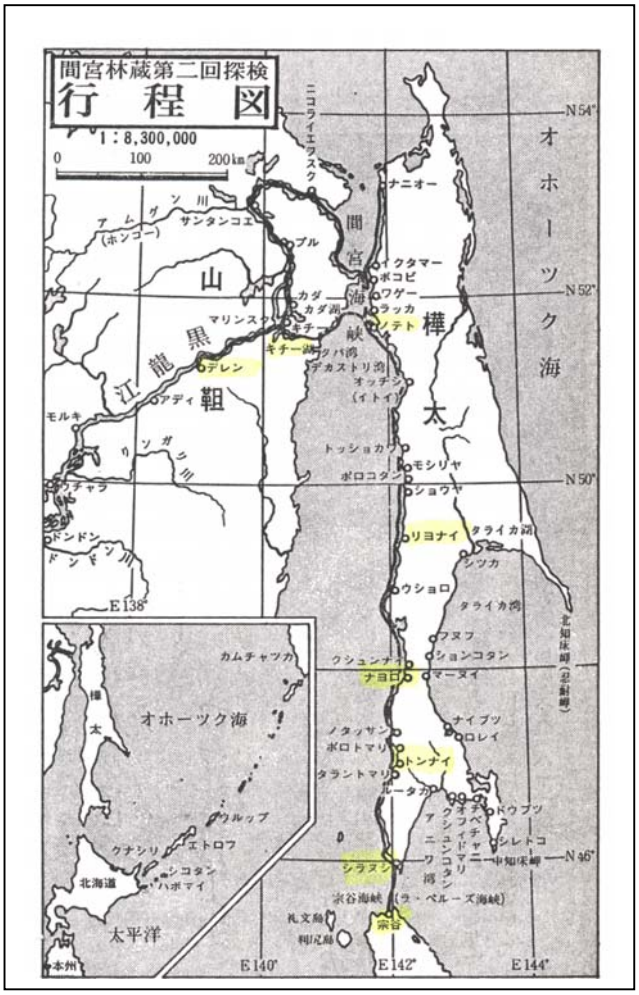
1、塼塔=レンガで築いた仏塔、当時は仏像や四天王など彫刻があったらしい。

★アムール川の河口から１５３ｋｍ遡ったアムール川の右岸、西からアムグニ川がアムール川に合流する地点ティル村の断崖の上にある。文化６年(1809)７月２６日に間宮林蔵はデレンからの帰途、船上から２つの石碑を遠望する。『東韃地方紀行』「此処の河岸高き処に黄土色の石碑二頭をたつ」とある。

間宮林蔵は樺太探検のおり、ギリヤーク部落に入り、樺太台地の露・清の領有状況を問いただしている。調べた内情は、ロシア国の暴政を防ぐ為に満州軍隊が樺太の島中を巡検し、樺太南端シラヌシから１３０里余北の西海岸イトイ辺りまでを領域とし、毎年清の貢納国(獣毛皮税)となっていた事を知る。清朝の部族長が管理をする酋長の職名は、ハラダ(満州語で氏族長名=酋長)といい、次夷はカーシンタ(次長・郷長名)と清朝の官名となっていた。

西海岸のナヨロ(北緯48度弱)・ライチシカ・ウロョロ(48度50分辺)・ナイブツ(47度30分辺)はハラダ酋長名となっていた。又ナヨロの酋長は日本側からも「乙名(おとな)職」の名を授けられていた。林蔵は樺太アイヌ民から樺太全土はロシアの勢力が及んでいないことを知るのである。そして清朝政府も樺太を領有する意識が薄い事を知り、樺太の領有意識の稀薄な大地に北海道アイヌ民が樺太の大地へ往来している事実は、幕府(日本)は好機とらえ、この大地を我が国領土として領有したいという強い意識が働いたことが伺える。その意識の立ち位置は即ち北蝦夷(樺太)の大地は日本の領土である強い意識が、間宮林蔵や松浦武四郎も持っていたはずである。

１８５３年、日露和親条約の国境策定の場で、ロシア使節プチャーチンは樺太に居住する日本人は少ない事の根拠に、ロシアは樺太全土領有権を主張したが、これに対し、勘定奉行川路聖謨(としあきら)(幕臣、勘定奉行兼海防掛)は「我が国の人間が全島を調査し、アムール川流域まで到っている」と間宮林蔵の探検を根拠に領有権を主張した。国家間の常識として、探検とは領土を領有する意志が強く、歴史的に野心的なものなのである。従って国際間に於いて探検と発見はその国の領有を意味するものなのである。



樺太図『間宮林蔵の再発見』大谷恒彦著より

その意は林蔵の樺太探検から９６年後、日露戦争が勃発してから２ヵ月後に、東京地学協会が林蔵贈位申請の願いを出してあった。急遽、明治政府は間宮林蔵に正五位を贈ったことで判る。林蔵が確認

した海峡は日本地図では間宮海峡となり、ロシアの地図ではタタール海峡となっている。

『東韃地方紀行』に、林蔵はニヴヒ村の村長がデレン(清朝仮府)に貢物を納める行路に同行してデレンに到着する。林蔵が見たデレン仮府は、清の役人が管理している貢納場と山丹交易場所であった。林蔵は《諸方の夷、幾百人となく、日々、仮府中に乱入し、交易をなす事、其の誼嘩(喧しい)なる事、譬るにものなし》と記述している。

デレン逗留中、日々の出来事を記録する林蔵の姿を見て、清の役人たちは高貴な人間と見て大変驚いたという。仮府の役人たちは、林蔵を船廬に招待し、地酒焼酎と肴に豚肉・鶏肉・卵・川魚・其の他野菜類でもてなされ、筆談話に華がさいたと記している。

黒竜江右岸に徳楞満州仮府(仮府跡は不明)　船廬酒宴図・『東韃地方紀行』の絵図。右奥手前の鬚顔が間宮林蔵(九大デジタルアーカイブより)

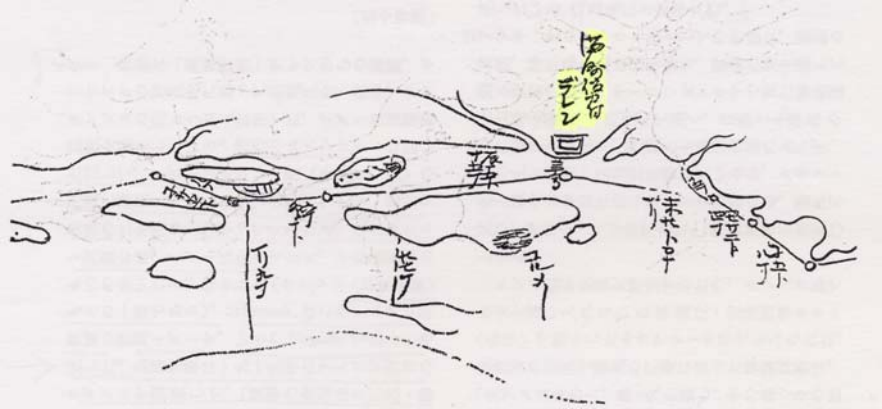
★満州仮府１７世紀末、清が黒竜江城に進出していたロシア人撃退して、黒竜江下流域の宗主権を確立した後、寧古塔(ニンクタ)建立、やがて松花江と牡丹工の合流点に置かれた三姓(サンシン)の副都統衙門から、毎年官人が黒竜江下流域に仮屋を設け、沿海州各地や樺太の酋長達より貢納の貂皮(黒貂)を徴収(税)し、これに対し清朝は依帛(きぬ)を賞賜した。この仮設の官署を林蔵は「満州仮府」し呼んでいる。山丹人(オルチャ)はその賞賜品や交易品を携えて樺太南端シラヌシ渡航し、北海道宗谷アイヌ民と交易した。これを山丹交易と呼ぶ。(『東韃地方紀行』巻之上・東洋文庫 484 より)

★徳楞は不明であるが、黒竜江右岸・北緯５１度１５分。文化６年(1806)間宮林蔵がノテトの酋長(カーシンタ)コーニとともに赴いた満州清朝の仮府あった所。(『樺太史研究』洞富雄著・新樹社より)

★ギリヤークについて・鳥居龍蔵の樺太踏査「北樺太及び黒龍江下流の民族に就いて」大正１０年。ギリヤークは黒龍江畔附近から江を下りてその沿岸、江より延びて間宮海峡、樺太島に分布する。

彼等は自身の呼称を「ニグブン」(ニヴフ・ニブヒ)と称す。オロッコ族は彼等を「クギ」と呼び、宗谷アイヌは彼等を「スメレングル」と呼び、シナ人は彼等を「費雅喀・フェイヤク」と呼ぶ。この**「スメレングル」**と林蔵はデレンまで同行した。現ニヴフ人口は黒龍江周辺とサハリンに４６００余人という。

ニヴフ族の絵図・スメレングル男夷　　スメレングル女夷・（九大デジタルアーカイブより）



満江分図書（抄）　デレンの絵図

『鳥居龍蔵全集』第8巻　「人類学及人種学上より見たる北東亜細亜」256—257 頁に、

《７月１７日、間宮はデレンを辞して下江の途に就いた。・・・アムグン河が黒龍江に合する所で、丘の上に明時代の奴児干都司の跡があり、また永楽と宣徳の二つの石碑があった処であります。永楽年間、明の隆盛であった時に、此処に観音堂なども建立され、奴児干都司の地として、黒龍江流域から樺太等各方面の中心地であった。その永楽の碑文なども漢文と女真文と蒙古文で書いて居る。その碑文によると、永楽の初めに明が樺太を征伐したことがあり、樺太の島であることが明らかに判って居る。一体樺太が島であるということは、シナの方では早くから知って居ったのである。・・・ただ日本人も知らず、西洋人も知らなかったけれども、シナ人は昔から知って居った。・・・間宮はデレンから黒龍江を下って舟の中から石碑のあることは明白にみとめて居る、・・・この石碑は、間宮が一番初めに発見したものであります。ロシア人は 1854 年以後である。・・・歴史としては間宮が４０年も早い。・・・間宮が『東韃紀行』が書かれてから２０年後にシーボルト氏によって、本国の『地学協会雑誌』に載って居ります。》と解説されている。又同８巻「黒龍江と北樺太」四（296 頁）《・・・間宮のこの行一は、実にロシア探検以前の挙であって、その探検記としはての『東韃紀行』は最も大切なる記録である。・・・かのシーボルトが高橋作

衛門を通じて、間宮製作の地図などを求めたのは、当時にあって実に大切なる資料であったのである。そしてその『東韃紀行』の如きも、欧州で訳せられている。・・・》とある。

樺太大地の幕府の認識度は・・・近藤重蔵(1771－1829)は寛政１０年(1798)最上徳内と択捉島に渡り、その北端に「大日本恵土呂府」の国標を建てた。近藤が文化元年(1804)に著した『辺要分界図考』は幕府の調査班の作成した地図は、ロシア人の地図、山靼人の砂書き地図等に基づいて製作された地図である。サハリン島と樺太とは別々描き、樺太は韃靼大陸と地続きとなっている。この地図(巻２)で次のように記述がある。

《樺太の極奥、山丹(黒竜江下流域)ト界ヲ接スル所、或ハ陸続キト云、或ハ海ヲ隔ルトモ云、夷人(アイヌ)・山丹人(ギリヤーク)ノ説ク処区々也。守重(重蔵)之ヲ考ウルニ、カラフトノ奥地ハ満州・山丹ト地続也。樺太西辺ハマンゴ(黒竜江)ノ枝流ノ海ニ入ル所ヲ以って山丹ト境ヲ隔テ、東辺ハ山丹ト地続ナレドモ、山海険悪ニシテ輙ク往来スベカラズ。又マンゴノ大川有テ、地ヲ隔テシヤウニ見ユルヲ以テ、夷人樺太ヲ以テ島ト心得タルモ知ベカラズ。(東辺ノ夷人ハ皆中地ヨリ山越シテ西辺ニ出ル也。東辺ヨリ西辺エ廻ル海路ノコト知ルモノナシ。)　故ニ或ハ陸続キ、或ハ海路ト云フ説アルナルベシ。・・・(略)》とある。

源義経の記述部分を『窮髪紀譚』から　**『東韃地方紀行』(巻之上・間宮林蔵述　村上貞助編　文化８年（1811)・東洋文庫 484 より)**

《満州人に源義経蝦夷より満州へ入りし事をつど度々に尋ねしに、聢といたせし証拠はなく候へども、当時漢土の天子は日本人の末なりといふ事承り伝え候と、人ごとに答えたり。思うに蝦夷へ行し我が国人言葉を聞伝へたるにてもあらん歟。併一つの証拠ともなるべきは、唐太の地を出離れ、マンコの川（黒竜江）を５０里斗り上りて、アヲレヒと歟いひし処に、青石に錐様のものにて彫付し二疋の馬の絵あるを見たり。其筆勢いかにも我が国人の画法にして、全く異国の人の筆法にあらず。土人も是は日本人の筆のらしいと伝へ、林蔵にも試みに書いて見給へと所望せしかども、筆拙ければとて辞してやみぬ。右の馬の絵もしや義経又は義経従者の画けしにもあるべき歟。・・・略》とあり、

満江分図書(抄)「此岩ニ日本人之刻し馬有り」と書き入れてある図(『東韃地方紀行』東洋文庫 484)。『満江分図書』アオレーの下流十丁ほどの地点に、

「此岩ニ日本人之刻し馬有り」と書き入れあり、村上貞助の『睦奥州駅路記』序文草稿の端書にもその旨がある。

『東韃地方紀行』 解説 245 頁・四、村上貞助**『陸奥州駅路記』**序文に、

《予が友、間宮林蔵奥蝦夷よりカラフト島を過ぎて東韃デレンといへる三姓(軍事拠点)出張の仮府ある処に至りし事あり。経る所の夷落、皆義経の事を謂ざる者なし。黒竜江の内、サンダゴへといへる処に赤き石の立たるありて、是に馬を彫付たり、其筆は我邦の画する所に似たり。往昔、義経此処を過られし時、矢の根を以って刻せられたりと云伝ふ由、カラフト島に住めるスメレンクル夷の話なりと云へり。赤い石が立ち、これに義経が彫りつけたとするような、史実に微し得ない伝説など、もちろん信ずべきでないが、石に刻した馬の画については、『満江分図書』のモンコレとアヲレーの中間に、それを記入しており、貞助の記述を裏づけていて、これまた『窮髪紀譚』にも載る。・・・略》とある。

松浦武四郎蝦の夷地探査から義経の記述を見る

『西蝦夷日誌・弐編』から義経の伝説部分を見る。(『新版蝦夷日誌』下・「壽津(壽都)領」文久３年(1863)松浦武四郎著・吉田常吉編・時事通信社昭和５９年刊行)から義経言説の部分を抜粋する。

義経弁慶の古跡・・・ 扨義経卿・弁慶坊の事、《東部にてはサル(沙流)へ来り玉いし事を往々説き、浄瑠璃と云う物にも作り、西部にては樺太へ渡り、満州へ入り玉いし事を伝え、江刺鴎島には寅巻を隠し玉いし窟、弁慶が力競石(相撲場)等云有り。其余処々に古跡とする処多し。是には論有りて、ウキクルミとは他方より来る大将の事、シャマイグルとは無髪の軍人を言よし。敢て義経・弁慶と一定の論なき共いへり。・・・。》(６０頁)

義経蝦夷渡来の説・・・《源廷尉居跡今に現存、其の地方の人をハイグルと申して殊に勇武を尚候俗にて、土人恐れ候由承候。グルとは此方に申党の事にて、智者は死なずと申候に付、廷尉高館の死は実に無レ之哉覧、故に猶奥へ渡られ候と申由にて、彼地は韃靼の地に接し候えば、若彼方に避られ候歟。・・・。》新安手簡。(６１頁)

弁慶岬の弁慶像・寿都郡寿都町

★新安手簡=書翰集。二巻。立原翠軒編。編年未詳。新井白石と安積澹泊との贈答の書簡の中、和漢書籍・人物・文学に関するものを集めた集。天明四年(1784)。

義経の高館自殺は明確ならず・・・《義経の事、東鏡に付いて思寄られ候事御尤に候。

是も近世に仕候物に見えず。高館草子と申すものに、義経より先、泉三郎討たれ候と有レ之、東鑑(あずまかがみ)には遥に義経の事候ひし後に、泉三郎は討たれ候由見え、是に付愚存(ぐぞん)(自分の考え)無にもあらず。・・・高館草子に、義経自殺の後、家に火を放たれ候と見え、焼首にて程を経候などいかにも慥(たしか)ならぬ様存候。・・・先日申落候、寛永中越前(えちぜん)新保(富山県小矢部市)と云う処の船頭、建州(けんしゅう)(中国東北部)へ船を吹流され、能時節(あたうじせつ)に参り合、其時は北京遷都の砌(みぎり)(おり)にて北京へ連れられ、其より返され候事に候。其者話とて砌(みぎり)に承候。》(６２－６３頁)

中国にて義経像と弁慶像の札を門に貼る・・・建夷奴兒部(ヌルガン)の辺の人家乃門々、田舎にて元三大師(だいし)(天台宗の良源)の像を札に貼(ちょう)す如く義経の像と弁慶の像の如き物二枚づつ貼し砌に見候と申事に候。》(新安手簡・新井白石／安積覚)(『**新版蝦夷日誌**』**下**・６３頁)

清帝自ら義経の末裔となすとの記事・・・『国学忘貝』ニ云(森助右衛門著述)。図書集成全部一萬巻、清ノ世ニ至テ編集セル所ナリ。宝暦(十年)庚辰歳(1760)清人汪縄武ナル者齎来リシテ、明和(元年)甲申歳(1764)官庫ニ納メラレシト也。書中図書輯勘ナル書百三十巻有。清帝自序、其文ニ朕姓源義経之須裔(すえい)、「其先出ニヅ清和ーニ、故号ニ国清ート有由也」ト記セルヲ見タリ。一度其書ヲ欲スリドモ、嫏嬛(ロウケン)(ビンイン・天帝の書庫)ノ秘書ニ等シケレバ、空ク渇望(かつぼう)スルノミナリシガ、去年家兄ノ餘光(よこう)ニ依(よっ)テ始テ彼書ヲ見ル事ヲ得タリ。先初巻ヲ披(ひら)キ見ニ、巻首ニ雍成帝御製序アリ。此文ニ義経ノ事ヲ記サレズ。次ニ蔣廷錫(注)ガ表文アリ。此上表ニ其事ナシ。次ニ凡例アリ。此中ニモ見エザル故、總目ヲ閲スルトモ、図書輯勘(しゅうかん)ナル書名モ無シ。大ニ望ヲ失ヒタル(桂林漫録巻下)。(『**新版蝦夷日誌**』**下**・６３頁)

国学忘貝=随筆。３巻４冊。森長見著。天明７年(1787)刊。多く古史籍による国礼・国法・風俗・史論・史談等に及ぶ。注・蔣廷錫・『古今図書集成』に、1698 年に康熙帝の勅命を受けた陳夢雷が纂修館総裁となって，この編纂事業は始まり、以来 24 年を経て、蔣廷錫が勅を奉じて事業を継承し，1725 年に完成，銅版印刷法を用いて 64 部を刷った。(コトバンクより)

桂林漫録=随筆。２巻。桂川中良著。寛政１２年(1800)刊。文墨・書籍・碑銘・古瓦・古器物等に関する記事。挿絵も多い。

シーボルトの説・・・《余(注)が友人大島某(注1)と、・・・余と和蘭(オランダ)の尺度エルフート抔(など)の事を論じ、其事分明ならざれば、矢勃爾杜氏(シイボルト注2)に質問せり。矢勃爾杜の説に、西洋の「フート」は素(もと)日本より渡りしものなれば、日本の尺と大同小異有のみ答し由也。大島甚(はなは)だ訝(いぶか)り、重ねて

其縁故を問ければ、答に余先年支那に航海せし時、建靖寧寺記とて一片の碑文を見しに、其文蒙古字故余其学に昧、一字も読み得ざるを以って、支那人に就って其大意を聞たり。此碑は元の太祖(成吉思汗)の立処なるを、近世に至て見出せしと。抑元の太祖は素日本人にて、智恵膽略衆に秀たり。其名を [illegible] ①と云。其大兄の忿怒に触れ放逐せられ、蝦夷に来り魚骨を以って屋を作り、爰に居住して土人を服従す。大兄仄に此事を聞、怫然として益怒り、兵を遣て誅戮せんとするの風評有り。 [illegible] ②之を聞いて大に恐れ、蝦夷を去りて満州に渡り、遂に蒙古に赴き一地を掠略し、自唱て此地素より従来の君主なければ、皇天今我をして衆民を撫育せしむと。是より兵威益々振い、万民従服して漸く其近隣の諸国を併合し、終に支那を奪略し帝位に上り、其朝名を改めて元と称すと。是碑文前面の大略也。又曰。此太祖及び二世・三世の帝相継いで西洋羅馬等の諸国を伐し事有り。此時日本の尺度を西洋に伝へたり。而して又其側面に鳥居を刻めりと。好盛按に、矢勃爾杜氏の説実に縁故有を以って、大島氏に托し其原文を得ん事を請けるに、矢勃爾杜速に領承、支那に便し原文を求め贈りけれ共、満文故誰も読得る者なく、大島は写し置たりと。余は其意無ければ打捨置たり。扨元は源氏の源を憚りて元と改しなるべし。 [illegible] ③は源義経の音を、洋人等誤り伝え斯く読しならん。世に義経卅四歳にて頼朝公の譴責を蒙り、蝦夷に奔ると云。然らば卿は、後白河帝の保元２年丙子に生れ、後鳥羽帝の壽永八年に蝦夷に遁れ、建久５年の頃に満州より蒙古に入、支那を掠む。建久元年は蒙古の太祖元年なり。是より元仁甲申に帝崩ずと有らば、卿６９歳にして物故せし也。矢勃爾杜日本に侫して是等の妄説を吐たると言人も有ども、余は全く虚妄にも有まじと思ひぬれば、記して後人の一覧に供す。》『柳葬雑記』〔筆〕(『蝦夷日誌』下６４―６５頁)

★明治３０年発行『史料通信叢誌』北海道の巻、壽津領(78－85 頁)に集載されているが、①②③ローマ字らしいが判読できない。注、余とは栗原柳葬でなく手塚好盛(律蔵)４４頁で述べる。

1、大島高任(1826－1901)父大島周意は南部藩藩医。江戸で箕作阮甫から蘭学を学ぶ。長崎採掘冶金を学び、後釜石西洋式高炉を建造。岩倉使節団に同行、欧州の鉱山視察。釜石に官営製鉄所を建設。翻訳著書『西洋操銃篇』手塚律蔵との共訳『西洋鉄熕鋳造篇』がある。

2、矢勃爾杜(1796—1866)ドイツ人医家・博物学者。文政６年(1823)長崎出島オランダ商館付の医官で着任。塾舎を開き、研究は政治・社会・宗教・文物に及ぶ。帰国に際し日本周辺の地図を持ち出し「シーボルト事件」(1829 年)を起こし日本から追放される。

3、『柳葬雑記』=随筆、４冠。栗原信充(号柳葬)著。嘉永元年(1848)刊。本邦の史伝・地誌・武具・故実制度等の間する考証の雑集。栗原信充(1794—1870)号は柳葬。甲斐源氏の流れ晩年は武田を名乗る。

平田篤胤から国学を学ぶ。（注 1－3 は『蝦夷日誌』下・松浦武四郎著吉田常吉編　時事通信社より）

唐太蝦夷義経を尊信す・・・《如レ此元の世祖・清の太祖の事、兎にかく越の新保の船頭話もよも空とも決し難し。建州は唐太地と甚だ近く、何ぞ渡り玉ふ事無と云難し。唐太夷尤も卿の事説き尊信し、車櫂とて両舷(船べり)に小櫂を附、両手にて揆〔掻〕をも卿の数玉ひしと云。又白主なるグイの土塁は卿自ら築り給ひし由言伝へ、方一丁余角にて三方に口あり、高凡一丈計の土居(土台)也。時々土器の缺を出す。好事の者、文化の頃、是を得んと地を掘に、天俄に曇り、雷雨烈しかりとて掘事を禁ず。然に近頃松前家敬警衛の士二三輩、隠に掘に一匹の蜥蜴出ると思や、空かき曇りて雨車軸(豪雨さま)を流し、洪濤恰　傾ニ坤軸一が如く、辛うじて会所に帰り来れば、晴天白日、一点の雲無りしと云。如レ此れ靈有る故、土人此地を尊敬する事大方ならず。夫等の事に附ても、此地に渡海なし玉ひしやらんと思はる。今太平の風習、暖衣(暖かい衣服)飽食の人士、如レ此遠境迄と言べけれども、近く譬を取らば、清正公は兀良哈(ウリャンカイ・蒙古高原北部の民族)に入り、長白山(吉林省と北朝鮮両江道)を南面に見る地に至り、其苦辛圖しる可ならず。主将の膽略(大胆で知略)世間溜々人士(地位のある人)不レ処レ可レ論也。》（『蝦夷日誌』下６７頁）

注・白主なるグイ=白主は樺太の南端西能登呂岬の西北二里にあり。往昔蝦夷島の宗谷の交通はこの小泊による。白主の東方能登呂との間にグイがあり、白主とともに近世の要津(城塁)。

「シーボルトの説」の経緯を説明する・・・シーボルトは文政１２年(1829)に追放されて以来、３０年後の安政６年(1859)に再度来日した。翌々年、幕府に招聘され蕃書調所(洋学研究教育機関)顧問格で同所にいた。　《蕃書調所に教授手伝いに大島總左衛門高任という蘭学者がいて、同僚等の手塚律蔵と、オランダの尺度、エル(ＥＬ)とフート(ＶＯＥＴ・足)のことを論じていた。大島はよく解らないのでシーボルトに聞くと、シーボルトは、「フートは日本の尺と殆んど変わらない。その訳は元の太祖以下の２世３世がヨーロッパに侵入した時、日本の尺度を彼の地へ伝えたからである」と答えた。そして「なぜ蒙古人が日本の尺度を用いたかって、それは元の太祖が日本人だったから他ならない」と答えた。手塚律蔵は蕃書調所に教授手伝いて、この話、大島高任を介して聞いた話の情報を『柳葬雑記』に載せた。これを読んだ松浦武四郎が好感を懐き、これを材料として『西蝦夷日誌』の第２編に収めて公刊したことにより、義経・成吉思汗説は茲に確固たる地歩を占めるに至った。》と岩崎克己は述べている。　（『義経入夷渡満説書誌』序説・60－63 頁）

シーボルト著の『日本』に著した成吉思汗即源義経とは

シーボルト著『日本』は１８２３年から６年間に於いて、塾生から日本各地の地理・歴史・文化・風俗・動植物の調査を集大成したものを、１８５２年ドイツ語で７編に分かれ出版された。『日本』に現わしている「成吉思汗即源義経説」とは如何なる内容のものか。『シーボルト先生その生涯及び功業１』呉秀三著・東洋文庫 103 より見る。

彼は通詞吉雄忠次郎の意見から考証して成吉思汗即源義経を唱へたり。

其一節は左の如し。《義経が誅に伏せしこと『和漢年契』(注)日本の歴史に之を載せたれども、不偏不党(中立)なる歴史家及び余の友人吉雄忠次郎の説によれば、義経が奥州にて戦死せしというは全く一の仮托にしてこれによって一時を糊塗(ごまかし)したるのみ。義経が蝦夷に走りたることは蝦夷を記する書物にて之を載せざるはなく、新井筑後守の『蝦夷記』にも其顛末を述べたり。而して義経が蝦夷に行き１１８９年(文治５年)満州に入りたる年代は蒙古史中の最も緊要なる時期にして、蒙古の牧畜国が建設されしその時に当り、鐵木眞(成吉思汗)は同年(1189)２８にしてケルーレン河畔(Ｋｅｒｕｌｅｎ)の野営に於いて「汗」とし推戴せられ、九藩の白旗を樹て旗幟(旗とのぼり)となし、ベーデー(Ｂｅｄｅ)の民４０萬の首長となりたり。

義経は此頃年齢３１、白旗を用いる源氏の世家より出たり。「汗」は「カミ」にして、日本の古碑に於いて神化したる諸侯を指せるものにして、人皇以来それを日本諸侯の爵位として「守」といえり。義経は「カミ」即ち「カン」にして、「汗」は鐵木眞より以前、亜細亜にありしことを知らず。鐵木眞死後、其系譜を編みし蒙古書に初めて之あり。且つ羅馬法王が佛蘭西より「汗」の廷(政治を司る)に遣わせしカルピン(Ｃａｒｐｉｎ)アスセリン(Ａｓｃｅｌｉｎ) ルブルキース(Ｒｕｂｒｕｑｕｉｓ)(1247 宝治元年―1253 建長５年)等の見聞したる習俗・儀礼は多くミカドの朝廷に見る所と相い似たり。白色は朝服又賀服に用い、軍旗と紋所ある陣幕とに用いたり。カルビンは成吉思汗の営をシラ・ヲルダ(Ｓｙｒａ Ｏｒｄａ) と云いたるが、シラは白にして、ヲルダ即ヲルドウ(Ｏｒｄｕ)は大弓なるが如く、大弓は日本の古武将が好みて用いたるものなり云々。》(『シーボルト先生・・・１』２７４頁)

(注『和漢年契』1805―1866 年まで日本歴史年表から中国年表部分を省きドイツ語訳された年表)

松浦武四郎の「西蝦夷日誌」第二編に栗原柳葊の雑記を引きて曰く

《蘭人シーボルトガ清人ヨリ建靖寧寺碑トテ満州文ノ碑文ヲ獲タルコトヲ記ス。其文二拠レバ、シーボルトハ日本国源義経ノ事ナリトアリと云へり、(渡辺修二郎の「世界に於け

る日本人」。）源義経、成吉思汗同一人なりとの説は早くより我邦にて云はれたることなるべし。シーボルト先生これを吉雄忠次郎に聞きて其著書に記せしより、西洋にも伝はりたるならん。後に米国人グリフィス・ハウス等も之をたたえ、末松謙澄も嘗てシーボルト義経同人物論を著はせり。》と呉先生は述べる。（『**シーボルト先生**その生涯及び功業』**275 頁より**）

『柳莽雑記』の著書は栗原柳莽でなく手塚好盛(律蔵)ではないのか

岩崎克己は中外医事新報第１２５２号に「シーボルトの成吉思汗即源義経とその後世への影響」（Ｉ）に『柳莽雑記』の著者は誰か、の説明をみる。

《・・・渡辺修ニ郎氏は明治２６年発行『世界ニ於ケル日本人』(318 頁)に於いて、『松浦竹四郎ノ西蝦夷日誌、第二編中ニ栗原柳莽ノ雑誌ヲ引テ云々』と述べられ、呉博士も前掲著書(596 頁)に於いて氏に従はれた。併し私は残念乍ら直ちに右の説に賛同する事は出来ない。・・・(略) 栗原柳莽なる人の伝記を『増訂国書解題』62 頁並びに平凡社の『新撰大人名辞典』65－66 頁に検するに、名は信充(又信光)、幼名陽太郎、通称孫之丞、字は伯任、号は柳菴、寛政６年(1794)江戸に生まれ、明治３年閏１０月７７歳で京都に歿した故実家とある。然るに右に引いた『柳莽雑記』に「好盛按に」の文字があった。良盛が乃ち『柳莽雑記』の著者であると考える事は少しも不自然でないにも拘はらず、栗原に好盛と云う諱、或るいは字のあった事を私は識らない。・・・蕃書調所員大島の親友で好盛と云う字だが諱だかを持った人は、手塚律蔵ではなかったかと直感される。彼に好盛なる名のあった事は安政５年出版された『泰西史略』(初編３巻３冊・手塚律蔵訳)に「手塚律蔵金刺好盛訳述」と見えている事に依って疑いがない。且つ彼は安政３年(1856)蕃書調所の教授手伝に任命されて以来、文久２年(1862)１２月迄在職していたから、シーボルトの江戸滞在中は大島と同僚であった訳である。仍って『柳莽雑記』を以って直ちに手塚律蔵の随筆と断定する事は早計かも知れないが、疑問は好盛と柳莽との不一致であるが、恐らくは栗原柳莽が、私の未だ識らない或る随筆、即ち『柳莽雑記』中に、手塚好盛の或る私記を、出所を示す事なくそのまま転載した為に、『西蝦夷日誌』の著者をして斯かる混乱を生ぜしめたものではなかろうか。》と述べられている。

手塚律蔵の僚友・西周・・・シーボルトの成吉思汗即源義経説は手塚律蔵の義弟に当る、且っては手塚と同じく蕃書調所の教員であった西周(1853 年、脱藩して手塚律蔵の門に入り蘭学と英学を学ぶ)が、その明治２年の随筆『未広の壽』(未刊)の中に触れている。

《先年ドイツ人ノホン・シーボルトガ此国へ渡りし時、皇那の事を誉め諂う心から、元の太祖は蝦夷へ渡れる源義経にて、妖僧は弁慶なりと言うが、年代も略々合うが肯れぬ附合の説にこそ、その証として右の碑文の写しを送るが、余も先きの幕府の時、開成所へ仕えたとき、一見したが、蒙古字にて書いてあったので、読むことはできず、中に漢字の所にラマ教の名があるのを覚えている。》とシーボルト説より一歩引いた立場にいた。

『北窓瑣談』橘南谿著を見る・・・文化２年(1805)『東西遊記』の作者橘南谿著に『北窓瑣談』「後編巻之一」の出版時、丁度シーボルトの疑獄の起った文政１２年(1829)にあたるその直後に記述を見る。(『東西遊記・北窓瑣談』大正１１年１１月２４日)近代デジタルより

大清会典一　清の高宗皇帝の勅によって成れる政書也百巻より成る・・・《往年唐土より大清會典という書を関東へ献せし事の有し。其中に、今の清朝は清和源氏の流れにして、源義経の末裔なる事を載せたり。然れば、唐土日本因縁なき国にもあらず。此書官より差戻どされたり。其副本一部を長崎の唐通事神代氏残し留めて家に蔵たるを、神代の子息太仲常は見たりしが、其書白紙摺にして、二枚重ねにて、其美麗なる書なりしをと。太仲京へ登り居て、余と同街の時物語なりき。此事は白石先生の頃金史別本に載たりとて、色々沙汰ありし事なり。白石も半は信ぜられしよし、新安手簡(新安手簡、荒井無白石と安積澹泊との手簡を記載)の中にやらん見えたり。其後も年久敷諸方にて珍奇の話と成居れる事なれども、畢竟(仏語・究極)は浮説(流言)なるべし。然るに、神代子実に見えりしと、奇中の又奇なることなり。・・・》★『大清会典』清朝代に編纂された史書、漢文以外に満文の編纂がある。

《・・・後程へて、我邦の清和源氏唐土の祖先なりといふこと、大清会典といふ書に出たりといふ事を、浪花の兼葭堂の主に物語しに、彼ぬしも先年かの大清会典を所持せしが、其後或諸侯に奉りし、其書十六チツ有りて、其美麗の書の仕立なりと。兼葭堂のぬしは、かの清和源氏の事さらに見及ばざりしとぞ。さらば疑らくは、虚説にて、神代氏幼少の時のことゆゑ見誤りけるにこそ。其書は今に其侯の所蔵なりとぞ。》とある。

★橘　南谿　(1753－1805)江戸後期の医者。紀行『東遊記』『西遊記』随筆『北窓瑣談』がある。

「元代闘国略」北沢正誠著をみる　北沢正誠(佐久間象山に師事)「東京地学協会報告」明治１３年・第１巻の内の第３篇(１３－14 頁より)

《按スルニ、松浦武四郎氏ノ西蝦夷日誌、第２編中ハ、栗原柳葬ノ雑記ヲ引テ、蘭人「シイボルト」氏、清人ヨリ建靖寧寺碑トテ、満州文ノ碑面ヲ選タルコト記セリ。其文ニ拠レ

バ、成吉思汗ハ日本国源義経ノコトナリトアル由ヲ述べ、又西洋ノ「フート」ハ日本国ヨリ出テタルモノニシテ、即ち成吉思汗ヨリ伝フル者トナス。其説甚ダ奇ナリ。又世ニ鎌倉実記ト云フ俗書アリ。其第１７巻ニ、義経陸奥ニ在ルノ日、北上川左衛門尉義行ト称スル旨ヲ述べ、且金史別本ヲ引キ、範車国大将軍義鎮ノ伝アリ。其父ヲ日本陸華仙、権冠者義行ト云フ。是ヲ義経トナリセリ。其文中、東小洋ノ称アリ。然ルニ漢土ノ書ニ東西洋ノ称アルハ、明ノ永楽５年、西洋(此西洋ハ亜細亜州中ニ就キ、東西洋ヲ畫ス。欧羅巴州ニ非ズ)入貢以後ニシテ大小西洋ヲ分ツハ、萬暦 29 年、大西洋人利瑪実(マリオ・リッチカトリック教会の司祭・明朝で活躍)入貢、五大州ノ説始テ明ニ入シ後ニ在り。遼金ノ版図、長江ヲ畫シ南海ニ及バズ。当時猶末ダ東西洋ノ稱アルヲ聞カズ。且其文章拙願、決シテ漢人ノ手ニ出シ者ニ非ズ。余、断ジテ其戯作(読み物の総総称)タルヲ信ズ。》と記述している。

松浦武四郎蝦夷場所の調査と交流　松浦武四郎は文化１５年(1818)伊勢国(松坂市)に生まれ、明治２１年(1888)東京神田にて７１歳で死去。幕末の激動期、開国を求めるロシアなど先進諸国の日本周辺や蝦夷地に軍艦による偵察隊の到来の時代、国際情勢の好奇心一杯の松浦武四郎青年はいた。蝦夷地探査は６度に及び、詳細な記録(日誌)は幕府へ提出したが、しかし松前藩政の場所請負制度によるアイヌの人々の漁業職への縛りは苛酷な労働に変わりなくアイヌ民たちの苦難は続いていた。米と干鮭の交換比率は１６０４年において、松前藩は干鮭百尾に対し米二斗俵と交換比率が、１７８２年には米が八升と百尾干鮭の交換率が下がっていた。アイヌ人たちは苛酷な生活苦を松浦武四郎に訴え、武四郎はアイヌの現状を、幕府に松前藩場所請負商人の非道を訴えたことが原因で、「日誌」は松前藩の圧力で、幕府から出版を許可されなかった。

明治維新の世になり蝦夷地に詳しい武四郎は、大久保利通の推挙により開拓判官に任じられた。武四郎は蝦夷地の名称にも関与し、その改称名として「北のアイヌ民族が暮らす大地」即ち「北加伊道」の名を挙げ、明治政府の検討の結果、蝦夷地は「北海道」と改称された。武四郎は「北海道の名付け親」と呼ばれる由縁である。(松浦武四郎記念館冊子より)

★・場所請負制度、豊富な水産資源を区切った地域を「商場」と呼び、海産物の権利を藩士に与え、藩士は商人に海産物を売って金を得ていた。やがて藩士達は商人に請け負わせ商人の請負制度となる)

『按北扈従』巻の4に悲惨な状況を報告している（松浦武四郎記念館刊行より）　《扨此村は人家三軒、然るに此宿せし家は、シンコクシ(アイヌの松浦の雇)の家なるとかや、家内八、九

人暮しの由なるが、皆ホロアントマリ(昭和時代の大泊・オオドマリ)の番屋に到りて稼ぐ居る由。またアイカアイノ(家主)は倅のヲノコトイと女の子や子供六人まで連れてトマリ(漁港)に取られ、其故此村は当時空虚に成って居りけるなり。》と記録がある通り、場所請負商人たちは漁場へ連行し故郷へなかなか帰さなかった。

★扈従とは松前藩から蝦夷地調査派遣された箱館奉行向山源太夫の付き添いを命じられたよる。『按北扈従』本書安政３年(1856)の「松浦竹四郎日誌」は樺太紀行を中心とした『按北扈従』の松浦孫太氏解読本を編集発行した。『按北扈従』は宗谷から白主に渡り、東海岸のクシュコタン→コタンケシ→シスカ(敷香町)→マーヌイから西海岸→ランチカ→シラヌシ→宗谷と戻ってくる所までしる記している。

武四郎の蝦夷地での義経伝説の記述を考察　武四郎は義経蝦夷渡説を世に広く読み物による流布と言説化に一役買っているのは、単なるアイヌ慕情のためだけでない。世は欧米やロシアの軍艦が、蝦夷海を偵察している事情に、幕府(日本)の対外的危機意識が高まり、幕府の領土意識の強くはたらき、武四郎自身も「義経蝦夷渡り伝説」を盛り上げ方は、一般庶民が蝦夷領土意識を認識させた。時には松前藩と小競り合いを繰り返しながら、武四郎は知識人としての我が国体の憂いを、国際感覚を持ってその思考を高めていた。

弘化３年(１８４６)２回目の蝦夷地調査時に、松前藩の医師西川春庵(西川が樺太赴任時、武四郎は下僕として同行)とも合い、江差では頼三樹三郎(陽明学者頼山陽の息子)とも会っている。又吉田松陰、藤田東湖(水戸学藤田派の学者)、富岡鉄斎(文人画家・儒学者)、川鍋暁斎(浮世絵師・日本画家)等の交友関係を深め、当時、国際感覚を持った文化最高レベルのジャーナリストの意識があったと思われる。

左・松浦武四郎・明治１５年　中・蝦夷地調査行程図(第４回)安政３年(1856)武四郎３９歳『北海道の名付け親・松浦武四郎』より　右・旧旭ヶ丘スキー場跡よりユジノサハリンスク市を見る、筆者撮影

武四郎は蝦夷地統治を幕府側に立ち、松前藩や幕府要人にアイヌの救済こそが、ロシア

の侵入を防ぐ方法であると進言している。幕府の外交危機管理の対処に、武四郎は義経伝説の面白さを世に知らしせしめ、義経が遁走した蝦夷地域、義経が渡った樺太の大地は我が領土、と言う認識をもっていた。アイヌの人々と上手に付き合うことが、我が国の領土を意味し、北海道・北蝦夷地・北加伊道と樺太の大地が、国際的に我が国の領土となることを期待した。明治２年に開拓判官、大久保利通推薦に就任するが、僅か半年で辞表を提出、明治政府の派閥争に本心から嫌気が差したようである。

余話として、仙人の様なスタイルの武四郎、一体、何を生業(なりわい)として生活をしていたのか。松浦武四郎記念館刊行の『北海道の名付け親松浦武四郎』によれば、江戸の山口遇所という篆刻家(てんこくか)(石に文字を刻)で居候をし、技術を学び、各地の名士や書家や絵師に篆刻を贈った。喜ばれた上にお金と宿泊賃を稼ぎ、松尾芭蕉の様な旅の人生を送った人らしい。偶然かも知れないが橘南谿、松尾芭蕉、松浦武四郎も伊勢の出身である。

（松浦武四郎記念館・三重県松阪市小野江町３８３）

大陸と樺太の小史　**高倉新一郎著著作集　第２巻『北海道史』〔ニ〕「満州と樺太」**261－265 **頁**

蝦夷とは大和民族が漠然と東北の異民族を指して呼んだ呼称であり、蝦夷ヵ島の住民であるアイヌ民族の祖先で、その分布範囲は北部樺太島の南端、東は千島一体に及んでいた。その奥にいる民族、樺太方面ではオロッコ・ギリヤーク、さらに彼等がサンタンと呼んでいた黒竜江口付近の住民と、千島方面ではカムチャツカ半島に住むカムチャダール等とは古くから関係を持っていたらしい。・・・漢代の地理書『山海経』には、北部に魚皮を着する玄股国(ゲンココク・黒歯国の北・人々は股の部分が黒く魚の皮を衣服にしている)と、その北に「偽りレ　人ト　身ニ　生ズレ　毛ヲ」という毛民の国が紹介されており、白鳥庫吉博士は、多毛民族はアイヌとしている。当時、松花江沿岸や沿海州にいた粛慎などが朝貢していたから、樺太アイヌを通じて知られていたらしい。

唐の貞観１４年(640)には流鬼(りゅうき)(ギリヤーク)が太宗に貂皮を献上している。明代の苦元、苦夷(クイ・カイ)、清代には庫野葉・庫葉・庫頁等と書かれた者と同様で、樺太の土人を指していて、アイヌはアレウト方面(アリューシャン列島)の土人から「クイ」と呼ばれていたから、樺太アイヌと見られる。樺太が詳細に知られるのは元・明代となる。元朝の世祖クビライは満州・朝鮮を平らげ、更に黒竜江口に東征元帥府(ニヴフの支配と軍管区)を設け、その地方の民族を綏撫(すいぶ)(鎮め治める)して、更に渡を渡り樺太島の骨嵬(クイ)・亦里干(オロチョン)等を討平した。明代になって元の東征元帥府なる今日のクチールに奴児干都司(ヌルガントシ)を置き、下

流の地を綏撫し、樺太には苦夷(アイヌ)・苦元(アイヌ)の外に吉里迷(ギリヤーク)がいた。松前の記録によれば、文禄２年(1593)松前の藩祖蠣崎(かきざき)慶広が徳川家康に拝謁時、樺太から渡来した道服を着ていたところ、家康に懇願され、これを贈ったと伝わる。恐らく唐衣の蝦夷錦であろう。

明が滅びて清代になり、黒竜江を下ってきたロシア人を撃退し、1689 年ネルチカスク条約で、この一体を手中におさめた。満州人が樺太に入り、西海岸のイトイ、ガウト、東海のドウガーの酋長をハラダ(喀喇達(ハラダ)・民族長)に任命し、その外地にカーシンタ(嚶珊達(カシヤンダ)・郷長)に任じ、「年々満州に入貢するに、その貢物は黒豹皮一枚を献すべし。その賞賜として鍋一枚を与へ、その他交易の物もまた下直にして是を与ふべし」(間宮林蔵『北蝦夷図説』)と約束して帰ったという。そこでこの地のギリヤークは毎年満州に朝貢するようになったらしい。満州人は毎年６月にやってきて、反物・木綿・酒・煙草・飾玉・鍋・栗・稗・大豆・小豆・陶器等を持ち寄り、土人の毛皮と交換し、９月になると交易所を閉め、官人と共に満州へ帰ったという。

ロシアの出現・・・元禄１０年(1697)ロシアはカムチャツカ半島に達し、間もなくこれを征服した。ロシアのシベリア進出した理由は黒貂(くろてん)の皮であった。至る処で土人を使って毛皮動物を狩り、又物々交換で集たり征服した地域は「ヤサーク」(税)として男子一人に何枚の毛皮税を取り立ていた。安永７年(1778)ウルップ島に進出したロシア商人が、北海道の東端に通商を求めて来航したが、幕府は赤夷(えびす)が出現した程度の認識であった。しかし、ロシアは破竹の勢でシベリアを征服し、北太平洋に進出のロシア悪行であることを、オランダ商人より、長崎でヨーロッパ文化を学ぶ日本人学者に教えたのである。オランダ側は、ロシアと日本の友好条約を結ばれたら、日本交易との独占を失う畏れを抱いていた事による。文化元年(1804)ロシア皇帝の国書を携え、レザノフ(遣日使節・日本との交易を強く求めた)を正使として長崎を訪れた。幕府は翌年春まで待たせた揚句、拒絶した。

レザノフ失望の中で退去したが、幕府の目を覚まそうと、文化３年(1806)９月、樺太南岸に設けられていた日本の要地、久春古丹(クシュンコタン)(樺太旧大泊町)を襲い、物を奪い、建物を焼き、番人を捕えて去った。翌春更に択捉島を襲い、紗那(しゃな)の会所(択捉島東北部に位置する)を砲撃した。これに対処するために、文化８年(1811)ロシアは千島測量船が国後(クナシリ)に入港時、幕吏はロシア人を欺いて会所に招き、船長ゴロヴニン外７名を捕えて松前に護送拘束した。(『ゴロヴニン日本幽閉記』岩波文庫に詳しい)

後に高田屋嘉兵衛等の仲介により、文化１０年にこの事件は解決して一時は北辺に平和がもどった。しかし、日本周辺を取り巻く米・英・仏・露の鍔迫り合いは続き、日露の樺太境界線は北緯４８度辺り(ナヨロ)で、ロシアの手により樺太南北が分断される形となった。こうしたロシアの動きに対し、幕吏はなす術がなく、ロシアは樺太全土を主張してやまず、止む無く国境を定めずして、北緯５０度付近をもって両国民雑居の地とし、紛争が起きた場合は双方の役人に任せるに止まった。延元年(1860)幕府は樺太の警備を仙台・庄内・会津・秋田の４藩に命じた。慶応３年(1867)秋田は蝦夷地の支配地を返上し、会津も庄内も明治元年の戊辰戦争変乱のため樺太を引き払って帰国する。この間、ロシアは日本の維新動乱の隙を突き、明治２年には久春古丹に進出し、事実上樺太全島を制した。新政府はやむを得ず、明治８年、樺太島と千島列島と交換条約を締結し樺太全島から手を引かせざるを得なくなったのである。　　『北海道史』第２巻〔二〕(337－357 頁)

余話・サハリン州郷土博物館に日本の資料が残る　（サハリン州郷土博物館・筆者撮影）

日本軍による樺太境界設工事写真・明治 39 年(1906)

現在サハリン州郷土博物館に樺太アイヌ戦士の勇士の写真

日本国と露国境界石・見部６０㎝

日本政府による千島アイヌとの写真　１８８６年

第4章 瀬脇壽人の「浦潮港日記」以後に書かれた書誌を見る

『浦鹽斯徳紀行』 鈴木大亮著は・・・第１篇・紀行　第２篇・地理、年紀、気候、戸口、風俗、職業、兵備、警保、囚獄、教育、衛生、訳述、郵便、電信、物産、漁猟、牧畜、貿易、物価、輸出入、租税　第３篇・物産品評報文、対話書となっている。北海道有力商品の石炭等やその他の需要輸出分析をしている。この紀行文は８日間の調査記録ではあるが、確かな実務的詳細な報告をしている。時はロシア・英国の外交・海軍力の圧力に維新政府は「海軍創設」を急務となっていた時期、ウラジオストク周辺の情報を適格に政府に報告の責務を負っていた。この書の中に「ニコリスキイ」(ニコリスク)の古墨の記述があるので、その箇所をみる。(**『浦塩斯徳紀行』の原文は『明治北方調査探検記集成』第１巻**)

『浦鹽斯徳紀行』　**鈴木大亮著・開拓使　明治１２年１２月刊**・奥山亮補註・22 - 35 頁

《**明治11年9月12日**　午前４時「ニコリスキイ[1]」ニ達ス。・・・露僧「ニコリスキイ」ノ家ニ憩フ。・・・１４日早起、市街ニ逍遙(歩く)シ、遂ニ古墨ニ抵り兵営ヲ見ル。・・・。・・・古墨ハ南北１０町[2]東西７、８町許ノ長方形ニシテ、壁ノ高サ１丈２、３尺、壁上１２０、３０歩毎ニ高サ８、９尺、方２間許ナル望遠台あり。壁ノ外面を横射スルニ備フ、四面濠ヲ繞ラシ、其広キ処凡ソ十間許、塡塞讒(壁で囲まれた砦)ニ其跡ヲ在スルノミ。濠外ニ坡垛(弓を射る)アリ。稍高シ。圮壌シテ全形ヲ見ル能ハスト雖モ、其外郭タルヲ知ルヘシ。何ノ世、何氏ノ築ク所タルヤ知ル能ハサレドモ、墨中ニ存スル所ノ石佛ヲ以テ之ヲ微スルニ、蓋シ三、４百年前ノ物タルヘシ。仕官某言フ。３百年前一豪族アリ、此地ニ居レリト。営舎ノ戸外ニ古佛(仏像)ニ個あり。足部ハ地ニ没シ、脚趾ヨリ肩ニ至ルノ高サ３尺２、３寸、両手ヲ束ネテ臍辺ニ膺ツ。服ハ明制ニ以テ、袂ノ中央ヲ絛紮(たばねる)頭部ハ毀碎(砕ける)ス。想フニ異宗徒ノ為ス所ナルヘシ。別ニ古石壇アリ。蓮華様ノ物ヲ彫刻ス。又石造ノ羊像、蹲踞セシ者２個。高サ３尺許。石質ハ我ガ御影石ニ似タリ。郷人ノ言フ所ニ拠レハ、別ニ満文ヲ彫ミタル記念碑アリ。露僧之ヲ翻訳セシコト有シモ、今其所在ヲ失セリト。・・・気候寒烈、露暦１２月上旬ヨリ翌年２月マデハ最モ甚シ、・・・雪ハ１０月下旬ヨリ地ニ敷キ、深サ１尺５、６寸、３月中旬ヨリ４月ノ初ニ當テ全ク融スト云ウ》

1、コリスキイ(ニコリスク)=清代は「双城子」、南城と西城があった。後ニコライ１世の名を取りニコリスコエ村、1898 年ニコリスク・イスリースキー市。現ウスリースク。公園に義経伝説の亀石の亀趺がある。亀の写真は６６頁参照。『成吉思汗ハ源義経也』小谷部全一郎著・「義経公園」で述べている。

2、１町=１０９、０９ｍ。１丈=３、０３ｍ(東西は１ｋｍを越え、土壁の高さは３、３ｍ)

明治１１年８月に北海道開拓使黒田清隆、海軍卿川村純義(薩摩藩士・海軍創始期首脳、海軍大将)らが軍艦金剛に乗って、ウラジボストクを視察した。

この時の随員の一人が『浦塩斯徳紀行』著者鈴木大亮である。

この明治１２年の刊行から８１年後の昭和３５年、鈴木大亮の孫にあたる奥山亮氏が「北海道地方史料」(第三集)として注釈を付けてガリ版で復刻。加藤九祚解説の「浦潮物語」(二)「鈴木大亮のウラジボストク旅行」に加藤九祚の説明がある。

(『浦塩斯徳紀行』原文は『明治北方調査探検記集成』第１巻に有る)

★鈴木大亮・仙台藩士、江戸江川塾で砲術を学び明治４年黒田清隆の推薦で開拓使官僚を歴任、後秋田県知事、逓信次官となる。

『浦塩斯徳紀行』明治１２年国会図書館デジタル化より

「義経ノ蝦夷へ赴キシ事跡応間」 吉良義風『温故集談』第２号・東京出版社　明治 13 年 9 月２６日・10－14 頁

《源義経ハ奥州高館ヲ遁レテ蝦夷ニ走リシト云フ。一説ハ人ノ知ル所ナリ爰ニ国学忘貝ニ云ウ・・・略。西土今ノ清国ノ編集セル図書集成ト号スル書、一萬巻アリ新渡ニテ其部ノ内、図書輯勘ト云ヘル百卅巻アリ。清帝自序ヲ製ス其略文トヲ朕姓ハ源義経之裔、其ノ先出ニツ　清和－ニ号ス国ヲ　清－トアリ。古文孝経序跋ノ序ニ古今図書集成、一萬巻寶暦庚辰(こうしん)ノ歳、清客汪縄武齎シ来ル其全套テ(おおい包む)明和甲申納オサメル、之ト官庫ノ文アリ(**原文注釈**・義風近者聞ク此書今正ニ紅葉山ノ官庫ニアリト)又鎌倉実記義経ノ子義鎮ノ傳ヲ挙ゲタリ。金史別本列将傳ニ陸奥高館ヲ落去シ蝦夷へ渡リ、韃靼ニ至リ金ノ章宗ニ従イ大功アリシ事ヲ挙タリ。又義経蝦夷軍談、又蝦夷志等ニ義経ノ傳エアリ、若シ今ノ清ヲ以テ義経ノ後胤トセバ西土ヲ掌握セシ事実ニ快然タル哉。トアルニ又近者聞ク、今満州地方ノ何方ニ歟、義経ノ墓トテ満州文字ノ碑銘アリ。又其墓ニ並ヒテ四箇ノ古墳アルハ、家族ト云。其碑銘ノ写シハ既ニ外務省中ニアリト。

若果シテ然ラバ、眞ニ実験論究セザルベカラザルコトシナラズヤ。因ニ云ウ、今北海道ノ土人、短小ノ木片ニ切形アルモノヲ以テ古代ノ記録トシ、其数ヲ多ク所持スルヲ名誉トスト聞ケリ。果シテ然ラバ、是亦其記録ヲ翻訳セバ、其古代ノ珍説モ著シ。且つ義経ノ傳ナドハ見ルニ足ルベキノアルヤ必セリ。当路(重職)の諸大人思惟アランコトヲ請フ。トハ余ガ東京大学法理学部墳墓考ノ応問ニテ、則「学芸志林」第３６冊中登載ノ事ナリ。其後「交詢雑誌」(第 6 章 90 頁参照)１１号ニ、義経ノ事跡ヲ、史学者岡谷繁実(『名将言行録』著)

答書義行ハ義経ノコトナリ。終ニ満州ニ於テ卒ス。其墓碑ノ摺紙ハ当時東京大学ノ図書中ニアリト見エタレバ、直ニ大学三学部ニ就テ之ヲ問フト雖ドモ、所蔵ナシ。遂ニ之ヲ岡谷氏ニ問フ。答書ニ云ク古賀謹一郎(儒学者)ニ御尋有之候ハ、相分可申(原文注釈・義風末タ古賀氏ニ問ハズ)。・・・略。暗記ニ建セイリヤウ寺記(原文注釈・青龍寺ト覚エタリ)ト正面ニ有之、裏ノ方ニハ韃文ニテ銘有、之趣韃文ヲ読ムモノニ訳サセ度トノ事承リ候。テッボリシン(地名)等ノ近辺ノ山、余程近傍ヲ伐従ヘ候由、・・・略。トアリ。然ルニ近頃聞ク所ニ依レバ、昨年正ニ内務省ヨリ清国政府ヘ談判ノ上、図書集成１萬巻ヲ金１萬５千余円ヲ以テ購求シ、則図書局ニ保存セラルト。其書全部銅版摺ニテ其製本実ニ美ヲ極ムト云フ。此銅版摺ヲ一見シテ、彼国当時ノ盛事見ルニ足レリト。而シテ後之ヲ鋳崩シ銭貨ヲ造ルト云フ。爰ニ吉村春峰(国学者)氏ハ此図書輯勘ニアリト云フ国学忘貝ノ説ニ拠テ、其確実ナルコトヲ探究セント云レキ。近者別ニ報スル所アラントス。》

★吉良義風・「上記」明治１０年に出版、内容は天地の始まりから神武天皇までの歴史書。

「義経元太祖同人ナルノ説」 森三渓述　東京大学編纂『学芸志林』第１３巻第７５篇明治１６年１０月２５日出版　(369－376 頁)

『学芸志林』は東京大学発行の学術総合雑誌。創刊明治１０年―１８年終刊。白野夏雲(物産研究家)のアイヌ研究、隈本有尚の天文学者等の記事がある。１７巻通冊１００冊あり。

森三渓述「義経元太祖同人ナルノ説」は明治１６年１０月に『学芸志林』に掲載となる。末松謙澄の「ジンギスカン即源義経」は明治１２年にロンドンで発刊、それを内田弥八『義経再興記』は明治１８年３月発刊、依って経緯は判らないが、末松英文の「ジンギスカン即源義経」を内田弥八より２年以前に原英文を見たか、それとも瀬脇壽人の「浦潮港日記」を外務省から取寄せ見た事になる。内容は「浦潮港日記」をほぼ踏襲している。

《源義経ガ成吉思汗即元太祖ト同人ナルノ説ハ近頃漸々唱道スル人ノ数ヲ増セリ。其ノ蝦夷ニ渡リシ事ハ証跡明白ニシテ亦覆ウ可カラス、而シテ其ノ亜細亜大陸ニ渡リタル事ハ人ノ半信半疑未決セサル所ナリ。今証拠ヲ諸書ニ採リテ其ノ信ジ可キ所以ヲ述ベン。

蝦夷人ノ口碑ニ曰ク、義経其ノ従者ト神岬(道南積丹町)ヨリ海ニ航シテ山丹ニ入ルト。浦塩斯徳ニ判官岬アリ、判官着岸ノ処ナルベシ。寛永年中越前ノ舟人満州ニ漂白ス、満人之ヲ北京ニ送ル途ニ過ギクル所ノ村戸毎ニ壁上ニ義経弁慶ノ甲冑ヲ衣タル図ヲ貼セリ。蓋之ヲ神トシ祭ル也ト。又人アリ嘗テ満州ニ漂ス地ニ義経ノ祠アリ、建築ノ法(作り方)、鳥

居の形篠龍謄(形状を正しく築造)ノ紋一ニ本那ノ制ニ従フ。浦塩斯徳ヨリ１５０里ノ処ニ蘇城ト云フ城アリ。古昔日本将軍難ヲ避ケテ此ニ至リ築ク、死地ヲ出テ、此ニ来レルヲ以テ蘇城ト名ズクト。満州ノ土人相合スレバ前代日本人ノ事ヲ談スルヲ楽トス。其ノ説ニ満州ハ昔時日本ニ属セリト、歴史ニ此ノ事ヲ記セス。恐ラクハ日本人アリテ彼処ニ往キ之ヲ属セシメシナラン。伴信行(伴信友)ノ著『中外経緯傳』ニ曰、義経粛慎(沿海地方)ニ入ル其ノ地ヲ名ツケテ満州ト曰フ。祖先満仲ノ徳ヲ慕ツテ也。・・・略。

・・・又支那西洋ノ書ニ就テ元ノ太祖成吉思汗ノ傳ヲ見ルニ大ニ似タル所アリ、即チ左ニ述ベン然レドモ、元朝ハ本文字ナシ故ニ其ノ少壮(若くて元気)ノ時ノ履歴ハ知ルニ由ナシ。太祖名ハ鉄木眞、姓奇渥温氏、(**原文注釈**・一作「キヤト」)蒙古ノ語「キヤン」ハ飛泉(瀑布)ノ義ナリ「キヤト」ハ複数ヲ示ス水源ノ義ト相似タリ、又曰ク蒙古ノ語ハ清音濁音通シ用フ「キヤン」「ギヤン」通シ用フレバ「ギヤン」ハ「源」ナルヘシ。・・・略。

孛端又兒ハ其季也、子孫稱ニ日子族一蕃衍(はびこる)為ニ敷部一居ニ於鳥桓(地名)之北一、日子蒙古語ニ「ヌーランユン」ト云フ後訛テ「ニロン」族ト称す日本人、又ハ日本ト音相近シ意・・・(略)。日ノ子ナリト称シテ土人ヲ服セシハ英雄ノ権謀多ク在ル所ナリ。・・(略)。

「ジンギスカン」又「ゲンギスカン」「ゲンジスカン」「ゼンギスカン」ト読ム源氏汗ト似タリ。建国曰レ元。元ハ「モト」ナリ「ミナモト」ナリ音源ト同シ。・・・略。

其ノ他、成吉思汗ノ性質行状ニ就テ考ルニ義経ト同キコト多シ、宋元通鑑ニ其旗ハ九斿ノ白旗ヲ用フトアリ、又西洋人ノ説ニ汗ハ妾５百蓄ヘタリト云フ、左モアルヘシ、又常ニ兵士ヲ戒テ曰ク「平日ハ牛ノ如クセヨ、戦ニ臨メバ飢鷹ノ如クセヨト、又軍法ハ甚厳ニシテ将ノ許サザルニ戦フ者ハ死ニ処セリト云フ」「常ニ寡ヲ以テ衆ニ当リ士卒ニ先タチテ進ム、屢々間諜ヲ用ヒ敵ノ不平者ヲ懐ケテ通セシムル」等義経ノ行ト同ジ。成吉思ハ常ニ「眞神ヲ拜セリ人ニ謂テ曰ク、教法ハ人々其ノ信ズル所ニ任ズヘシ、異同ヲ以テ好悪ヲナス、勿レト」嘗テ佛加里ヲ取リシ時、堂宇アリ間曰ク、「何シテ曰ク、上帝ヲ祀ルト乃チ馬ヲ下リ徒歩シテ之ヲ拜スト」。・・・略。

・・・又明和３年(1766)始メテ渡ス所、図書集成中ノ輯勘録ナル書アリ、其序ニ乾隆帝(清朝６代皇帝)ノ上諭(君子の諭し)ヲ載スト云フ、曰ク、朕ガ家姓ハ源義経ノ裔ナリ、義経ノ先ヲ清和ト為ス、故ニ清ヲ以テ国号トナスト。清ハ元満州ヨリ起レバ元ト其ノ地ヲ同ウス共ニ義経ノ裔ナルコト。彼ノ帝ノ自言ニ依テ彌明カナリ成吉思汗ノ源義経ナルコト復疑フ可クモアラズ。・・・評或ハ云フ、図書集成輯勘録乾隆帝ノ序ニ朕ガ家姓源義経云々ノ字アリト云フハ非ナリト編者末タ其書ヲ見サレバ茲ニ其信僞ヲ保セス。》と成吉思汗即源義

経説を肯定している。

（注１５０里=６００ｋｍ。末松謙澄は１５０英里している・その根拠は瀬脇壽人が「浦潮日記」で５０里と記述しているからである。第６章８９頁参照。）

「沿海州南部烏蘇利蘇城郡紀行」調査紀行日誌

『東京地学協会報告』・「沿海州南部烏蘇利蘇城郡紀行」深堀順蔵著　第１３巻１０号・明治２５年(1892)１月刊行。深堀順蔵１週間旅程の蘇城周辺紀行文の概略を見る。

明治２１年、日本政府はロシアの海軍力に備えて、シベリア・満州・朝鮮地域を日本国政府は沿海州南部地域の調査を開始する。露国の領有政策の現状を探索調査した記録が、「沿海州南部烏蘇利蘇城郡紀行」である。地図・地域種族住民調査・生活の業・農業生産種類の調査等の多岐わたっている。その地域の烏蘇利・蘇城の日本武将(義経)が領有したとう伝説地を見る。

《**明治21年(1888)6 月28日**、午前７時浦潮港ノ日本貿易事務館ヲ出テ西比利亜街道ヲ北行ス。３魯里(ロシア里数[1])ニシテ当港駐在ノ線列歩兵第一大隊ノ野営地アリ、是辺ハ第一番川ノ河盂(鉢状)ニ属スルヲ以テ少シク平地アリト雖ドモ実地兵ヲ練ルノ地勢ニ非サルナリ。・・・・余拝ハ仝行者７名ト３、４百m計リ騎行シテ西伯利街道ヲ右折シテ丘麓ニ沿ヒ磽确(砂利地)或はハ沮洳(じめじめした地)ノ経路即チ獣路ニ入ル是レ蘇城ニ至ルノ道ナリト云フ。・・・略。

1、ロシア１里=１０６７m。３露里=３、２ｋｍ

同6月29日、早々出立スヘキノ驢馬匹ナク荷車２台ヲ雇ヒ暫ク１１時本村ヲ出発ス。余ハ車中ニ枯れ草ヲ積ミ其上ニ坐臥ス。２時「ペトロブ」村ニ着ス、此間２５魯里ニシテ全ク「ウスリー」湾ノ東海岸ニ沿行シ或ハ之ヲ去ルモ数魯里ノ外ニアラス。・・・略。

6月30日　・・・「タウジミ」河盂(河に沿って)ニハ韓村数多アリ・・・是ノ韓人村ハ「スーチヤン」山脈ノ西北麓ニアリ戸数２０戸斗リ耕作及ヒ遊猟ヲ以テ生計ヲ立ツルモノニシテ貧村タルハ言ヲ待タサルナリ。家屋ハ朝鮮固有の構造法ニシテ皆土壁藁棟(ワラを混ぜた土壁)ノ矮屋(低くて小さい家)ナリ。・・・「スーチヤン」山脈ヲ越へ６時蘇城河畔ノ「ウラジミロフカ」村ニ着ス是ノ間６５魯里(約６９km)ヲ騎行セリ。・・・蘇城郡域ハ１８６８年ニ於

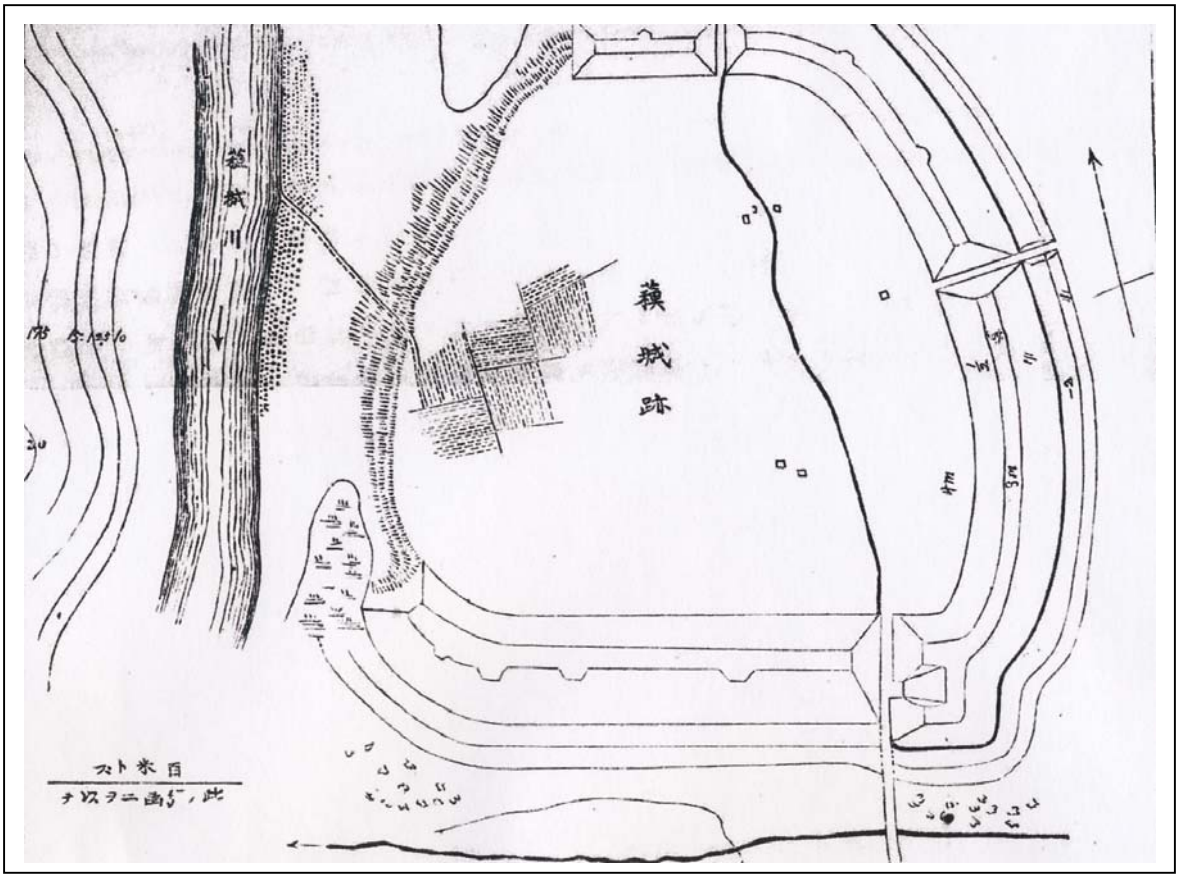
テ、蘇城河ノ全谷及ビ該河ト「ウスリー」湾トチムヘ河「アスコルド」嶋トノ間ニ広豪ノ地面、蘇城郡や役所ノ管轄(支配)ニ帰ス、其ノ当時ハ郡役所及官吏宅を亜米利加湾ノ西岸ナル「ナホーツカ」湾ニ置キシモ、当時移轄シテ「ウラジミロフカヤ」村ニ在リ。其ノ管轄面積ハ４６万６千「デシャチン」(デシャチンは２千４百平方里サーゼン)ニシテ、人口３千３百人ナリ。内魯人２千２百人、満人５百人、ト云フ(韓人モ是数中ニ含有スルナラン)・・・・略。

7月1日　市街ヲ巡視シ東方ノ小丘ニ登り、「ウラジミロフカ」(地図５９頁参照)ヲ視写ス。午后１時２０分、馬車ヲ賃シテ蘇城跡ヲ訪フ、蘇城跡ハ仝名(全名)湖畔ニシテ「ノビーツカヤ」村ノ上流数魯里ニ在リ。「ノビーツカヤ」村ハ「ウラジミロフカ」村ヲ去ル魯里２５里トス。道路ハ蘇城河ノ左岸ニ沿ヒ３、４ノ寒村アリ。沿道能ク耕作ス魯人ハ満魯両様ノ培種法ヲ用ユ。魯人ノ工作法ハ甚ダ゛祖ニシテ其地ヲ耕耡(たがやす)セシノミニテ、畦区(水田と水田の間の提)ヲ設ケス、穀物ハ雑草と共ニ繁殖ス。・・・・４時蘇城跡ニ達ス。**郭門[1]ヲ距ル5、6百米ノ処ニ一門アリ(図形ニ示ス)**(門絵図５９頁参照)之ヲヲ通過スレバ、三々五々[2]韓人ノ家屋アリ。其ノ周囲ハ皆能ク耕作シ、穀物野菜等繁殖ス。余輩ハ小渓ヲ渡リ、郭門ヲ過ギリ、土堤ニ登リ其ノ城跡ヲ眺望スルニ、其ノ土堤ノ整然トシテ崩壊セサルヲ以テ、察スレバ６、７０年前后ノ建築ニ依ル可シ。或ハ云フ、金時代ノ古跡ナラント。余ハ考古ノ碑石ナキヤヲ、探索セシモ、更ニ是等ノ類を見ス。

僅ニ其ノ城跡ヲ図ス。郭内３、４ノ韓家アリ。一般ニ耕作シ、余地ナキカ如シ。帰途一韓家ニ至レバ、４、５名ノ韓人圍坐ス。是城跡ノ来歴ヲ聞ントスルモ、言語不通ナルヲ以テ、筆談ヲ試ミシニ、能ク字ヲ解ス。即チ余問テ曰ク、是城幾十年前之築工乎。彼ノ一人筆シテ曰ク、此レ城不知幾百年之城也。此レ居人民不遇２０年也。

余又タ問フ、無此城址之口碑乎。彼答テ曰ク、元無城碑也。余又タ問フ、此城ハ韓人ノ築工乎、将満人乎。彼答テ曰ク、此居民本小国人也。不知何許国之地也。非小則大国也。余問フ、当時有機個家乎。又人人口幾何。彼間小国人口乎。余書ス、然。彼レ答フ、不過２０戸也。人口限５０命。余間、貴姓名如何。彼間フ、但吾乎。余答フ、然矣。彼姓朴、名林鶴。余問フ、此居之村長乎。彼レ答フ、吾渡江今年始為到此訓。余筆談モ無益ナルヲ以テ、起ツニ臨ミ多謝々々(シェシェ)ト書セシニ、彼又タ、君亦何以此問乎。余又タ筆シテ、吾輩者研究地理者也ト書シ、車ヲ駆テ旧道ヲ取リ帰路ニ就ケリ。・・・・略。》(51－53 頁)

1、郭門・土城の内囲い門。外囲いの門。2、人家があちらこちらに散在する。



蘇城跡の図・東京地学協会報告「沿海州南部烏蘇利蘇城郡紀行」深堀順蔵氏記・第１３巻１０号より

深堀順蔵は１週間の旅行で南部「ウスリー地方」を踏破(とうは)し、村数・１１村・戸数・３６６戸・人口・２０１４人と調査を終える。この地こそ、瀬脇寿人が、地元の情報提供者から、日本武将がこの地に城を築き「蘇生(そせい)した」所から「蘇城(スーチャン)」名付けられたと云う。情報提供を受けた蘇城地方である。しかし瀬脇はこの地方へ訪れることなく歿している。

蘇城の日本式の鳥居を拝見する

下場・両桂[1]ノ文字は実物ニハ共ニテ両句[2]ヲ書ス　(**間口**(まぐち)３ｍ×**高さ**４ｍ８０㎝)

棟木(むなぎ)[3]・蘇城新営洞製条閭[4]

右柱・悪不犯和[5]　妖気遠適[6]　**左柱**・悪条不進[7]　幽不瀆明[8]

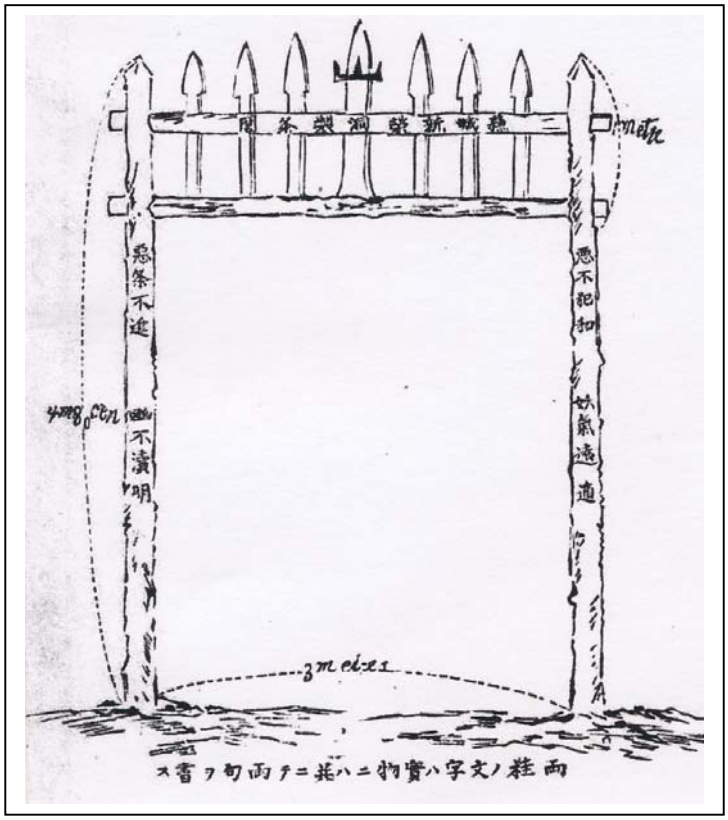
1、(かっら・けい)カッラ科の高木。**2**、句(く)左右柱の組み合わせ。

3、棟木(むなぎ)・日本式鳥居での「島木(しまぎ)」。　**4**、蘇城(ソーチエン)の新営(しんえい・軍隊の屯所)

洞(うつろ・領主と領民の共同体・一門一族)、製(せい・建てたもの)、条(じょう・何々よって)、閭(リョ・村の入口門)、

４の意は「蘇城の軍隊の屯所は一門一族の村門」鳥居で云う額束(がくづか)。５、悪いことが起らない

ように不犯（ふぼん・仏語で云う邪淫戒に交わらない）、和（わ・やわらげる）、5、の意は「悪いことが起きる邪気に交わらずにすこやかに」6、妖気（ようき・あやしい気配・不吉な気配）、遠適（エン・テキ・遠い所へ放つ）、６の意は「不吉な霊気は遠く放つ」7、悪条（悪い事は）、不進（入れない）、７の意は「悪気はけして入れない」8、幽不（邪霊は入れない）、瀆（トク・けがす・あなどる）、８の意は「邪霊や穢れを入れない明るい村門」の意となる。

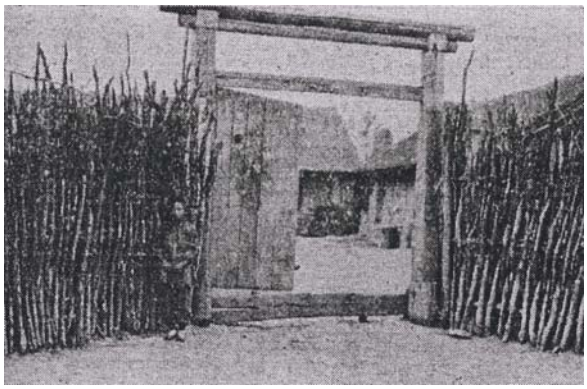


蘇城に日本武将が建てた鳥居と云われた門

（筆者訳による）

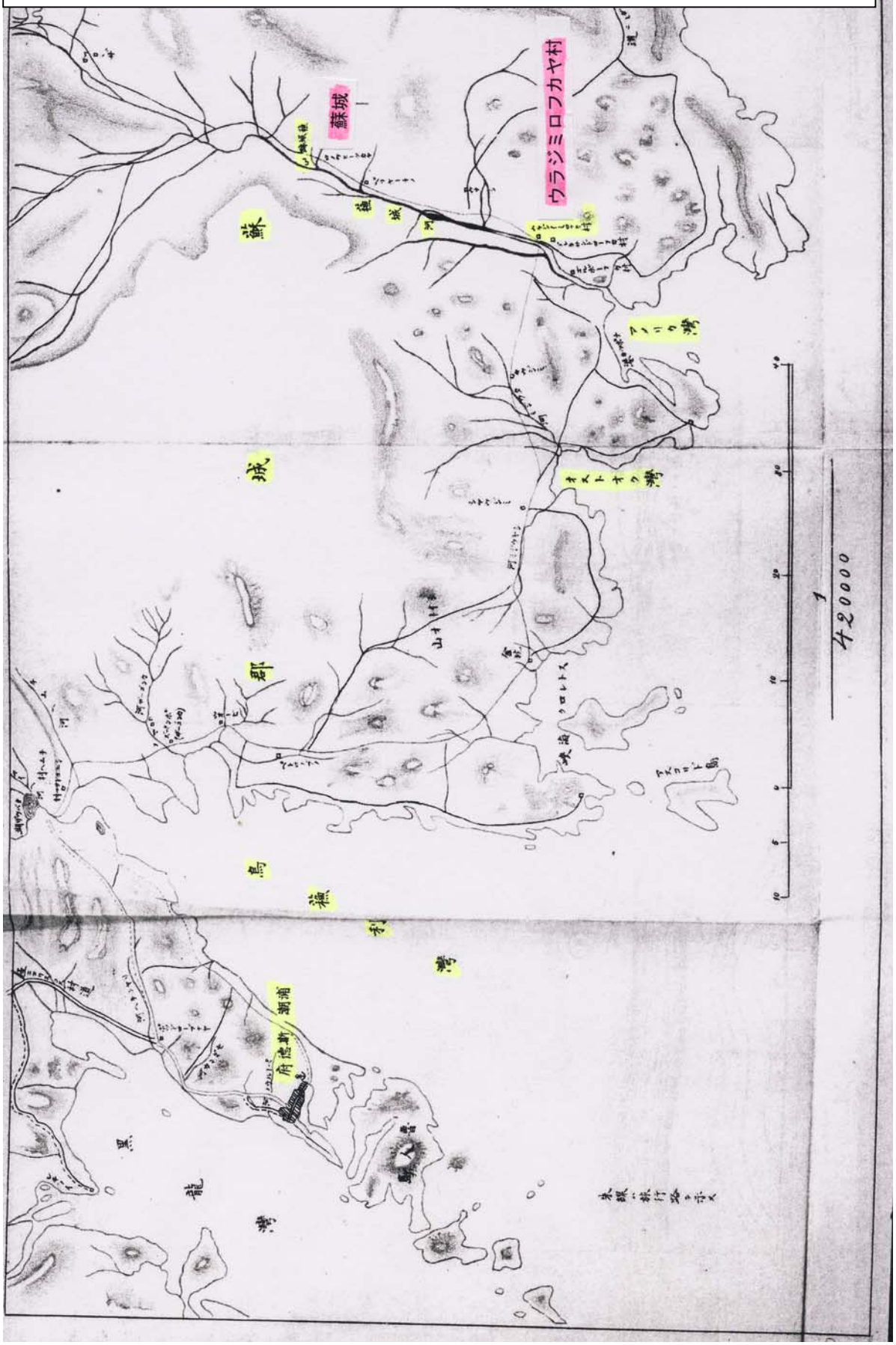
上記の門図は深堀順蔵の手書き絵図で、この門こそが瀬脇の「浦潮港日記」の明治９年１２月１日、蘇城跡に「廟前ニ日本製式ノ鳥居アリ」と山東登州黄邑城人（サントンタムジユーユンイーチャンイン）の劉鵬程（リユウパンチエン）地元の情報提供者に聞いた「鳥居」とはこの門のことであろう。

鳥居龍蔵は大正8年に日本の鳥居に似た門を見ている



左・牡丹江上流地方（黒龍江省南部）に見られた満州人の家　　**右**・満州阿什河、老爺廟。門戸は我が国の鳥居に類似した形ものである。純然たるであった。鳥居龍蔵全集８巻『人類学及人種学上より見たる北東亜細亜』大正１３年７月より。

『沿海州南部烏蘇利蘇城郡紀行』深堀順蔵氏記　第１３巻１０号　明治２５年(1892)より



★上記地図に蘇城川河口アメリカ湾がある。ロシア軍艦「アメリカ号」(554ﾄﾝ・140馬力・外車式・1856年ニューヨーク建造)はアムール河の河口部(土砂の堆積)より、帆船等を曳船に活躍。艦名による。

その4年後、明治25年に『西伯利地誌』が、同じ蘇城周辺調査の記述を見る

この『西伯利地誌』は『沿海州南部烏蘇利蘇城郡紀行』深堀順蔵著と同じ地域の調査報告であろうと思われる。『西伯利地誌』上巻　下村修介・加藤稚雄編　明治２５年１２月・610－611頁より。

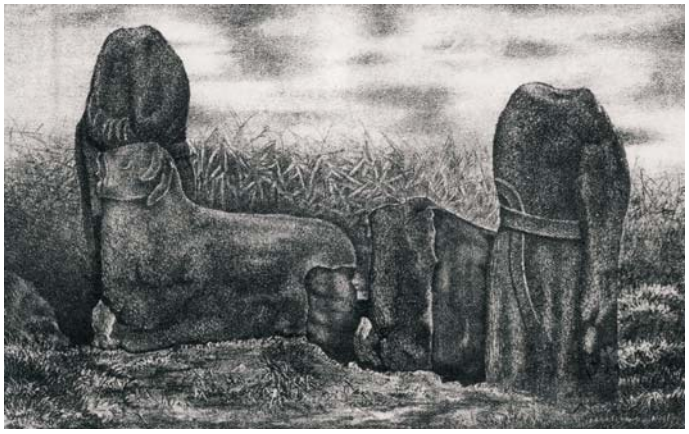
《・・・蘇城廳(庁)ノアル所ヲ烏拉地米羅喀鎮称シ蘇城河ノ左岸河口ノ埠頭ヲ距ル２１吉米の処ニ位置ス其住民ハ１８６６年、尼古来斯克[1]ヨリ移住セシモノニシテ、専ラ農業ニ従事セリ。壊崩トハ蘇城河ノ灌漑(水を配した農地)スル地ヲ總称セリ、烏拉地俄斯徳府ヨリ蘇城ニ赴クニハ水陸二道アリ。一ハ郵路ニシテ、一ハ海路トス、汽船諾威克号ハ１ヶ月３回乃至、５回此れ両地ヲ航海シ蘇城河口ニ埠頭ヲ設ク。

此地方ハ土地ノ膏腴(土地が肥える)ナルニ關ラス住民懶惰(怠け者)ニシテ労役ニ服スルヲ嫌フカ故ニ冨裕ナルモノナシ。此鎮ヨリ蘇城河ノ左岸ヲ遡ル約３０吉米ノ処ニ蘇城ノ遺跡アリ。其土塁郭門等ハ今尚ホ存シ整然トシテ壊崩(くずれる)セス其建築年代及ビ建築者等未ダ詳ナラズト雖モ、或ハ云う。金時代ノ古跡ナラント然ドモ考古ノ碑石ナク、居民ハ移住ナルヲ以って之レヲ伝説スルモノ少シ郭内朝鮮人ノ家屋敷戸アリ、農業ヲ生計トス。

輓近(近頃)、蘇城地方ヲ探見セシ者ノ説ニヨレバ此地方ハ人民集団シ部落ヲナスモノアレバ、必ズ一箇ノ寺院ヲ設ケ、住民ノ家屋ハ概ネ矮小ニシテ不潔ナルモ寺院ハ皆壮麗ナリ。露人ノ宗教ニ熱心なるを證するに足れりと・・・・(略)》とある。

1、尼古来斯克・ハバロスク地方のニコラエフスキー地区。現ウスリースク。

『西伯利地誌』の著者下村氏・加藤氏は「蘇城ノ遺跡」の遺跡について、金朝時代の遺跡としている。



尼古里斯克の石像(『西伯利地誌』より)

表紙国立図書館ホームより

『西比利東偏紀要』曹廷杰著の記録から寛永の年号を考える

『樺太史研究・樺太と山丹』洞富雄著（新樹社・昭和３４年）第２編・「山靼交易とその政治的背景」から

曹廷杰(1850－1926)地理学者。1886 年曹廷杰は兵士２人を連れ、松花江からアムール川に入り、ハバロフスクからウスリー川、ハンカ湖経て帰国。アムール下流で２つの永寧寺碑を発見する。この旅で得た資料を基に『西伯利東偏紀要』著している。

『樺太史研究・樺太と山丹』序文に《清国が愛琿条約[1]によって黒龍江左岸を、北京条約でウスリ江東岸を、ロシアに割譲してから２５年後、明治１８年(1885)、満州歴史地理の研究の功績を残した「曹廷杰」が、さきに露領となったシベリアの東南部を密探したことがある。曹氏はその際の探査報告書『西比利東偏紀要』の内で、ウラジウォストックの北方２６邦里(里=500m)にあるニコリスク[2]、即ち双城子の西側附近に或る独逸人経営製粉工場の敷地内に石碑の一文があって、原文に**「寛永 13 年湖北進レ馬3千匹」**との云々の日本人の残碑がある。これは海参崴（ウラジウォストク）東北７００余支里ばかりの蘇城溝のうちにあり、蘇城なる古城を寛永建都の時代の言い伝えや、黒龍江下流の済勒彌（ギリヤーク）が蝦夷地に往来したという説と共に、黒龍江以南の露領沿海州が、早くも日本人の竊據（盗みとる）する所となっていたことを示す証拠であるとしている。

問題の残碑は今ハバロフスクへ持ち去られている。さて、この碑の寛永の年号であるが、果たして日本の年号かが疑わしい。寛永１３年は、わが国の海外発展が最高潮に達した時、日本人・日本船が断乎禁止された年で、邦人が満州の一角に領土を開いた事実はないとはいいきれない。またウラジウォストックの東北約５０那里、スーチャン河畔の蘇城に存在する中国人や土人の間に日本武将築城の伝説があり、明治１０年前後頃までも、寛永通宝が流通したと現地情報提供者は伝える。寛永の年号は、おそらくそれは渤海国（698－926 年満州から朝鮮半島北部に存在した国家）、蒲鮮萬奴の大眞国（１３世紀に蒲鮮萬奴は金朝の将軍が中国東北部に建国した国家）の年号であろう。》と記述している。

1、 愛琿条約=露帝國と清朝が 1858 年アムール中流の愛琿条約で清国の黒龍川左岸を露国が獲得。

2、ニコリスク=清朝代「双城子」。1866 年露国領となる。ニコライ１世名を取りニコリスコエ村・ウラジオストク北 100ｋｍ所。小谷部全一郎がこの地にある亀石を義経伝説としている。（66 頁参照）

ニコリスク周辺の地理と義経の話を『西比利亜漫遊白山黒水』を拝見する　石澤発身著・博文館・明治３３年１１月（国立国会図書館デジタル化資料より）

其十・ニコリスクの史的観察に・・・《是より先余はニコリスク（原文注釈・或はニコリスコ

エ)なる地の歴史遺跡多きを聞き、必ず此地に至らんことを欲したりき。同行者見玉氏また満州鉄道の状況を視察せんとして同地に赴かんことを望まれたりしが、同地形勢を詳らかにせざるの故を以って、一度び浦港に帰り、事実調査の上該地に向はんと決したりき、浦港に帰るに及んで恰も好し実業家、馬越恭平氏来港共にニコリスクに赴かんことを以てせらる。・・・・ニコリスクの如く壮大にして自然的地勢が古代都落の集合地たるを示す適例は少なかる可く、且またはしなくも此地に義経渡来云々の俗説を譲すに至りしを以て、今茲に該地の地形を詳述して読者の参考に供せんとするは蓋し無益の業にあらざるべし。・・・・略。

・・・昔渤海置く所の五京十五府六十三州の故地、往々かかる地形の下に建設せられしならんと思へば、史家懐無限の感に堪へざるべし。然らば此地は何時代の遺跡なるか。不幸にして今之を史乗に照し遺物に徹すべし者なきを以って其時代を推定すること能はずと雖も、支那人は此地を呼んで双城子と云ふ。

双城の名大明一統志及び東国興地勝覧に見ゆ「大明一統志」曰寧遼縣南ニ京一曰南京、又南曰哈蘭又南曰双城直抵高麗王都また「東国興地勝覧」云双城即永興府三万衛即吉邑婁勿吉之地、哈蘭即咸州府其古跡在今と、以上の二書に拠って之を見れば其の云ふ所の双城は今朝鮮国咸鏡道永興(李氏朝鮮の行政区分の永興)の地にして、ニコリスクの所謂双城とは著しく其方角を異にせり。》

《・・・此の如く双城の名を以って其地理を追求する能はずとせば、土城の點にに於て之を史書に求めざる可らず「寧固塔記」に由寧古塔而東三百里有土城即五国城とある者里数に於いて稍近きの感あるも其方角に於いては当れり、されどかの「八域志」(朝鮮８道の地誌)に豆満江上雲頭山即金五国城とあれば是れとしも見えず、而して此地方支那人の伝説に依れば、此城址は古の哺爾單城にして今より三百年前は河岸にゴリド[1]人及鄂魯春人の聚落甚だ多く二三の酋長ありて之を統轄せり、然るに満州人西方より来侵し此二種族を北方に窘逐(迫害)せりと(西比利亜地誌亦同説)「ロツス高麗史」云ふ所の「凡遼東の城塞其荒廃百を以って数べきも皆明清近代の遺址とす其の眞むに高句麗の遺物と為すべき者ただ此の一城(卑沙城・現大黒山にあり)あるのみ(日韓古史断所載)等の言に思ひ合さば、双城の土塁は其伝説の示すが如く三百余年前の遺址ならんも、其地勢の要害は千古変ずる能はざるなり。

疑ふらくは渤海五京中の東京龍原府(吉林省延辺朝鮮族自治州琿春市)は此地ならんか、而して此地より発見せられたる遺物として余の目撃せし所は前述せし所の石人石獣及亀形を為せる２個の墓碑とす。共に無文従って其年代を推定すると難しと雖ども、此墓碑に就い

て在留日本人間の附合の俗説を唱へて曰く、源義経蝦夷を逃れて韃靼海峡を渡り、西比利亜の地に入り此地に於いて死去せり。

其墓石は即義経の墓碑なりと、其理由とする所の者二あり。其第一に曰く、現今支那人は亀を忌むこと、蛇蝎(サソリ)の如し、特に其手合はざる故を以って商業上之を忌むこと甚し、此の如く忌む所の者を墓碑に用ゆるの尊敬する者は日本人にして古来此地方に来りし者は義経なり。故に其墓は義経のものならざるべからずと云ふ五段論法的理由なり。》

1、ゴリド人は現ナナイ人のこと。花江と黒龍江の合流地点からウスリー河流域。ウスリーのゴリド、アムールのゴリド区別がある。漢人は彼等を魚皮套子・韃子と呼び、現地の人たちは漢人を「蛮子」と呼んだ。『鳥居龍蔵全集』８巻「ゴリド族の探検」154 頁参照)

《第二の理由に曰く、浦港の北方ハンガン湾なる地名あり。此れ益判官義経渡来事実を確定せしむる者なと、以上２個の理由に依って義経逃竄説は西比利亜在留日本人間に流布すること驚く可き程にして(原文注釈・遂にニコリスク丘陵の城址ある所を御殿山と称するに至る)或種の人は堅く之を信じて疑いはざる者あり。・・・(略)

独り日本人の中にのみ流布する者なるを以って、信ずるに足らずとなす者なり、(原文注釈・ハバロフク図書館に陳列せる同一の墓碑に露西亜文を以って説明をつくして曰く此墓碑は往古支那人の用ゆる所にしてニコリスクに発見する所なりと)、特に亀形の墓石は支那内地旅行者の屡々目撃する所にして、独り此地に限りしのみにあらず、ハンガン湾なる地名に至っては偶然の符合と云ふ可し、而して此墓碑の発見せられし地は、市の西南隅、現今製粉所々有地内にして、国中墓石発見地と記する所なり。

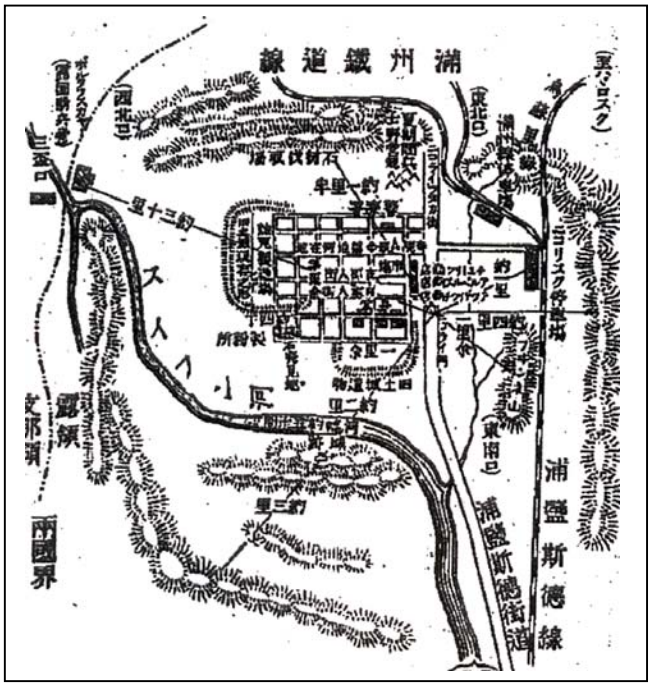
其一個は現今ハバロフク図書館に陳列せられ、他の一個はニコリスクに於ける寺院境内に放棄せらる。(原文注釈・国中現今墓石所在地と記す所)而して石人石獣は朝鮮北部に於いて屢々見る所にして朝鮮人の遺物なるを示し、浦港博物館に蔵する奇形布目の瓦片は「ロツス高麗史」卑沙城(遼東半島南端の高麗要塞)の條に「築造太堅硬にして巨瓦方磚粗陶を以て成り瓦面多く斑痕を印せり、蓋しその造瓦の時布片又は其他の料に載せ乾曝せる者」(原文注釈・日韓古史断所載)と云へるに合し同く朝鮮人の製作に係る遺物なり。)・・・略。》

《此地に１泊在留邦人蜻蛉会々員諸氏の待遇頗る厚し。９月３日浦港に帰る。此地に止まる４日間(原文注釈・浦港を去る８里にチモハなる地あり又遺址ありと余之を見るの機を得ざりき)７日郵船会社船相模丸に乗船、前路朝鮮沿岸を経て１９日東京に着す。一條の客路萬里の山野、見る所を記るすも去年の夏と過ぎ去りぬ。溷濁たる黒龍の水、寂寞たる興

安の嶺恍として夢の如し。(従明治三十二年九月　至仝　三十三年一月　稿)　　》とある。

亀趺(キフ)・鳥居の娘幸子のスケッチ画

『西伯利亜から満州へ』「鳥居龍蔵・君子・幸子・緑子」昭和３年(1928)より。



ニコリスク(双城子)市図(『西比利亜漫遊白山黒水』より)

《ハバロスク博物館において「ニコリスクから運ばれた碑文の台石。この碑文は金時代のもの、この碑文は源義経に関係する説があるが、誤った解釈である》と記述している。このスケッチ画の台石が、小谷部全一郎著『成吉思汗ハ源義経也』第７章１４７頁の記述に「ハバロフスクの博物館に持運ばれた台石の上の古碑は・・・」とはこの亀趺であろう。

★双城子(そうじょうし)=清代の名称、城跡が綏芬河(すいふんが)(黒龍川よりウラジオストク附近に流れる河)の東の南城、西の西城と２つの土城が在ると言う意味。１８６６年ロシア領、1898 年地名はウスリースクとなる。現在はロシア連邦の沿海地方南部にある都市。ウラジオストクの約１００余ｋｍほど北に位置する。

日本武将(義経)が領有したと云う遺跡は誤解であると内藤虎次郎氏の講演

巷では昔、日本の武将が大陸に渡り諸国を平定して、領民を綏撫(すいぶ)して大帝國を建国したという伝説地の遺跡は、日本とは関係のない遺跡であると内藤寅次郎が講演する。その「日本満州交通略説・中」『叡山(えいざん)講演集』(内藤虎次郎他多数の論客の講演録が収録)大阪朝日新聞社発行・明治４０年１１月１０日発刊の、「日本満州交通略説」中・中世の交通 629－649 頁・内藤虎次郎８月４日講演内容を見る。

《・・・・義経の事が支那の本に載って居るという説は、新井白石の『新安手簡(しんあんしゅかん)』(白石と安積澹泊(あさかたんぱく)との往復書簡)などに、勿論(もちろん)白石も疑って信ぜずに載せてあります。其時分種々話があったものと見えて、『金史』に源義行の伝というものがあると云う事を、誰か言い触ら

したと見える。義行というのはつまり義経が京都を落延びて、義経征伐の宣旨が下ってから、朝廷から名を改めて義顕とも義行とも言ったということがありますから、そう云う事から好い加減な事を言ったと見える。

兎に角『金史』に義行伝をさがして、一行残さず繰ったと云うのでありますが、所が何も無かったのである。・・・・水戸に居った坊さんが言った事に、『金逸史』(正史に書かれていない史実)の中に在ると云うことであり、所がそう云う本も出て来ない。然るに『源義行伝』と云うのを誰か書いて安積澹泊(江戸中期の儒学者)に送り、それを白石に送ったと云う。・・・・是は偽物であって、義経の事は支那に無いということが分って、安心したと云うことであります。・・・・『新勘図書集成』と言って、その中に清朝の元祖は源義経であるとある。清朝と云うのは清和源氏の末流だから清朝と云うのだ。それが『新勘図書集成』に出て居ると云うことを言いふらした者がある。所が『新勘図書集成』と云う本は無いのです。其の時分に『欽定図書集成』(古今図書集成)と云う一萬巻もある本が渡ったので、そう云う事から間違えて言い出したものか、或は誰も見得ない本だから、それに託して人をかつぐ為に言ったものか、義経の事を造り出したのです。

そう云う話が日本に遺って居りますから、近頃満州へ日本人が行くと、そこら中へ義経の古跡を拵えます。一番初めは浦鹽斯徳の先きのニコリスクに在る墳墓を義経の墓と言った。ニコリスクの石碑に漢字書いてあって、**寛永13年**という文句があり、**「湖北馬三千匹を進む」**ということが書いてある。寛永と云えば日本の年号ですから、一時日本人が其の時分に此処を占領したのではないかと言い出し、寛永１３年というのは徳川三代将軍時代だから新しいのであります。何だか分らないので、日本人の墓かも知れないと云う墳墓がニコリスクに在って、双城子の古墳と云う事を支那人も言って居るから、兎も角之を義経の墓と極めて、それに種々の説を附けた。支那人は亀を嫌う、亀の上に石碑を載せることはあるまいから、日本人の古墳であろうなどと言ったが、決してそうでははない。支那人の石碑は螭頭亀趺(螭龍・螭首、螭=ミは水、ツは助詞、チは霊、水の霊、想像上の動物、蛇に似て４足、毒気吐き人を害する)などと言って石亀の子の上へ石碑をのせるのがあり少しも不思議ではない。・・・・(略)。

奉天にも義経の墳墓あり、奉天十二陵の中源義経の墓という絵葉書がある。二台子というのは奉天から僅か２、３里の処であります。・・・絵葉書にあるのは關帝廟で墳墓でもなんでも有りません。・・・・尤も満州人の少し大きな墓には笹龍胆(第８章１１３頁参照)に似た草花のような紋章が附いて居る、此の墓にもある。それを一時義経の墓だと言ったと見

えます。・・・・蒙古に王爺陵(内モンゴル・ウランホト)というものがあります。昌圖(遼寧省鉄嶺市)附近にあったようで、新聞にも出ました。それが何かしら義経の墓となって居ったらしい。これは蒙古の僧格琳沁と書いた親王の墓で、この人が死んでからまだ４０年にもならないでしよう。そう云う誰でも知って居る人の墳墓が、日本人には義経の墓として認められて居ったわけです。・・・・義経の事はどれも是も私の見た所では確かなものは無いのであります。》と前面否定の講演となる。

亀趺について **拙著の電子書籍『義経不死伝説の声を聞く』第８章モンゴル編より解説する。**

亀の形をした石碑の台石を指す。中国での伝説上の生物とされ、竜神が９頭の子竜を生み、その１頭が亀に似たのが「贔屭」（ひき・びき）という。重きを背負うことを得意として碑の装飾台となる。亀ではなく竜であるという。

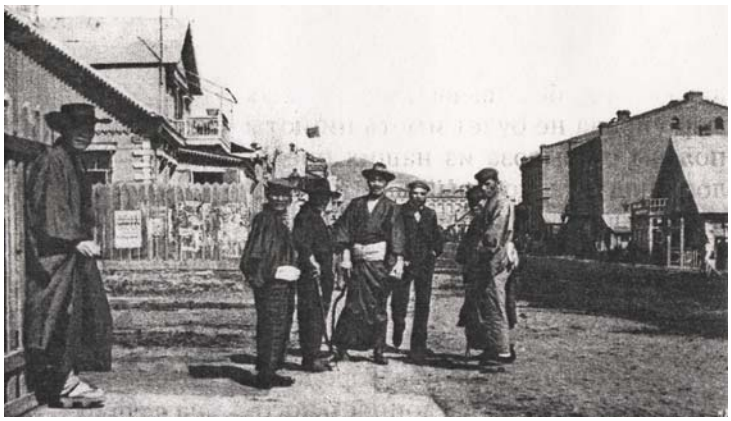
左・亀趺は西モンゴル・ハラホリン。カラコルム都の寺院の亀趺。中・ウスリースクの公園の亀趺（ウィキペディアより）。１２世紀支配金王朝もの、亀台の上に碑があったと伝わる。右・亀趺『成吉思汗ハ源義経也』小谷部全一郎著の写真、中の亀石同と思われる。

『大漢和辞典』に贔屭（屭）は鼇。又、雌の鼇（雌鼇）、一説に大きい龜とある。鼇=おおうみがめ・想像上の大亀。海中にあり、背に蓬莱（不老不死の霊山）、瀛洲（東海の神仙）、方壺の三仙山を負うという。鼇山=大きな海亀が戴いているという海中の山、神仙の棲む所。とある。辞典『字統』に「贔屭」=貝は子安貝・宝物・財物、激しい勢いを示す語。屭=尸は人の形、財を荷う意。「ひいき」は力を作す・好む者に肩入れする意となる。「贔屭の引き倒し」は引っ張りすぎると碑石が倒れる事からくる説。

余話・モンゴル旅行中、ガイドに亀石（花崗岩）の由緒を聞くと、「モンゴル人は亀を長生きの動物(海の神様)として敬まっている。カラコルムには昔は４個の亀石があり、カラコルム盆地へ山から雪どけ水が流れ込まないように四方向に亀趺を置いて祈願した」との説明を受けた。又、マルコポーロもこの亀趺を見ているのである。

ウラジオストクの歴史概略　『ウラジオストクへの旅』佐藤芳行・イゴリ・サヴェリエフ共著　ブックレット新潟大学２４より。

ウラジオストクにロシア人が居住したのは１８６０年のことである。日本国内は欧米５カ国との通商条約をめぐって、社会が騒然としていた時期となる。この附近は満州人など少数の先住民族が暮らす辺鄙な漁村であった。日本でのウラジオストクの表記は「浦塩斯徳」「浦潮」「浦汐」等となる。１９世紀、ロシアのシベリアへの領土拡張を展開したのは、中央アジアへの進出に英国としのぎを削っていて、黒海から地中海の出口あるボスポーロス・ダダネール海峡をめぐって両国の利害が対立し、１８５３年―５６年にクルミア戦争に至っている。１８５８年清朝と愛琿条約が締結され、アムール河(黒龍江)の左岸やウスリー江の左岸はロシア領となった。ロシアは１８６０年、エス・コマローフ少尉補が率いる４０人の水兵が上陸してその地に村落を築き、その集落は「東方を支配せよ」を意味する「ウラジオストック」という名前が与えられた。ロシア政府は移民達をウクライナのオデッサ経由でウラジオストクに輸送した。、ウスリー地方に４万５千の人口が５６村を新しく村落を築かせた。しかし労働力不足は解決できず、清国、朝鮮、日本からの多くの出稼ぎ労働者が移住してきた。アムール、沿海州に、中国人４万２８２３人、朝鮮人２万６１００人、日本人２２９１人、ドイツ、スウェーデン人２２００人が移住していた。１８９１年になるとウラジオ一敦賀間に直行便が開設され、この時期シベリア鉄道の敷設工事が始まり、日本から労働者７００人が海を渡りその工事分野を支えた。又日本人経営の商人、大工、家具製造、建築等に活躍した。貿易事務次官の瀬脇壽人の仲介によって、ロシア地方行政当局から軍用兵舎や風車の建設工事の依頼も受けている。



２０世紀初頭・日本人居留民

(『ＫＲＡＴＫＩＪ ИСТОРИЧЕСКИЙ ОЧЕРК　Г. ВЛАДИВОСТОКА』Н.П.МАТВЕЕВ 著・再版 1990 年)より

第5章福澤諭吉と関係・瀬脇壽人・富田鉄之助・末松謙澄・内田弥八の関係

『福澤諭吉事典』慶応義塾 150 年史資料集　別巻２より。

福澤諭吉の履歴から・・・福澤諭吉(１８３５―１９０１年)蘭学、英学、著述家、啓蒙思想家、教育者、慶応義塾創設者、1984 年から日本銀行券１万円紙幣表面の肖像となる。豊前国中津藩(現大分県)下級藩士の生まれ。嘉永６年(1853)２月、１９歳で長崎遊学して蘭学を学ぶ。安政２年(1855)大阪で蘭学者、緒方洪庵(おがたこうあん)の適塾で学ぶ。福澤は頭角を現し安政４年敵塾の塾頭となる。緒方洪庵夫妻の好意に一生の恩人とし、洪庵没後も家族と交際を続けていた関係となっていた。

安政５年(1858)１０月、中津藩の命で江戸へ行き蘭学塾(後の慶応義塾)を開いた。同年欧米５カ国の通商条約が結ばれ、翌年横浜が開港され、福澤は早速港見物に出かける。開港貿易街で、得意のオランダ語を試してみたが、まったく通じない。店の看板も、ビンの貼り紙すら読めない。やっとドイツ人のキニッフルというオランダ語が話せる商人を見つけ、筆談で蘭英会話書を二冊買って江戸へ戻る。この時期、既に貿易現場は英語が国際語になっていたのである。以後、福澤諭吉は渾身の力で英学に進むのである。

安政６年版　開港横浜の図・『世界情勢と躍進日本外交史』内田茂著より

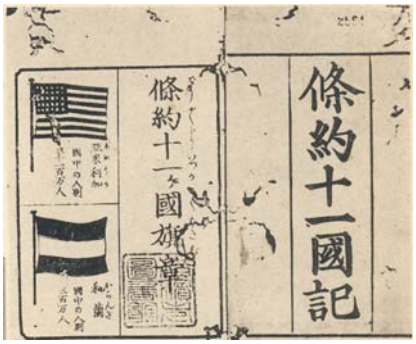
キニッフル・ドイツ人

★キニッフル(1827－88)ドイッ生まれ。オランダ系の商社として設立、安政６年(1859)６月横浜外国商人第１号の開設。福澤諭吉に蘭英会話書を売った人物。(『福澤諭吉事典』より)

福澤は万延元年(1860)咸臨丸で軍艦奉行木村摂津守の従者として渡米する。文久２年１月翻訳方として英艦オーディン号で欧州へ派遣、福澤諭吉等の随行する遣欧使節団が最終国ポルトガルに向うため、経由国フランスに於いて冷遇待遇を受けた。福澤は「冷淡無愛想」極まりないものであったと記している。それは同年５月、東禅寺(港区高輪・幕末に英国公使館が置かれた)を警護していた松本藩士による英国水兵殺害事件の報が９月には欧州に届いていた。日本国内では、１月に老中安藤信正が水戸の尊攘派浪士に襲撃され、８月には生麦事件が発生し、政治上極めて不安定な時期と重なっていた。１２月に使節団帰国後

より福澤は身を慎んで夜間外出をも控えた。この時期の話が、手塚律蔵が長州藩士に襲われ日比谷のお濠飛び込んで危うく難を逃れたのはこの年のことになる。

慶応４年(1868)それまでの家塾(福澤塾)から、芝新銭座(現港区浜松町)のに移転した。塾名は、その年の元号をとって「慶応義塾」とされた。この年の９月に元号は明治と改められたがは義塾の名称は改めなかった。



左・万延元年(1860)日米修好通商条約の批准書を交換するため遣米使節団一行。前列右・福澤諭吉、岡田伊蔵、肥田濱五郎、後列小永井五八郎、濱口與右衛門、根澤欽次郎、米国桑港(サンフランシスコ)で撮影したもの。中・『條約十一国記』安政より慶応に至る間に條約を締結せる米・英・佛・露・白(ベルギー)・伊・普(プロイセン)・瑞西(スイス)・葡(ポルトガル)・丁(デンマーク)・和蘭(オランダ)の１１ヶ国の国情を極めて通俗的に解説したもの。福澤諭吉著・慶応３年版。右・條約１１国記著作当時の福澤諭吉。『世界情勢と躍進日本外交史』内田繁文編纂・昭和１５年４月３０日発行より

福澤諭吉活躍の時代背景・・・明治１１年(1878)に刊行した『通俗民権論』と『通俗国権論』(両書は同時刊行、人民も「独立国の大儀を忘れず」、「国権を重んずるの人」になれ)において「民権」の拡張によって「国権」を確保し、これによって独立の維持を期待する図式を提示した。福澤は官と民とが対立せず、互いに調和することで安定的な政治が実現できると考えていた。

明治１０年の西南戦争の際、西郷隆盛の反乱を専制政治に対する「抵抗の精神」という観点から肯定した。戊辰戦争の江戸城の無血開城を「痩我慢」の精神を損なったとして批判した。「明治十年丁丑公論(ていちゅうこうろん)」を記し言論取締に抵抗したため、公表されなかった。丁丑公論は西南戦争直後に脱稿したものであるが、後々の明治３４年２月１日『時事新報』(後の産経新聞)に掲載された。同年５月に「痩我慢の説」と一緒に出版された。「今、西郷氏は政府に抗するに武力を用いたる者にて、余輩の考えとは少なく趣を殊にするところあれども、結局その精神に至ては間然(かんぜん)(批判、非難)すべきものなし」西郷を讃えている。

福澤は朝鮮国の近代化にも深く関与し、近代化を志向する開化派を物心共に支援した。開化派は甲申事変[注1]で失敗すると、逃げてきた金玉火均、朴泳孝等を自宅に匿った。慶応義塾は朝鮮から多くの留学生も受け入れている。この頃、明治１３年、交詢社の機関紙『交詢雑誌』を発行、毎月５、１５、２５日旬刊、「知識交換世務諮詢」という「無形物の交易運輸」を担う雑誌、社員からの質問に対し部内と専門家に依頼して回答する雑誌となる。

壬午事変=明治１５年７月２３日ソウルで発生した守旧派によるクーデター。明治９年の日朝修交条規によって開国した朝鮮は、開化派を重用したが、守旧派大物の国王の父大院君を担いで挙兵、一般住民にも反日感情が高まり、日本人が殺傷される事件が発生する。この事変により開化派官僚が多数殺傷され、国政を握った大院君は守旧的政策への転換を図ったが、袁世凱[2]率いる清国軍の介入で反乱は鎮圧される。日本政府は関係者の処分や謝罪と賠償を求めた。日本世論は朝鮮の事情が伝わぬことに不安視した事に『時事新報』[注]が金玉均・兪吉濬らを通じて政治状況を分析し終始出兵を辞さない強硬論を主張して政府の後押しをした。

注・『時事新報』=福澤諭吉が明治１５年３月１日創刊した日刊新聞。あらゆる党派や利害から離れた「独立不羈」の立場から発言することを宣言する。

1・甲申事変=明治１７年１２月４日ソウルに発生した守旧派に対する開化派のクーデター。壬午事変後、開化派は急速に衰え、日本も清国の軍事的優位を認めざるを得なかった。開化派は１２月４日守旧派を襲撃し王宮を占拠、新政府を樹立したが、３日後に清国軍が介入して開化派は殺害され、日本人も多数の犠牲者を出した。この事件に対し日朝間は明治１８年１月、日本へ謝罪と賠償公使館建設費、公使館護衛の駐兵権など定めた漢城条約が締結の記事を連載し、『時事新報』は多くの読者を得た。

2、袁世凱=(1859－1916)軍人、政治家。甲申事変の際に清国軍を率いて朝鮮に武力介入し、日本国と対立した。北洋軍閥を統率し、辛亥革命(1911 年のしんがいの年に勃発する。清朝を倒し中華民国を樹立した革命)では愛新覚羅溥儀の退位と引換に、孫文に代わり中華民国臨時大統領となる。

★脱亜論=『時事新報』は日本政府の後押しをし、開戦も辞さない強硬な態度で清国の非

を追求する報道の立場をとった。この時期に記された社説の一つが「脱亜論」で、明治１８年３月１６日・社説３千字余の記事である。その骨子は次ぎのようなる。

《東洋に押し寄せる西洋文明は努めて受容すべきである。開国以来の日本では、独立に対する危機感が高まる中で「古風老人の政府」よりも「国」を重視した志士たちによって明治維新が起され、旧套(きゅうとう)を脱し西洋文明を取り入れて、アジアに新機軸を打ち立てた。・・・日本国民は西洋文明を重きとする精神に転じた。ところが日本の隣の清国と朝鮮の二国は、西洋文明受容の心を生ぜず、古風旧慣に恋々(れんれん)としている。日本の維新のごとき激変が訪れない限り、二国が古来のアジア流の正教風俗を打ち破って独立を維持する道につくことは不可能であり・・・日本は西洋諸国から近隣の二国と同一視され、古風恋々たるアジアの一国と軽視されては独立を危うくする外交上の不利益をこうむるばかりである。・・・「悪友を親しむ者は共に悪名を免かるべからず。我等は心に於いて亜細亜東方の悪友を謝絶するものなり」》アジ演説的な論説記事は後日物議を呼ぶことになるのである。

この社説は甲申事変以後の朝鮮問題を論じる連日の社説の一つにすぎず・・・昭和８年『続福澤全集』に収録されるまで人目にふれないでいた。しかし戦後、福澤諭吉のアジア論を否定的に再評価する流れのなかで、広く知られることとなる。戦後、この社説が日本のアジア侵略の論理的な裏づけになった、という見解が韓国等で強く主張され続けている。

日韓の軋轢は明治２７年(1894)７月から翌年の３月にかけて、朝鮮半島(李氏朝鮮)をめぐる大日本帝国と大清国の「日清戦争」につながって行く。

★福澤の日清戦争観・・・福澤にとって日清戦争は朝鮮を清国の影響下から離脱させ、名実共に独立国となることをうながす思想行動であった。

福澤自身は日清戦争の勝利をだれよりも喜び、『福翁自伝』の中で、日清戦争の勝利を「愉快とも有難いとも云いようがない」と振り返っている。・・・・福澤は日本国中が戦勝に沸きあがる世論を見て、同年日原(ひのはら)昌造(長府藩士・時事新報記者・師範学校長歴任)に宛てた書簡に「国人が漫(みだり)に外戦に熱して始末に困ること」を不安視し、国民の未熟さが、将来日本に大きな問題を起さぬようにと教育による人材育成の分野で努力したいと表明している。

福澤諭吉と瀬脇壽人の関係について　**『高木兼寛の医学・東京慈恵会医科大学の源流』「医会講習所の設立と福澤諭吉」松田誠著より**

慶応義塾は福澤諭吉が安政５年(1858)に中津藩江戸藩邸で開いた蘭学塾が起原となって

いる。明治１３年(１８８０)、５年間の英国留学を終えて帰国した高木兼寛[1](1849－1920)が帰国の翌年、松山棟庵[2](福澤諭吉の高弟・1839－1919)と共に成医会講習所なる英国式医育機関を、明治６年に慶応義塾構内に設立していた。松山は帰国早々の高木を訪ね、英国流医学を基調とした医学校の設立を盛んに進めたのであった。この松山の熱心な誘いは、当時の医学教育が極端にドイツ流の研究機関の色彩が強かった事による。松山の背後には福澤諭吉がいて、福澤の意向が相当入っていたと思われる。福澤と松山は、すでに医会講習所の設立を８年前(1873)に慶応義塾内に終えて、同じ思想で慶応義塾医学所を盛り立てて行く最中であった。この医学所は、約３００名の卒業生を送りだしただけで、経済的破綻のためにわずか７年の寿命で廃校のやむなきにいたっている。おそらく、福澤は彼好みの「人間普通日用に近き実学」(学問のすすめ)を基調とする医学校を創ってみたかったのでは、ないだろうか。『福澤諭吉辞典』「医学所設立」に、《当時、西洋医学を学ぶには大学東校のほかに官公立の学校が数校あるばかりで、しかも大学東校が採用したドイツ医学が日本の医学教育の主流になっていた。医学所設立の趣旨の「英米諸家の医書に憑準して日に新医学大綱を世の少年医生に教授せば聊か我文化の進歩に補するところあらん」は、私立として最初の、しかも英米医学による医学校設立への気概を示すものといえよう。》とある。

1、 高木兼寛(1849－1820)明治、大正期の海軍軍医。1885 年海軍医総監、1888 年我が国最初の医学博士、1881 年成医会を結成し、成医会講習所(東京慈恵会医科大学の前身)を創立。男爵。

2、松山棟庵(1839－1919)幕末明治期の洋方医、翻訳家。慶応２年(1866)慶応義塾で英学を修め、福澤諭吉の高弟、慶応義塾医学所校長。東京医学会を興し、東京慈恵会医科大学創設者。

瀬脇壽人と高木兼寛の関係　　**脚気をなくした男『高木兼寛伝』松田誠著より抜粋する。**

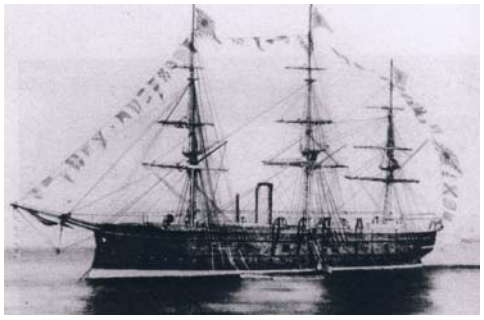
《・・・お雇い英国医学博士ウィリアム・ウィリスの「疫学的な考え方」と「施療病院の発想」の医学的哲学による影響が大きい。ウィリスは「貧者のための病院」を建設の覚書を建議している。「文化の進んだ国では、富んだ人は貧しい人を助けるものである。これは天の摂理である。貧者の多くは、家に医者を呼びたくとも、また治療薬を買いたくともその余裕がない。富裕な人は貧者のための病院を設立し、無料で手当てや投薬をし、そこで回復するまで看護すべきである。・・・そもそも、その国の文化は、富者の寄付金による病院施設がどれだけあるかによってきまるものである。・・・」と。このウィリスの思想を高木兼寛は大きく影響を受、この思想の原点はキリスト教によるものであると思う。》

高木は英国留学前からの宿願であった脚気の研究であった。脚気の予防と治療の問題は

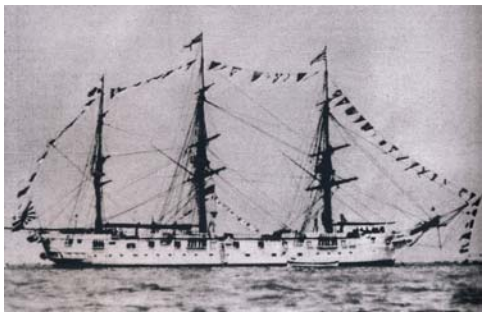
差し迫った国家的重要課題で解決を見出せずにいた。日本海軍のニュージーランド、南米に練習航海に出た軍艦「龍驤(りゅうじょう)」が明治１６年９月１５日品川沖に帰った。航海中に龍驤から「ビヤウシヤオホシ　カウカイデキヌ　カネオクレ」(病者多し航海できぬ金送れ)という悲痛な電報が海軍省に届いた。乗組員３７６名、重症脚気患者１６９名、死亡者２５名を出した。今日なら誰でも知っているビタミン不足からくる病である。高木が予防と調査に乗り出した頃、艦船、兵営、学校の食事は、山盛りの「銀めし」と塩辛い「たくわん」であった。高木は留学中に英国で見た食事は、白米を食せず、たくさんのタンパク質(パンと肉)の摂取の食事によることを突き止めていた。しかし、日本の嗜好(しこう)の強い銀シャリ食事の強い反対にあい、軍関係者から支持をとれなかった。高木は省や要人と会い、欧米はパン食・肉食などのタンパク質をとり、日本に於いては米食よりも麦めしのほうがタンパク質の割合が多いと、伊藤博文や有栖川宮威仁(ありすがわみやたけひと)に食生活改善案を頼み込んだのである。後、軍艦「筑波」は新しい食料を満載して、食糧予防実験が明治１７年２月３日、ハワイ、ウラジオストック、釜山港のコースたどる「筑波」が品川を出港した。筑波から「ビユウシヤ一ニンモナシアンシンアレ」(病者一者もなし安心あれ)というハワイの電報が届く。同年１１月１６日、遠洋航海を終えて無事品川に筑波は帰ってきた。

しかし、陸軍に於いては、軍医、東大医学部はドイツ医学に信奉していて、病気は菌から発生するという理念が強く、脚気菌がいるとの主張により、日露戦争時、陸軍兵３万人犠牲者を出したと云われている。

時代背景としては「軍隊に入れば銀シャリがくえる」との確約で入隊兵士は、脚気予防に「麦めし」を食わせる高木の軍隊食は、抵抗があったことは当然とも云える。国会での食事費用(パン食では副食費が割高)の予算獲得により、紆余曲折の末、軍隊のパン食へと変わったのである。軍隊に納めた日本パン食産業界が、今日のパンやケーキの発展に繋がりなっているのである。



軍艦「龍驤(りゅうじょう)」明治１６年脚気死亡者２５人出す



軍艦「筑波」明治１７年病者なしの電報を打つ

「龍驤」は装甲巡洋艦、英国アバディーン建造。佐賀の乱、台湾出兵、西南戦争に従軍した。

ここで福澤と高木との関係をみる。どのような関係で高木を知り、高木を高い人物評価していたのか。少し独断的に考察すれば、それは高木の岳父は手塚律蔵=瀬脇寿人である。高木兼寛は、明治５年６月に瀬脇壽人の長女、富１９歳と結婚しているのである。仲人は高木の師で時めく石神良策(1821－1875・薩摩鹿児島藩医、戊辰戦争では英国医師ウィリスの下で治療活動。鹿児島医学校教授。明治５年海軍病院長)であった。石神と瀬脇は長崎遊学時代からの蘭学僚友関係であり、当時、石神は明治維新の波に乗り海軍軍医部の最高実力者となっていて、その石神が自分の後身に高木兼寛に将来を賭けていた人物であったから、高木の優れた若者像を逐一瀬脇に話していたことが想像できる。慶応義塾医学関係の人脈が瀬脇の娘富と高木の縁談経緯に繋がったようである。と、『高木兼寛伝』述べている。

福澤諭吉と瀬脇壽人の関係は『福翁自伝』に・・・手塚律蔵(瀬脇)の名が２度出てくる。当時手塚は蕃書調所で教授手伝、手塚の後輩が福澤諭吉となり、英学修学に助言と指導を受けたと推察できる。手塚と福澤の交友関係は、手塚が明治１１年に帰船で客死するまでの、約２０年間続いていたようである。

『福翁自伝』「英学発心」に《・・・安政６年、五国条約というものが発布になったので、ソコデ私は横浜に見物に行った。その時の横浜というものは、外国人がチラホラ来ているだけで、掘立小屋みたいな家が諸方にチョイチョイ出来て、外国人が其処に住まって店を出している。其処へ行ってみたところが、一寸とも言葉が通じない。此方の言うこともわからなければ、彼方の言うことも勿論わからない。店の看板も読めなければ、ビンの貼紙もわからぬ。何を見ても私の知っている文字というものはない。英語だか仏語だか一向わからない。・・・》と。**（ワイド版・岩波文庫３３）**

「蕃書調所に入門」に《・・・九段下に蕃書調所という幕府の洋学校がある。そこには色々な字書があるということを聞き出したから、如何かしてその字書を借りたいものだ。・・・私は裃を着て蕃書調所に行って入門を願ごうた。・・・・》とあり、

「攘夷論の鋒先洋学校に向う」に《・・・・私共と同様、幕府に雇われている翻訳方の中に手塚律蔵と云う人があって、その男が長州の屋敷に行って何か外国の話をしたら、屋敷の若者らが斬ってしまうと言うので、手塚はドンドン駆け出す、若者等は刀を抜いて追っかける、手塚は一生懸命に逃げたけれども逃げ切れずに、寒い時だが日比谷外の濠の中へ飛び込んでようやく助かった事もある。・・・・》と述べている。

高木兼寛の後身東京慈恵医大の『慈大愛宕新聞』に・・・大久保武二著、昭和１０年１月号に手塚律蔵の記事が出ている。

《西洋文化のことに及べば律蔵は口を極めて褒め称えて居た。文久２年(1862)１２月２８日、律蔵は日比谷にある長州屋敷へ招かれた。律蔵は大に西洋文化を賛美したので、之を聞いていていた血気の志士一同は隊を組み、律蔵の帰路を追い、其の夜桜田門外に要撃(ようげき)した。》と記事が載っている。

同新聞３月号の律蔵の記事は、手塚律蔵の子息、手塚壽雄(千葉県佐倉鷹匠町に生まれる、明治１９年英国医学留学、東京病院及び初代院長)の壽雄の時代の話しになるが、

《壽雄が韓国侍医宮中顧問として京城に赴任中、井上馨も亦駐韓国公使として京城に赴任駐在していた。其の昔、桜田門外に律蔵を要撃した者は伊藤博文、井上馨、木戸孝允(たかよし)(桂小五郎)の３人であったと白状し、壽雄と井上馨の会談する機会が多く、其の都度井上は、「どうもあなたの亡父を無謀にも追撃して実に相済まなかった」と平身低頭哀必より詫びたと、瀬脇未亡人は語った。》と記事は伝える。

瀬脇未亡人とは、堀田家の奥女中大目付木村與治右衛門の娘、賀濃(賀野)、媒酌人は堀田侯の侍医神保良肅(緒方洪庵門下)と伝わる。

富田鐵之助と福澤諭吉の関係　　**『忘れられた元日銀総裁・富田鉄之助伝』吉野俊彦著より**

富田鐵之助(1835－1916)は仙台藩士富田実保の四男として天保６年仙台市に生まれる。富田家は仙台藩の「着座」の家柄で、藩の重臣の階級は、一門、一家、準一家、一族、宿老、着座となる。重臣の順では末席に属するが、富田家の知行高は２千石で、上から２７番の位となる。万治３年(1660)の「伊達騒動」(綱村の放蕩三昧に起きたお家騒動)に初代富田氏紹(うじつぎ)の活躍により伊達騒動は収束する。その功により「在所」(自己領地)を賜っている。富田鐵之助は７代の孫となり、実に毛並みの良き家柄の生まれとなる。文久３年(1863)２８歳の時、藩より海軍術の修業を命ぜられ、勝海舟の氷解塾に学び、勝との出会いは富田の一生に大きな影響を与えた。

後の話しであるが、富田が東京府知事時代の明治２６年に、三多摩地方を神奈川県から東京府に編入に成功している。当時、上流の三多摩地方が神奈川県に属していたため、しばしば東京府民の衛生上危険な状態が生じることがあった。明治１９年の夏、日本橋の浅草周辺にコレラ患者が発生した。東京都総務局文書課編東京都都史紀要第１３『水道問題

と明治２６年三多摩編入始末』に「(前略)富田知事ハ直ニ神奈川縣知事及警視総監等ニ協議シ、西北両多摩郡管理替ノ件ヲ時ノ内務大臣井上伯ニ上申セシニ、同大臣モ編入ノ必要ヲ認メラレ、終ニ明治２６年ニ及ビ、東京府及神奈川縣境域変更ニ関スル法律案即チ三多摩郡管轄替ノ件ヲ、議会ニ提出スルノ運ニ至レリ。」とある。

神奈川県三多摩地方は自由党の地盤で、その抵抗は強く、編入に７年の歳月を要した。富田鐵之助の水資源確保は現在の東京都民にとって恩人なのである。

『海舟全集』第１０巻「海舟年譜」は富田鐵之助の編纂になるが、その「緒言」に、《氷解塾ニ起臥シ、海舟先生ノ訓戒ニ接シタル４０余年前ノ昔トナリヌ、又同学ノ諸士過半幽明境ヲ異ニス、就中坂本龍馬ノ毒手斃レ、前河内赤沢等自刃ノ如キ今尚悲惨ノ情ニ堪ヘサルナリ、人ノ栄枯興亡世ノ移リ行クサマ、行雲流水ノミ、先生世ヲ辞シ給ヒテ早七回忌辰トナリヌ、爰ニ往事追懐の余、此年譜ヲ綴リ、世ニ在マセル同窓旧友ニ頒チ、其ノ感ヲ同フセント欲ス。》　明治乙巳１月　富田鐵之助、(『海舟全集』第１０巻　511 頁)

勝海舟の子息勝小鹿が米国へ留学(慶応３年・1867)することとなり、富田鐵之助にその随行を命じられ、且つ仙台藩から学費を給与するものであった。勝がよほど富田の人物を見込んでいたからであろう。時は徳川幕府が崩壊時に重なり、仙台藩は戊辰戦争の争乱に巻き込まれ、戊辰戦争の報に富田と高木はニューヨーク→アラスカ→サンフランシスコ→香港→横浜へ５ヶ月間の急行帰国した。その焦る気持を木村敬之氏筆「富田鐵之助翁伝」に、

《先生に謁して、両人の帰国するに決した理由を話すに、海舟先生大声にて「汝等の考は浅薄(あさはか)であった。今度の政変に於いて徳川の政治を持続せんとするが如きは至愚迂濶(おろかでうかつ)の極である。殊に東北は甚だ人物乏しく、徒らに国の大を恃みて尊大不遜の挙に出ずるは、世界の大勢を知らざるのみ。忠告を加うるも咀嚼(良く考えて理解する)の力なし。今や幕府の興廃諸藩の消長何かあらんや。只皇国あるのみ。汝等をして海外に留学せしめたるは、東北の人物の缺乏(欠乏)を補わんが為めであった。軽々に帰り来るは甚だ我が意に背く」と呵責(きびしく責める)された。》とある。

よって翌日勝海舟に謁し米国留学の決意を述べた処、数日後約束の通り旅費を支給された。勝の言葉は後世の人々に与える影響は富田ばかりではない思う。幕府の留学生の身分は不安定であったが、勝の指示と明治政府の方針転換で在米留学生は学費を政府から支給されることとなる。

明治５年２月、条約改正の準備の為、欧米先進諸国視察団、岩倉具視特命全権大使が渡米して来た。富田たちの米国での対処の活躍により、大久保利通・伊藤博文の知遇を得て、富田は一躍留学生から明治政府の外交官に登用されることに至る。

富田は商学勉強をＷ・Ｃ・ホイットニー主宰のニューアーク商業学校で経済学を学び、このホイットニーは明治８年来日して、一橋大学の前身である商法講習所教授となった人物である。

明治７年に賜暇帰朝(官吏ガ願い出て休暇が許可される)して結婚をする。結婚の相手は杉田成卿の娘縫で、『蘭学事始』の杉田玄白の曽孫にあたる。富田が４０歳の時、富田の先輩に当る、仙台藩江戸詰の大童信太夫(維新後は福澤の斡旋で官吏となる)を通じて福澤諭吉は富田と親しく、同時に杉田家ともと同様に親しく、この富田と縫との結婚は福澤が取り結んだようである。福澤諭吉の媒酌により、福澤家で結婚式を挙げた。又富田鐵之助と杉田縫は当時としては珍しく、婚姻契約書(行禮人・福澤諭吉、証人・森　有禮とある)を取り交わしたと、当時の新聞にも報じられた。式後の一ヶ月後に、富田は一人米国へ赴任したが、残された縫が当初、福澤諭吉の家に居たことが『福澤諭吉書簡集』に収められた在米中の富田鐵之助宛に送られた福沢の手紙(明治８年４月 29 日付)の註に記されている。この手紙によると、在米中の富田が入学した商業学校の主宰者ホイットニーが来日するについて、縫がその世話をするために、ホイットニーの家に移る事情が記されている。

『福澤諭吉書簡集』に富田鉄之助宛の書簡が、１巻・１８８、１８９、５巻・９０６に記事あり。

富田は明治9年10月帰国と同時に結婚、翌明治１１年１２月に英国公使館一等書記官(副領事官級)としてロンドンに赴任し、明治１４年５月に帰朝するまで、縫いを日本に残している。英国公使館在勤の発令は１２月９日、翌明治１２年１月１５日「富田鐵之助履歴」に「任所英国へ出立ニ付為御暇乞参内、聖上拝謁被仰付、緞子一巻白羽二重二匹並ニ酒肴下賜、又神殿参拝被仰付、神酒幣物ヲ賜ハル」とある。

着任は明治１２年６月１０日となっていることは注意したい。それは岩崎克己著『書誌』と関連があるからだ。『書誌』の岩崎克己は、富田の渡英が１１年１２月に英国公使館在勤命が出て、着任は６月１０日となる。末松の英論文『ジンギスカン即源義経』が翌年１２年(1879)に発刊しているからである。１月１５日に国内に居て、「・・神酒幣物ヲ賜ハル」なっているので、『浦潮港日記』を渡英時に持参しないと間に合わないことになる。

岩崎はこの経緯を『書誌』の序説に「末松が集めていることを富田の耳にはいったと見

え、外務省から『浦潮港日記』を取寄せた」と述べているが、事実は福澤が外務省に届いていた瀬脇寿人の『浦潮港日記』を、末松の論文資料に持たせたものであることが分る。

富田鉄之助が国際外交畑、金融関係肌の履歴は、商業起業・日本国の金融界・日銀総裁を歴任された人物であり、情緒的な義経伝説には興味を懐くような人物には思えない。やはり明治黎明期を幅広く見渡せる人物、日本国代表する啓蒙思想家、福澤先生の指示で、「富田君、瀬脇寿人の『浦潮港日記』を末松謙澄君に届けてくれ」との想像は難くない。

瀬脇壽人が浦潮港(ウラジオストク)から函館に帰る英国船ドラゴン号の船中で、明治１１年１１月２９日、客死したことを福澤は知っている筈である。末松が倫敦(ロンドン)で「ジンギスカン即源義経」の英文による歴史論文を纏める為に、『浦潮港日記』を必要なことを事前に承知しており、福澤は富田に使いを授けたと筆者は推察する。

日本銀行第２代総裁・富田鐵之助

明治２２年発行日本銀行兌換銀行券・左の日本銀行の筆蹟は富田鐵之助による。『忘れられた元日銀総裁・富田鉄之助伝』吉野俊彦著より

岩崎克己は『書誌』の序説、「十一、義経は成吉思汗」に次のようにある。

《瀬脇の『浦潮港日記』は何箇月分が一括されては外務省に送られていた。これを読んで面白いと感じたらしい省内の僚友富田鐵之助は、瀬脇の歿した翌年一等書記官としてロンドンの帝國公使館に赴任した。同じ頃そこに末松謙澄が書記生の資格で来ていた。少しは館務も執ったであろうが、ケンブリッヂ大学において文学・語学及び法学を研究するのが主たる目的であったらしい。どんな動機からだったか、今確かめる術もないが、成吉思汗はわが義経であるという論文の材料を集めていることが富田の耳にはいったと見え、外務省から『浦潮港日記』を取寄せて参考に供した。出来上った著書の標題は、「The Identity of the Great Conqueror Genghis Khan uith the Japannese Hero Yohitsune」(大征服者成吉思汗は日本の英雄義経と同一なること)と云い、副題に『史学論文』(An Historical Thesis・歴史的論点)と銘を打った。私家版で特定の発行書肆(しょし)(出版社)はなかった。１８７９年(明治１２年)とい

う刊年が、彼の渡英した年に当っていることは、私に或る疑問の影を投ずるのであるが、今は論じない。》と、昭和１８年という時代背景があり意味深な記述をしている。

福澤諭吉と末松謙澄の関係・・・郷土誌の書に『若き末松謙澄』玉江彦太郎著・海鳥社では、末松が内閣に提出した履歴書には「のりずみ」とあるが、誰も「のりずみ」と読まず、「けんちょう」と呼び本人も名札にK・Suyematsuとしていたと述べている。

末松謙澄の履歴を『修訂防長回天史』(1980年・柏書房)から著者末松謙澄(けんちょう)の履歴を拝見する。全巻１２巻・各冊に「枢密(すうみつ)顧問官帝國学士院会員正二位勲一等文学博士・法学博士公爵末松謙澄著」とある。この末松謙澄はどのような人物か略年表的に追ってみる。

安政２年(1855)８月２０日、豊前国京都(みやこ)郡前田村(福岡県行橋市)に生まれる。父七衛門は大庄屋を勤め、その五男五女の四男。幼名を線松、のち謙澄と改め、青萍(せいひょう)と号した。

慶応元年(1865)８月、父の友人村上仏山の私塾水哉(すいさい)園で漢学・詩文等を学ぶ。

慶応２年(1866)第二次征長下、小倉藩(幕府側)は長州軍の攻撃を受け、小倉城炎上。大庄屋末松家も全焼、一家離散、謙澄は仏山に引き取られる。

明治４年(1871)、上京、大槻磐渓(ばんけい)塾(幕末明治の蘭学・砲術家)に入り、近藤真琴(まこと)(教育・思想家)にも就く。

明治５年、東京師範学校に入学したが退学。『高橋是清自伝』上に開成学校教授グイド・フルベッキ(和蘭(オランダ)生まれ米国人宣教師・英語・政治・経済を教える。大隈重信等も生徒)の書生であった高橋是清と相知り、高橋が師範学校を止めさせたと伝わる。謙澄は高橋から英語を学び、高橋は謙澄から漢学を学んだ。翌年にかけて２人でフルベッキ宅に来る外国新聞を翻訳して新聞社に売り込む。

明治７年(1874)東京日日新聞に入社、ここで福地桜痴(源一郎)の知遇を受け、福地は旧幕臣、岩倉使節団(大隈重信の発案、明治４年―６年欧米へ 107 名を派遣)メンバーで明治政府首脳とも面識が深く、その福地に謙澄は高く評価された。

大久保辰彦編『廿一大先覚記者伝』に昭和５年大阪毎日新聞社に謙澄の記事がある。

《或る日、かれは福地と一緒に銀座を歩いて居ると、そこへ通りかかったのは時の参議工部卿伊藤博文が、伊藤は福地を見て、「君の同行者は何者だ」と聞く。福地は「これが末松謙澄である」と答へると、伊藤は喜色を浮かべて「御馳走するから一緒にこないか」といふので、２人は伊藤の馬車に同乗して伊藤の許に行って、いろいろの話をした。伊藤は頭がよく、人物もしっかりして居るのですつかり気にいり、記念として「ミルの論理学」(ミ

ル 1806－1873・英国哲学者・社会学者、論理学体系を著す)と「ギボンの羅馬史」(エドワード・ギボン 1737－1794・英国歴史家『ローマ帝国衰亡史』)を与えた。伊藤はかれに「あくまでも新聞記者として立つ決心か」末松は「必ずしもしからず」と答えると、伊藤は「それならばおれが世話をする」と言ってかれを法制局の雇に採用し、それからすぐ太政官権少書記官(明治政府が設けた・儀政官以下七官の総称)に上った。》とある。

明治８年１２月、特命全権弁理大臣黒田清隆に随行し朝鮮にて日朝修好条規の起草。

明治１０年６月、山県有朋の引抜きで、兼補陸軍省七等出仕、征討総督本部附となる。西郷隆盛に降伏をすすめた山県の一文は謙澄が草案、その名文は西郷軍にもてはやされた。

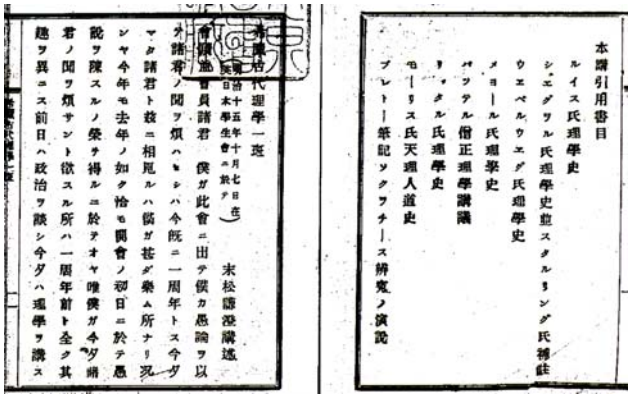
明治１１年２月、２３歳。英国公使館一等書記生見習という名目で、英・仏の歴史編纂方法を学ぶことで渡英する。

明治１２年、ケンブリッジ大学へ入学。同年ロンドンでの「ジンギスカン即源義経」を発刊。それが明治１８年、内田弥八の『義経再興記』として那訳に繋がる。

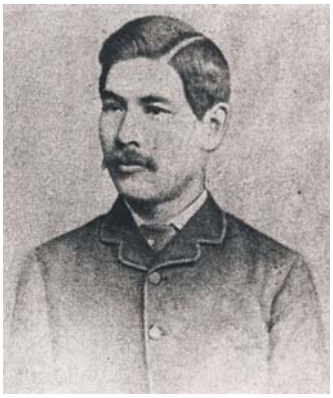
文学・語学法学を修め、法学士およびバチュラーオブ・アーツ(文学士)となり、又マスター・オブアーツ(文学修士)を取得。明治１２年、『支那古学略史』明治１３年、『希臘古代理学一班』明治１６年、等を刊行する。

明治１９年(1886)帰国。3月内務省県治局長。初めて展覧劇を演出指導する。

明治２２年、３５歳、伊藤博文の次女生子と結婚。翌年、第一回衆議院選挙に当選(福岡県第８区)。明治２５年、第二次伊藤内閣の法制局長官。明治２８年２月、再度韓。１０月男爵。明治３０年１月、毛利家歴史編輯所総裁を委託される。４３歳。明治３１年、第三次伊藤内閣の逓信大臣に就任。明治３３年１０月、第四次伊藤内閣の内務大臣となる。当時、伊藤の知恵袋と称せられた。枢密顧問官、公爵。



『希臘古代理学一班』近代デジタルライブラリーより



在英時代の末松謙澄『若き末松謙澄』より

補足・ケンブリッジ在学中に英訳の『源氏物語』(４８帖のうち１７帖までをまとめたもの)明治１５

年、ロンドンで発刊。末松は日本の古典を海外に紹介する企画していた。

日露戦争期の明治３７―８年、英国に滞在して、英国の世論を日本側に向けさせ、日本の国債７億円を米英のユダヤ系国際金融機関に買わせることに成功している。明治３９年に枢密顧問官、明治４０年、日本留学中の韓国皇太子の御用掛となり、大正５年には法学博士の学位を授与された。大正９年(1920)１０月歿(享年６６歳)。初版本『防長回天史』の刊行が完結して１ヶ月と旬日(10 日位)後と伝わる。『防長回天史』内容の経緯については省く。

福澤諭吉の「末松謙澄宛福澤書簡」を拝見する　『福澤手帳』福澤諭吉協会編・１９８７年１２月・５０号・河北展生(慶応義塾大学教授)より。

―末松謙澄宛　明治１９年４月２０日―

《過日は久々にて拝顔、寛々御話伺ひ、近年の愉快を覚、実に難有奉存候。さて此二生は、津田興二、高橋吉雄と申し、旧と本塾の学生、今は時事新報に従事致居候者にて、何卒一度拝顔御話相伺度との志願、御帰朝早々御来客も多く、定て御うるさき義と奉察候得共、御都合の節一応御逢被成遺候様懇願の至に不堪候。い才は本人共より可申上、御聞取奉願候。早々頓首。

１９年４月２０日　　諭吉

末松様　　梧下　(手紙の脇付に用いて敬意を表す語)

尚以、近々御閑暇も御座候はゞ御来訪奉願候、夕刻なれば大抵在宅に御座候。御同食いたしながら、面白き御話伺度冀望致候。以上。　》(冀望・希望、そのお願い)

宛名の名は末松謙澄である。・・・書簡中に、「久々にて拝顔」とあることから、帰朝直後と、留学前にも会っていることがわかるが、いずれもその日頃は不明である。

末松の帰朝について、『時事新報』明治１９年４月１日の記事に、２月英国を出発印度洋経由で帰国する旨が報じられ、更に４月１７日の記事に、１５日伊藤総理と共に上野の松源蓬莱亭で開催の鑑画会に出向いたことが報じられていることから、４月上旬帰朝したものと思われる。・・・末松の話に興味を抱いた福澤は、早速時事新報の記者、津田・高橋の両名をインタビューさせるため、この書簡を書いたのである。・・・この両人が末松に会っ

た日は明白でないが、『時事新報』明治１９年４月２３日・２７日・２９日の３回にわたって、「欧州叢話」と題する記事があり、その冒頭に、「左の一条は多年英国に滞留し、近頃帰朝したる某氏の談話にして、本社員が聞くがまま、其肝要なる節々丈けを略記せしものなり」とあり、某氏とは末松謙澄で、本社員とは津田・高橋の両名であることがわかる。叢話の内容は、当時の英国の重要問題であるアイルランドの自治権問題をめぐる議会の様子の紹介が中心で、併せて仏独の政情が記されている。(『福澤手帳』より)

★『福澤諭吉全集』１８巻に、900・中上川彦次郎宛、福澤先生演劇を観る「フワンシーボールの評」に末松の名前が出てくる。　**津田興二**・中津出身。義塾に学び、明治１８年時事新報入社。政治経済の記者で活躍、２５年三井に入り、実業人として活躍。　**高橋義雄**・義塾で学ぶ。１５年時事新報入社。論説記者で活躍。海外遊学後、三井銀行、三井呉服店と実業界で活躍する。

福澤諭吉と内田弥八の関係

『福澤諭吉全集』の『別巻』(時事新報論集拾遺・書翰集拾遺・他)１４２―１４３頁より)に、《内田弥八は徳島県三好郡井川村の酒造業内田秀篇の長男、明治１６年１月１７日入門(義塾)、同２０年４月正科卒業。文中「伴(とも)ふて上国地方を漫遊したることもあり」とあるのは、明治２２年９月から１０月へかけて福澤が家族従者總勢２０名を率ゐて京阪神名古屋静岡辺を漫遊したときに一行に加はったものであろう。内田は慶応義塾に在学中、末松謙澄がロンドンで刊行した英文著書 を翻訳して『義経再興記』と題して出版しベストセラーとなり、源義経即ジンギスカン伝説を世に広めた。卒業後極東貿易の志を懐いて支那印度豪州を漫遊したが、途中で病を得、帰国して療養に力(つと)め、明治２４年１月１６日、熱海で死去。

『義経再興記』の訳述者内田弥八(やはち)の履歴

内田弥八(1861－1888)徳島県三好市井川町西井川村の組頭庄屋の嫡子として生まれた。出生は複雑な経緯となっている。幕末から明治初頭、井川町はキザミたばこ産業で繁栄した地域である。弥八は明治９年、１５歳にして出奔し大阪の商家の僕となり、家主に勉学を認められ、１８歳の年東京で漢学者、岡千仞(せんじん)(1833－1913 漢学者)の塾に入塾する。２０歳で故郷に戻り西井川村の戸長(こちょう)(村長)となる。田舎暮らしは時流が見えず、１年余で又出奔、英学を志ざし慶応義塾へ２２歳で入塾(明治１６年頃)する。弥八は刻苦勉励(こっくべんれい)にして、頭角を現し、福澤諭吉の信頼を得た。師の福澤は弥八と家族を連れて関西方面旅行し、英学の心構えの指導をした。その時分に末松博士の「ジンギスカン即源義経」の歴史研究論文が

慶応義塾に送られてきた。指名を受けた弥八は寝食を忘れ翻訳に没頭し、出版に当っては、出版元の栗田書林(栗田信太郎)が２百円以上の出資金、弥八の出資金は１２０円とし、栗田書林へ販売収入はまず栗田書林社に返済金にあてる。その代わり、出資金の相殺が終った後は、弥八は利益の７０％、書林３０％の割りで利益配分の取り決めとした。これが後日、弥八に巨大な富となって入ってくる訳となる。当時の物価指数は現在の６万倍、弥八の取り分の金額だけでも７２０万余円となる。(「内田弥八の手紙」井川町教育委員会より)

金作のために故郷の父に送った手紙に、

約定書　　今般内田弥八ハ訳述義経漂流記ヲ内田弥八栗田信太郎両名ニテ出版ス依テ約定スル事左ノ如シ。

第一条、出版資金ハ両名ヨリ出金スルモノトス尤モ資金ハ売上高ヨリ最初ニ引去ルベシ。

第二条、純利益ハ内田弥八へ十分ノ七分ヲ渡シ、栗田信太郎(書店主)へ十分ノ三分渡スルモノトス。(第三条から十条略)

徳島県　　内田弥八

東京芝区露月町十五番地　　栗田信太郎　　明治十七年一月廿七日

内田弥八封簡、廿一日　　内田大人玉机下　　二伸　明日百四十円指出候節　左の人名名前を以て指出可(べし)　申候間豫(あらかじ)め御承知可被降候　(責任出資金者はご承知くださるべく候)

二伸　明日百四十円指出(さしだし)候節　　(指出=現状の差出(借入金)報告書)

左の人名　名前を以って指出可　　申候間豫(あらかじ)め御承知可被降候

金三拾円	東京芝区三田慶応義塾	内田弥八
金三十円	同所	内田芳谿(弥八)
金三十円	東京芝区汐留町壱番地	鳥尾岩太郎(弥八の親友)
金三十円	東京芝区三田慶応義塾	西野恵之介
金弐拾円	同所	筑紫三郎

★西野恵之介は慶応義塾管理職・福澤の高弟、帝國劇場の発起人の一人、後事業家の道を進む。★筑紫三郎は義塾卒業後、王子製紙で活躍。★鳥尾岩太郎は同郷人、弥八は彼の紹介で慶応義塾に入塾した。明治２０年に鳥尾岩太郎と弥八の共訳で『世界英傑伝』を刊行している。

調達資金は鳥尾の外、弥八と義塾の人たちの借入金であることが分る。不足金額は高利貸しからも調達する状態となっていた。鳥尾岩太郎を除くと、慶応義塾関係の応援融資が

１１０円（６万倍とすれば、今の金額で約６６０余万円）となっていることが分り、義塾の資金の入った書籍の発刊となっていることが知れる。現在の金額においても半端でない金額が、弥八は郷土庄屋の嫡男であるからこそお金の信用調達ができ、故郷西井川村の内田家の土地を担保で融資が可能にしたのであろう。実家との融資が成立して、弥八と義塾側の契約が成立して出版にいたったものと考えられる。又、故郷へ早急にお金の催促は何度もあったことが、故郷の井川町教育委員会発行の「内田弥八の手紙」に述べられている。郷土の両親は、明治１８年代、この金額を捻出は内田家の土地を担保に多大な苦心惨憺の末の融資金額であることは言うまでもない。

福澤諭吉は、栗田信太郎という書籍店を紹介し、旧幕臣の山岡鉄舟先生の題字をもらい、漢学者の石川鴻齋の序文を贈られ、大反響の『義経再興記』は第８版まで刊行となる。内田弥八の度胸も見上げたものであるが、結果オーライとなっているが、弥八自身は書籍が販売不振の場合を考えていたのか、又、奈落の底を覚悟して借金をしたのか、と考えてしまうが、生まれの良さは、意外に大胆と明るさであったかも知れない。

『義経再興記』は売れに売れ、弥八は今日の億万長者となり、故郷に田畑地を１２００円（今の金額にして約７２００万）分買い求めた。弥八は時代の先駆けとして、早く欧米に追いつくために何をすればよいか、その答を求めて、支那・シャム・ジャワ・豪州へと海外視察の６ヶ月の旅行に出た。しかし、滞在のシャムで急変して吐血、コロンボ・シンガポール・豪州での医療治療に専念したが、病の悪化を辿り、神戸港に明治２３年５月帰国したが、翌年の１月１９日に帰らぬ人となったのである。

弥八の葬儀は徳島市の滴翠閣（てきすいかく）で行なわれ、「内田弥八の追悼会」に千人有余の人が集まり、故郷での期待の星、〃末は政治家・大事業家〃とささやかれた弥八であったという。

（『内田弥八の生涯』平成２年。『内田弥八の手紙』昭和６１年。井川町教育委員会「生涯学習」より）

芳谿内田弥八之碑誌に福澤諭吉先生が碑文を贈る

《内田氏の慶応義塾に在（あ）るや、余は最も之（これ）を親しみ、其業を卒（おわ）るの後（のち）、伴（とも）ふて上国（じょうこく）地方を漫遊（まんゆう）したることもあり。素志大（もとよりしだい）にして凡ならず。其支那印度に行くを聞き、実業上必ず大に成すことあらんと期したりしに、不幸短命にして逝く。其人の為に悲むのみならず、国の為に之を惜む。其臨死自記の碑文の如き、世間稀有（けう）の事にして、余は之を一読しても氏の気力の非凡なるを知ると共に、ますます惆悵（ちゅうちょう）（うらみかなしむ）の情に堪（た）へざる者なり。明治２６年４月４日　福澤諭吉涙を揮（ふるっ）て記す。》**（『福澤諭吉全集』『別巻』より）**

芳谿内田弥八之碑・臨死自記の碑文

「内田弥八号芳谿天資磊落不事父母営家産末報恩人竊脱到大阪為商家僕三年始志学業在東都大阪之間修漢学数年見世将欧化入慶応義塾修英学有年業末半而記述義経再興記当時大行干世得数千金其后業卒而退慶応義塾卒遊支那印度豪州其志在層進彼我之貿易及到豪州羅病在る彼地療病十越月尚不愈帰途上陸於諸港養体与心千辛萬苦終得帰父母之国数回然病日加重遊摂津須磨浦及豆州熱海加養雖不怠天命無如何―訂髪沐浴正衣服依臥榻如眼長逝享年三十無妻子　臨死自記　」(明治２４年１月１９日・死の直前の自記)

碑は徳島県三好郡辻町(現三好市)西井川にあり、縦１７０㎝、横９５㎝の石碑で、臨死自記の碑文の次に福澤の文が刻まれ、その後に「正五位勲四等巌谷修題額、土井芳年刻」とある。

内田弥八顕彰碑の由来文

《碑の由来・この碑は内田弥八の墓碑並びに顕彰碑である。内田弥八は幕末、この地の名家、内田家に生まれ天性磊落(らいらく)、長じて岡千仞(おかせんじん)の門に入り漢学を学ぶ。修業中招かれて東井川村及び西井川村の戸家(村長)に就任(明治１４年１０月２８日)したが、世の正に欧化せんとするを見、在職わずれて退任。慶応義塾に学び英学の修得に専念した。在学中蒙古王ジンギスカンは源義経の後身であると断言した。『義経再興起』を発刊洛陽の紙面を高からしめた。塾卒業後大志を抱き、中国・印度・シャムに遊学、政財界より将来を嘱望されたが、豪州に至り病に倒れ、志半ばにして帰国、明治２４年１１月１６日、３２歳で療養先熱海に於いて歿した。この碑は明治の先覚者、慶応義塾である福澤諭吉の奨めにより父秀篇が建てたものであって、彼は死の直前に記した自伝と恩師福澤諭吉の「涙を揮って記す」としたためられた追悼文とよりなっている。上部の題字「芳谿内田弥八の碑」は明治の書道大家厳谷一六の筆になり彫工は名匠土井芳年の手になるものである。》とある。

昭和５３年１２月　　徳島文理大教授　　藤井喬撰文

三好市井川町吉本にある内田弥八の記念碑

第５版『義経再興記』

内田弥八

第6章 『義経再興記』を考察する

『義経再興記』内田弥八訳述・自序に、「・・・昨盛夏頃、眼飢歴史、甚困無事、偶友人恵一英書、繙而見之、則記載義経自蝦夷渡満州為元祖鐵木眞之書也。・・・」とあり、直訳すれば、

「昨盛夏の頃、眼歴史に飢ゑ、甚しく事無きに困む。偶然友人一英書を恵む。繙いて之を見れば、則ち義経蝦夷より満州に渡り、元祖鐵木眞と為ることを記載する書なり。」と内田弥八は経緯を記している。(『書誌』序説　岩崎克己著より)

末松謙澄は明治１２年(1879)、倫敦で“Identity of the Great conqueror Genghis Khan with the Japanese Hero Yoshitsunegb”「日本で大征服者チンギスハンの“アイデンティティは英雄義経」を歴史論文と銘打ってロンドンで英文発刊し、発行部数とロンドンでの評価は判からない。**末松はこの歴史論文に自著「日本のK・スエマツ」と明確に記しているが、**内田弥八は「偶然友人一英書を恵む」と云って、K・スエマツの名を何故か伏せている。著者名を入れないことは、その経緯の事情は分らないが、原作者の名は記載しないことは黙殺行為である。

この時代の世論を考慮すれば、外国人によって記述された歴史論文として発表したい、と云う強い意思を感じられるのである。編集段階から『義経再興記』は外国人が書いたもの、外人の著者がそう言っている書物にしたい思惑が読み取れる。明治１８年代の日本の世論は、日本人の思考論理より、外国人の論理のほうが勝っている、即ち外国ほうがあらゆるものが優れているという、世論受けを狙った計算を感じられるのである。

『書誌』の著者岩崎は《世の受け取り方は不思議なことに、世の諸先生方は英文による『成吉思汗』の解明しょうとはせず、内田弥八訳述で満足してしまったことにある。当時民間人では原書を読む暇な人が居られなかったようで、訳書を読む人は原書を問題にせず、原書を読む人は訳書を軽蔑してこれに触れなかった。

しかし何よりも不思議なのはこの激流の外に超然としていた原著者の態度である。自著が『義経再興記』を通して世間に歓迎されようとも、攻撃の対象にされようとも、敢えて誇りがましいことも、弁解がましいことも、公にしなかった。ただ日露戦争当時、黄禍論者に対して、反論する末松謙澄の言葉に、

「Are not the Mongolian and Tartar elements of population predominant in the Russian communities rather than any other nations? Is not the very locality where the great Mongolian leader, Genghis, arose i. e. the banks of the river Onou, situated in a

Russian province?〃(Suyemats, Baron. The Risen Sun. p. 344. London, A. Constable. 1905)」

「人口のモンゴル系人種及びタタール系人種の要素は、他の国よりもむしろロシアの社会では支配的でないですか？、偉大なモンゴルのリーダー（Genghis）が現れたまさしくその場所（オノン川の岸）は、ロシアの行政区に位置していませんか？　(Suyemats、男爵。ライゼン日電話。 344。ロンドン、A.コンスタブル。 1905 年)」　**（筆者英訳による）**

と見えている。これを英文『成吉思汗』の所論と比較対照する時、興味深々たるものを覚える。と『書誌』の岩崎克己は述べている。国際諸国の諸氏(欧米)よ、黄色の日本人を責めるまえに、タタール人(モンゴル系民族)を抱えているロシアこそ、黄禍論に値すると、末松の発言は説得力ある。

黄禍論・(おうかろん・こうかろん)過去に於いて欧州の白人種たちはモンゴル帝国の侵略に苦しんだ実経験から、今日では日本人がその行動を始めている。１９世紀半ばから２０世紀前半にかけて米国・ドイツ・カナダ・オーストラリア等に現れた黄色人種脅威論(人種差別の一種)、１９００年に義和団の乱に続き、１９０４年に日露戦争で日本が優位に立つと、英国では黄禍論がジャーナリズムに登場する。やがて黄色人種が世界に禍(わざわい)を齎すであろう、という黄禍論(日本人を指して)が欧米に広まった。

『義経再興記』の拾い読み　**（内田弥八訳述兼出版・石川鴻斎・土田談堂・明治１８年３月）**

第２章(３９頁)、《義経従者ト共ニ大陸ニ対峙スル神岬(カムイミサキ)(後志(しりべし)・積丹町)ヨリ大陸ヲ指シテ出帆セシハ日本人或ハ蝦夷土人ノ熟知スル所ナリ。此岬ノ表面ニ堂宇(どうう)アリ。又タ其近傍(きんぼう)ニ弁慶岬アリ。然(しか)レドモ、此事ニ就(つ)キ東蝦夷夜話(とうかいやわ)[1]中詳記スル所ナリ。唯(ただ)ダ古時経歴者ノ著、辺要分界(へんようぶんかい)(『辺要分界図考』海防・外国地誌)ヨリ左ノ語ヲ抜粋スルニ過ギザルナリ・・・(略)》

1、『東蝦夷夜話』大内桐斎(とうさい)著・蝦夷地の地誌風俗を蒐集したもの。

同(４０―４１頁)《・・・義経ノ大陸ニ渡リシ證左(しょうさ)ハ、寛永年間越前(えちぜん)ノ小港神保ノ船人、満州ニ漂流セシニ、恰(あたか)モ清朝北京遷部(ぺきんせんぶ)ノ時ニシテ、彼ノ船人モ共ニ北京ニ送ラレ道スガラ、建夷奴兒(ケイトレ)[1]地方家々ノ門戸ニ義経及ビ弁慶ノ畫像(がぞう)[2]ヲ貼付スルヲ見タリ、是レ義経主従大陸ニ渡リシ顯然(けんぜん)タル証左ナリト・・・(略)。》

1、建夷奴兒=建洲(けんしゅう)(満州南部)奴児干(ヌルガン)郡司(軍行政府)の街。2、畫像=義経、弁慶の肖像が貼られていた。

同（６１頁）《・・・西邊利亜ニ居住スル魯人ト交易スルニ當リ、我領事館[2]ヲ浦潮斯徳ニ置ケリ時ニ、其ノ領事ニ任ゼラレタル先ノ瀬脇君ハ其ノ穿索ニ深ク熱心シ、駐在中ハ必ズ此ノ事ヲ吟味セシト・・・（略）》　**1、ロシア人。　2、正式には貿易事務館。**

同、（６２頁―６３頁）《・・・現今倫敦駐在日本領事ノ富田君[1]曽テ、瀬脇君ヨリ聞キシ事ヲ余ニ語リテ曰ク、満州ニ判官岬アリ、義経上陸ノ地ナラン、又タ日本建築ノ結構ニ従イ建造シタル堂宇アリ、八幡ト称ス、八幡ハ神党派ノ敬拝スル軍神ナリ、又タ義経主従ノ墓[2]アリ、是レ必ズ其等ノ人ノ墓ナラン。故ニ此地ニ至リ探究スルノ許ヲ得ンコトヲ願イ云々ト、瀬脇君ハ我外務省ニ通信シタリト由、是レヲ観レバ、君ハ此事ヲ穿索セズシテ死セシナラン。・・・・義経主従蝦夷ヨリ満州ニ渡航セシハ全ク事実ナリ。・・・・義経ハ彼ノ豪傑成吉思汗其人ナラン、茲ニ又タ「グリフス」氏ノ語ヲ引用スベシ、曰ク義経ノ名ノ不朽ナルコト必然ナリ・・・（略）。》

1、富田君（鉄之助）・第５章、75 頁参照。　2、墓・『沿海州南部烏蘇利蘇城郡紀行』55 頁参照。

第４章、（９１頁）《余ハ成吉思汗少壮（意気盛ん）中ノ口碑ヲ穿索シ、且ツ之ヲ評論スルニ先キダッテ支那国中ノ宣言ヲ記載セント欲ス、・・・茲ニ第一ニ「セピユ」（支那の雑史）ヲ読ムノ機会ヲ得ル、能ハザルヲ一言セザルヲ得ズ、此ノ書籍中ニ成吉思汗ハ乃チ源義経ナリト明記スト、グリフス氏ノ書中ニ見ヘタリ・・・（略）》

同、１０２頁―１０３頁　《・・・明和３年（1767）５月新渡図書集成９９９６巻、清ノ蔣天錫敕ヲ奉ジテ之ヲ挾定ス其中ニ輯勘録３０巻[1]アリ、第３０ノ序文ニ云う、乾隆皇帝述ブ、我姓ハ源義経ノ裔ナリ、其ノ先ヲ清和ト云ウ、清ハ源ナリ・・・・義経ノ日本人タルコト亦タ疑フ可カラザルナリ。清和帝ノ孫、満仲ニ賜フ義経ハ其ノ裔ナリ、故ニ其ノ一族ヲ清和源氏ト称ス清帝ト・・・（略）》

1、森長見『国学忘貝』清朝６代乾隆帝「朕の姓は源、義経の子孫云々」「図書輯勘録」の実体は不詳

同、（１１４－１１５頁）《・・・成吉思汗ノ父也速該ノ事ヲ信ゼズ余謂フニ也速該ハ成吉思汗ガ蝦夷海ヨリ来リシ譚ノ変化ナラン也速該ハ支那音読ンデ「エゾガイ」トナス。然ラバ即チ也速該ハ蝦夷海ノ代名辞ナラン乎。・・・成吉思汗ノ父其名ハ也速該ナリトハ成吉思汗ガ蝦夷海ヨリ来リシ譚ノ訛伝ナラント。・・・》

第５章（１６４頁）《・・・義経主従蒙古ニ入リシトキ本名ヲ公ニスルヲ好マズ、且ッ之ニ滑稽(その様)ヲ交ヘ又タ土人ヲ瞞着(だます)セント欲シ義経ヲ斯ク称セシモノナラン。余ハ以上ノ事ヲ記載中、先ノ浦塩斯徳駐在日本領事(貿易事務官)瀬脇氏ノ日記中ヨリ長キ抜粋ヲ得タリ、此抜粋ハ倫敦駐在日本領事館富田君ノ余ニ恵送セラレタルモノナリ。・・・》

第６章（１７１―１７４頁）《是ヨリ先ノ瀬脇君ノ日記ヲ精索セン・・・満州中ニ存在スル日本人ノ遺跡ヲ穿索セシ人也、君ガ土人支那人及浦塩斯徳ニ住居スル日本人ヨリ、聞知セシコト及自ラ吟味セシコト等ヲ、記載シタル其記載ニ従ヘバ、満州中、日本人ノ来往セシコトニ就キ、口碑ノ常ニ流布スルハ、最モ確実ニシテ疑フベカラザル也。又タ各地ニ城堡及墓アリ土人之ヲ以テ日本人ノ城堡及墓ナリトナシ曽テ疑ハザリシ、而シテ是等ノ古石碑ハ古跡及種々ノ宮殿中ヨリ発見シタル数多ノ書類ト共ニ満州ノ其部落曩ニ魯西亞ニ属セシ時、魯都ニ運ビタリト，又満人相会スレバ常ニ日本の事ヲ談話スルヲ以テ、最モ楽トナス其説ニ曰ク、満州ハ往時日本ノ統御ヲ受ケタリト。・・・日記に従ヘバ浦塩斯徳ヨリ殆ンド１５０英里[1]ノ地ニ古城アリ「サチヤン」ト称ス。日本国将軍ノ建築セシモノナリト、此城ニ就キ瀬脇氏ハ「サチヤン」城ノ側街ニ住居セシ支那山丹人「ソリボンチヤン」ヨリ聞キシ事ヲ記シテ、曰ク日本ノ軍将本国より危難ノ運命ヲ逃レ、茲ニ来リ城ヲ築キ「サチヤン」ト名付ケタリ「サチヤン」ハ蘇城ノ意ナリ。・・・土人ノ口碑ニ従ヘバ昔時日本軍将二人あり、此国ニ来レリ其名ヲ金烏諸(ジンギスカン)、寛永ト云フ、蘇城ハ其一人ノ建築セシモノナリ、然レドモ二人中此地ニ先着シタルハ、金烏諸ナルヤ將タ寛永ナルヤ、又タ其到着セシハ何時ナルヤ、之ヲ知ルニ由ナシ寛永ハ此地の君長トナリ。子孫世襲スルコト殆ンド３００年碑あり、銘ヲ彫刻シ今尚城内ニ存在ス。・・・》

1、英里=１マイルは約１、６０９３km、「浦潮港日記」は５０里（２００km）、末松は５０里を１５０マイルとした。１５０英里×１、６キロ=２４０kmとなるから、末松は１５０英里とした。

終章、２０５頁―２０７頁　《・・・成吉思汗ノ姓、奇渥温ハ瀧ノ意ヲ含ム、義経ノ姓、源ハ水源ノ意ナリ、「ケ」ト「キ」ハ蒙古人殆ンド区別スル能ハザルノミナラズ、又タ往々換用(代用)セリ、・・・成吉思汗ハ嘗テ日子族ノ長ナリシト、日子族ハ発音上正ニ日本人ノ変化ナラン、又タ成吉思汗ノ父、其ノ名ハ也速該ナリト、也速該ト蝦夷海ハ音相近シ、故ニ発音上、蝦夷海ニ也速該ナル文字ヲ適用シ成吉思汗ノ蝦夷海ヨリ来リシコトヲ指示スルモノナラン、・・・成吉思汗ノ第一后妃ノ尊称ハ「フジン」ナリ、・・・「フジン」「夫人」

ハ貴女ノ尊称ナリ、・・・成吉思汗ノ即位式ニ用ヒタル旗、及軍旗ハ純白ナリ、源氏ノ旗及軍旗モ亦タ純白ナリ、・・・・源義経或ハ源氏汗ノ変化ナリト、・・・・》

２１２頁、《論説及瀬脇氏ガ満州中ニ存在スル日本ノ石碑、遺物、及有名ナル日本軍將ノ事跡ニ就キ其ノ口碑ヲ記載シタル日記中ノ明証等ヲ以テセリ、・・・其軍将ノ名ハ成吉思ノ訛伝タルコト容易スク之ヲ知ルヲ得ベシ。故ニ又タ源義経ノ訛伝ナルコト疑フベカラザルナリ。・・・(略)》。成吉思汗と源義経は同一となる事を結論としている。

『交詢雑誌』の巻末広告文　(第 202 号　明治１８年 10 月 15 日　『義経入夷渡満説書誌』289 頁)

《『義経再興記』、本書ハ英国倫頓府ニ於テ、日本支那英書等ヨリ証左ヲ取リ、源九郎判官義経ガ蝦夷ヨリ満州ニ渡リ、支那元朝ノ太祖鉄木眞トナリタルコト、及今ノ清帝モ亦義経ノ子孫タルコトヲ明記シタルモノナリ。此書一度世ニ出ズルヤ、大ニ亜細亜全州ノ注意ヲ振起(ふるい立つ)シ、支那公使館ノ如キハ既ニ漢語ニ翻訳中ナリ。又印度語ニ訳セント企テシ人モアリト云フ。以テ此書ノ声価ヲ知ルベシ。今般第二版刻成ナル。諸彦陸読縦覧ヲ賜へ。・・・発兌元　　東京芝区露月町　　栗田信太郎(栗田書林)》と広告が出ている。

『交詢雑誌』　交詢社は福澤諭吉が全国的に広めた啓蒙活動組織。設立目的は「知識を交換し世務を諮詢すると云うに過ぎず」社員からの諮詢について討議・報知し、社員同士が相知る「知識集散の一中心」「人知交通の一大機関」を目的として、明治１３年１月に第１回の大会となり、この交詢社の機関誌が２月５日発刊されたのが『交詢雑誌』である。内容は遺産処分、木綿、溶鉱炉、焼酎、米価、肺病、貨幣、教育令、三種神器、田畝小作など多岐にわたって質問に回答する雑誌で、明治３４年４月２５日、５７１号で廃刊となる。　(『福澤諭吉事典』慶応義塾 150 年史資料集・別巻２より)

『義経再興記』発刊後に「ジンギスカン即義経説」の反論をみる

義経が蝦夷から外国へ渡った真偽を雑誌に回答した重野安繹の反論をみる。『義経再興記』発刊されて１１年後、義経の真相について、重野安繹(文学博士・歴史家・漢学者)が**「論説・源義経」**の実相について講演、明治２９年６月１４日の講演記録が『東京学士会院雑誌』(学術上功績顕著な科学者を優遇するための機関、学術の発達に寄与するため必要な事業・初代会長福澤諭吉・２代、西周となっている)第１８編之７より。(明治２９年７月２８日発行・309－315 頁)

《・・・・義経が蝦夷より金国に渡って清朝の元祖となったと云う説は、金史別伝並び

に白石の手簡等で小口を開いたが、さすが白石は大学者、そして安積澹泊(水戸藩士・儒学者・大日本史編纂に従事)も堂々たる歴史家であるから種々穿鑿の未遂に其妄説たることを看破して、建州漂着の船頭話しも立消の姿となったが、其伝説は猶世に残って、天明年間に至り、讃岐の人、森助左衛門が『国学忘貝』と云う書中に十方塗轍もない妄説を書き著はしたから、又大に世人の脳髄を撹乱した。其説を桂川甫粲(江戸中期蘭学者)が桂林漫録(随筆家)に載せて辯斥(弁析)してある。甫粲は江戸の官医桂川甫周の弟、漫録は寛政１２年の著作である。

国学忘貝に云、圖書集成全部一万巻、清の世に至りて編集せる所なり。実暦庚辰ノ歳、清人の汪縄武なる者が齎し来りしを、明和甲申歳、官庫に納められしとなり。書中圖書輯勘なる書百３０巻あり。清帝の自序あり、其文に「朕ガ姓ハ源義経之裔、其先ハ出ニ清和一ヨリ、故ニ号スニ国テ清ト一」と有る由なりと能せるを見てより、一度其書を見ん事を欲すれども、娜嬛(昔の書き言葉)の秘書に等しければ空しく渇望するのみなりしが、去年家兄の余光に依りて始めて彼書を見る事を得たり。先ッ初巻を披き見るに巻首に雍正帝(５代)御製の序あり。此序文に義経の事を記されず、次に蔣廷錫が表文あり。此上表に彼文は有るめりと通読すれども其事なし。次に凡例あり。此中にも見えざる故総目を閲すれば圖書輯勘なる書の名も無し。大に望をば失ひたれども、此書を見る事を得たるこそ生涯の洪福なれ。彼説は忘貝のみにもあらず、普く世に言い伝う所なり。同好の士、義経の事に於いては永く繁念(煩わしい)を絶つ可し、此書雍正三年(清の世宗元号)に撰成る銅にて製したる活版なり、・・・(略)。★・蔣廷錫が勅を奉じ 1725 年完成、２年後に銅版印刷法で 64 部刷る。

義経は即ち成吉思汗なりという説を書に筆したのは前にも述べたる如く『義経再興記』で、近頃のことであるが此書の出来る前方２５、６年、即ち安政中に彼の有名な「シーボルト」が日本に再来して、韃靼地方に源義経を祭り今に其の祠があると云う説を言出し、幕府の蕃書調所で事実取調があって、儒官古賀謹一郎(儒学教授・官僚)号茶渓、調所の頭取で専ら其の取調に任じ、如何にも珍説であるから、一時は大噪ぎで手を盡して穿鑿したが、遂に要領を得なかった。尤もシーボルトは何を証拠として言出したか、親く其地に往いて見た人があるなら何方の何某と名前時代も分り、又外国の書にしかとした據り所があるなら其時に其書名も世上に知れわたり、其説の信否も判断してある筈なるに、曽て其等の事なきは心得ぬことである。因って思うに「シーボルト」が説は全く伝聞又は想像で成立したもので、日本人の伝説即ち白石の建州漂着人話などを聞きかじり、眞誠らしく言い出したが、当時は外国人殊に「シーボルト」と云へば何事も信用する世上の有様であったから、

一時大噪ぎをしたものの、事実のないことは仕方がない、又其説も立消となった。そこで其の説を受継いで『義経再興記』が顕れ出でた。

『義経再興記』に付いて一つの話がある。地学協会の会員北澤正誠(1827－1910 年佐久間象山の門弟・『竹島考証』「今日ノ松島ハ即チ元禄１２年称スル所ノ竹島ニシテ、古来我版図外ノ地タルヤ知ルベシ」と報告)と云う人は地学の熱心家で、先年成吉思汗の征略した地を巨細に取調べて上木(出版)もした位の人だが、此人が源義経外国渡の事を、先年英人の「サトー」(今の英国公使サトー氏)に間うたことがある。・・・・日本の源義経が韃靼地方に行き成吉思汗は即ち源義経であると云うことを外国で伝へ、貴国でも専ら其の説ありと承るが、其の出処証拠は如何なるものであるかと間うと「サトー」の答に、貴君は『奥羽観跡聞老志』(２０巻・佐久間洞巌著・仙台藩の国史編修史官)と云う書は御覧なさらぬかと言うから、知らぬと言うと、佐久間洞巌という学者が享保(1716－1736)頃に著した書で、其の書の中に義経の伝があって、外国に渡ったことが載せてある。・・・・(略)。

そこで北澤は此説は取止めのない話で、外国に其証拠とするべきものはないが定めて、日本人の伝聞想像から起って聞老志が其中で古いものであると云うことを「サトー」が諭したろうと合点したが、それでも猶も止まずして、北澤は種々穿鑿した所、某の地に碑文があるとか何とか云う説はあれど、終に突き止めた証拠物は出ず仕舞であったと、拙者北澤より直話を聞いたことがある・・・・。

義経蝦夷落の説は『清悦物語』(東北の義経物語)等の神仙話より起り、一転して金史別本又は建州漂着人話となり、再転して清朝の元祖説となり、三転して韃靼(清朝元祖)蒙古(成吉思汗)混合説の再興記となったが、畢竟(究極)伝聞想像から起ったから其の説が輾轉して落ち着かず、愈出て愈虚となる。成吉思汗説に至って虚誕の極度に達した。・・・・(略)。

義経が果たして成吉思汗であり、清国の太祖であるならば此上もなき大出来事、我が国家の為め如何計りの名誉であろうか、それでこそ新井、安積、相原、桂川、古賀の諸先輩も大骨折をして、どうぞ此説を実にしょうと取り掛かったが、(好奇の心は別にして)終に成立しなければ棄てるより外に仕様がない。拙者や北澤氏なども随分骨折ってはみたが、前述の通りであるから、義経蝦夷落ち以後の説は断じて成立せぬものと見認むる。但し当今は亜細亜東北辺遼東金州地方より吉林黒龍諸所へ遊歴も出来、・・・・。何処かで義経弁慶の石像・塑像・碑文等が出て、義経再興記の説と符合することがあるかも志れぬ、先ず今日までの取り調では其説は成立ぬ。・・・(略)》と結んでいる。

★注・欧州では地理学が国の発展をなし、我が国も赤松則良、北澤正誠、福澤諭吉、福地源一郎等に

より、明治１２年「東京地学協会」を創立した。

4年後に「源義経ノ女真ニ渡リシ事」 小田清雄著『博聞雑誌』第４５号　明治２２年９月５日発行、184－185 頁（『翁草』の抄録）より。『博聞雑誌』武藤山治の創刊。『時事新報』編集者として渋沢栄一の系譜に繋がる「政商」や徳富蘇峰などの御用新聞記者を攻撃した。学術随筆博聞雑誌・学術ノ事ノミヲ輯録スル随筆体ノ雑誌。論説・歴史・伝記・天文・地理・人事・農事等なる。

《源義経ノ女眞ニ渡リシ事　世ノ諺ニ源義経奥州高館城ニテ死セル真似シテ蝦夷ニ渡ル蝦夷人義経ヲ敬スル事神ノ如シ、後世ニ至テ彼地ニ於テ神ニ祭ルト云々此事拠有ガ如シ金史列将伝(金史別本)ニ、範車国大将軍源光録ハ者、日東陸華山ノ権冠者義行ノ子也、・・略。義経高館ニ在テ鎌倉ノ聽テ憚リ義行ト改名ス一説ニハ義経違勅(背むく)ノ後ハ時ノ摂政良経公ト和訓相通ズルヲ忌デ義行ト唱ヘラルト云々。・・・・(略)。

按ニ中華ノ北方ニ女眞国(女直トモ)アリ、其ノ中間ニ契丹国アリ、宋ノ徽宗政和５年(本朝鳥羽院永久３年ニ当ル・1082－1135)乙未女眞王阿骨打ミズカラ帝ト称シ国号ヲ「金」ト云ウ。金此時ヨリ勢熾(勢い盛ん)ニ成リ金ト宋トノ境ニ在ル契丹国ヲ宋ヲ宋ト牒ジ合セテ討滅し夫ヨリ宋ヲ攻侵シテ宋ノ都ヘ攻詰メ靖康(1126－1127)２年丁末４月ニ宋ノ上皇天子ヲ生捕テ金ニ連行ク。宋ハ都ヲ攻落サレテ徽宗ノ子康王ト云ヲ取立テ南京ニ行テ位ニ即ケ高宗ト号ス宋ノ地過半ハ金ヘ取ラレテ南ノ方半分ヲ宋ニタモツ是ヲ南宋ト云ウ。夫ヨリ６０年余年ヲ経テ南宋ノ孝宗(２代皇帝)淳熙(年号)１４年丁末ニ金ノ王雍死ス其ノ子金ノ第２代ヲ章宗(金６代皇帝)ト云ウ。

義経ノ高館没落ハ文治５年己酉(干支ノ組合せ４６番目)ナリ。夫ヨリ直グニ蝦夷ヘ越ラレ、蝦夷ヲ従エテ金ニ至リ章宗(金の第６代皇帝)ニ仕ヘラレシニヤ、世説ニモ今ノ清朝ノ天子ハ義経ノ裔也。故ニ清和ノ清ノ字ヲ以テ国ニ号クト云ヘリ。怪シキ説ニ似タレドモ時勢ノ転変、右ノ説々ヲ併セ考ルニ全ク浮タル事ニモ有ベカラズ、其ノ上近年ワタレル図書大全ト云ル書ニ今ノ天子ハ日本源義経ノ裔ト有ヨシナレバ、此義正説ナリヤ。義経外夷ヘ趣テ後ノ事蹟ハ本那ニ伝ワラナケレバ、須ク異那ノ伝ニ倚ベキカト神澤貞幹ノ翁草ニ云ヘリ。》と「ジンギスカン即源義経」肯定論となる。

★翁草=江戸後期の随筆。内容は歴史、地理、文学、芸能、芸術、宗教等に及ぶ、200 巻、神沢貞幹著。

その翌年に「成吉思汗ハ我ガ源義経ナル歟」 井上斧作『博聞雑誌』第 68 号・明治 23 年 8 月 20 日　307－309 頁より。

肯定論として・・・《ギルパー氏ノ史中ニ曰ク、満州人ハ前代日本人タルノ談合ヲ為スヲ第一ノ快楽トス。其説ニ曰ク、此満州ハ昔時日本人ニ属セリト。此事通常ノ歴史ニハ記セズト雖ドモ、往々満州ノ旧書中ニ見ル所トス云々。・・・(略)。

姓奇渥温トハ蒙古語ニテ飛泉或ハ水源ノ義ナリ。亦タキャンハギャンニ通ジ、此ヲ併用セバ源ト変化ス。亦タ子孫日子族云々ハ、是レ亦タ蒙古語ノヌーランユント謂フ語ノ訛ニテ、ニロン族ト云ヘルニテ、則チ日本族ト音甚ダ近ク、意モ亦タ相似タリ。・・・・。

又成吉思汗トハ衆汗ノ汗ト謂フ義ニテ、ジンギスカン又ゲンギスカント読ム。音訓源氏汗ニ似タリ。・・・・。又波斯(ペルシャ)ノ史ニ曰ク、成吉思汗ノ将ズイダ・ジュピー、欧州南部ヲ攻テ功アリト載スト云フ。蓋シ、ズイダ・ジュビーハ西塔・鷲尾ナルカト云フ説アリト。又博士エスマール氏ノ波斯史中ニ曰ク、成吉思汗ハ元トエーソー(蝦夷ナラン)ヨリ侵入セシ者・・・・。以上所列スル考証ニヨリ、余輩熟々観察ヲ下スニ、我ガ源義経ハ遠ク満州ニ遁走シ、成吉思汗ト変ジ亜細亜全州ヲ震動セシメ、以テ清国ノ遠祖ト爲リシ者ニランカ。》と述べる。

明治26年に「源義経靺鞨を経略して満州と改称し、大元皇帝の始祖となるの疑」

鵜沢正徳著の雑誌『史論』第三巻・史学書院・明治２６年１月２７日出版。６９－８０頁に瀬脇寿人の『浦潮港日誌』と「成吉思汗即源義経」をそのまま踏襲論文としている。

《文治の初、源義経京師(都)を脱して、蝦夷に渡りたりとの事は、開拓使編纂の北海道志、蝦夷風俗彙纂、及び海陸軍等の諸記録に詳にして蔽うべからざる事実なり。本編は故瀬脇壽人氏が日本貿易事務官を以って、浦塩斯徳に在勤中に探検せしものにて其の事跡稍々信ずべきものあり。近来、英人某氏の著、『義経再興記』なる書あり、此の編と彼是参観し、尚その事跡を確実にするを得るは史学家の本文なりとす。幸に其の捜索考究を惜むこと勿れ。余、官命を奉じて浦塩斯徳港に滞在すること久し、余暇を以って源義経の事跡を探索せんと欲し、本港に在留する人に逢うごとに之を尋問せり。偶々長崎の人斉藤七郎兵衛１日来て云ふ、日本人の墳墓蘇城に存在するものあり。之を探究するに源義経の古城に似たり。現に同地土人の説話なりと、余、此言を聞て益々疑訝を懐き、尚ホ本港在留の米人コーベル氏、及其の妻王氏金梅(支那人)並に支那人王鎮九等に就いて聞見する所と、又、伴信友が著書、及び蘭人失勃爾杜氏の説話とを輯録して、以って識者の参考に供ふ。

源判官義経、其の兄頼朝の譴責(不正)を蒙り、清原の秀衡が許を脱して蝦夷に渡り、夫より靺鞨国に到って、土人を愛撫し、燐邦を服して蘇城に拠り、其の地方を満州と改称し、

以って日本の武威を蒙古、靺鞨(沿海州のツングース系族)、中央亜細亜、及び欧羅巴州までも輝かせり。其の子も亦た乃父の豪勇を受継ぎ、支那国に打入って凱歌を唱へ、遂に帝位に登って世号を元と称せしと云ふ。

元は源氏の源の音を仮用し、又満州は源氏の始祖多田満仲の満を仮用したりと云へる事は、伴信友が『中外経緯傳』に諸書を引いて載る所なり。又蘭人失勃爾杜氏は久しく日本に在留して、我が国事に明らかなる者なりしが、嘗て露国に遊歴し、同国の博物館に於いて日本制の太刀と重藤の弓とを見、又ヲルガ(オノン川・蒙古ヘンティー山脈を源流)の河源に一廟あるを見たりしに、廟前に日本式の鳥居(５８頁)あり、是必ず日本人より聞たりし、勇将義経の蝦夷地より満州を経て韃靼に来り、死したる遺跡ならんと或る人に語りしと聞けり。

余、両氏が説を見聞せしより、尚此の事跡を詳にせんと、此地に歴遊せし人に逢う毎に、日本人の遺跡やありと尋問し、又此事を探索することを依頼しり。此行も亦斉藤七郎兵衛等に話せしに、斉藤の云るは山東、東州、黄色城人、劉鵬程といへる者に邂逅し、偶々語次(話の続き)日本人墳墓の事に及びければ、尚ホ切に聞しに本港より北に当り五十里余りの地を蘇城と云へり。従時日本国の名将某氏国難を避ける為に、九死を逃れ一生を得て、本地に渡来し、城郭を築き蘇生したる縁因に依り城名を蘇城と名け、今尚その城址あり。其側に此名将の渡来せし初め、暫時住居したる人穴石塔、及び台場等あり。又日本人の子孫と称する民家あり。此人穴は日本国の名将の住居し給う穴なれば、此内に入れば祟ありとて土人敢て近かずかず、然るに 15、6 年前、支那人 7 名が来て、何の祟ることあらんとて、此穴に一宿せばやと臥したりしに、夜半に至り 7 名其の穴の外に出されたり。此子孫と称する民家に、3 百年前、寛永通宝と題せる銭を鋳造し、今尚ホ此城の近傍数十村にて通用せりと。按ずるに、日本の名将の子孫、寛永通宝の文字ある銭を鋳造したと云る説は甚 訝かし。

義経の蝦夷に渡りしは、後鳥羽亭の建久年中(1190－1199)の事にて、寛永は後水尾帝の御宇なれば 4 百年余りの後世なり。然れば義経主従の子孫、建久年中より蘇城に在りしに、寛永年中、日本人此の時世の銭を携へ行き此子孫に與へしを、蘇城にて鋳造せし物なるべし。又名将と云う義経或は其の従者ならん。此外日本人の墳墓住所など云える所は、満州より奥地にも数十所あると云へり。余自から行きて尚仔細に探索せんと思えども、蘇城迄も行程 50 里余里、奥地は２、３百里もある由なれば容易に行を能はず、公務の余暇あらば探究せんと楽しみ居れり。其後斉藤は蘇城の者より、義経の事蹟を載たる書籍を借受け、且同所人の本港に寄寓した者を同伴すると約して帰れり。既にして斉藤は支那人王鎮九と

称し、稍々学事ある者にて、蘇城に２０年余住居せし者を誘ひ来りしゆへ、秋田の人鈴木運吉を通弁に頼み、日本人の古跡を問たれば、鎮九は蘇城に居りし時、土人より聞きたりとて左の如く答へたり。

往昔、金鳥諸、寛永といえる両人は日本国より渡来して、一城を築き蘇城と唱ふと。古来土人の口碑に伝ふれども、寛永が先に来れるか、金鳥諸先に来れるか、又時代も詳ならず、寛永蘇城の王位に即しより、其の後裔２８０年余年在位すると云ふ。

寛永の墳墓は蘇城に在りて碑文あり。金鳥諸の女、紅羅女(明史に紅羅と云う者あり、考えるべし)東京城を作ると云ふ其２人の棺槨(ひつぎ)は牡丹(地名)　江辺に在て現にその霊榧(かや棺の霊)は浮樞せりと。(本土の貴人の葬式は棺を土中に埋めず、樹上又は地上に浮置すると云)又蘇城に客居せしとき、寛永通宝の銭、今尚通用するのを見たり。此銭、日本より来れる寛永氏の鋳造せし銭と聞たりと答ふ。又運吉其の外の日本人も皆此銭を見たと云ふ。此談話如何にも虚言ならざる様子ゆへ、此寛永、金鳥諸両人が事蹟を記載したる書籍は無きや。一見致したしと頼みたれば、鎮九は承諾して帰り、其後王鎮九訪来りて、寛永、金鳥諸が小伝の書籍、大小両部あり、寧古塔(満州東部牡丹江中流、清朝が満州統治に重要な場所)に到らざれば得べからず。今之を購求(購入)し給ふには、別に人を遣はざれば急に入手し難し。寧古塔まで日本里数にて１２０、３０里に減ぜざれば、旅費３、４０円に下らずと云へり。其語気黄白(金銭の要求)を貪る体なれば、幸便に托せんとて帰したり。

過日、又日本人墳墓の事を問んとて、向に王鎮九を労せし謝儀を與えんと、斉藤に托し運吉と会合して附與せしむ。其後鎮九が筆語中に云う。満州地は往昔に粛眞と称し、中古に至り満州と改む。此地は上古朝鮮に隷属し、中古日本の版図に入り、爾後支那に従属し、現今露国に属せり、今君等本地に残存せる日本人の墳墓を探索し給ふは、中古に復せんと欲する意ならんと、此時、余心中大に驚駭し、今本地露国の領属たり。何ぞ我国に於て他人の所領を覬覦(身分不相応な願い)するの意あらんと答たれば、暫時黙止せしが、復寛永氏は日本人なり。其の旧地を復せは如何と云ひしゆへ、、余反覆(裏切る)して日本に於いては、誓て右様の意旨あらじと答えて止みぬ。今斉藤より聞くに満州人等固より露政に服せず、此回も窃に英船の来港を祈り、内外より討伐せんとする意あり。是故に寛永が古領を復し給ひと云ひしならんと云ふ。実に斉藤が推察明中なるべし。コーペル氏も亦話中に露国の兵隊愈々近日来着する評判あり。されど明春は英船本港に侵入して戦闘に及ばん。其時恐れべきは満州人なり。彼等は平素露官を怨望すること甚しければ、必ず裏切りすべし。且彼等は固陋(旧習慣)にして唯欲情のみ深ければ、英人と露人と日本人亜米利加人などの区

別なく、其欲心を逞しくして金銭を奪掠し、他那人を殺害せん、是のみ恐怖と云へり。

又去冬(昨冬)王鎮九が往昔日本人寛永と称する者蘇城に来住して本地の酋長となり、遂に支那を掠略せると云へるは義経の事ならん。然ども寛永は日本の年号、義経と年代相距ること４５０余年なれば、何人ならんと思いしに、新井白石の蝦夷誌を閲るに、土人義経を「オキクルミ」と称して尊崇し、又弁慶崎と唱える地ある事を載す。次に寛永年間、越前国新保の人韃靼に漂着し、燕京(北京)を経て朝鮮より日本に帰りし者あり、此者帰朝して韃靼地内の奴兒干(アムール河口に元・明代の軍行政府)と称する地に在留し、此地方の人家の門戸に神と尊奉して、義経の像に似たる者を懸ると云う由を載たり。

按ずるに蘇城にて日本人寛永と称して、往昔の国王と尊崇せしは、越前人の残り留りし人ならん。然れども義経も渡来したことは疑いなし。蝦夷地、樺太にて判官と尊敬し、又弁慶崎と称する地名ありて、死したりと云ふ地はなく、単に韃靼に渡海すと土人の口碑に残これり。又越前人の帰朝して云へる奴兒干は今の蘇城の辺なるべし。朝鮮国を閲るに吹風川と黒龍江との間に奴兒干と称する地名あり。

『書誌』岩崎克己の注釈。これより『史論』第３巻の７５頁から７９頁の記述を省略する。この省略部分の記述は第1章22頁から25頁に掲載した。この部分は岩崎克己氏が『浦潮港日記』の明治１０年３月６月までの草稿がないので『史論』第３巻の７５－７９頁は、『源義経靺鞨を経略して満州と改称し、大元皇帝の始祖となるの疑』鵜澤正徳著から記載とあるので其の様にした。下記の記述は『史論』第3巻の79頁から80頁となる。

予が本港に来りしより源義経の古跡を探索せんと、土人に逢う毎に此事を問いしに唯日本の智勇兼備なる名将の、其の昔蘇城に渡来し、一城を築きて此地方を押領し、其の子とも其の孫ともいへるが智勇あって蒙古を席巻し、遂に支那地に入り「元」の世を起せしとなん皆いらへたりき。余又休暇の時に蘇城に趣むき、日本将の事跡を探らんと、１８７４年鏤行(刊行)、英国龍動イムレー氏板の日本国北部航海地図を閲するに、本港より、北に当る海岸２０里ばかり、蘇城より 7、８里の所にハンガン崎と称する地あり。本港在住の満人に此地名の来由を質問すると、古より唯ハンガン崎と唱え来るといえり。唯ハンガンと唱へ来るといへるあり。往時ハンガンと称する人居住したる地なるゆえ、斯なん唱えると云うるもあり。是れ九郎判官源義経の始めて来着したる地か、或は蘇城に城郭を建築する前、暫時此所に居住した地なるゆえ、斯く唱え来る事と察せられる。されば判官義経の衣

川より脱走したる道路は、奥州を発して箱館に来り、蝦夷地を経過してサガレーン(サハリン)に渡り、夫より此ハンガン崎に渡来して、蘇城の地を卜し築城した事明らかけし。其証は箱館人に聞し事あり、蝦夷に義経明神と唱え、土人の崇敬する小社諸所にあり、又義経崎、弁慶崎、など唱える地ありといへり。

余も現に義経蝦夷争戦記と題したる古書を、箱館の佐野與三右衛門が宅にて一覧せり、又サガレーンに渡来して一村に到り、義経明神に参詣したり、然れば義経の満州に渡り、支那を征伐して「元」の世を起したりと、今日迄も口碑に遺れるは実事にこそあれ、伴信友が『中外経緯傳』に諸書を引用して浦潮港よりニコライスク地方は、上古蒙古に属せし時肅慎と称し、其の後独立して韃靼と唱へ、義経渡来して其始祖満仲の名字の「満」を取りて満州と改め、夫より支那を掠略して、其の姓源氏の音を假りて「元」と称したと云へるは、決して誣言にあらざるなり。(尚委しき事は、予か本港雑記をあわせ見るべし) 》

以上７５－７９頁を除いた全文となる。

『浦潮港日記』に『史論』第3巻75―79頁を記載した理由は・・・『浦潮港日記』の明治１０年の３月から６月の草稿がないので、「源義経靺鞨を経略して満州と改称し、大元皇帝の始祖となるの疑」鵜沢正徳著の雑誌『史論』第３巻の７５－７９頁を使用したと岩崎克己氏は転載したと述べている。鵜沢正徳は瀬脇壽人の歿後１５年後に『浦潮港日記』(原文カタカナ)の日記記述を解説的に論文化したものになる。『史論』の誌面に瀬脇壽人の草稿説明があったのかも知れないが、筆者はこれについては追求不能となる。

ここで少々不思議なことは、『浦潮港日記』の全文を何処から鵜沢氏が手に入れたのか。鵜沢は明治１８年の内田弥八の『義経再興記』からも考究したと述べている。瀬脇壽人の没後１５年後に鵜沢は『史論』に掲載している訳で、日記の前半部の原文は親族の瀬脇三重子氏蔵となっていると、岩崎克己は昭和１８年の『書誌』に記している。ならば鵜沢は『浦潮港日記』の全文を外務省から手に入れたことになる。とすれば、ルート１つが富田→末松→福澤→内田弥八となり、ルート２つが外務省から別枠で全文を『史論』の発行所・史学書院・編輯者・鵜沢正徳へ明治２６年頃(１月７日)に渡した人物が存在したことになる。これを解く術はないが、２つ目のルートの人脈には、「ジンギスカン即源義経説」を世に吹聴し、大陸に目を向かせようとした鵜沢正徳や大陸進出を煽る人たちが、『史論』に発表したと見ることができる。

第7章 小谷部全一郎著『成吉思汗ハ源義経也』を考察する

小谷部全一郎　『成吉思汗ハ源義経也』の著者（1867－1941）慶応３年秋田県生まれ。横浜英語学校に学んだ後、明治２１年、渡米。同２８年、エール大学を卒業、組合派の牧師としてハワイの日系人教育に尽力。同３１年に帰朝後、アイヌ保護運動に熱意を燃やし、翌年、北海道胆振国虻田のアイヌ部落に移住、同３４年に虻田土人尋常小学校に、同３８年には土人乙程実業学校を設立する。同４２年、貴族院に請願した「土人保護の議」が通過し、土人学校が国営化されたのを機に北海道を引き払い帰京する。大正８年にシベリア出兵に陸軍通訳官として従軍する。同１３年に初版『成吉思汗ハ源義経也』を出版、昭和４年、日本ユダヤ同祖論の古典『日本乃日本国民之起源』を上梓、同７年にはユダヤ問題について陸軍大臣に意見具申、上海のユダヤ人機関誌に執筆している。昭和１６年、東京大井元芝町の自宅で死去。享年７３歳。（**参考文献・『成吉思汗ハ義経也』復刻版・八幡書店。「義経伝説をつくった男」秋田魁新報連載記事・1993 年 2 月 15 日―4 月 6 日。『虻田町史』第３巻より**）

小谷部全一郎が創設した虻田学園跡

『成吉思汗ハ源義経也』の著者・小谷部全一郎が創設した通称「虻田学園跡」を訪ねた。今日では一般的に「とんでもの本」と評価される小谷部全一郎であるが、虻田町ではどの様な位置づけをされているかを、興味を持ってこの町に入る。虻田町は小谷部全一郎の経歴を、ありのままに解説され、大人の対応をとっていた。虻田町の「小谷部全一郎と実業補習学校」跡の説明板に次のようにある。

虻田学園跡・虻田役場内・現洞爺湖町

看板の説明は《明治元年(1868)秋田にうまれた小谷部全一郎は東京で苦学を重ねたうえ、明治２１年渡米し、ハワード、エール両大学で神学や哲学を学んで同３１年帰国した。翌年北海道に初めて渡りアイヌ民族の現状に激しく心を動かされ、板垣退助、大隈重信、二条基弘、近衛篤麿らの賛同を得て「北海道旧土人救育会」を設立した。その目的はアイヌの若者達に農工技術を習得させ貧困から救おうというものであった。東京神田での大演説会での「滅びゆくアイヌ民族を救え」という熱烈な訴えに感動した白井柳治郎と共に、明治３４年虻田村に適地を求め、翌年四月虻田第２小学校をつくり白井柳治郎は訓導無[1]とな

り、小谷部全一郎は補習学校の建設資金集めに没頭した。明治３７年２月には私立実業補習学校「北海道旧土人救育会虻田学園」の設立認可、９月には校舎も建ち、理事長の小谷部全一郎をはじめ農業は白井柳治郎(後に校長吉田巌)、学科は大越連治、蚕業(さんぎょう)織物は中山桂枝らが担当した。生徒は小学校を終えたアイヌ子弟を全道から募り、全寮制度という画期的な学園が全国的注視の中で発足した。しかし、年々学園の経営は困窮をきわめ、入園者も減り資金面も思うにまかせず、初志の理想には遠くなり、小谷部全一郎は挫折感のうちに病に倒れ、明治４２年１１月すべてを吉田巌(アイヌ研究家・帯広市)に託して虻田を去った。同年７月有珠山(うすざん)噴火による避難、入園者皆無という状況となり翌４４年四月閉校となったが、小谷部全一郎のアイヌ教育に傾けた情熱とその偉大な業績は、永く教育史上に残るものである。同校舎は大正３年村役場の焼失により仮庁舎に使用した。》とある。

１、訓導無=教員の資格、教え導くこと。国民学校には校長及び訓導を置くことを定めた。

筆者は小谷部全一郎を擁護するものではない。明治時代の黎明期「ジンギスカン即源義経説」がどのような歴史的背景の中で生まれ、どのような経緯で流布の広がりをみたのか、そのことが日本の歴史にどのような影響を与えたかを、確認したいからである。よくあるスポーツ試合終了後に、結果を承知の上の解説云々や、今日のモラル論や、後世の平和時に自己保身の安全を担保される上での評論云々でなく、当時の時代フィールドに降りて、現場を見渡す歴史探究をしたい。先ず『成吉思汗ハ源義経也』を拾い読みする。

『成吉思汗ハ源義経也』 小谷部全一郎著・冨山房・大正１３年１１月１０日発行より

「巻首の辞」に《満州及ビ蒙古ニ遺(い)ル我ガ源九郎義経公ノ史実ハ、年ヲ遂フテ漸(ようや)ク判明センモ、数百年間実地研究ヲ軽視セラレタル後ヲ承ケ、先人未発ノ筆ヲ越シテ之ヲ書ニ記載スルニ当リ、恰(あたか)モ羅針ナクシテ太洋ニ航シ、或ハ闇夜荊棘(けいきょく)(いばら)ノ山路ヲ辿ルノ感アリ。・・・・》　　大正１３年１１月３日　　著者謹識

１章―１２章からなり、なかなかの名文調で記述されている。「成吉思汗即源義経」の論説は、今日では「とんでもの本」とされているが、現今の歴史モラル論での解釈批評を筆者は控える。小谷部が現地を探索行動はロシア軍や馬賊の隙間をすり抜けて、内蒙古・沿海州へ義経伝説を求めて探索している。人馬を見ては馬賊でないか、ロシア軍でないかと、肝を冷やす探索であると語っている。小谷部は鳥居龍蔵のように陸軍に守られての行動が

羨ましいと、愚痴話を語る場面もある。筆者もモンゴル・ジンギスカン探訪の旅の経験から現地探索には感心がある。

余談・モンゴル旅行で「ジンギスカン即源義経説」をガイドに質問してみた、・・・ガイドは「そんな話は聞いたことがない」との回答である。逆にモンゴル側からの質問を受けた、「日本人にはお尻にアオイアザがあるのは、フビライが、文永の役、弘安の役と日本国を攻め込んだ「元寇」時、嵐によって多くのモンゴル兵士が船を捨てて、日本国に上陸した。その兵士の後裔が今の日本人であると、学校教育や大人たちから、そのように聞いている。それは本当か」と逆質問された。思わず笑いながら「違う」と答えたが、モンゴル人たちは本当にそのように思っていることだけは確かである。

小谷部は終章の結に、「成吉思汗逝いて茲に七百有余年、其後の世界は殆ど白人横暴の歴史にあらざるはなく、有色人種は悉く劣等視せられて彼等のを壓迫蒙り、印度其他の国民の如きはその生存に缺くべからざる土地をすら略奪せらるるに至れり。四面恰も薄氷を履むが如き亜細亜洲の一隅に介在して自衛の武備を整え、自主独立を維持する我が日本を目指して、彼等は黄禍(黄色人種)の本源なるが如くに誣(人を欺く)う、百方悪辣手段を講して日本を壓伏することに汲々たり。蓋し日本にして倒れるれば、頓死の亜細亜は自ら滅亡し、世界は白人の専有に帰するものと妄想するが故なるべきも、天祐を保有する三千年の国家は彼等が考ふるほど然かく容易に倒れるものに非ず。・・・・成吉思汗第二世が、旭日昇天の勢を以って再たび日東の国より出現するは蓋し大亜洲存亡の時機にあるべき耳」と述べている。

この結びの論考が「成吉思汗即源義経説」を書く原動力となっていたのではないか。そして明治大正初期に沿海州・満蒙の大地に日本武将が築いた城跡や鳥居の証があると、『義経再興記』の説を踏襲して世に刊行した。ジンギスカン=義経伝説を広め、世は大陸へと王道楽土・五族協和の掛け声を高らかに、膨張国家思想とあいまって、満蒙の大地に義経が領有していた大地に移り住もうと云う大和民族魂に火をつけたことが、この本の熱読された理由であろう。今日的モラルではプロパガンダと言われているが、当時、欧米で囁かれた日本人を指して黄色人種脅威論(人種差別)の国際世論に、黄禍論に対抗する論理として「ジンギスカン即源義経」説を国際諸国へ向けて雄叫びを挙げて、大和民族の精神高揚

に繋げたこの読み物は、後の日本に与えた影響は大きいと言わざるを得ない。

「第４章　義経蝦夷に逃げる」（６９頁）　《・・・日本は皇室中心主義と陸軍に斯く各々其の特色を発揮して国を保つ所以なり。然れば仮令(たとえば)列強国の協商(協議して決める)を以ってするも、建国以来磅礴(混じり合う)として其の国に存する国性なるものは、亡国に至らざる限り滅失(滅び消える)し得らるべきものにあらず。彼の猶太民族の如きは、その国全く滅亡せしより１８５０余年に及ぶと雖も国有の猶太教に拠りて依然其の民族性を維持し、生存を保ちつつあるを看れば縦ひ国亡ぶるも民族の全滅せざる限りは国性国魂の滅ぶるものに非ざること瞭然(明白)たり。・・・》

「第５章　日本と粛慎及義経大陸に渡る」（111―112 頁）　《・・・義経が蝦夷より大陸に渡りたる経路を、土俗の口碑に拠りて推考するに彼は古より夷民が交易其他漁業の為に往来せる海路を辿りて樺太に渡り、彼処より一衣帯水の今のニコラエフスク注に到り、黒龍江を遡りてハバロフスクに上陸し、此処に或る一定の時期を過ごし、更に同処を左折して流るる黒龍江の支流烏蘇里河を舟行し、その上流なる今の浦潮斯徳の東南に方る蘇城に上陸し、此処に築ぎて居り、後ち此地の北西に方る今のニコリスク(現ウスリースク)即ち当時の首府なる双城子に居を移し、更に西進して興安嶺に本拠を置き、徐に西進を断続せるものの如し。而して彼は如何なる機運に乗じ、如何にして蒙古の大汗と成りし乎は、専ら口碑に索め、遺れる風俗習慣に尋ね、遺跡を探りて文字を超越したる活歴史を読まずんばある可らず。》

注・右ニコラエスク・ナ・アムーレ、日本では「尼港」。ハバロスク地方アムール川が河口部に流入する地点から80ｋｍ上流地点。ハバロフスクから 977ｋｍ。清領代はミィアオジエ(廟街)呼ばれた。1920 年(大正９年)ロシア内戦時、赤軍バルチザンによる「尼港事件」が起きる。赤軍 4300 が、尼港住民が略奪、虐殺が起き、受けて立つ日本守備隊殲滅された。殺された住民 6000 余、日本人犠牲者 731 人にのぼる。写真は 20 世紀初頭、ウィキペディアより。

「第６章　西比利亞及沿海州の蘇城」（124 頁）　《現在の西比利亞に於ける自然の状態

は、往昔の粛慎時代と更に異なる所なかるべく、露将ハバロフは、勇壮なる多くの部下を率ゐて、西紀１６４９年に季候殆ど我が日本に等しき南部露西亞より今の沿海州に侵入し来り、其の地方に居住せる支那人を遂いて都市を建設し、露国の移住民は、此処を郷土として生業を営み、（にぎやかに繁盛）を極めつつあるは、今のハバロフスク市なりとす。・・・現在の浦潮を距る東北約３０里、スーチヤン河右岸の支那山丹人の部落ホニヘツザに、方形の古城址あり、土人は此れを蘇城と称す。

・・・支那山丹土人の居住する蘇城付近に昔より伝はる口碑に曰く、往昔日本の武将が危難を避け、本国を逃れて此地に来り、城塁を築きて居り、其の城をサーチャン（蘇城の義）と呼びたり。その武将が此地に来新に城を築くまで、今の城址の在る丘の反復の洞窟に棲みたり。

・・・イーポン（日本人）より渡来せるその武将の名をキン・ウ・チョと云う、此処の蘇城を築きて、・・・往昔日本国より武将が落延び来りて、此地に塁塞を築き、蘇りたる義にとり、蘇城と命名して・・・蘇城を築きたる武将の名を、キン・ウ・チョ（源をキン・義をウ・経をチョ）と称すること、及び其の武将が後に支那に攻め入り、強大なる国を建てて、王となりしと伝ふるは、彼の満州に出没し、蒙古に入りて大汗となり、而して支那其他の邦国を併略せる。・・・チン、ギ、ス或はジン、ギ、ス又はゲン、ギ、スなどと国々の語音の訛りに拠りて呼ばれる、成吉思汗の前身に彷彿たるものあり。》とあり、『義経再興記』や『浦潮港日記』を踏襲している。

「第７章雙城子（清朝代呼び名）と義経軍の古碑」　（142－143 頁）

《・・・・双城子の市邑に土俗の所詮義経軍の古碑と称するものあり。土人はこれを日本の武将の碑とも、或は支那の将軍の碑とも伝う。居留日本人は一般にこれを義経の碑と称し、而して其の建てられたる市の公園を、我が居留民は現に之を義経公園と呼んで有名なるものなり。土人は此の古碑を将軍の頌徳碑なりと云い、日本人の或者は義経の墓なるべしと称するも、・・・・。此の古碑に対して居留日本人は義経公の碑として敬意を払い、土着支那人其の他の亜細亜民族も、古来の習慣を墨守して敬礼し、露西亜人も必ず脱帽して敬意を表しては、懿徳広大なりし古名将の俤を不言の裡に偲ばれるなり。

・・・今は大亀[1]の形の台石に建てられた石碑は、数年前露国人がハバロフスクの博物館に運び去りたるなり。同地在留医師の言に拠ると、磨滅せる碑面には、幽かに笹龍胆[2]と義の文字を読まれると云う。・・・・ハバロフスク博物館に在る所詮義経の碑と称するものは

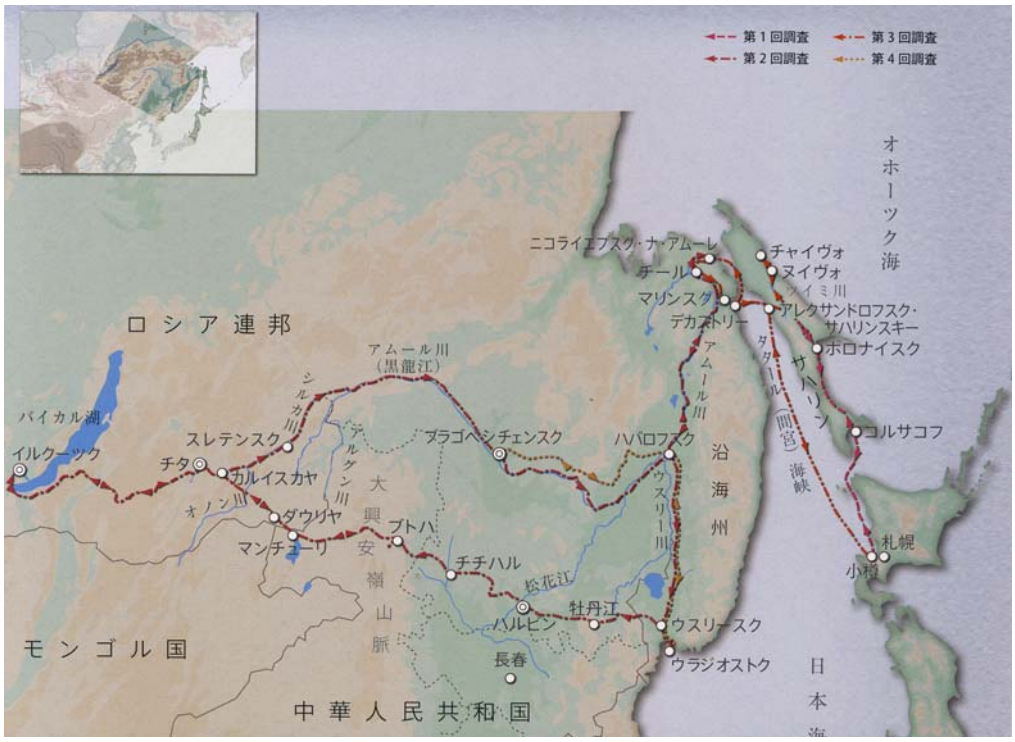
白色を帯びたる花崗岩の一種なり。石碑の表面には厚くセメントの漆喰(しっくい)を塗り、何者か彫刻してあるものを隠蔽(いんぺい)せり。・・・・露国人が殊更に此の古碑を漆喰にて塗り、隠蔽せしは、自国に不利なる記事がある故なるべし。・・・》と。

この記述は亀石の碑石を小谷部は見ていないが、見ているかのような碑文の解説は、説得にかける。どうやら、この「笹龍膽」(113 頁参照)は蒙古人が住んでいる熱河周辺に多くあったらしい。家紋、紋章というより「装飾」であるらしい。これに近い「梅鉢」「龍」などを彫ったものがあると云う。　　**1、大亀について第４章６６頁参照。**

2、笹龍胆=第８章「新聞記事」１２月２４日の記事の絵図１１３頁を参照。

同時期に大陸入りした鳥居龍蔵(とりいりゅうぞう)の「ジンギスカン即源義経説」への回答

鳥居龍蔵は大正８年、東部シベリア及北満州調査、１０年、北樺太及第２回黒龍江調査、昭和３年東部シベリア調査に入っている。小谷部全一郎と同時期に日本軍の要請で満蒙から東部シベリアに入った人類学、民族学、考古学者のフィールドワークの鳥居龍蔵が『中央史壇』に反論を載せている。



「地図に見る鳥居龍蔵の足跡」の地図・鳥居龍蔵記念博物館「サハリンとシベリアの調査ルート」より

１９１２(明治 45・大正元)年に初めてサハリンを調査、１９１９年に第１回シベリア調査でウラジオストクからハルビン、マンチューリ、チタを経てバイカル湖沿からイルクーツクを訪れている。帰路、大興安嶺付近の民族調査、その後、スレテンスクからアムール川を下り、ハバロフスクを経て河口のニ

コライエフスクまで踏査した。１９２１年に小樽から北サハリンを経てアムール川河口付近を昭和３年（１９２８）に沿海州からアムール流域を調査した。徳島県立鳥居龍蔵記念博物館冊子より

「小谷部さんは大陸の例を幾つも引いて居られるが、予は不幸にして、氏が立証されたものを大概見たが、同氏の考えとは反対に、義経らしいものはなかった。オノン河辺の鎧は、似てもつかぬものであるし、源氏の笹りんどうの紋云々という話にも信用がおけぬ。・・・氏がこれらの地方を巡遊されたと云うことの功労に対しては感謝するけれども、集められた材料は義経と何の関係もない。」と静かに語っている。

鳥居龍蔵の世の研究者への反論・・・東亜細亜を踏査した『鳥居龍蔵全集』８巻、朝日新聞社・昭和５０年発刊。『人類学及人種学上より見たる北東亜細亜』（大正１３年７月刊を集録・岡書院）より。

『人類学及人種学上より見たる北東亜細亜』の自序に、《シベリア出兵は失敗であると叫ぶ人がある。私は一学究、もとよりその可否に関しては何も知らないが、少なくとも出兵によって当地調査の便宜（べんぎ）の開かれたことは、１つの効果として考えなければなるまい。然しながら、当時駐屯軍の保護便宜あるに拘らず、我が国紳士（軍隊と無関係な学者研究者）が同地の調査あるいはその他の旅行だもあえてしなかったということは、最も遺憾とする所である。この千歳一隅の時に会し、当時まで秘密庫として窺知（きち）(伺い知る)するを許されなかったシベリアに、何故に我が国紳士は足を向けなかったのであるか。これらの諸君は、シベリア出兵の失敗を語る前に、自ら己が心中を省みて然るべきであろう。・・・斯学（しがく）(この方面の学問)上相当の結果を齎すを得たことよりして、シベリア出兵は人類学、人種学、考古学に対して貴重なる寄与をなしてくれたものとして、深く敬意を捧げたいのである。》と述べていることは流石（さすが）である。

更に第１章の「３・東京よりウラジオへ」に、《シベリア出兵があながち無意味でないことを考えたのである。これを利用するの如何ということは、日本人の任務であって、漫然この機会を看過（かんか）(ほうっておく)して何ら利用することなくば、シベリア出兵はその効果を齎さないのである。故にシベリア出兵をして意義あらしめんとすれば、独り軍隊のもならず、日本国民も亦これを利用しなければならぬのである。若しこれを利用しなかったならば、シベリア出兵は単に軍隊としての失敗のみならず、日本国民として亦失敗といわねばならぬ。》

人類学、考古学のフィード・ワーク大家の考えていることが凄まじい。国際紛争もなん

のその、学術研究に役にたてば何でも利用する強欲心に筆者は脱帽する。鳥居は敗戦後、直には日本に引揚ず、中国ハーヴァード燕京大学客員教授に招かれ、そしてやり残した遼朝時代の研究に専念している。（鳥居龍蔵全集８巻参照・１－１２巻）

留学時代の小谷部肖像

余話として『ジャパニーズ　ロビンソン・クルーソー』小谷部全一郎著生田俊彦訳。この書は小谷部がアメリカ渡航への苦難の話と、留学体験を英文でボストン・ピルグリム社より出版した。明治 31 年日本人 31 歳の自伝は米国民の知識人に反響はあった。国内に於いては『成吉思汗ハ源義経也』が熱読され、文化的な自伝は受け容れられない時代となる。

余話・ジンギスカンの風景

ジンギスカンの馬つなぎの地・オノン・デリウン・ボルタグ、ビンデル村クリルタイ遺跡から３ｋｍ、テムジンが馬を繋いだ所とされる。アメリカとモンゴルの両国研究者グループが「ジンギスカンの誕生地・陵墓」として割り出した所。現在のモンゴル政府はジンギスカンの聖地は発掘させない。

左・クリルタイ・石碑前で火を焚き天空に火の炎を上げ神に誓う儀式場となる。「テン」はシャーマニズム信仰、蒙古の「テングリ」は天神を指し、天神の「テン」を漢字音写「天」を当てる。

右・チンギス・ハーン誕生碑　ヘンティ県ダダル・チンギスの誕生記念碑「この身ははてるとも我が国は永遠なり」とウイグル語碑文となる。ソ連邦時代に森の中に在り、撤去を逃れた碑で、独立後モンゴル国民のシンボルとなっている。

第8章　新聞記事を拝見する

『読売新聞』 1877(明治10)年1月6日・朝刊2面

○ 前にも浦潮斯徳の事が出して有りますが、此所へハむかし日本の義経が渡ッて同所より五十里ほど北の蘇城といふ所にハ、義経の墓が三ッ立てあり(蘇城といふハ義経の城あとだといふ)城跡にハ寺もあり、義経の子孫だといふ家が今でも有て古い軍書もあり、此家でハ「寛永通宝」の銭を鋳て満州あたりへ出すといひ(或る人の説に寛永の頃と義経の頃とハ四百年ほども時代が違ふので妙だが寛永ごろに誰か此国へ渡ッて寛永通宝の銭を彼の義経の後胤へ與へたもので有ろうといふ)此ほかナホーツカまたはニコライスケあたりにも日本人の古い墓が有り、ソワンキングの城内にも日本人の墓が四ッほどあるといふ。義経の築いた城ハ蝦夷地で九死一生の中をのがれ、辛くして彼の国へ渡ッたから蘇生した心もちで、城の名をつけたので有ろうともいふが、委しくハ又しらべて書たしてましょう。

1885(明治18)年3月26日・広告・朝刊3面

○ **『義経再興記』** 判官義経の跡を蝦夷地に晦ませしや其の後の事跡に附いてハ世人の常に疑がう所なりしが、今度芝露月町の栗田信太郎(栗田書林)方より出版せし義経再興記ハ内田弥八氏の訳述にして義経が元の太祖鉄木眞なる事より、今の清朝ハ其の後胤なる事の確証を挙げて説明せし珍書なり。

1905(明治38)年2月1日・朝刊5面

○亜爾泰山頭の神鏡 バイカル湖辺アルクスク約五十里アルタイ山頭に近きアラールス、スカャステープと称する所に、一小村あり、此地一面ハ全く開墾せられ居るも一面ハ全く砂漠の地にして人家僅かに十二三戸、人種はブリヤーヅと称する蒙古土人にして、其鼻ハ低く頭ハ平圓なり、此処に一個のラマ廟ありて僧侶老少八人之に住す。該廟の祭礼にハ婦人ハ金色を以って飾りたる帽子を戴き、又乗馬相撲等の余興あり。其有様恰も我国風に酷似し、殊に廟の正壇東方に向って安置される神鏡(神霊のご神体)ハ一見我古代の製作其の儘なるを以って、寺僧に就て之れを問へバ、今より三百年前支那より来りしものなりと、伝ふ取って之れを検するに果して裏面にハ高砂の尾上松[1]並に爺姥の両像を彫刻し鶴亀の紋あり、傍に正三位藤原秀衡朝臣謹製と記せり。・・・・如何なる因縁によりて数千里、しかも海を隔てし此地に渡航したるものなるやハ、何人も源義経の往事を想起するとならん、然らバ数々史学者によりて伝へられたるジンギスカンの義経の後身なりしと、又必しも無根

の説ならざるべく殊に弁慶の古墳址ニコリスク(墓ハ扁平の石を以って蓋ひあり露人近年之をハバロスカに移せり)に存在せりと云ふが如き未だ正確なる史上の考究を遂げたる人なきも古るき年代の情形ハ必らずしも是れを付会とのみ云ふべからずと或る人ハ物語れり。

１、高砂の・・兵庫県の高砂、その地が尾上神社にある松が有名。「高砂の松」「尾上」にかかる枕詞。

1905(明治38)年2月4日・朝刊5面

○亜爾泰山頭の神鏡に附いて　鳥居龍蔵　寄稿

本月一日の読売新聞を読むに、其雑報中に『亜爾泰山頭の神鏡』と題し、ブリヤーツ種族が本邦の古鏡を神廟に安置せらるることを記載せられたり。こハ面白き事実にして吾人の大に研究するに足るものなり。されバ余ハ是に就いて聊か思ふ所を記さんとす、読売の雑報子ハこの神鏡に就いて、かく云はれたり。

以上の解釈ハ、一理なきにあらずと云へども、余を以て見れバ、これハ当れる説にあらず。ただに当れる説にあらざるのみならず、又論理上より見るも、必ずしも□□(判読不明)あるべき事にあらざるなり。

義経の満州に渡航せん事、ジンギスカンに関係ある事ハ、これハ一種の伝説にして、決して歴史にあらず。されバ、ザーグとしてこれを見れバ、或面白き所あるも、これを歴史として見れバ、一も価値あるものにあらず、抑も伝説なるものハ歴史上の事実にあらずして、民族の精神中に裔き出す、一種の詩とも云ふ可きものにして、伝説の価値ある全くこの所に存ず。・・・・義経の満州に渡りたりと云ひ、ジンギスカンに関係せりと云ふも、又一種のザーグにして、我国民が英雄の末路を憐れむ余り、・・・・義経の満州ハ又これを以て見る可きものにして、決して歴史上にしかありしものなりと云ふ能はざるなり。・・・・この古鏡其物より見るも、これハ決して義経当時のものにあらず。・・・・是れ明かに徳川時代に盛に行はれしものにして、決して源平時代のものにあらず。・・・・この輸入者ハつねに千島、サハリン島の土人の手に因ってなしき、即ち千島アイヌハ蝦夷アイヌより本邦の物品を受け取り、再びこれをカムチャツカ半島のカムチャダールに送れり、尚ほサハリン島のアイヌはギリヤーク、オロッコ等の手に伝へ、一衣帯水のアムール河畔の土人に送りしなり。・・・以上の事実にして已に存在するとせバ、アルタイ山付近のブリヤート(モンゴル系民族)が徳川時代の古鏡を所持すれバとて、何ぞ殊更に源義経に附合する必要あらんや。・・・其年代ハ古き時にあらず、徳川時代にせられしものならん。

1905(明治 38)年10月23日・朝刊1面

満珠管見(10)　義経の墓　昌図府(遼寧省最北部)の西、公主陵に笹竜胆の紋を付けた墓がある、之が義経の墓であろうとの事で、一時中々評判になったよしながら、道遠くして余ハ行く暇がなかった。『義経再興記』の著者ハ、この頃龍動で又一つ証拠が出来たと、再販の支度に嘸いそがしいであろう。義経が満州へ入った、義経が清朝の先祖である、清和源氏の清の字を取って清国と名づけたなどと、久しく聞くことで、夫に反対する人ハ、義経の事蹟の載ってゐるといふ金史別伝ハ無い本、古今図書集成の御製の序とかに見えるといふが、その図書集成も無い本であるとまで、断言した人もあったそうぢやが、尤も近年まで古今図書集成ハ日本に二部より無かった。・・・(略)

併しまんざら種のないことでも無からう。何かこれにハその伝のもとがなからうかと思ってゐたが、此頃ふと思ひ当ることがある。又一つ世間のもの笑の種を播ておかう。全体満州ハ鉱物に富んでゐる。「金」の太祖の詔の中に「遼ハ鑌鉄(はがね)を以って号とす」と見えて、遼といふとハ鉄から出た名である。又「金ハ変せず、壊れず以って国号とすべし」とあって「金」といふ国号ハ勿論鉱物から出てゐる。金史にハ「国に金水の源あるを以って国名とす」といふ説も見えてゐる。遼の中京に金源縣といふ地名もある。その名ハ、金から元まで伝ってゐた。それで国号の「金」とこと一に金源といっているのがある。

「始於金源氏之□」　　(開原石塔寺正徳十一年の碑文)

「我朝得姓曰愛新覚羅氏、国語謂金曰愛新、可為金源同派之証」

(乾隆四十二年諭旨)(1736－1795 の年号・清朝 6 代皇帝)

この「金源氏」といふことが何かにあって、之をギナタ流(句読点を間違えた読み方)に読んだが、何かして、夫から広まったのではないだろうか。金史や、今の清朝の歴史はあまり人の読まなかったものであるから、誰やらがそのうなことを云ひ出して人をおどろかしたのではなからうか。・・・(略)

義経でも頼朝でも今ハ、笹龍膽の紋にかくが、あれハ村上源氏の紋で清和源氏ハ引両が紋であるといふ説もある。そうすると笹龍膽もあまりあてにならぬて。昌図府辺にハ丸に牡丹、蓮花などを書いたのもある。又丸に桃を書いたのもある。これハ桃太郎が攻め入った処は矢張満州であって、其時降参した印に鬼がつけたのであらうか、或ハ為朝の琉球に於けるが如き関係で、当人ハ本国へ凱旋したが、子孫が彼処に今に繁昌してゐるのかもし

れぬ。伏姫の遺蹟をさぐりに行った人たちハ、満州へ桃太郎の子孫を訪ふのも妙であらう。

1909(明治42)年8月23日・朝刊1面

○ 義経再興記の新論拠　藤原家、支那大陸及び義経の関係　佐々木照山

第一に義経は奥州から前へ落ちて行ったか行かぬかが問題、若し落ちて行ったとすれば何を頼にしたか、・・・・幾百年鎖国の後から考へれば、靺鞨などいへば耳遠い感じもするが、弧帆(海に浮かぶ一艘の帆船)風を孕んで自由に太洋を駕し得た昔に在っては靺鞨幾千里程を見猶ほ比隣の心地で有ったらしい。古くは多賀の古城碑を見ても分る、靺鞨茲を去ること云々の文字があるのに依るも、我北辺と彼との間に交通の盛に開けて居た事が知れる。・・・・北へ渡れば蝦夷ケ島だ。更に進めば樺太だ。其処からは名も著き間宮海峡を容易く越えて黒龍江口に達し、その辺は即ち成吉斯汗勃興の地ではないか、此に至っては一巻の義経再興記徒に無稽(でたらめ)として抛ち去るべきではない。特に年代を推せば相等しい。・・・義経と大陸、其処に何等の連鎖なしとは考へられぬ事だけを、明にして置く。

1909(明治42)年9月5日(日曜日)・附録1面

○「義経再興記の新論拠」を読んで　小川柳坡

多くの学者は義経が陸奥にて殺されたものと断定して居るが、自分等は殺されぬ説が信ぜられてならぬ。・・・・サンタンコへと云ふ地名が間宮林蔵の紀行にある。此のサンタンコへは日本音であろう。山丹越とか、山靼越とか云ふので、山越川越と同一の意味であるべく思われる。・・・・義経が黒龍江に活動した根拠地かも知れぬ。如何にも日本人が選択し相なる土地柄でもあり、日本流の甲冑などが此辺一帯から発見されて、浦塩の博物館などにも陳列してあるなど、彼や此と思ひ合わせると、義経が死なぬと仮定すると、其地理上土人伝説上、蝦夷より樺太を経て黒龍江に侵入し、アムグン(明の満瀼河)河、チル(ヌルガン都司を置く)の地辺に建都し、南進して金朝東北の地を奄有(自分のものにする)し、烏蘇里流域より東海に到るまでを領土としたるものかとも想像せらる。・・・・義経の奥州落ちの疑問時代に相当するから、己丈けは、之を義経再興記仮説として居る。・・・・(略)

1939(昭和14)年4月10日・朝刊7面

数百年前日本武士が、入満の墳墓発見、東洋史の謎を解明

【新京本社特電】(9日発)　現満州皇帝階下の御先祖に当る清朝の始祖太祖無発祥の城

址と数百年前日本武士が入満したことを実証する３百余の「日本武士の墳墓」が９日建国大学教授稲葉君山博士によって発見され東洋史の謎に一つの光明を与えることになった。今まで清朝発祥の地は現在の奉天東方興京老城[1]の地赫図阿拉(遼寧省瀋陽東方の興京老城) が定説で、博士としては興京南方嘉哈河(ギョルチャ)、碩里河の間に、太祖が女真の一尊として萬暦年間に築城し、ここが発祥の地だと断じていたのだが、昨秋になって京城の旧家甲家から発見された見取図により奉天省興京県二道河ハランダ山麓城址の実在が確認され８日民政部大宮□託を伴い調査に赴いたもので、その際博士はその二道河から源を発した太子河(遼寧省東部より渾河の南を東西に流れる)上流にある約三百の墓が日本武士を葬ったものである。と、土民から聞き躍りあがって、更にこの方面の調査にも乗出すことになった。

左・フェ=アラ城　1、ヘトゥ=アラ城(興京老城、新濱満州族自治県)の南方、ギヤハ河(嘉哈河)とギヤハ河支流のショリ河の合流にはさまれた地点に位置する。(『満州実録』名場面集・その７より掲載)

右・『成吉思汗は源義経也』小谷部全一郎著の『読売新聞』昭和５年(1930)１１月２３日の新聞広告。『義経再興記』は各新聞雑誌に広告し、読者は広告で知り書籍を買い求めていたようである。

『満州日日新聞』昭和12年(1937) 12月18日　公主嶺の附近に源義経の墓　縣公署が実否を調査　夕刊２面

北海道を始めシベリア方面に残されてゐる源義経を繞る古蹟や伝説を基礎にして〃不世出の英雄ジンギスカンは源義経なり〃との新説が提起され一頃史学界はもとより一般に多大の興味を投げかけたことがあったが、今回図らずも懐徳縣公主嶺(吉林省四平市公主)附近に「源義経の墓」がある、との極めてセンセイトョナルな話題が提供され各方面を驚かせてゐる。・・・〃ジンギスカンは源義経なり〃との説を一応肯定して考へるとき「義経の墓」

の存在説を全くの虚構の風説として抹殺する訳にゆかないのであるが、いづれにしても「源義経の墓」を繞(めぐ)る風説は地元民も勿論一般に非常な感心の対象とされるに至った。・・・「事実とすれば国宝物だ」とばかりに意気込んで早くも縣公署礼教科を総動員、近く一斎に附近古蹟の調査を進むることになった。・・・現在は当地から約三里の地点朝陽(あさひ)坡黒山咀といふところに韃子墳がありますが、これも蒙古の豪い人の墓だと部落民伝説として伝はってゐるほか秦家屯太師坡にもこの種の墓がありますが、義経の墓といふのは全くの初耳です。どっちにしても一応徹底的に調査を進めてみたいと思ってゐます。

12月21日　問題の義経の墓蹟〃公主陵〃に在った　日露戦争生残り勇士菊池氏が興味ある実見談　夕刊2面

１８日本紙に掲載された〃源義経の墓〃が公主嶺(こうしゅれい)(吉林省四平市)附近にあるとの記事は俄然全満の史学家、考古学家の間に興味を投げかけゐるが、１９日夜大連居住の日露戦役生残り勇士の口から、この説を確実化せしめるやうな重要な墓蹟実見談が齎された。・・・。

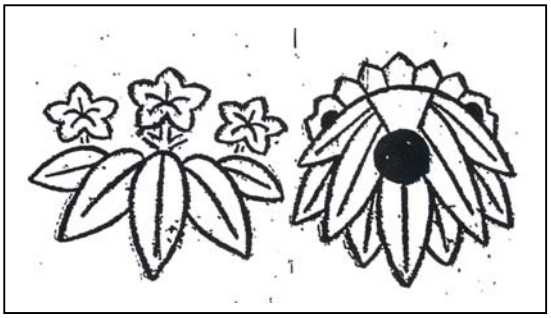
御紙(新聞)の記事に異議をもつのは甚(はなは)だ失礼ですが、源義経の墓が農家の垣の内にあるやうな貧弱なものとはどうしても考へられません。また７００年の風雨に曝されながら墓標の金文字が残るといふこともうなづき兼ねます。当時私の参拝した墓は公主陵東北方の村の入口附近にあり、道路添ひの右側(村に向った)にありました。その四辺の地勢は丘陵が多く墓蹟の左右及び後方も丘陵で草につつまれた墓の左右の長さは約６、７間、高さ１間半以上もあったと思います。墓の土塁もたしか石であったやうに思います。・・・。

后黄花嶺附近で薩摩芋畑を発見した我々はここでも、内地風の風物に接し、愈々(いよいよ)その源義経墓蹟説に疑問を抱きましたが、軍務に携る身で、それを調査する間もなく、そのまま今日になりました。御紙の公主嶺附近に源義経の墓があるとの報道に当時の旧い記憶がよび覚まされ、自分の見た公主陵の墓が公主嶺附近と伝へ尋ねした次第です。

12 月 24 日　成吉思汗の像にも笹龍膽(ささりんどう)の紋章　謎の〃義経の墳墓〃夕刊2面

〃源義経の墓が公主陵附近にある〃との本紙報道は史学、考古学著間にセンセイションを起こし、その調査が各方面に行はれてゐる。・・・。菊池氏(日露戦役生残り)の笹龍膽を刻したる石標を見たることは事実なりと思惟される。史学界の権威大連図書館島田氏は本紙の報道その他より検討し、菊池氏の発見したのはむしろ公主嶺陵の古蹟でなく法庫門西方王爺陵(ほうこもん1おうやびょう)のことであろうと鑑定してゐるが、その双城子(ニコリスク)の古碑に笹龍膽の刻しあ

りたる史文もあり、またハバロフスクの博物館にもその地方より発掘せりといふ日本式の古き甲冑の一部及び笹龍膽と木爪の紋章ある朱塗りの古き教机ありといわれてゐるので、〃源義経が成吉思汗なりや〃或は〃源義経の墓蹟が満州にあり〃との二疑点は未だ確定せざるとしても、兎に角笹龍膽の刻せられたる石標がかつて或は現在も存在してゐるであろうといふことは一般に信ぜらるに至った。



左が日本の笹龍膽　　右が蒙古の笹龍膽

『満洲日日新聞』12 月 24 日の記事より

1、法庫門=満州奉天の北ある門、国境の門。

12月24日〃義経の墓〃現存説有力化　寺院に残る記録も　明かに経歴記載
位置は奉天省康平縣内か　実見者また現はる　朝刊7面

・・・・。官民尊崇の的　星川〃小隊長〃が詳知

過日御紙で源義経の墓蹟前に菊池三郎氏実見の記事を見て自分も其当時の事を思い出し貴社に御通知した訳です。菊池氏のおられた心台子とは新台子(遼寧省鉄嶺県)、石仙寺とは石佛寺のように自分は記憶してゐます。法庫門から萬里の長城を越え墓蹟に至る方角は大体一致してゐますが、菊池氏の三里に対し自分は十里位あったように思います。こり道路は支那馬車の通れる程度のものでしたから巾一間以上あったように記憶してゐます。墓蹟は大体地図に示したような位置にあり、菊池氏の発見したといふ石標の表には文字が書いてあるやうにおもいましたが、或は笹龍膽の模様が書いてあったかもしれません。・・・・。

私が中隊長殿の従卒から聞いたところでは墓蹟左方の寺院の僧侶が源義経の記録であると中隊長殿へ一書を呈し、中隊長殿はこれを読了され、明らかに日本の源義経同様の経歴を書いたものであったことを認められた由です。自分は満州事変当時も通訳で従軍し多少は満州語も判りますが、駐屯当時この満州語に似た言葉で、附近に住んでいる児童達な、この墓蹟には誰が葬ってあるかと尋ねると、どの児童も「源義経」と漢字を書いて見せました。・・・(略)。

12月25日　義経の墓は萬壽山？『源義(ゲンギ)経(ケウ)』として
信仰する土民達　奉天の板橋氏が新説・夕刊2面

・・・私は公主嶺勤務当時懐徳縣住民の生活状態を種々調査しましたが、或る土民の入

口に「源義経」と大書した赤い紙が貼りつけられいあるのを発見、住民に尋ねて見るとこれは「源義」経といふ一種の宗門と答へを得ました。私はこの時以来義経入満説に非常な興味を抱くやうになり、先ず「源義」経の由来について調べて見るとその昔日本より渡来した日本人によって開かれた教義で当時、付近一帯はこの教への信徒のみであったと住民は語って居り、更に開教者は懐徳縣(吉林省懐徳縣)より蒙古に向ったが約百支里(中国１里=500m。中国の１公里は１ｋｍ)の萬壽山に於いて死亡したとも語られてゐました。段々調べて見ると事実懐徳西方の萬壽山といふ山には何人かの立派な墓があることが判明しましたが、私は遂に機会がなくて実地調査を行うことが出来ませんでした。義経入満説によると義経は沿海州蘇城を経て入満したといはれて居り、吉林には十八山状の像があり。法庫門附近にもこれと同様の像があると聞いてゐます。この経路を辿って見ると菊池氏の公主嶺墳墓説も一応考えられますが、私が調査した範囲では公主嶺よりも萬壽山の方が有力なように考へます。・・・・(略)。

12月30日　日蒙は同一の民族　義経の簿蹟説は妥当を缺く

史料前に松岡氏談　夕刊2面

本紙の報道によって俄然センセーションを巻起した〃源義経墓蹟在満説〃は肯定、否定の両論を生みその帰路は容易に決せられなくなったが、問題の法庫門、公主陵、蓮花崗附近に約二ケ年間蒙古人と共に生活した。蒙古通が現れ墓蹟研究に関する重要意見を発表した。・・・日露戦役生残りの勇士中村氏菊池氏の発表されて墓蹟実見の地点は大体正確である。だがそれは部分的地理が正確といふ意味で地点は違っている。御承知のやうに公主陵とは蒙古王族の娘の墓で、この女の墓が源義経の墓蹟などとは飛んでもない間違ひである。両氏の実見されたのは御紙の記事によって判断すると公主陵より更に西方法庫門より約４０支里の地点にある蓮花崗といふところにある墓蹟で、ここには過日中村氏の示したと同様の墓蹟及菊池氏の語った笹龍膽様のものを書いた石標がある。この地点は蒙古の博王府旗下にあるが墓蹟の主は博王の一人僧古林といふ蒙古の武将である。此僧古林は清朝末期の英傑で咸豊年間(1851－1861)英仏聯合軍が北京に進入せんとした際、過般虐殺事件のあった通洲(北京の近く)で、聯合軍を苦しめた勇将で、その後捻匪の乱(１９世紀半ば反乱)を平げ河南辺りで戦死した。清朝史に有名な忠臣である。この人の功績で博王は王位を受けたのである。

さて問題の笹龍膽だが、これは現在蒙古人の住んでゐる熱河あたりにも沢山あるが、**日**

本の笹龍膽は上部に花があり下に笹葉がついてゐるが、石標、瓦等に彫られた蒙古の分は笹の模様のものが三葉並べてあるだけで、**これは紋章といふより寧ろ装飾といった方が妥当と思ふ**。このしるしのかはりに梅鉢或は龍などの彫ったものもある。で日本人がこの模様を見た時、先入観で笹龍膽と速断してしまったものと思ふ。また蒙古には日本の神代史と同様のことを書いた例へば我々の祖先は天から降ったものだといったような調子の古代史がある。これは４冊に分れ、〃蒙古源流[1]〃と称してゐる。この蒙古源流の源流といふ文字或は内容が日本から渡ったといふ風に解されたのではあるまいか、自分は日本と蒙古の関係を考へる時、そうした墓蹟の考証による結びつきを考へる前に日本人と蒙古人は大昔には同一の民族であったといひたい。これは長い間蒙古人と一緒に住み其日常生活から自分が考察した色々の諸点から推論するもので例へば骨格、気質、習慣の一致、具体的にいへば感激性に富み、尚武(しょうぶ)(武道武勇を重んじる)の気質強く、また宗教心旺盛で戦争の門出には、日本のお護り同様のものを持ち、経済観念が極めて淡白且つ潔癖で、音声(濁音のある点)歩行は全く日本人同様である。この点鳥居龍蔵博士も指摘してゐられるし、写真の兜は一昨年熱河の八大寺から自分が発見した成吉思汗の兜で、博多の博物館[2]に元寇の記念として残ってゐる国宝の兜と同様のものだ。兎も角自分の意見では笹龍膽説による源義経墓蹟の判断は妥当を缺(か)くものと思う。

1、蒙古源流・1662年サガン・セチェン・ホンタイジによって書かれた年代記(モンゴル語)。

2、元寇資料館・福岡市博多区東公園内、元寇記念展示室には、日蓮宗史、元軍の武具等がある。

今回は『読売新聞』と『満蒙日日新聞』を調べた記事を掲載した。その他の新聞を根気良く調べれば、いろいろ面白い記事が出てくるかと思い調べてみたが、なかなか義経伝説記事を見出せず根気負けした。２社新聞の記載記事から考えて、他の新聞社もこのような記事があると思われる。今日では「ジンギスカン即源義経説」が与太記事とされているようで、この「説」で検索すれば〇件となってしまう。今記事の掲載分は「義経」で検索してやっとこれだけ探せ出せた次第で、なにか新聞社の裏操作を感じてしまうのである。

満州国への進出には王道楽土、五族協和、と新聞・ラジオ・映画と夢の新天地と煽った記事等があったからだと思が、戦前の戦争絵画の傑作が国官庫にしまわれている様子をテレビ番組で拝見したが、傑作品だけにその処遇に苦慮しているという話である。この件と似た話なのかも知れない。

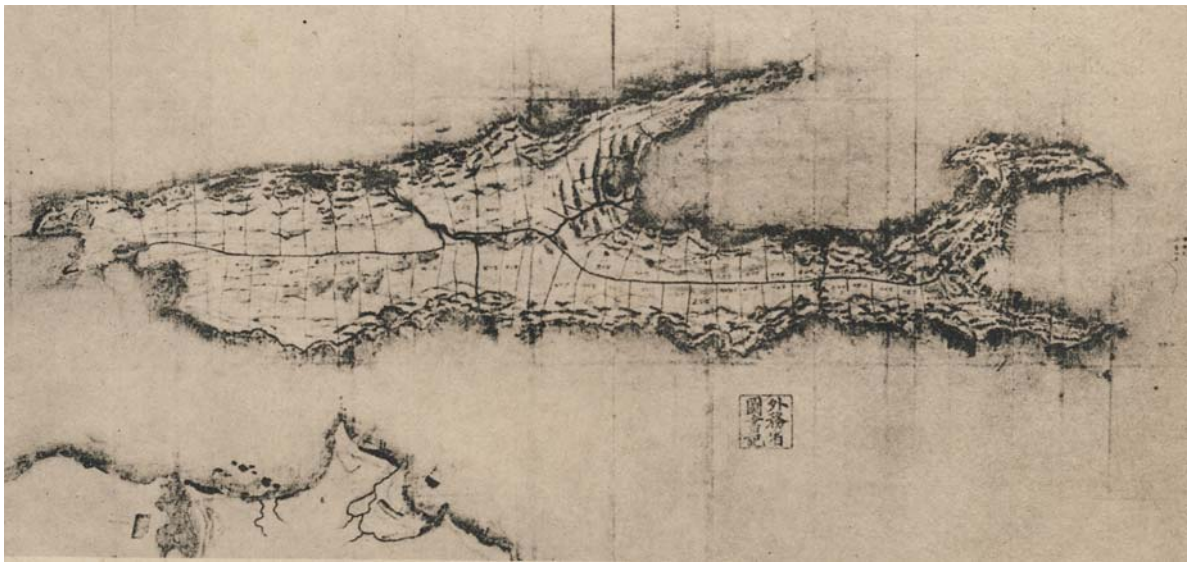
第9章 明治維新、明治、大正時代の国際外交を見る

『世界情勢と躍進日本外交史』 内田茂文編纂　昭和１５年４月３０日・発行　日本図書刊行会

内容は、第１章開国準備時代（ペルリ提督の浦賀来航）から、第７章新東亜建設時代（日ソ中立條約の成立）の日本外交史となる。樺太国境交渉始末と琉球小笠原問題をみる。

樺太国境交渉始末

《露国が西比利亜を東に向って太平洋に達し、カムチャツカを占領したのは、１７世紀末で、正徳元年（1711）には、千島列島を南進し、占守島（千島列島北東端の島）幌筵島（同地域）二島を略し、明和、安永の頃には得撫島（同千島列島）以北の諸島を侵し、遂に、その艦船は蝦夷地沿岸に現われるに至った。この事実は頗る徳川幕府を驚かし、所詮北門経営の声が空しくなったのであったので、爾後半世紀ばかりは、日露の交渉が杜絶していた。然るに嘉永６年（1853）露国使節プーチヤチンが長崎に渡来したことによって、再び関係が生じたのであった。・・・尋で安政元年（1854）８月プーチヤチンは函館に入港し、更に下田に転じ、筒井肥前守、川路左衛門尉等と会商したのであるが、樺太境塀のことは、遂に決定を見ず、姑らく旧慣に従って界を定めぬまゝとして置いたところ、露人南下の勢ひ益々甚しく、到底これを防遏することが不能となった。・・（略）　日本の主張に対し、現時露領である得撫附近の三小島を日本に譲與しょうとの意見を抱持していたから、５０度境界の議は全く消滅するに至った。かくて使節等は唯樺太が両国人雑居の地たるを帰朝するの已むなきに至り、幕府はこの問題を残して倒れたのである。



樺太地図・小出大和守一行が持参せるもので極めて精緻なもので、北緯５０度線線が記入されている。

樺太地図・下記小笠原島領有通牒『世界情勢と躍進日本外交史』より掲載

・・・明治６年５月、開拓使長官黒田清隆は、樺太放棄を建議し、無用の紛争を避け、専ら力を北海道の経営に盡(つく)さんことを以ってした。７年３月、榎本武揚を特命全権公使として露国在勤を命じ、委(ゆだね)るにその権を以ってした。武揚は露国政府と談判数十回、議漸く成り、明治８年５月７日、露国太公アレキサントル・ゴルチヤコフと、樺太千島両島交換條約に記名調印したのであった。・・・(略)》（２９―３０頁）

★榎本武揚は会談後、シベリア大陸を横断して瀬脇のいるウラジオストクに来所。第１章・１４―１６頁、瀬脇壽人の明治１１年８月１日日記に繋がるのである。

琉球･小笠原問題・・・《琉球は、徳川氏の初期、鹿児島島津氏に征服せられて之に隷属したが、裏に於いては支那に通じ、明朝の滅後は清国に入貢していた。幕末西洋船の来航頻繁となるに及び、英仏の諸国人は、琉球に対して通商を結ぶ事を要求した。遂に外圧に堪えずして、欧米諸国と締約し、世界各国に対し頗る複雑な関係を致すに至った。我が国と琉球との関係が､極めて明白となっているにも拘らず､琉球は依然旧来の慣習を改めず、清朝との通交を継続せんとし、使を上せて我が政府にこれを歎願(たんがん)した。けれども素より我に於いて之を許す筈もなく、明治１２年、内務初期官松田道之を遣わし廃藩置県を断行、藩を改めて沖縄県となし、尚泰(しょうたい)(最後の琉球国王)をして東京に移住せしめて華族に列し、邸宅を賜った。・・・琉球問題を自然に解決したのは、厳密なる意味に於いて、明治２７、８年戦役の結果、東洋に於ける日本の地位が全く確立したからであると謂い得よう。

小笠原島領有通牒・文久２年幕府より小笠原島の領有についてプロシア外相に宛てた通告書翰

小笠原島の発見は、遠く豊臣氏の時で、小笠原貞頼これを発見、爾来内地と同島との間に交通があったけれど、寛永の鎖国令と共に、一時全くこれを絶つに至った。然るに文政年間、英米人の来島しこれに移住する者あり。ペルリ提督来航の時も、この島に停泊した

事があるので、この間々に放置しおかば我が領有たることを薄弱ならしむる虞(おそれ)れあり、幕府は文久年間、特に吏を派遣して茲に駐在せしめたが、其後内政外交多端にして、遂にこの島の経営に心を傾くる能はずして倒れ、明治８年に至り、我が政府は島治の施をなし、且つ列国に告げて我が領土たることを知らしめ、明治１３年、島司を置き管轄を東京府に置いた。》小笠原諸島は正式に日本領土となる。（『世界情勢と躍進日本外交史』３１－３２頁）

日清戦争から日本を取り巻く東アジア情勢を見る（拙書の『義経不死伝説の声を聞く』より掲載）

日清戦争　日本は１８６８年に明治維新を成し遂げ、欧米国家制度を導入した国民国家を建国した。日本と清国は１８７１年、１８条の日清修好条約が調印したが、同年台湾へ宮古島民５４名が漂着して殺害される事件が起きた。日本政府の抗議に、清国は台湾を政府の力がおよばない「化外(けがい)」の領土に属していると回答してきた。この回答により明治政府は１８７４年５月、明治政府は陸軍中将西郷従道(つぐみち)を兵３千で台湾南部へ派兵した。同年イギリス中国公使の仲裁で、宮古島島民は「日本国属民」と明記されたのである。続いて１８７９年、明治政府は琉球藩を廃して日本国の沖縄県とし、中国へ朝貢を禁止し更に福州琉球館（明・清代の福州と琉球の進貢貿易）をも廃止させた。

明治８年、江華島(こうかとう)事件（日本軍艦がソウル近くの江華島砲台との戦闘、飲料水を探す口実で上陸し、島民殺害し、大砲 38 門を奪った）を契機に、その翌年日朝修交条規を結び、１８８０年日本は朝鮮ソウルに公使館を開設した。１８８２年に日本指導の軍制改革に、朝鮮の不満兵士の抗日暴動がソウルで発生し、日本公使が包囲される事件が起き、翌年ソウルに日本政府は日本人保護の名目で軍隊を駐屯させた。一方清国も朝鮮を服属国とみなし日本の出兵を牽制していた。１８８５年、日清間に天津条約が結ばれ、朝鮮から日清両国軍は撤退すること、出兵に関しては相互に通知することを約束交わした。

しかし、日本の国民世論は「清国に朝鮮を勝手にさせない」という強い意思が政府と国民にあり、１８９４年３月、朝鮮の全羅道(ぜんらんどう)で「東学党(とうがくとう)の乱」（甲午(こうご)農民戦争）に率いられた農民運動が蜂起し、腐敗した官僚の罷免、租税の軽減を求めて全道（チョンジュ）を占領した。あわてた朝鮮政府は清国の袁世凱(えんせいがい)軍の派遣を要請し、6 月、清軍は農民戦争が盛んな地牙山(ガザン)方面から上陸し、日本軍は仁川・ソウルから天津条約の取り決め通り朝鮮に派兵した。まもなく朝鮮政府と農民は全道で和睦したが、清国も日本も朝鮮支配をもくろみ、撤兵をしなかった。当時の新聞の記事を拝見する。

東京日日新聞・明治27年7月14日《３国の傍観・英露米３国は朝鮮内政に付き我要請を至當とし清国に向かて日本と協力すべしと勘告したるも、清政府は之を拒絶したるを以って３国は調停のことを止め、傍観の位地に立ちたり云々とは昨日の各紙中に見る所然るに我社の探聞する所に依れば、３国協力の調停は痕形なし》（東京日日は毎日新聞の前身）

東京日日新聞・明治27年7月20日《清政府は既に一たび我の好意を以ってせる協議を斥けたるより我は清の如く外国の使臣にも縋らず、又清政府の嫉視をも事とせず段々呼として独力韓廷に助言し、韓廷亦我の盛意に服して其要請を容れ暫次効果を実際に見んとする場合に運びたれば、清国は躍起となり裏面的陰険手段を逞くしたるも韓廷は唯だ袁世凱の甘言に乗らず猫の如き牙山２千の兵到底頼むに足らざるを知り・・・日韓両国間の交渉を妨害し萬止えず得ざるときは開戦するを辞せず、と決心するに至りたり》と伝える。

日本政府は７月に朝鮮王宮占拠して親日内閣を組閣し、これに不満の清国に８月１日に両国は宣戦布告し「日清戦争」が勃発した。翌年１月に李鴻章は降伏し、同年４月、下関で李鴻章と伊藤博文・陸奥宗光とで日清講和条約が結ばれた。この条約の主な内容は、清国が朝鮮独立を承認すること、清国は遼東半島・台湾・澎湖島（台湾海峡）を日本に割譲、などの条項が結ばれた。しかし、これをロシア・仏・独に３国干渉により、日本は遼東半島を清国に返還させられた。ロシアはその報酬として清国から東清鉄道敷設権を獲得し、続いてロシアは１８９８年には旅順・大連をも租借し、ドイツは膠洲湾（山東半島南海岸）を、イギリスは威海衛（山東省最東部）と九龍半島（香港）を租借、フランスは広州湾（広東省南西部）を租借した。なおもロシアは清国政府が日本へ支払う賠償金をフランスからの借款の口利きの代償として、満州里から沿海州へいたる１５００キロの鉄道敷設権を得た。２年後ロシアはハルピンから南下して旅順・大連の１０００キロ間、東清鉄道南部線の敷設権と遼東半島南部地域の租借権も手に入れたのである。

日清戦争に勝利した日本は、清国の勢力を追い出したが、現実には朝鮮に政治的影響力得たのはロシアであった。明治２９年(1896)5 月「小村・ウェーバー覚書」で日本は朝鮮国王がロシア公使館にいる現状を認めさせられた。ロシアは朝鮮と秘密協定「露韓密約」を結んで、ロシアは国王の保護、軍事と財政の援助、ロシアが武力で朝鮮政府を助ける約束がなされていた。その見返りに朝鮮北部地域の鉱山開発権や鴨緑江流域の森林伐採権を得た。日本は帝国主義列強間の軍事力の対立に直面し、これらに対抗する外交力を得るた

めに、軍事力の道を更に強固にすることを国策とした。

明治３３年（1900）山東省で義和団の宗教秘密結社が外国人排斥運動を起こし、列強国はこれを好機と捉え、ロシアは鉄道を守る理由で１７万７千の軍を満州に入れ、また日本を含む８ケ国連合軍が北京を占拠した。清朝が安定しても、ロシアは満州から撤退せず、英国はロシアを牽制するために、日本と１９０２年、日英同盟(協商条約)を結んだ。ロシアは満州から第１次軍は撤退したが、第２次撤兵は取りやめ、１９０３年、「ロシア軍は撤退後満州を他国に割譲しない。ロシアの同意がないかぎ他国の領事館を開設させない。占領したロシアの得た権利は保留する」などの７カ条を清国に突きつけた。

同年５月、ロシアは朝鮮半島の日本勢力の駆逐をはかるため、鴨緑江(北朝鮮ロシア国境)を東の黄海の要にするために、朝鮮の龍岩浦(鴨緑江沿い)に基地を建設した。同年８月、日本側はロシアに満州と朝鮮の特殊権益を相互に認める方針を伝えたが、ロシアの回答は満州にふれず、朝鮮領土の軍事利用など建設禁止を求めるものであった。これを承知したら、対馬の先は帝政ロシアではないか、ロシアの毒牙に政府も国民も脅威が現実のものとなったのである。

翌年、茲にいたり日本は御前会議において帝政ロシアと開戦を決意、これが日露戦争前夜である。ロシア軍人は「日本兵３人にロシア兵１人で間に合う、来るべき戦争は単に軍事的散歩にすぎない」と豪語して憚らなかった。

東京日日新聞・明治37年１月3日・《舊臘（昨年 12 月）日本政府は終に露国の誠意の存否を疑い、乃ち最後の決心を以って露国に復答する所ありしと、同時より始めて英米独の３国に向って日本の真意を表明し、続いて他の列強に対しても同様の通告を爲したるよしなれば、今日となりては最早日本の誠意は世界に知れ渡り居るはずしかも、右の通告は片辞の激越(感情が激しく対立)は渉るものなしと雖も、其裏面に於いて日本が最後の決心を有せることをも識認せられたらんと思はる》

同2月3日・《露国の戦備・露国の好戦的態度を取るのは今日に始るにあらず、其の未だ我と直接の交渉を開かざる、猶ほ已に盛に水陸の兵力を増加して、清韓両国を強歴せんと欲したるのみならず、他の一面には両国に対して益々威迫を加ふ其の汲々として戦備を修むる。》

同2月9日・《日露断交の通知・列国に同文通牒を送り日本は露国と外交上の干繋(つながり)を破りたる旨を通知したるよし》と記事は伝える。

日露戦争顛末・『世界情勢と躍進日本外交史』内田茂文編纂解説より日露講和成立をみる

《日露間の戦役既に一年有半を踰え、其惨禍測るべからざるものあり、北米合衆国大統領ルーズベルトは、明治３８年６月、日露両国政府に勧告し、世界平和の為め、速かに戦闘を休止せんことを以ってした。両国政府は、米大統領の意を諒とし、我が国は外務大臣、小村壽太郎を全権に任じ、米国駐在佐藤愛麿、政務局長山座円次郎等を随へて米国に航し、露国はウヰツテ及駐米大使ローゼンを全権委員に任じ、８月９日から、合衆国ポーツマスに会して談判を開始し、頻りに折衝を重ね、(明治３８年)９月５日に至り、漸く会議成立、両国全権はその議定書に調印を了した。講和條件の主なる條項は、

一、露国は韓国に於ける日本の宗主権を認める事。

一、露国は満州より撤兵し、清国の領土保全及びその利益の開放を承認する事。

一、露国は旅順港及大連の租借権を日本に移転譲渡する事。

一、露国は長春、旅順口間の鉄道を日本に移転譲渡し、且つ両国は満州に於ける各自の鉄道を軍略上の目的を以って経営せざる事。

一、露国は北緯５０度を境として薩哈嗹島(樺太島)の南部を日本に譲渡し、且つ両国は各自の領地内に軍事上の工作物を築造せざる事。

一、露国は、日本海、オーツク海及ベーリンク海に瀕する露領沿岸の漁業権を日本に譲與する事等であった。

講和條約は調印を了して其成立を見たが、顧みるに、開戦の当初から講和成立に至るまでの、当局者の苦心は、全く第三者の想像も及ばぬものがあった。而して、この戦役に於ける外交の最大困難は謂うまでもなく講和の際にあったのである。萬一これに失敗するあらんか、赫々(立派な様)たる勝利も遂に水泡に帰するからである。我国が、伊藤博文の主唱で、開戦と同時に、**末松謙澄を英国に**、金子堅太郎を米国に差遣したのも、実は他日講和の議の起きに際し、第三国の好意ある斡旋を翼望するがためで**末松、**金子両差遣使の活動も洵に政府の意を帯し、適時効果的の言動措置を講じた事は謂うまでもない。

明治３７年も砲火の中に暮れ、３８年３月、奉天の大開戦となり、露国側の死傷十数萬に及ぶと伝へられ、欧米の諸国は、露国が無謀の戦争を継続するの愚を笑った。かくて米国が講和の調停者となるという説は、早くも世界に伝わった。併し露国側は、国民に対す

る威信の失墜や、人心の動揺、果(はた)して如何なる結果を招来するか知れぬという対内的関係と、外国に対する見えもあって、容易に講和に応ずるやうの気振りもなかったが、我が国としては、一日も早き講和を望んでいた。それは、我が国の政府当路者なり元老なりが、所詮日本の止まるべきところを知っていた賢明からであった。・・・(略)(『世界情勢と躍進日本外交史』「日露講和成立」54－55頁)

小村全権の提出した講和條件は、條件の中で、彼我(ひが)の意見が紛糾し、解決困難と見えたのは、薩哈嗹(樺太)譲渡と、軍費賠償と、中立国抑留軍艦交附及び極東海軍の制限の４項で、就中(なかんずく)、最も困難で決定しなかったのは、割地と償金の二問題で、場合によっては、或は談判決裂に及ぶかの状態をさえ呈するに至った。両全権は非公式の会議を開いて何等か妥協案を見出さうと努めた結果得たのが、薩哈嗹二分案であった。これに米大統領の面目をかけた熱心な仲裁が功を奏し、２９日午前１０時５５分、日露最終の会議が開かれ、談判の結果、９月５日漸(ようや)く講和議定書に調印を了したのである。》と日露講和條約の道筋が述べられている。(**『世界情勢と躍進日本外交史』**５６頁)

欧米列強国たちは日露戦争をどのようにみていたか

１９０２年の日英同結んだ英国の本音は、この同盟は東アジアに於ける権益擁護の同盟であり、英国は戦争の渦中に巻き込まれることは恐れていた。１９０２年１２月、アーサー・バルフォア(政治家・哲学者)が閣議に提出した書簡に「日露両国が戦争状態に入る場合、ロシアが勝っても負けても、ヨーロッパとアジアでその力を弱めるであろうから、イギリスとしては当然利益がある」と、外交方針を見切っていた。その欧米の裏側外交を見れば、米国は、日露戦争によって露国の軍事力をヨーロッパから削ぎ、東アジア商業権の獲得に期待と、ヒィリピン植民地確保を狙っていた。英国は中東からインドに入る露国勢力を北に押し上げることに懸命でいた。仏国は露国結びつき、ドイツ(ブロシャ)の軍と露国軍を対峙させ仏国の軍事力を補うとしていた。２０世紀初頭、列強国の政治バランスは、露国の軍事力を削ぎたい米・英と、ドイツの軍事力を削ぎたい仏国が対等していたのである。

『世界史上より見たる日露戦争』羽黒繁著より

日本の外債(日本国債)に苦慮 **拙書『義経不死伝説の声を聞く』第９章より**

日本は日露戦争に軍事費２０億を使った。ロシアもだいたい同額という。日本政府は国内より税金と国債で４億以上集めたが、不足分７億円（戦費の 35%）を外債に求めた。開

戦と同時に金子堅太郎を米国へ、**末松謙澄**を英国に派遣して列強国に親日世論づくりに走らせた。この日本の公債売り込に成功した裏に、米国は鉄道敷設で満州市場に期待し、英国は中国への進出を更に進めようとしていた。仏国は日露が戦争を勃発すれば、ロシアの軍事力が欧州で弱まり、ドイツが優位なってしまう事を恐れていた。ドイツがロシアを助けたのは欧州のロシアの軍事力を削ぐためといわれる。米英に国籍を持つユダヤ人が、ロシア国内でのユダヤ人迫害が起り、ユダヤ系の国際金融業者に反感を買うことで、日本の公債売込みに有利にはたらいた。日本国内に於いては、２０万の将兵と２０億の国費の結晶、天皇の名で戦われた日露戦争ということで「明治天皇の遺産」とも呼ばれた。

日露戦争戦費調達の裏側　**小谷瑞穂子著『世界の中の日本』より**

《大国ロシア帝国を相手にした日露戦争では、日銀副総裁高橋是清が欧米諸国で募った日本の外債を購入して、戦費の半分を支えてくれたのは、ユダヤ系のアメリカ人銀行家ジエイコブ・シフ(1847－1920)でした。シフはドイツ、ラフンクフルト生まれのアシュケナージ系のユダヤ人で、新大陸アメリカへ移民して、欧米にネットワークをもつ銀行家として成功した人です。シフは帝政ロシアのロマノフ王朝のユダヤ人へのポグロネ(弾圧・虐殺)を憎み、そのために、大国ロシアのアジアへの進出を阻もうとする小国日本を救援したのです。日露戦争後、明治天皇はシフを宮中に国賓として招待し、感謝の気持ちをお伝えになりました。高橋是清の求めに応じ、明治天皇より「旭日大綬章(だいじゅしょう)」贈られている。高橋が昭和１１年、２・２６事件での暗殺されるまで、シフと堅い信頼と友情関係で結ばれていた。》

『十字架のユダヤ人・誤解されし民族と日本人』小谷瑞穂子著に、《ロスチャーイルド銀行はロシア政府からり再三の要求にもかかわらず、ユダヤ人を迫害している帝政ロシアの戦費融資には絶対に応じなかった。》183 頁にユダヤ人の心証を述べている。

日露戦争終結　明治３７年(1904) ２月６日日露戦争が始り、翌年５月日本海海戦で日本艦隊が辛くも勝利した。９月、ポーツマスで米国のルーズベルト大統領の斡旋で日露講和条約が結ばれた。米国に条約の期待は、日露講和会議の最中から満州の鉄道に強い関心を示し、米国は満州における鉄道を清国の所有と必要な資金を「ドル外交」で関係各国から出資する「ノックス満鉄中立案」を提唱していた。

しかし、日本帝國に於いては我が国民の血を流した結果であり、日本が手に入れた南満

洲鉄道を米国大鉄道資本が買収工作は、講和会議から帰った小村外相の強い反対でこの計画は潰してしまった。

日本はこれにより韓国の保護権、南樺太、遼東半島、東清鉄道南満州支線の経営権、沿海州の漁業権を獲得したが、１２億の賠償金要求は拒否された結果となる。日本国民は大不満であったが、ロシア帝國の兵力３百万・約軍艦５１万トン、日本の兵力２０万・約軍艦２６万トン、その戦力差を日本政府は国民に実情を知らせなかった。日本政府も日露戦争継続には国力は無く、ロシアにおいても国内に革命の内乱事情があり、このぎりぎり交渉を小村寿太郎は見事にまとめたのであるが、実情を知らされていない国民は、小村は帰国時に右翼団体から罵声を浴びせられ、暴徒化した一部の国民は、米大使館・教会を破壊し、この事件を境に米国の親日世論は離れてしまった。日本帝國が手に入れた満蒙の大地は欧米の欧米列強国の協商(協議)に入れさせないという強い意思があった。

当時の世界に目をやれば日露戦争当時、アフリカの植民地の奪い合っていた英国と仏国が、日露戦争を境に妥協をみて「英仏協商」が成立し、ドイツはアジアでの大海軍の侵攻が本格化していて、英国に脅威を与えていた。欧州は英国の敵は仏国でなくドイツに変わりつつあった。英国と米国は満州の鉄道権益のために日露戦争に強い関心を持ち、ロシアの軍事力が弱まることを期待していた。仏国はドイツに対抗するために日露戦争を早く終結させたかった。仏国はロシアの意向を受けて調停に動き、米国は露国にある程度の打撃を与えれば、これ以上日本・ロシアに満州の進出を押える事で、米国は日露戦争の調停を仲介した。米国自身は満州へゆたかな「ドル資本」で満州鉄道の進出する計画を持ち、それらの思惑が１９０５年各列強国の思惑が日露戦争を終らせたといえる。

そして日露戦争中に第一次日韓条約によって、外交顧問、財政顧問を韓国政府に送り込み、日本側の強硬論を採用させたのは、日英同盟改正交渉を進めていたからである。米国ともタフト[1]国務長官と桂首相の秘密協定を結び、英国によるインド支配、米国によるフィリピン支配を承認する交換条件で、日本は韓国併合の支配権を認め合うことにより、日本は併合をおし進めることができたのである。

日本はロシアから獲得した満州の権益を新たに設立される鉄道会社を引き継ぎ、明治３９年(1906)８月、旅順に関東都督府(とうとくふ)を置いた。ポーツマツ講和条約より鉄道守備隊を１キロにつき１５名を越えない範囲で配置できることとなり、日本に譲渡された東清鉄道は長春―旅順間、７６４キロ余、これにより日本軍は総計１万４４１９名の守備兵を置けることになった。１９１７年ロシア革命が起り日本もシベリア出兵のさなか、１９１９年、関

東都督府は廃止され、都督府陸軍部は独立して関東軍となった。

1、桂･タフト協定・日露戦争中、1905 年７月２９日内閣総理大臣兼臨時外務大臣の桂太郎と、フィリピン訪問の途中来日した。ウィリアム・タフト陸軍長官（第２７代米国大統領）で交わされた協定。この協定は、米国は日本の韓国支配権を確認し、日本は米国のフィリピンの支配権を確認した。日米首脳が互いの権利を認め合った協定といわれた。この合意覚書は、米国「まったく、正しいこと」と語った。３つの議題、①日本は米国のフィリピンに野心のないことを表明する。②極東の平和は日本、米国、英国の３国同盟による。③米国は日本の韓国における指導的地位を認める。

日露戦争の民族運動に及ぼした影響

日露戦争に於ける日本の勝利は、白色人種に勝利した有色人種は、アジア諸民族によって熱狂的に迎えられた。英国から帰路の孫文はスエズ運河通過中にアラブ人の感激話を次のように伝える。《沢山のアラブ人・・彼らは私が黄色人種であるのを見て、私に「お前は日本人か」と問いかけてくる。私は中国人だと答えると「自分達は今度非常に喜ばしいニュースをえた。なんでも日本はロシアが派遣した海軍を全滅させたということを聞いた。この話は本当か。自分達はこの運河の両側にいて、ロシアの負傷兵が船ごとにヨーロッパに送還されて行くのを見た。我々は東洋の有色人種は西方民族の圧迫を受け、苦痛をなめていた。だが今度日本がロシアに勝ったということは東方民族が西方民族を打ち破ったことになる。日本人は戦争に勝った。我々も同様に勝たねばならない。」と言うことであった。

インドに於いては、大国ロシアを破った日露戦争の快報が続々と飛込んできたことにより、英国の圧迫に苦しんでいたインド民衆は、公然と反英運動に挺身するようになったと言われている。ポーランドに於いては、1772 年より、ロシア、オーストリアに国は分断され、ポーランド独立運動はロシアの弾圧に屈服していた。この時日に日露戦争が勃発し、ロシア敗報にいたるをみて、ポーランド人は大いに喜び、さらに旅順陥落を知る。そして大敗を確認したポーランド人は公然と反旗をひるがえした。》

当時の東京朝日新聞社編「日本外交秘録」に「ロシアの敗戦とポーランドの有頂天」と題する牧野伸顕（明治･昭和前期の政治家、大久保利通と満寿子の次男）の懐旧談に次の様にある。

《・・・ポーツマスの談判がすんだ頃、ポーランドの伯爵がロシア国境に近いエズポールに招待され、在郷軍人連中に大歓迎を受けた。会ってみると彼等のいうには「日本皇帝陛下の代表に、我々は同胞を代表して敬意を表し御礼をいいにきました。それは日本皇帝陛下の勇敢なる軍隊がロシアを負かして打撃を与えた。ロシアは日露戦争に負けた結果、

今までのポーランド人に対する束縛が解かれた。ポーランド語、土地所有権、結婚の自由が、日本の連戦連勝のお蔭で、その束縛が一つ一つ解かれ、今では非常に自由の民となった。これは日本皇帝陛下のお蔭で忘れることができません」ということであった。》とあるり、又、フィンランドやスウェーデン、バルカン諸国にも大きな影響を与えた。日本は日露戦争の結果、多くの権益を獲得したが、米国資本の満州進出を抑えたことにより、日米両国の国交がしだいに悪化を辿ることとなる。

『世界史上より見たる日露戦争』羽黒繁著・９章「日露戦争の民族運動に及ぼした影響」より

大陸への出進と「ジンギスカン即源義経」 **拙書『義経不死伝説の声を聞く』第９章より**

内蒙古では１９１２年２月清朝最後の皇帝宣統帝(愛新覚羅溥儀)が退位し、清朝末期に中国全土に革命運動、辛亥革命が起こった。革命による中華民国が樹立し、満州の地は漢民人による満地開拓運動を推し進められていて、モンゴル人の牧草地を漢人が侵食し、牧畜の満蒙民は生活を脅かされていた。日本の進出はこの満蒙人民が漢人から独立運動する状況下で軍事支援活動を行い、満蒙の知識青年独立運動組織に武器援助した。漢人軍閥の進出を駆逐する本格的な支援に乗り出して行き、そして、日本帝国の野望はこの沿線上で１９３２年満州帝国建国に繋がって行く。この時代、世界に眼をやれば大英帝国は世界一の植民地保有国であり、次いでフランスがそれに続き、アメリカはスペインから独立するフィリピン革命に援助しながら１８９９年に侵略と隷属化に成功していた。当時の日本国民の世論思考は植民地獲得国家へと躍進していく強制国家に夢をみた。世界の常識は、植民地を多く持っている国家、すなわち優秀な国家と、国民そう信じていたのである。日清戦争の前夜、明治１８年（１８８５年)『義経再興記』は読まれ、日清・日露戦争へと連戦連勝に日本国は沸きかえり、満州国への権益が広がり、日本人移民が大陸へ進出した。そして満州事変(昭和６年)、支那事変(昭和１２年)と繋がって行くのである。

その前夜、大正１３年（1924）に小谷部全一郎の『成吉思汗ハ源義経也』が世に轟き、英傑義経の登場は、義経不死伝説を信じる人々、清・日露戦争の勝利を経験した人々、戦勝に歓喜をおくった多くの日本国民に熱心に読まれたのである。

この時期、動乱の大陸で活躍した川島浪速、清朝１４世王女、男装の麗人と言われた川島芳子（父は粛親王・清王朝筆頭の名家)、中国籍に移した伊達順之助等が大正５年に第２次満蒙独立運動に加わっていた。それは小谷部全一郎が大陸に「義経伝説研究」に渡る２年半前のことであった。

むすびに

１７世紀後半に語られだした源義経の蝦夷渡来伝説の言説が広まり、そして明治・大正にかけて流布が浸透した経緯となる。そもそもの「義経語物」の始まりは寛文７年(1667)、中根宇右衛門正章という幕府の小姓組番が、幕府の代理で地方への巡見のため、同役二人が奥羽と蝦夷地に派遣された。巡見使とは江戸幕府が日本全国津々浦々の政の実情を、全国８つの区域に分け、政治と民情の調査等の情報を集め、幕府は地方藩実情を監視する制度となっている。藩側に於いては内部事情を幕府に知られたくないので、巡見使を歓迎して、お酒を飲ませ、さつさと隣の藩に送り出す宴会巡見役の状態にあった。

津軽海峡を渡り、蝦夷地に入った巡見たちが驚いたことは、それは本州では語られていない「義経が蝦夷に渡った証跡」「義経大明神の祠」を見出したことである。

巡見使にねぎらいのお酒が運ばれ、松前藩士から義経大明神を祭る酒宴の儀に立会い、「ヲキクルミ神を祀る神事にございます」といい、巡見使は「ヲキクルミ」とは、松前藩士は「ほうがん殿ことでございます」と答えた。聞いた巡見使者は腰をぬかさんばかりに驚いた。藩の接待係りはアイヌ通詞を交え、巡見使にヲキクルミと判官殿の由来を語った。この話を聞かされた巡見は江戸に帰り、蝦夷の土産話を会う人ごとに吹聴してまわった。これが義経蝦夷渡来の原点となる。

『寛政重修諸家譜』に中根宇右衛門は元禄９年に６５歳で歿したとあるので、松前に渡りは３６歳の時、晩年に中根が語った思い出話を、荒井白石の『退私録』や浅倉景衡(幕臣、常陸水戸藩医朝倉重景の子、姉の夫新井白石に学ぶ)の『遺老物語』に収められている。

話は中根の少年時代に遡る。寛永２１年(1644)４月、越前国坂井郡三国浦新保村の船頭竹内藤右衛門の一行が、３隻の船に分乗して松前に到る途中、暴風に遭って沿海州と朝鮮との境界辺に漂着したことがあった。藤右衛門等４３名は不幸にして土人に殺害され、生残った１５名が盛京(奉天)を経て北京に送られ、１年間逗留の後、生保３年６月、生国に帰還した。２ヶ月後、国田兵右衛門と宇野與三郎の両人が生還者を代表して江戸に召され、将軍の側役中根壱岐守正盛に漂着の顛末を口上し、且つその審問に答えた言葉の中に「建夷奴児部の家々の門戸に義経・弁慶らしい畫像の貼ってあるのを見た」という一条がある。この話が白石から安積澹泊(水戸藩士「大日本史」総裁として編纂)に手簡に報ぜられている。

それが『本朝通鑑』の「衣河之役、義経死セズ、逃レテ蝦夷島ニ至ル、・・・」。更に荒井白石の『蝦夷志』に著し、蝦夷が崇拝するヲキクルミなるものは判官即ち源義経に他な

らないと、なって行く訳である。そして漂着者が北京で見た神像の話は、義経の大陸渡航を暗示し、水戸藩の『大日本史』もこの説を否定しなかった。

上記が義経蝦夷渡来の世の人々に信じられてきた経緯となる。それを吉雄忠次郎がシーボルトに語り、「義経は衣川で死せず、北蝦夷にわたり黒龍江に遡り、やがて成吉思汗になった」という話に繋がって行くのである。シーボルト自身も沿海州南部を未見の地であるにも拘らず、義経不死伝説と大陸渡航説の流布の大役を努め、その話しが松浦武四郎の「蝦夷日誌」の裏づけ材料となって広がって行く。更にこの「蝦夷日誌」や「中外経緯伝」等から、瀬脇壽人の「浦潮港日記」の義経渡航説となり、その素材を更に膨らませ、末松謙澄の「ジンギスカン即源義経」の英論文へと発展となる。

唯この時代の国際外交の場に目をやれば、先進国の裏側の外交戦術は、極東アジアに残された植民地域となりうる中国・朝鮮半島・日本への列強国の独善外交情報合戦が繰り広げられていた。明治維新の指導者たちは、蘭語から国際語は英語に激変する時代を痛感し、政府は列強国に遅れをとらない外交戦略を模索していた。先進諸国から日本を見れば、水と食糧と石炭を積み出せる開港と、先進国の製品を購入してくれれば良いわけで、将来的には日本国なぞ外交戦略でねじ伏せればよい、と云う位の戦術であると、維新政府の要人たちはその様に受け取った。その欧米思考に対し、明治政府は極東の小国日本でなく、アジアの中心は日本国から開展していったのだと云う、日本国物語を創造する理由があったのである。日本武将の源義経が大陸に渡り、満蒙の民族を綏撫し、平定したのは日本の源義経こそが成吉思汗なるぞ。その世界制覇を成し遂げた成吉思汗の末裔が、強勢国家大和民族であることを、欧米諸国に謳(うた)い挙げる外交を、外務省は背負っていた。そのため末松の「ジンギスカン即義経説」の歴史論文を、早急にロンドンから英文で発表する時期が切迫し、その雄叫びは欧米の中心都市ロンドンからの配信を要した。

後、明治 38 年日露戦争開戦時に、伊藤博文の強い意向で末松謙澄を英国に派遣し、日本国の立場を有利に導く外交戦術を、同じ仕法で成功をおさめている。(9 章 121－123 頁)

伊藤博文の次女、生子の娘婿である末松は、伊藤の知恵袋と称された人物、「ジンギスカン即源義経説」の英論文で欧米諸国を我が国へ引き付ける仕法を、英国留学経験者の伊藤博文は知らないはずがない。明治１２年前後の時代、日本外務省は国際戦略として、ロンドン日本領事館の責任範囲で、高等頭脳のなせる業(わざ)で生み出した「義経物語」であると筆者は推察する。依って末松謙澄は帰国後、枢密(すうみつ)顧問官(初代議長・伊藤博文)となり、公爵をも賜っている。

今書 6 章８６頁を再読すれば、『書誌』岩崎克己編の記述に「何よりも不思議なのは、この激流の外に超然としていた原著者の態度である。自著が『義経再興記』を通して世間に歓迎されようとも、攻撃の対象にされようとも、敢えて誇りがましいことも、弁解がましいことも、公にしなかった。」と深意を衝いている。

もう1つの義経伝説「岡城」考える

話は突然に変わるが、九州大分県竹田市の「岡城」は、文治元年(1185)大野郡緒方荘（現豊後大野市）の武将緒方三郎惟栄が源頼朝と仲違いをしていた義経を迎えるため築城したと伝える。西国では義経を迎えて再興を期待して、惟栄と義経は共に船で大阪から九州へ渡ろうとしたが、大物浦（尼崎市）で嵐に合い両者一行は散り散りとなり、夢敗れた義経主従は奥州方面へと逃亡した。

惟栄は捕えられ、群馬県沼田荘に流された後、惟栄親子兄弟が処罰をうけたが、緒方一族は処罰を受けず豊後南部で繁栄を続けた。九州方面は緒方一族と協力関係の氏族が多く、頼朝も穏便に処置したことが考えられる。

岡城は四方を断崖絶壁の谷の上にあり難攻不落の名城であり、歴史には「もし」はないが、義経は嵐にあわずこの岡城に入城して「義経再興」があったならば、また違った歴史伝説が生まれたことであろう。時代は下って、ここ岡城跡にて滝廉太郎が学校唱歌「荒城の月」を作曲し発表している。城石積の曲線の向こうに見える山々、自然の崖壁と谷は見事な眺望である。

大分県竹田市・岡城跡

「荒城の月」の作詞は、土井晩翠が仙台の青葉城址に立った時の歌詞とも、会津若松の鶴ケ城に立った時の歌詞ともいわれる。「荒城の月」４番の歌詞を、

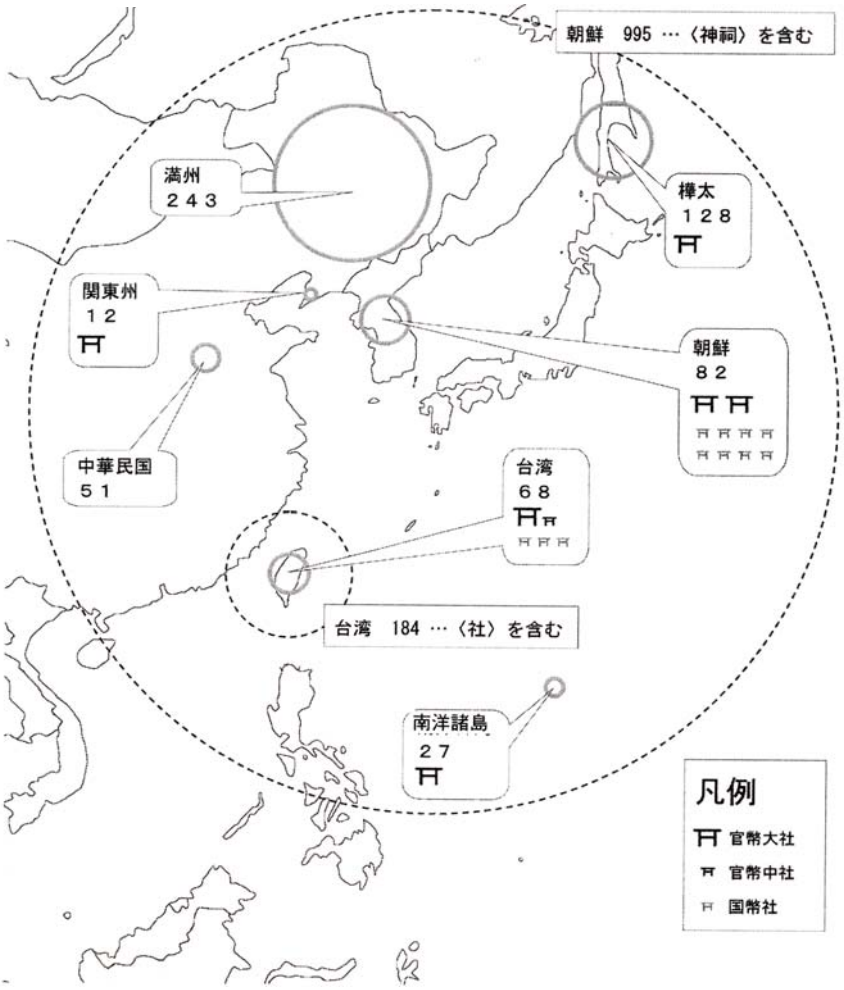
天上影は　かわらねど
栄枯は移る　世の姿
映さんとてか　今もなお
ああ荒城の　夜半の月

平たく言えば、「夜空に輝く月は今夜も替わらないが、人の世は栄えて滅びる理の姿、それでも今もなお、それでも今もなお、栄華を映し出そうとそうとしている。嗚呼荒れた城の石積に、今夜も夜半の月明かりがさんさんとふりそそぐ」と訳す。

旧日本統治国の海外侵攻地に建てられた神社の今昔考

『海外神社跡地の景観変容』中島三千男著・神奈川大学評論ブックレット３７より。

―海外神社分布図―



海外神社の地域別の多さを概念的に示したものである。朝鮮・台湾の場合は社・神祠を含めた数を波線の丸囲いでも示した。

戦前、アジア地域に建てられた神社(海外神社)は、現在判明しているねのだけでも１６００余社にのぼる。海外神社は日本の敗戦、「帝國」の崩壊とともに、現地人または日本人(軍)自身の手によって破却(はきゃく)され、その機能は全ての海外神社で停止した。

政府が管轄する官国弊社(官幣社と国幣社)から、地方が管轄する府県郷村社に至る社格制度が持ち込まれていた。政府設置の奉斎神社を上位として、天照大神や明治天皇等を祭神とし現地人の参拝等が奨励され、皇民化政策に大きな役割を果たした。また海外に移住した日本人が厳しい生活の安穏を祈願する為に建てた「居留民設置(奉斎)神社」は自らのアイデンティティを維持し、もっぱら自分達のために建てた神社で、現地人の教化に意識されないものもあった。(『海外神社跡地の景観変容』中島三千男著・ブックレット 37)より

筆者がサハリンで樺太神社跡、真岡神社跡、王子製紙工場跡を見た直感は、日本人として胸を絞めつけられる思いであった。カラフトの日本統治風景の想いは、「大陸国を捨ててもいい、このカラフトだけは確保して終戦を迎えてほしかった」の思いを強くした。そして、サハリンの風土は日本風土となにもかもが似て、初めて見る風景に思えず、懐かしい日本の大地に感じられたことである。このサハリンの大地では現在、石油・天然ガスの湧いている井戸を見たとき、「この大地さえあれば、日本は大発展したのではないか」との思いを強くした。誠に万感の思いで栄枯盛衰の風景をみた。

(現ガガーリン公園)　王子ケ池　　右・王子ケ池の石碑

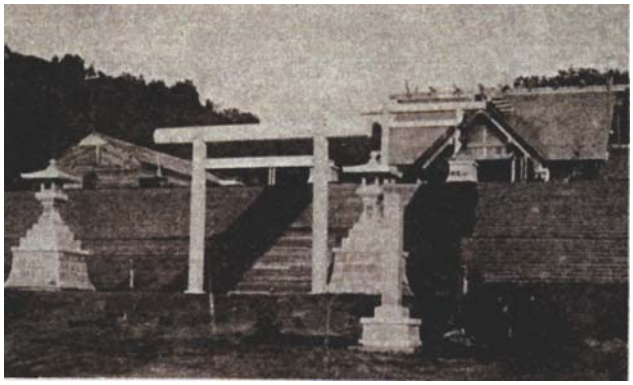
旧旭ケ丘(豊原・郊外ユジノサハリンクス郊外)からの連山で、旧日本国統治時代もスキー場となって居り、市民の憩いの公園になっていたと云う。この池に流れ込む川は「多摩川」と呼ばれ、川の縁には石碑と神社跡も残り、日本人たち生活していた時代がそのまま残されていて、ロシア人の感性を違う角度から拝見することができた。

『徳島大学総合学部・人間社会文化研究』第 17 巻(2009)65－164

１９１２年(明治４５年・大正元年)７月―８月〔鳥居龍蔵 1953・158－168〕(『ある老学徒の手記・考古学とともに６０年』『全集』１２巻・137－343)より

明治４５年７月２２日午後４時、鳥居龍蔵の一行は小樽から汽船で太泊(サハリン南端・コルサコフ)に向けて出発した。２４日、鳥居龍蔵は明治天皇の重態の報がつたえられる中、この樺太神社に参拝、天皇の回復を祈願している。

左・樺太神社(旧豊原市)明治４３年・官幣大社(海外神社データーベースより)　**右**・現サハリン旧樺太神社跡・奥に宝物殿が残されていた。

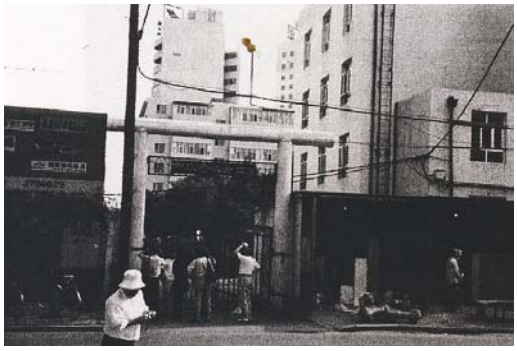


左・真岡神社(旧真岡町)明治４３年・昭和９年県社(海外神社データーベースより)　**右**・真岡神社跡、現在はサハリン郵船会社(ロシア国)が建っていた。階段部は当時のまま残され、水鉢・灯篭の台石が残されていた。★旧真岡町は日本の「電話局」の在所。１２名の女子局員が最後の電報を本国へ打ち、９名

が自決、(局職員１９犠牲)「北のひめゆり事件」と伝わる。旧局は脾肉にもロシア郵便局になっていた。

旧真岡王子製紙工場(サハリン郷土博物館より)

現在の王子製紙工場跡・そのまま残されている



長春神社(新京神社)旧満州・大正４年　　現在は新京幼稚園となっている・鳥居は入口門となる。(左右・『海外神社跡地の景観変容』神奈川大学評論ブックレット 37・海外神社データーベース)

想うことは、日本人が引き揚げてしまうと大和民族の神々は、しっぽを丸めて日本の本土へ逃げ帰ってしまった印象を強く受る。大和の神々は外国の諸民族の人々に悪させず、大陸渡った人々に強い天命運を示さず、つつましくお帰りあそばされた神と想われる。

最後までお読み戴きありがとうございました。　―完―

２０１４年４月３０日　　池田　勝宣

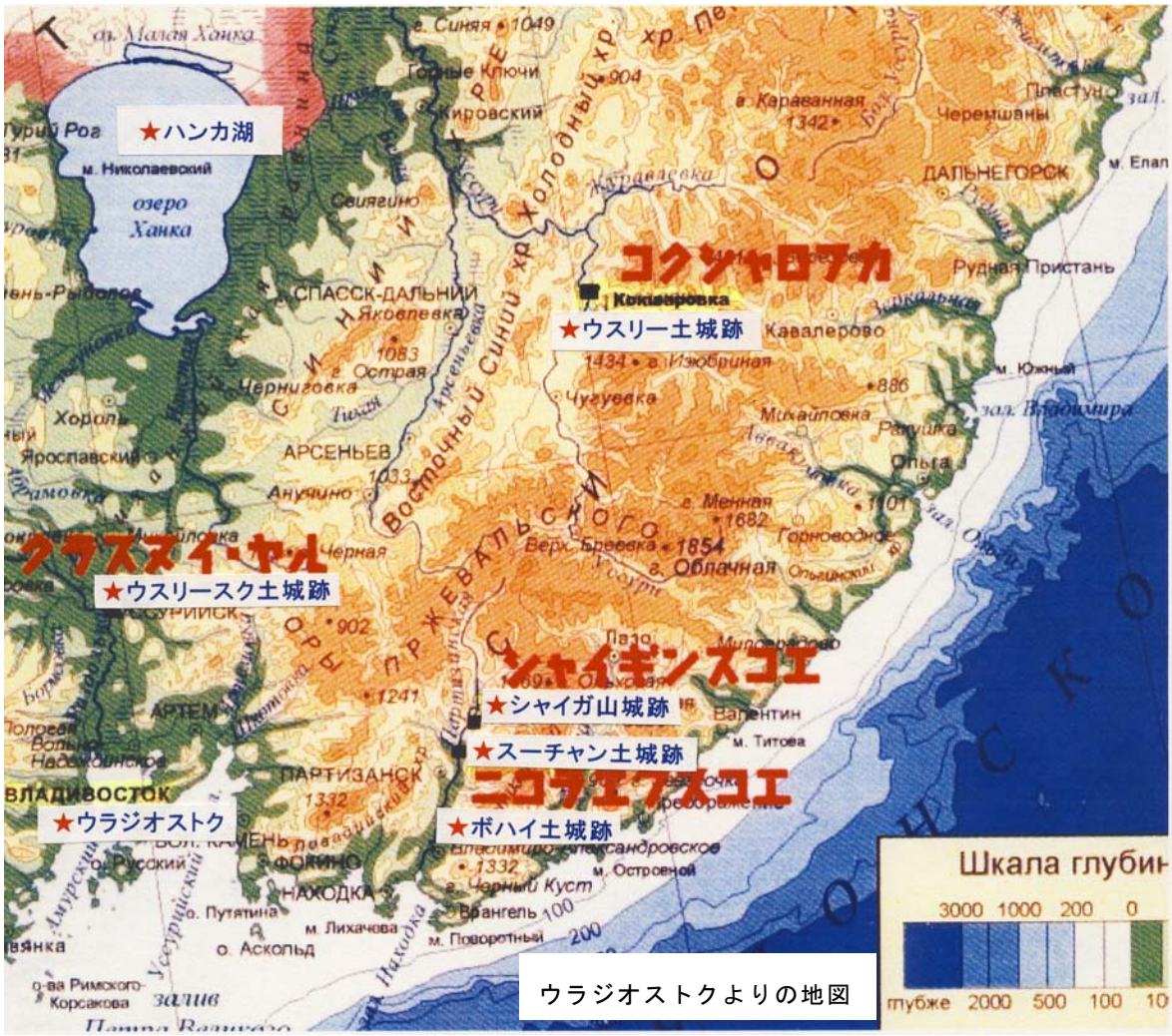
自己紹介　　池田勝宣(いけだかつのぶ)１９４２年神奈川県藤沢市生まれ。歴史研究会旧会員。

ー 附 録 ー

ウラジオストク・ウスリースク・ハバロスク紀行

今回『“ジンギスカン即源義経”流布の顛末』の終盤から、この地方の写真等を探したが見当らず、それならば意を決し、沿海州へ出かけることにした。

ウラジオストクを訪れた瀬脇寿人、明治９年１２月１日「浦潮港日記」に「蘇城（スーチャン）マデモ行程５０里余、奥地ハ２、３百里モアル由ナレバ容易ニ行コト能（あた）ハズ。公務ノ余暇（よか）アラバ明春ナド行ント楽シミ居ル」と記し、現地を探索したい気持を述べている。又『浦鹽斯徳紀行』鈴木大亮は明治１１年９月１２日「午前４時「ニコリスキイ」ニ達ス」。『沿海州南部烏蘇利蘇城郡紀行』深堀順蔵は明治２１年７月１日、「午后１時２０分蘇城跡ヲ訪フ」。『西伯利地誌』は明治２５年１２月に蘇城跡に入るとある。新緑の５月中頃、筆者はウラジオストクに入り、以下、現地実見の土塁土城遺跡探訪と石亀の報告とする。



ウラジオストクより約ボハイ城跡130k・蘇城跡 170k・シャイガ城200k・ウスリー城跡 350k・ウスリースク 100k

序　今回、ロシアの旅行社へ明治２５年の蘇城進路図と蘇城跡図をメール出送り確認してもらった。本当に現場へ行き着くか不安であったが、ロシア旅行専門のユーレックス社に依頼し、ウラジオストク側から承諾がでた。土城跡見学説明は、現地の女性考古学者マリヤさんを手配してくれた。しかし、マリヤさんはロシア語のみで英語が全く通じないことが判り、思案の末、現地行程内容を想定して、出発前にロシア語で質問問答集を作り、現地に関する資料、ロシア語での質問事項をノートに複写して出かけた。質問事項のロシア語の複写を見せ、現場での同じ質問を何度も繰り返し、大まかな歴史の経緯を理解することができた。マリアさんからの渤海国・契丹国が日本に友好の使節団を送った話など大まかに判った。ノートに図を書き、質問と回答の繰り返しであったが、頼りは「ロシア語電子辞書」のみ、電子辞書さまさまの土城跡見学とあいなりました。

ボハイ土城跡遺跡　ウラジオストクより130km位・蘇城跡より手前地区となる

「Средневековый дворец в приморье Чжурчжени Бохай」

中世の　宮殿　ある　沿岸に　（渤海湾）　ボハイ

「中世の渤海湾沿岸にある宮殿跡」となるらしいが、ボハイ遺跡を上記ように説明を受けた。「ボハイ」は地名かと思い何度も質問しているうちに、「ボハイ」は沿海州の国「渤海（ぼっかい）」の音を、ロシア語発音（なまり）で「ボハイ」であることがようやく解った。(渤海国・698－926)　この遺跡はマリアさん達が発掘し、地層が２段になっており、下段が渤海国時代もの、上面が「契丹・(遼)国の宮殿」遺物が出ると説明を受けた。歴史的に渤海は満州・朝鮮半島北部・沿海地方を制覇したが、後「遼（りょう）」(916－1125)の建国となり、「待望論」は内蒙古、中国北辺を支配した契丹（キッタン）人(耶律（ヤリュート）氏王朝)となる。中国北辺の「遼」の中国発音をロシア語音で「ズイ」となるらしい。露音の「ズイ」は「ズ」と「ブ」の中間に聞こえ、発音ができない。このボハイ土城跡は「日本武将の興った城跡」に入るのか不明である。

ボハイ遺跡入口・土塀の高さ３、５ｍ位

遺跡の外側から見た土塁

ボハイの遺跡全景は目測でW300m×奥行き２００m位ある(所在地区は蘇城跡 40K手前となる)

金代の山城集落「シャイガ城址」 シャイギンスコエ(ш а й г и н с к о е)

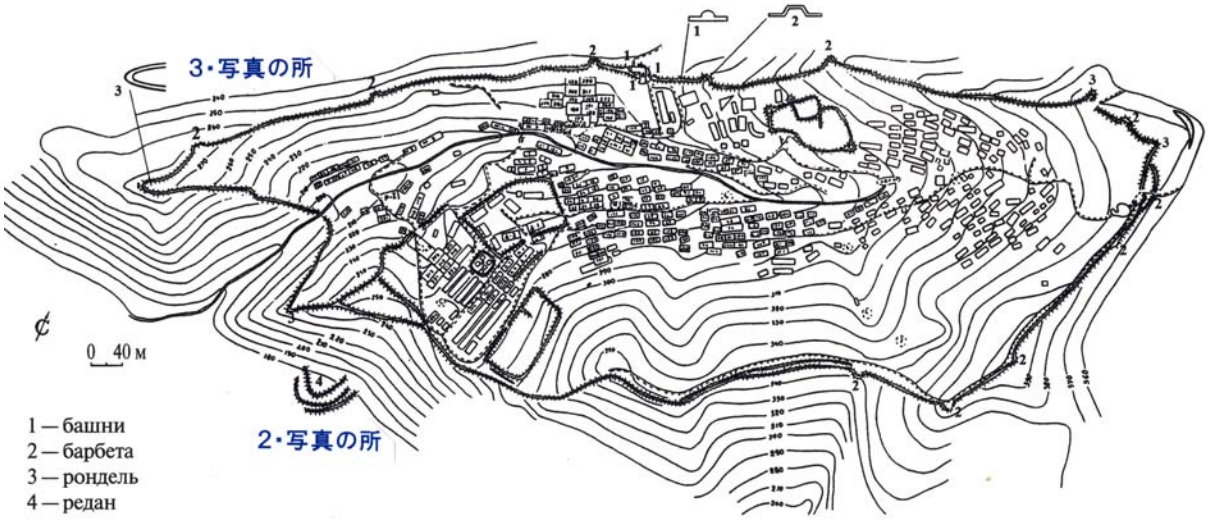
帰国後、考古学的にどのような山城集落なのか、『アジア遊学 107・北東アジアの中世考古学』・『世界の教科書シリーズ 8・ロシア沿海地方の歴史』より調べてみると次のようにあった。《パルチザンスカヤ川(П а р т и з а н с к а я)左岸に位置する。城址内には谷が入り込み、谷を取り囲む丘の稜線が城址になる。周長約 3600m、土塁 50 ㎝―４m、城壁には楕円形に突出した馬面(２の写真)がある。　城址は 1962 年より発掘調査が行われ、内城、工房址(鉄鉗(カナバシ)・鉄鑢(てつろ)・鑿(のみ)・鉄鎚(てつつい)等の鍛冶具が出土、製鉄から精錬加工作業まで)、堡塁、住居址群が発掘され、金代におけるこの地域の経済の中心的な集落都市と考えられる。》

1、山城の全景写真・少し詰っているが目測Ｗ２㎞位・山Ｈ200m位・「羊が食む草原の中世集落」

２、山のふもとに堡塁がある(図２の所)

３、上の写真頂上端部に投石場(投石機・露語ガランボン)

全景の左側より登る・山中は土塀が造られていた・下記図３の所は投石場・投石場より眼下を見る



遼・金代の城址・宿場駅跡『СРЕДНЕВЕКОЫЕ ДРЕНОСТИ ПРИМОРЬЯ』2012年より

図の左の説明。１、戦車の投石場　２、砲座（投石機・カタパルト）　３、絡頭（おもずら）（ハミを固定する緒・馬を繋なぐ所か）　４、凸軍堡　（図の縮尺 5mm=40m、城塞都市跡の広さはW1360ｍ×幅 480ｍ位か。Google衛星地図、俄罗斯滨海边疆区フルスタリン・хрустальный左側の山一帯の山城となる）

上記城址図まで登ると３時間かかる話、雨が降り続くので、左側図２の投石場のみを見学することにした。３の写真、雨の中斜面４０度前後の山道下り老人の足は痙攣し、最悪を想定したが、土地神様のお陰で無事に下山できたと感謝の思いを強くした。山城の城塞都市について参考まで下記の書を翻訳してみた。

『СРЕДНЕВЕКОЫЕ ДРЕНОСТИ ПРИМОРЬЯ』Выпуск 2

中世の　　古代　　沿海地方　　巻（問題）2

Отв.ред.Н.Г.Артемьева(アルチェーミー著)より(筆者翻訳を要約で)

《１３世紀の要塞集落で、モンゴル軍の攻撃から護るために造られた。１２１５年―１２３３年（金王朝）　緊張の続いた沿海地方の集落を維持する機能をはたした。商工業の発達もみられ、一般庶民・兵士の職種別の機能を追及した女真族の集落となり、防御の領域

の砦や要塞をよく造り上げてある。全体の城壁内を、南と南東防壁、出入り口の土城壁で囲まれている。収集された考古学資料によると、住居地は南西部に位置し、農奴は集落から分離した防御体制を主に目的としていた。しかし、１９年間のモンゴル軍に抵抗の後、必死の抵抗にかかわらず、集落都市は陥落した。この地方は中国牡丹江(ぼたんこう)、綏芬河(黒龍江省東部からロシア領内へ流れ、ウラジオストク付近のピョートル湾に注ぐ)現在の吉林省へと広がる。この集落都市は大規模な人口と、大規模な行政・経済の中心地で、中世の集落都市となっていた。》この城跡は明治期の日本武将話が絡むのか分らない。

余話・草花たち

はじめて見た花

カンゾウの仲間か

ヤマブキソウ

ヤマシャクヤクが群生

山シャクヤの群生には驚いた。沿海州の地はヒトリシズカ、スズラン・マイズルソウ等が多く見られ、日本より１ヶ月遅れの花季節感のようで、花たちは見事に咲いていた。

スーチャン(蘇城跡)　ニコラエフスコエ(ｎｉｋｏｌａｅｖｓｋｏｅ)

「沿海州南部烏蘇利蘇城郡紀行」調査紀行日誌・深堀順蔵は、明治２１年７月１日「４時蘇城跡ニ達ス。郭門ヲ距ル５、６百米ノ処ニ一門アリ(図形ニ示ス)之ヲヲ通過スレバ、三々五々韓人ノ家屋アリ」と記述がある。現在もここの地名は「スーチャン」(露国・パルチザンスカヤ川)となる。マリアさんからは**「渤海湾にある中世の宮殿」**と説明を受けた。(59 頁参照)

1、チャン土城跡入口(門があった場所か)

2、ニコラエフ土手の遺跡

ニコラエフスコエ遺跡・(google 衛星地図・俄罗斯滨海边疆区パルチザンスカヤ川・コラエフカ、ヴォドパドナヤ(Водпадная)川)ヴォドパドノエ川右岸スーチャン川の合流点に位置し(下記の衛星写真)、唐滅亡後、沿海地方は渤海、契丹(遼)、金(女真)、元(蒙古)の北方諸民族国家の興亡舞台となる。

看板の文字　Николаевское Городище-Памятник

ニコラエフスコエ(地名)　丘の砦の　遺跡

археологии федерапьного

考古学　連邦

значени (XIIXIII B.B.) １２世紀―１３世紀

Памятник охраняетсягосчдарством.Порча

памятника карается законом. (ф.з.v73-2002г)

ohranyaetsyagoschdarstvom (呼称)遺跡があります。 遺跡物を改ざんすることは、処罰の対象となります。(F.z.v73-2002 年) とある。

蘇城跡コの字遺跡の中央下白矢印から入り写す

現場印象は、明治２１年に深堀順蔵氏が見た城跡は『沿海州南部烏蘇利蘇城郡紀行』の行路地図はこの場所を指しており、下記の写真通りスーチャン城跡「蘇城跡」であることが判明。(５９頁参照)『東北アジアの中世考古学』村上昌敬訳「ニコラエフカ城址」について、城壁の高さ 10m(現時は５m弱)、周長は 2350m、内城の発掘調査から鬼面軒丸瓦、龍頭形の鴟尾(鳥の尾、沓形)等の飾り瓦、法華経に現れる迦稜頻伽像(上半身女、下半身鳥)が出土している。この城址は渤海、金、東夏代の土器が採集されている。

日本武将(義経)伝説のスーチャン(蘇城跡)はここであることが判る(目測はW４００×３００位)

1の入口写真に「鳥居に似た門」が立っていたと記している。（５８頁参照）　蘇城跡図・東京地学協会報告「沿海州南部烏蘇利蘇城郡紀行」深堀順蔵氏記・第１３巻１０号の行路地図は、確かに地図通りスーチヤンまでの道順に間違いない。（５９頁参照）しかし、現地案内者に「蘇城跡」の図には、左側に流れる川（蘇城川）とあるが、この川をウスリー川と結論を出し、ウラジオストクから３５０ｋｍ離れた、ウスリー川沿の「コクシャロフカ遺蹟」を案内された。疑問は有るがウスリーの土城跡を次の項で述べる。ウスリー川は中国語では烏蘇里（ウスリー）江、ロシア語、ウッスリ川（ｐ・ｙｃｃｙｒｉ）となる。

ウスリー土城跡（蘇城跡）　コクシャロフカ（ｋｏｋｓｈａｒｏｖｋａ）・車で片道7時間

「コクシャロフカ遺跡」は「городище（遺跡）Кокшаровка（コクシャロフカ），средневековое（中世の）городище（集落）」となる。「沿海州南部烏蘇利蘇城郡紀行」深堀順蔵氏記の蘇城跡図面の縮尺計算すれば４００ｍ×４００ｍとなる。深堀氏の蘇城跡平面図の左蘇城（ウスリー）川とすれば、図面通り「コクシャロフカ」が「蘇城跡」となる。考えるに、行路地図通り「蘇城跡（スーチャン）」はニコラエフカ土城跡が１つと、「蘇城跡」の遺跡図に描かれた川が、ロシア側の判断通りウスリー川とすれば、コクシャロフカ遺跡が「蘇城跡」の２つ目となる。この城跡はスーチャンの「蘇城跡」より倍位大きい城跡となる。

考察すれば『西伯利（シベリア）地誌』上巻　下村修介・加藤稚雄編、明治２５年探索は、地誌に記載された石像のイラスト絵図（６０頁参照）は、現コクシャロフカ城跡であると考える。それは現地案内マリアさんの説明で判ったことは、ウラジオストク市の沿海州国立アルセーニエフ博物館に展示の石人・石羊が似ているからである。博物館ではニコラエフカ城跡で出土したと明示がないので結論はでないが。下村・加藤両氏は蘇城跡を「金朝時代の遺跡」と記述している。

「コクシャロフカ」　　ウスリー川　（57 頁参照）　　ウスリー土城跡入口

Ｇｏｏｇｌｅ衛星地図でコクシャロフカを検索すれば地図が出るが、画像が鮮明でない。

ウスリー土城跡全景(１－６)入口より左側1、　　中央辺2、　　やや右にふる3、

右側へ４、(地面の黒いのは野焼き跡)　　右へ５、　　入口右側終点６、全体W500×500 位

土城跡内では発掘調査していた。この場所から５個のブッタ像が出土したと、マリアさんは地面にブッダ像を描いて説明してくれた。この仏像はウラジオストクアルセーニエフ博物館にあると説明を受けた。沿海州地方は渤海滅亡後の遼・金の発掘調査(９－１３世紀)は途上で、考古学的な解明はされていない。この遺跡は地域では「山羊の草飼場にある中世の砦と城市の跡」呼ばれているという。

沿海地域の歴史　『ロシア沿海地方の歴史』より

粗筋で沿海地域の歴史をみる。沿海地方は北東中国と極東の南に住む諸民族、粛慎(しゅくしん)から始る。粛慎(『日本書紀』に記述ある)は紀元前 230 年から紀元後に中国の歴史書に現われ、挹婁(ゆうろう)と呼ばれた。挹婁は「弓に巧みで、人の目を射当てることができる」と中国の年代記に残され、略奪目的の近隣諸民族攻撃を行なっていた。紀元３世紀なると中国東北領域に

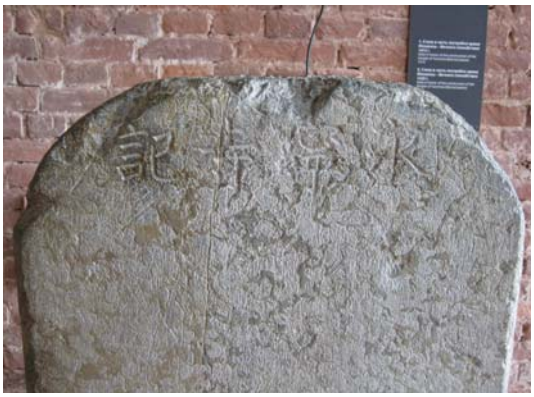
いた夫余に従属した。３－４世紀に沃沮が強勢となり、西は長白山脈から東は日本海沿岸、南は朝鮮の咸鏡南道まで広域となる。沃沮は古代朝鮮の高句麗に税として魚、塩、海産物、麻布、クロテンを納めた。４－５世紀には靺鞨と呼ばれる民族勿吉(ツングース系)が興る。７世紀までに靺鞨は数十部族に発展し、その代表は粟末靺鞨(アムール川・満州松花江)と黒水靺鞨(ウスリー・アムールの各下流)が勢力を持つに至る。西に室韋(モンゴルの祖)、契丹、突厥(トルコ系)、南に高句麗が隣接していた。

その靺鞨は６－７世紀にかけて中国唐と高句麗の影響を受けて発展し、ツングース系、満州民族国家が「渤海国」が建国されたのである。後、１０世紀初め、渤海の南西の隣人、遊牧民契丹人と２０年以上争っていたが、９２６年渤海は契丹に敗れ、１０世紀の初め、契丹は征服した渤海の地に「遼帝國」を樹立した。黒水靺鞨は女真と呼ばれ強制軍団となり、やがて黒水靺鞨の阿骨打という名の女真連合の指導者が起った。1115 年、彼は女真の黄金の帝國「金」を樹立して、1125 年契丹国遼は滅亡した。そして、金帝國も遊牧民「元」にことごとく征服される経緯となる。

沿海州国立アルセーニエフ博物館 ウラジオストック(Владивосток)市内

ウラジオストクの町は、１９世紀末から革命前まで、世界各地から人々集まった国際都市であった。アルセーニエフ博物館は、1906 年―1922 年まで日本の横浜正金銀行浦潮支店の建物であった建物。博物館には奴児干永寧寺碑あり(第３章３４頁参照)、１５世紀の初め明の永楽帝が建てたもので、碑文には表が漢文、裏が女真語、側面にモンゴル文字、契丹文字が書かれているが、現在では肉眼で読めない。近くにロシアの極東の探検家、アルセーニエフの記念館がる。(東洋文庫 55・『デルスウ・ウザーラ・沿海州探検行』２０世紀初頭のロシア人と中国人、朝鮮人、満州人、少数民族ことが描かれている。)

ヌルガン永寧寺碑文



永寧寺記と読める

重建永寧寺記と読める　　人像　　ライオン彫刻

人像・「Ｃｔａｔｕｙａ　ｃｈｉｎｏｖｎｉｋａ」「帝政時代の官吏像」遼朝時代の神殿、宮殿入口に置かれた人像。「ライオンの彫像」も同様入口部に置かれたと推測する。人像・ライオン彫刻は、ウスリースク南城の土城遺跡から出土か、ウスリー土城跡(蘇城跡)から出土かの説明はない。(60 頁参照)

ウスリースク遺跡　ウスリースク(Уссурийск)郊外・4k下にクラスヌイ・ヤル(クラースニヤル)

ウラジオストクより北西 100K、ウスリースクは沿海州南部に有る都市、清朝期は「双城子」と呼ばれた地域、ウラジオストクの北に位置し、シベリア鉄道と中国からの鉄道、北朝鮮からの鉄道が合流点。石亀は市内のドラ公園(Ｐａｒｋ　ｄｏｒａ)内にある。

1、ウスリースクの石亀(東屋(あずまや)の下に)　2、投石機で使用した玉石　　3、瓦や磚(せん)(レンガ)が見られる

1の説明は次のようにある。「**ＫＡＭＥＨＨＡＹＡ　ＣＨＥＰＥＰＡＸＡ=石亀**・１３世紀遼朝帝國時代。亀の彫刻は、シベリアや極東の王朝の埋葬場所ちかくの家族の墓地に設置してあった。この亀の記念碑は、１８６４年、シベリアと極東の探検家によって発見された。」この石亀は小谷部全一郎著『成吉思汗ハ源義経也』登場する石亀はこれである。(66 頁参照)

石亀の補足　ウスリースクに２つの城塞址の平原で、高貴な女真人たちの墓が発見された。その墓前には司令官と官吏、トラと雄羊の石の彫像、さらに死者の経歴が書かれた石

碑が置かれていた。その石碑のプレートは永遠のシンボル石亀の背に立っていた。初期の女真皇帝阿骨打(アグダ)の戦友のうちの一人である「エスィクイ公」の云々が石碑に記録されていた。エスィクイは契丹遠征軍に加わり、耶懶路(やらんろ)(スーチャン川流域総督)の女真族の首長である兄弟の死後、その地位を継いだ。1270 年代に、女真人の皇帝が、エスィクイの後裔の猛安(もうあん)(軍事・行政長の官名・千戸長)に「自分たちの出自を忘れないように」と「耶懶(やらん)」(金国建国に功績があった一族)の称号を与えたことが『金史』巻１に残されている。1995 年にクラスノヤーロフの城塞址で、耶懶の猛安の長の印判が発見され、それは 1221 年に鋳造されたものであった。　　『世界の教科書８・ロシア沿海地方の歴史』より

2、投石機に使用した玉石。ここウスリースクからズイ(遼)国へ戦争遠征した話が伝わる。土地の伝説ではこの地より２００キロ位離れた「山城ジャイガ城址」(写真３頁)の城主の王妃を掠めるために戦争を起した伝説が残る。

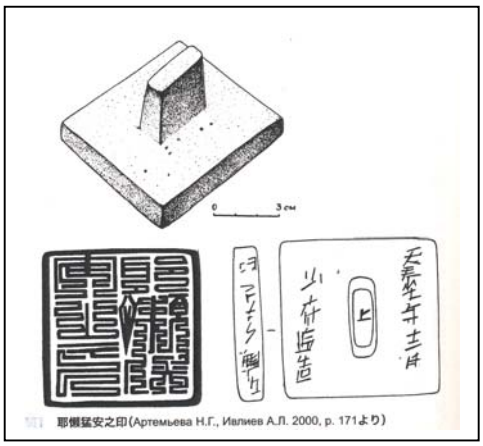
3、は１０－１３世紀に使用されたレンガや瓦が地表に出ているので、写真におさめた。

ウスリースク土城跡(南城)城跡を登り入口を望む(衛星地図・ウスリースク市下にクラースニヤル(ｋｒａｓｎｙｊ.ｙｒ)、ソヴェツカヤ通り・拡大するとヴェルフナヤ通り左一帯が土城跡となる)

城跡中腹よりウスリー川(中国名・ロシア・ラズドリナヤ)を見る・痛快なほど気持の良いところある。

ウスリースク土城跡から出土した印

『北東アジアの中世考古学』の「西ウスリースク城址・南ウスリースク城址」によれば、この西城址・南城址はスイフン川左岸の平地上に方形土城である。清朝代には双城子の名でしられている。(64 頁参照)南ウスリースク城址は川沿いに立地し地形の制約を受け、台形に近い平面形、周長約３ｋｍ。沿海地方では最大級の平地城となる。近年の発掘では東夏の年代が刻まれた「耶懶猛安之印」が発見されこの城郭が耶懶猛安と関係が深いことが判明した。この猛安は、金の世宗が恤品路(渤海に設置された率賓路が前身)統治一族の耶懶猛安氏に対してその故地の耶懶水(スーチャン川)の名を管轄の猛安に名づけることを許したことに由来する。



耶懶猛安の印『北東アジアの中世考古学』より

ハバロフスク地方博物館　ハバロフスク(ｘｏｂａｒｏｖｓｋ)市内

ウラジオストク駅より夜行列車で 11 時間の距離。ハバロスク地方は、日本海、オホーツク海に面しアムール川が流れる。このアムール川を交通路にして、ウラジオストクより早く開けた町となる。

ハバロスク博物館前にある石亀

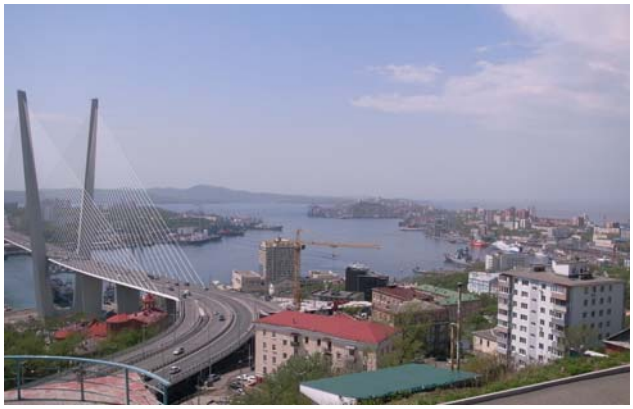
ハバロスク市内高台からアムール川を見る

「博物館の石亀」は次のような説明がある。「碑は女真民族の王子を讃えたもので、優れた王子は契丹(遼)の征服に貢献した。この記念碑は１１９３年に墓丘に建てられた。近代になり、１８９５年に当館に搬入された。」とある。

昭和３年、鳥居龍蔵の娘、幸子女史がこの石亀をスケッチした彫刻亀はこれであろう。

（６４頁）《ハバロスク博物館において「ニコリスク」から運ばれた碑文の台石。この碑文は金時代のもの。この碑文は源義経に関係する説があるが誤った解釈である》と記述あり。

ウラジオストク港 （ウラジヴォストーク・「ヴォストーク」は「東」「ウラジー」は領有する）



現在のウラジオストック港　　１８５０年ロシア海軍が入港した記念碑ある埠頭

（右写真この埠頭は仏・英国捕鯨船が先に発見した津、後にロシアは軍人を居住させ不凍港を確保した）

余話・ウラジオストク港を守るルースキー島要塞

ウラジオストク玄関口、ピョートル大帝湾にあるアムールスキー半島の南沖に浮かぶ島。ルースキー島はニコライ・ムラヴィヨフ=アムールスキーが名づける。1890 年、ウラジオストクを守る、ルースキー山を中心に大要塞の建設が始まる。要塞建設は遅れ、日本海軍のウラジオストク侵入を許した所でもある。

ルースキー島要塞跡

中央中腹に青い２点が見える。砲（38ｋｍまで射程距離）であったという。写真の奥がウラジオストク港、この要塞砲は海からは見えず、島の高所からの無線伝達により、発砲する手配となっていという。ルースキー島のウラジオストクに面した側は、要塞用地下道が

張り巡らされ、地上から目視攻撃ができない堡塁となっていた。

３８ｋｍ距離射程を持つ砲台跡　　全島に日本海に相対して地下堡塁となる

（ウラジオストク市に走る車は日本車ばかり、右の写真駐車は全部日本の四駆車となっていた）

『デルスウ･ウザーラ　沿海州探検行』アルセーニエフ著・東洋文庫 55 より

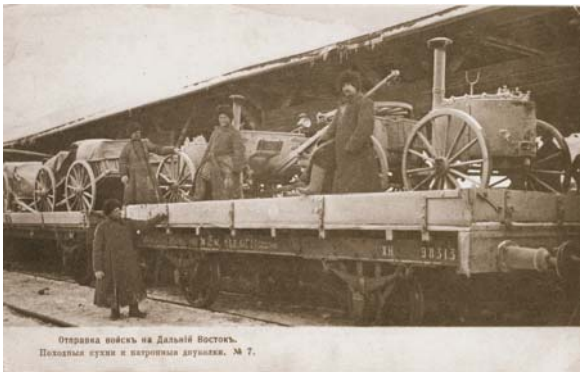
アルセーニエフが 1899 年沿海地方の探検記、その解題の 310 頁に長谷川四郎訳記述をみる。

「現在の沿海州がロシア領土に入ったのは 1860 年の北京条約によってであるが､この北京条約は､それより 2 年前の 1858 年のアイグン(愛琿(あいぐん))条約の追加条約であるアイグン条約ではウスリー江以東・日本海までの土地、すなわち沿海州はロシア・中国(清)の共有地ときめられた。それが北京条約では、ロシア領土に編入されたのである。当時、南からやってきたイギリスに手をやいていた清朝は譲歩せざるをえなかった。一方ロシアはアムールを調査して、この地方における清国軍の不在をたしかめておいたのだ。この条約によってウラジヴォストクはロシアのものとなり、前記プルジェワリスキー(中央アジア探検家)がこのあたり一帯の地を調査したのが 1867 年から 1869 年。1882 年にはウラジヴォストクにロシア太平洋艦隊の根拠地がおかれた。だんだんとウラジヴォストクは極東におけるロシア文化の中心となった。」と解説がある。

『ＲＵＳＳＫＯ-ЯＰＯＨＣＫＡＲ　ＢＯЙＨＡ　1904-1905ＧＧ.』

『日露戦争　1904－1905 年』 Ｖｌａｄｉｖｏｓｔｏｋ（ウラジオストク）　2006

ウラジオストクの「アルセーニエフ博物館」でロシア語の歴史・民族誌等の本等を 7 冊購入し、日本語に翻訳には気が遠くなるが、その中に『日露戦争写真集』あり、一部を紹介。この写真集は 1904－1905 年の日露戦争時に発行された葉書、ポストカードを中心に編集され、写真文は、ロシア文学研究・芸術運動・文学作品の自律性を強調した言語表現され、又日本国で発行された旅順攻略記念の葉書が多数収録されている。



左・торая батарея 23-й артиллерийской бригады

「電撃２３砲兵旅団」　**右**・Походные кухни и патронные двуколки

「野戦用炊事カマド台車」を旅順港に輸送する。（４点の写真の説明文は筆者の翻訳による）

左・Русско-японская война. Японцы транспортируют русских раненых「負傷したロシア人を輸送する日本兵」（旅順の戦いと思われる）

右・Внутренняя часть крепости Порт-Артур「旅順の要塞内側部」

今回、ウラジオストク、ウスリースク、ハバロスクと、義経伝説に関する城跡・石亀・石碑・彫刻物を見学できたことに満足した。城巡りで解ったことは、沿海地区には金代を中心に城跡・土塁跡が３０ヶ所位在ることも分った。この地区に興亡した渤海から遼朝(キッタン人)、金朝(女慎ツングース系、後の満州族)、その金も蒙古民族元朝に滅ぼされる。強勢元朝は日本の鎌倉時代に蒙古大襲来の歴史を刻む。この諸民族の歴史興亡の時代差があっても、大陸に「寛永」・「義」の文字や「笹龍膽」に似た紋章を見出した明治大正の人たちは、義経待望論に期待し、政府も国民も領土拡張の足掛りを求めていたことが解る。

以上沿海州レポート報告まで　　2014年6月26日　　池田勝宣